㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第220集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第45集

矢田遺跡 Ⅶ

古墳時代住居跡編 (4)
奈良時代住居跡編
平安時代住居跡編 (4)

1997

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第220集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第45集

矢田遺跡 Ⅶ

古墳時代住居跡編 (4)
奈良時代住居跡編
平安時代住居跡編 (4)

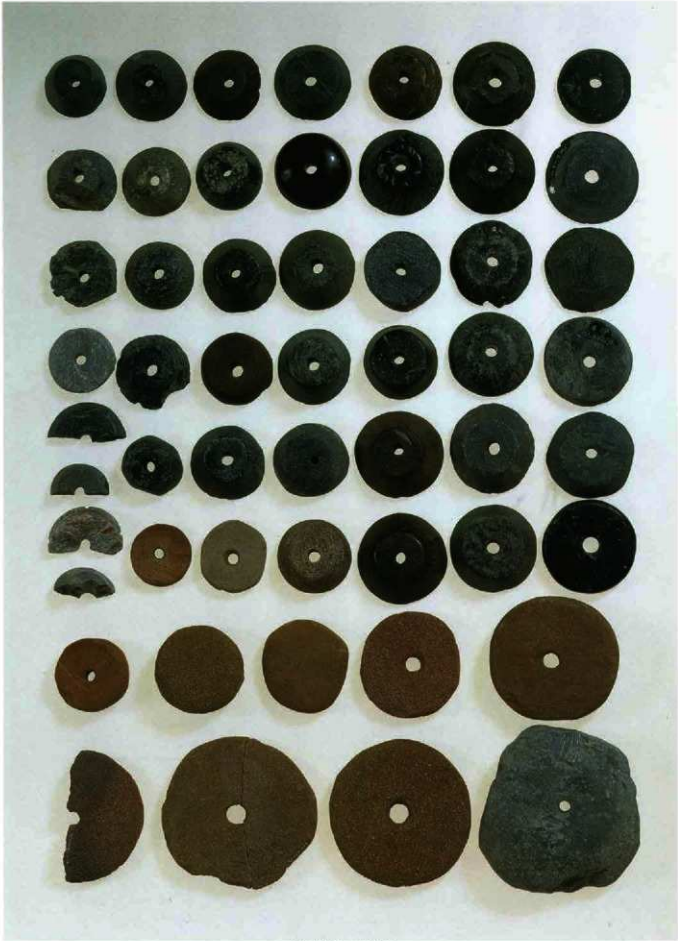
1997

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

矢田遺跡（現・吉井インターチェンジ）と周辺の地形（北から）

179号住居跡全景

179号住居跡カマド



本年度報告の紡錘車

矢田遺跡　古代村野外展示（事業団創立10周年記念）

序

鏑川下流域の多野郡吉井町に所在する国指定史跡「多胡碑」の碑文に記された多胡郡は六郷で成り立っていました。その一郷である「八田郷」は、矢田遺跡を中心とする地域に推定されています。本遺跡の発掘調査は、遺跡地に上信越自動車道の吉井インターチェンジが建設されるところとなったため、昭和61年から平成３年の６年間にわたって行われました。約９万㎡の広域に及ぶ調査区域から、古墳から奈良・平安時代にわたる750軒余の竪穴住居跡を始めとして、多数の遺構・遺物が発見されました。これらの成果は、平成２年度から進めた整理事業によって発掘調査報告書『矢田遺跡Ⅰ～Ⅵ』として逐次刊行し、古代「多胡郡」の歴史を解明する上で貴重な資料となっています。

本書の『矢田遺跡』Ⅶは、竪穴住居跡群をまとめた最終の報告書として刊行します。密集する住居跡を始めとする多くの遺構・遺物から古代「八田郷」の繁栄の様子をうかがうことができましょう。

ここに『矢田遺跡Ⅶ』の発掘調査報告書として刊行するところとなりましたが、発掘調査の開始から刊行に至るまで、日本道路公団東京第二建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、吉井町教育委員会をはじめとする関係諸機関、並びに発掘調査・整理事業にかかわった多くの皆様のご協力とご支援に厚くお礼を申し上げます。そして、本書が古代・多胡郡八田郷を中心とする地域の歴史を解明する上で、多くの方に広く活用されますことを願い序といたします。

平成９年３月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　小寺弘之

例　　言

1　本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「矢田遺跡（やたいせき）」の発掘調査報告書であり、第７冊目にあたる。本書は住居を対象とした報告書の最終刊行となるもので、奈良時代の住居を主とし、古墳時代、平安時代、時期不明、及び住居状遺構と呼称している遺構を含めて報告している。

2　矢田遺跡は群馬県多野郡吉井町大字矢田字天王原606・607番地ほかの周辺に所在し、大字名を遺跡名に採用している。他の大字小字と代表的な番地は以下の通りである。大字矢田字田代293・字稲荷久保1070・字谷頭1089・字杉ノ久保1024・字車地蔵1102・字天久保1120番地及び大字田胡字小蓋林344番地である。

3　本発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。

4　実際の発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。

整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（勢多郡北橘村大字下箱田に所在）が担当した。

5　調査期間及び担当者

(1)　発掘調査　調査期間　昭和61年４月１日～平成２年８月27日、平成３年11月５日～11月26日

調査担当者　鬼形芳夫（昭和61年度専門員、現高崎市立高南中学校教諭）

依田治雄（平成３年度専門員、現鬼石町立美原小学校教諭）

中沢　悟（昭和61～平成３年度専門員）

春山秀幸（昭和62・63年度調査研究員、現藤岡市立東中学校教諭）

関口功一（昭和63・平成元年度調査研究員、現群馬県立前橋南高等学校教諭）

内木真琴（昭和61・62年度調査研究員、現群馬県立前橋工業高等学校教諭）

富田一仁（平成元・２年度調査研究員、現群馬県立境高等学校教諭）

関口博幸（平成２年度調査研究員、現安中市立第二中学校教諭）

(2)　整　　理　整理期間　平成７年９月１日～平成９年３月31日

整理担当者　中沢　悟

(3)　事　　務　常務理事　白石保三郎（昭和61～63年度）、邊見長雄（平成元～４年度）、

中村英一（平成５～７年度）、菅野　清

事務局長　井上唯雄（昭和61・62年度）、松本浩一（昭和63～平成３年度）、

近藤　功（平成４～６年度）、原田恒弘

管理部長　大沢秋良（昭和61年度）、田口紀雄（昭和62～平成２年度）、

佐藤　勉（平成３～５年度）、蜂巣　実

調査研究部長　上原啓巳（昭和61～63年度）、神保侑史（平成元～７年度）、赤山容造

総務課長　斎藤俊一（平成４～６年度）、小渕　淳

調査研究第１課長　平野　進

調査研究第２課長　岸田治男（平成６・７年度）

総務課　国定　均、笠原英樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、

高橋定義（平成４～７年度）、宮崎忠司、大澤友治

関越道上越線調査事務所

所長　井上　信（昭和61～63年度）、高橋一夫（平成元・2年度）、阿部千明（平成3年4月～11月）、松本浩一（平成3年12月～4年3月）、吉田　肇（平成4・5年度）

総括次長　片桐光一（昭和61～平成元年度）、大澤友治（平成2・3年度）

次長　原田恒弘（昭和62年度）、徳江　紀（昭和63～平成2年度）

課長　長谷部達雄（昭和61年度）、鬼形芳夫（昭和62年度～平成2年度）、依田治雄（平成3～5年度）

庶務課　係長代理　黒澤重樹（昭和61～63年度）、宮川初太郎（平成元～2年度）

主任　国定　均（昭和63～平成元年度）、笠原秀樹（平成2・3年度）、吉田有光（平成4・5年度）

6　報告書作成関係者

編　集　中沢　悟

本文執筆　中沢　悟、小林昌二（第7章第2部）

遺構写真　鬼形芳夫、依田治雄、中沢　悟、内木真琴、春山秀幸、関口功一、富田一仁、関口博幸

遺物保存処理　関　邦一　（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）

小材浩一、小沼恵子、萩原妙子（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員）

土橋まり子（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団非常勤嘱託員）

遺物写真　佐藤元彦（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）

機械実測　長沼久美子、伊藤淳子、岩渕節子、光安文子、千代谷和子、萩原光枝、立川千栄子、南雲富子

遺物観察　中沢　悟

整理補助　皆川正枝、島崎敏子、富沢スミ江、木暮紀子、堀米弘美、伊東博子、木暮美津江、飯塚京子、岸　弘子、中野和子

委託関係　【航空写真】㈱青高館　たつみ写真スタジオ

【遺構測量、遺構・遺物トレース】㈱測設　㈱測研

【石材鑑定】陣内主一（前群馬県立自然科学資料館解説員）

飯島静男（群馬地質研究会）

7　出土遺物・図面は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。

8　発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。（敬称略、50音順）

吉井町教育委員会、井上　太、小林昌二、小安和順、陣内主一、関　和彦、堤　隆、津野　仁、永嶋正春、仲山英樹、平川　南、茂木由行、矢野健一、矢島　浩、渡辺　一

9　発掘調査従事者

青木いせ、天田文子、(故)新井克巳、新井幸子、新井すみ子、新井高子、新井まつ子、新井　緑、
新井富貴子、新井真弓、飯塚和良、飯塚初代、飯塚　房、伊倉茂登子、井田松寿、今井　好、
浦野千代子、江原まさ子、遠藤秀子、大木みさ子、大木みつ、落合君子、鬼形田鶴子、加藤節子、
金井すみ江、金井はる、金沢友次、神戸ハツエ、神戸　啓、喜多川源造、木村ハナ子、工藤きみよ、
栗原　清、黒沢敦子、黒沢京子、黒沢　治、小嶋八重子、小林愛子、小林きよ子、小林善三、小林初美、
佐藤八千代、斎藤友枝、斎藤初子、斎藤英子、斎藤政宏、斎藤美知子、志賀シゲ子、志賀　大、
柴藤カヲル、柴藤　孝、篠崎とよ、柴崎太郎、島田八千代、清水桂子、清水千代、白井精一、神保恵子、
神保すみ江、神保　進、杉田きくの、鈴木ふさ子、鈴木幸男、高田　嵩、高田三枝子、高橋千恵子、
高橋ちよ子、高橋春代、滝沢利子、竹内栄子、建部すみ子、田中みき江、田端春治、佃　潤、寺尾克代、
中村いち、櫛島静子、(故) 櫛島豊続、野口節郎、野口照子、野中正江、長谷川良一、長谷川高子、
林　敏子、原口葉子、平田　昇、藤本ひろ子、本間敏子、松本タツノ、松本良子、三ケ島富二郎、
三木時一、宮下憲子、村上繁代、望月登代子、百瀬美子、森　利子、森　基司、矢田部喜代美、
山崎孝子、湯浅安代、吉田良子、吉田たづ子、(故) 吉田一子、若林さく子、若林てい子、若林トヨ子

上記以外にも、周辺地域の多くの方々のご協力を受けた。(敬称略、50音順)

凡　　例

1　各遺構実測図の縮尺は次の通りである。

　住居跡　1／60、　竈　1／30を原則に、基準としてスケールを配している。

2　遺構実測図に記した断面基準線等は、いずれも海抜標高を表す。

3　遺構実測図の方位記号は、座標北を示す。(国土座標第Ⅸ系)

4　遺物実測図の縮尺は、次の通りである。

　甕・甑・壺・鉢・砥石1／4、　高坏・坏・盤・蓋・鹿1／3、　紡錘車・鉄製品1／2

を基本としており、それ以外はその都度縮尺を示した。

5　遺構実測図中のスクリーントーンは下記のことを示す。

(遺構)　焼土　粘土　炭

(遺物)　吸炭による黒色処理　内面漆又は吸炭、外面吸炭

その他の場合はその都度示す。

6　出土遺物については、遺物観察表を用いて記した。なお遺物番号は、遺物実測図・遺構実測図内遺物番号・遺物観察表遺物番号・写真図版遺物番号に一致する。

7　時期不明や遺物の少ない重複住居は他の時代と同時掲載とする場合もある。

8　遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修(財)日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」1988年度版を使用している。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
挿図目次
図版目次
抄　　録

第1章　発掘調査に至る経緯及び経過 …… 3
　第1節　発掘調査に至る経緯 …… 3
　第2節　調査の方法と経過 …… 4
　　1　調査の方法 …… 4
　　2　調査の経過 …… 5

第2章　地理的環境及び歴史的環境 …… 6
　第1節　地理的環境 …… 6
　第2節　歴史的環境 …… 7
　第3節　基本層序 …… 12

第3章　古墳時代の遺構と遺物 …… 15

第4章　奈良時代の遺構と遺物 …… 111

第5章　平安時代の遺構と遺物 …… 370

第6章　その他の遺構と遺物 …… 383
　第1節　時期不明の遺構と遺物 …… 383
　第2節　住居状遺構と遺物 …… 395
　第3節　報告済住居の記載漏れ遺物 …… 405

第7章　調査成果の整理とまとめ……409
第1節　古墳～平安時代の住居について……409
第2節　矢田遺跡における6世紀後半集落の成立……451
第3節　矢田遺跡周辺における古墳時代後期から平安時代後期の土器について……460
第4節　矢田遺跡における紡錘車の所有形態について……487
第5節　群馬県内出土紡錘車の編年……495
第6節　科学分析……499
付表　群馬県内出土の紡錘車一覧表……505
第7節　まとめ……543

発掘報告書抄録
写真図版
付図　矢田遺跡全体図
紡錘車編年図(1)
紡錘車編年図(2)

挿　図　目　次

第 1 図　矢田遺跡調査区及びグリッド配置図 …… 4
第 2 図　矢田遺跡と周辺の遺跡分布図 …… 8
第 3 図　矢田遺跡周辺図 …… 9
第 4 図　基本層序概念図 …… 12
第 5 図　本報告住居及び周辺遺構分布図 …… 13
第 6 図　2 号住居跡実測図（1） …… 15
第 7 図　2 号住居跡実測図（2） …… 16
第 8 図　2 号住居跡新東電実測図 …… 16
第 9 図　2 号住居跡出北電実測図 …… 17
第 10 図　2 号住居跡出土遺物実測図 …… 17
第 11 図　9 号住居跡実測図 …… 18
第 12 図　9 号住居跡電実測図 …… 19
第 13 図　9 号住居跡出土遺物実測図 …… 19
第 14 図　10号住居跡実測図 …… 20
第 15 図　10号住居跡出土遺物実測図 …… 21
第 16 図　26号住居跡実測図 …… 21
第 17 図　26号住居跡出土遺物実測図 …… 22
第 18 図　28号住居跡実測図（1） …… 22
第 19 図　28号住居跡実測図（2） …… 23
第 20 図　28号住居跡出土遺物実測図 …… 23
第 21 図　35号住居跡実測図 …… 24
第 22 図　35号住居跡電実測図 …… 25
第 23 図　35号住居跡出土遺物実測図（1） …… 25
第 24 図　35号住居跡出土遺物実測図（2） …… 26
第 25 図　93号住居跡実測図 …… 28
第 26 図　93号住居跡電実測図 …… 28
第 27 図　93号住居跡出土遺物実測図（1） …… 28
第 28 図　93号住居跡出土遺物実測図（2） …… 29
第 29 図　128号住居跡実測図 …… 30
第 30 図　128号住居跡電実測図 …… 31
第 31 図　128号住居跡出土遺物実測図 …… 31
第 32 図　161号住居跡実測図 …… 32
第 33 図　161号住居跡床下実測図 …… 33
第 34 図　161号住居跡電実測図 …… 33
第 35 図　161号住居跡出土遺物実測図 …… 34
第 36 図　166号住居跡実測図（1） …… 35
第 37 図　166号住居跡実測図（2） …… 36
第 38 図　166号住居跡床下実測図 …… 36
第 39 図　166号住居跡新東電・旧北電実測図 …… 37
第 40 図　166号住居跡出土遺物実測図（1） …… 37
第 41 図　166号住居跡出土遺物実測図（2） …… 38
第 42 図　166号住居跡出土遺物実測図（3） …… 39
第 43 図　178号住居跡実測図 …… 41
第 44 図　178号住居跡出土遺物実測図 …… 42
第 45 図　193号住居跡実測図 …… 43
第 46 図　193号住居跡電実測図 …… 43
第 47 図　193号住居跡出土遺物実測図 …… 44
第 48 図　286号住居跡実測図 …… 44
第 49 図　286号住居跡出土遺物実測図（1） …… 45
第 50 図　286号住居跡出土遺物実測図（2） …… 46
第 51 図　291号住居跡実測図 …… 49
第 52 図　291号住居跡電実測図 …… 49
第 53 図　291号住居跡出土遺物実測図 …… 49
第 54 図　345号住居跡実測図 …… 50
第 55 図　345号住居跡電実測図 …… 51
第 56 図　345号住居跡出土遺物実測図 …… 51
第 57 図　360号住居跡実測図 …… 52
第 58 図　360号住居跡電実測図 …… 52
第 59 図　360号住居跡出土遺物実測図 …… 52
第 60 図　365号住居跡実測図 …… 53
第 61 図　365号住居跡電実測図 …… 54
第 62 図　365号住居跡出土遺物実測図（1） …… 54
第 63 図　365号住居跡出土遺物実測図（2） …… 55
第 64 図　369号住居跡実測図 …… 56
第 65 図　369号住居跡新北電実測図 …… 57
第 66 図　369号住居跡旧東電実測図 …… 57
第 67 図　369号住居跡出土遺物実測図 …… 58
第 68 図　375号住居跡実測図 …… 60
第 69 図、375号住居跡出土遺物実測図 …… 61
第 70 図　411号住居跡実測図 …… 62
第 71 図　411号住居跡床下・427号住居跡実測図 …… 62
第 72 図　411号住居跡電実測図 …… 63
第 73 図　411号住居跡出土遺物実測図 …… 63
第 74 図　412号住居跡実測図 …… 64
第 75 図　412号住居跡電実測図 …… 65
第 76 図　412号住居跡出土遺物実測図 …… 65
第 77 図　414号住居跡実測図 …… 66
第 78 図　414号住居跡電実測図 …… 67
第 79 図　414号住居跡出土遺物実測図 …… 67
第 80 図　440号住居跡実測図 …… 69
第 81 図　440号住居跡床下実測図 …… 70
第 82 図　440号住居跡新北電実測図 …… 70
第 83 図　440号住居跡旧東電実測図 …… 71
第 84 図　440号住居跡出土遺物実測図 …… 71
第 85 図　452号住居跡実測図 …… 73
第 86 図　452号住居跡電実測図 …… 74
第 87 図　452号住居跡出土遺物実測図（1） …… 74
第 88 図　452号住居跡出土遺物実測図（2） …… 75
第 89 図　463号住居跡実測図 …… 76
第 90 図　463号住居跡電実測図 …… 76
第 91 図　463号住居跡出土遺物実測図 …… 77
第 92 図　468号住居跡実測図 …… 78
第 93 図　468号住居跡電実測図 …… 78
第 94 図　468号住居跡周辺遺構重複関係図 …… 79
第 95 図　468号住居跡出土遺物実測図 …… 80
第 96 図　470号住居跡実測図 …… 82
第 97 図　470号住居跡電・出土遺物実測図 …… 82
第 98 図　472号住居跡実測図 …… 83
第 99 図　472号住居跡電実測図 …… 83
第100図　472号住居跡出土遺物実測図 …… 84
第101図　474号住居跡・出土遺物実測図 …… 84
第102図　484号住居跡実測図 …… 85
第103図　484号住居跡電実測図 …… 86
第104図　484号住居跡出土遺物実測図（1） …… 86
第105図　484号住居跡出土遺物実測図（2） …… 87
第106図　503号住居跡実測図 …… 88
第107図　503号住居跡床下実測図 …… 89
第108図　503号住居跡電実測図 …… 89
第109図　503号住居跡出土遺物実測図 …… 90
第110図　537号住居跡・床下実測図 …… 91
第111図　537号住居跡電実測図 …… 91
第112図　537号住居跡出土遺物実測図 …… 92
第113図　542号住居跡実測図 …… 92
第114図　542号住居跡電・出土遺物実測図 …… 93
第115図　573号住居跡実測図 …… 94
第116図　573号住居跡床下実測図 …… 95

第117図　573号住居跡竈実測図……95
第118図　573号住居跡出土遺物実測図……96
第119図　636号住居跡実測図……97
第120図　636号住居跡床下実測図……98
第121図　636号住居跡竈実測図……98
第122図　636号住居跡出土遺物実測図……99
第123図　714・715号住居跡実測図……101
第124図　714号住居跡竈実測図……102
第125図　714号住居跡出土遺物実測図……102
第126図　715号住居跡出土遺物実測図……102
第127図　721・722号住居跡実測図……104
第128図　721・722号住居跡竈実測図……104
第129図　722号住居跡出土遺物実測図……105
第130図　724号住居跡実測図……105
第131図　724号住居跡竈実測図……106
第132図　724号住居跡出土遺物実測図……106
第133図　729号住居跡実測図……106
第134図　729号住居跡竈・出土遺物実測図……107
第135図　734号住居跡・床下実測図……108
第136図　734号住居跡竈実測図……108
第137図　734号住居跡出土遺物実測図……109
第138図　751号住居跡実測図……110
第139図　751号住居跡出土遺物実測図……110
第140図　11号住居跡実測図……111
第141図　11号住居跡竈実測図……112
第142図　11号住居跡出土遺物実測図(1)……112
第143図　11号住居跡出土遺物実測図(2)……113
第144図　19号住居跡実測図……114
第145図　19号住居跡出土遺物実測図……114
第146図　24・25号住居跡出土遺物実測図……115
第147図　24・25号住居跡実測図(1)……116
第148図　24・25号住居跡実測図(2)……117
第149図　29号住居跡実測図……117
第150図　29号住居跡竈実測図……118
第151図　29号住居跡出土遺物実測図……118
第152図　61号住居跡実測図……119
第153図　61号住居跡新東竈実測図……119
第154図　61号住居跡旧北竈実測図……120
第155図　61号住居跡出土遺物実測図(1)……120
第156図　61号住居跡出土遺物実測図(2)……121
第157図　80号住居跡・竈実測図……124
第158図　80号住居跡出土遺物実測図……125
第159図　81号住居跡実測図……126
第160図　81号住居跡床下実測図……126
第161図　81号住居跡新東竈実測図……127
第162図　81号住居跡旧北竈実測図……127
第163図　81号住居跡出土遺物実測図……128
第164図　82号住居跡実測図……129
第165図　82号住居跡竈実測図……129
第166図　82号住居跡出土遺物実測図……130
第167図　84号住居跡実測図……131
第168図　84号住居跡竈実測図……131
第169図　84号住居跡出土遺物実測図……132
第170図　88号住居跡実測図……133
第171図　88号住居跡竈実測図……134
第172図　88号住居跡出土遺物実測図(1)……134
第173図　88号住居跡出土遺物実測図(2)……135
第174図　95号住居跡実測図……136
第175図　95号住居跡竈実測図……137
第176図　95号住居跡出土遺物実測図……137
第177図　96号住居跡・床下実測図……138
第178図　96号住居跡出土遺物実測図……139
第179図　110号住居跡実測図……140
第180図　110号住居跡出土遺物実測図……141
第181図　112号住居跡実測図……142
第182図　112号住居跡床下・竈実測図……142
第183図　112号住居跡出土遺物実測図……143
第184図　116号住居跡実測図……145
第185図　116号住居跡竈実測図……145
第186図　116号住居跡出土遺物実測図……146
第187図　120号住居跡実測図……147
第188図　120号住居跡出土遺物実測図……147
第189図　131号住居跡実測図……149
第190図　131号住居跡竈・出土遺物実測図……149
第191図　136号住居跡実測図……150
第192図　136号住居跡竈実測図……150
第193図　136号住居跡出土遺物実測図……151
第194図　159号住居跡実測図……152
第195図　159号住居跡竈実測図……152
第196図　159号住居跡出土遺物実測図……152
第197図　169号住居跡実測図……153
第198図　169号住居跡竈実測図……154
第199図　169号住居跡出土遺物実測図……154
第200図　170号住居跡実測図……155
第201図　172号住居跡実測図……155
第202図　172号住居跡竈実測図……156
第203図　172号住居跡竈張り方実測図……156
第204図　172号住居跡出土遺物実測図……156
第205図　174号住居跡・貯蔵穴実測図……157
第206図　174号住居跡竈実測図……158
第207図　174号住居跡出土遺物実測図(1)……158
第208図　174号住居跡出土遺物実測図(2)……159
第209図　176号住居跡実測図……160
第210図　176号住居跡出土遺物実測図……160
第211図　179号住居跡実測図……162
第212図　179号住居跡床下・竈実測図……163
第213図　179号住居跡出土遺物実測図(1)……164
第214図　179号住居跡出土遺物実測図(2)……165
第215図　179号住居跡出土遺物実測図(3)……166
第216図　180号住居跡実測図……169
第217図　180号住居跡床下実測図……170
第218図　180号住居跡竈実測図……171
第219図　180号住居跡出土遺物実測図(1)……171
第220図　180号住居跡出土遺物実測図(2)……172
第221図　185号住居跡・出土遺物実測図……173
第222図　187号住居跡・床下実測図……174
第223図　187号住居跡竈実測図……175
第224図　187号住居跡出土遺物実測図(1)……175
第225図　187号住居跡出土遺物実測図(2)……176
第226図　222号住居跡実測図……178
第227図　222号住居跡竈実測図……178
第228図　222号住居跡出土遺物実測図……179
第229図　224号住居跡実測図……179
第230図　224号住居跡竈・出土遺物実測図……180
第231図　241号住居跡実測図……180
第232図　241号住居跡竈実測図……181
第233図　241号住居跡出土遺物実測図……181
第234図　246号住居跡実測図……182
第235図　246号住居跡貯蔵穴実測図……183
第236図　246号住居跡竈実測図……183
第237図　246号住居跡出土遺物実測図(1)……184
第238図　246号住居跡出土遺物実測図(2)……185
第239図　246号住居跡出土遺物実測図(3)……186
第240図　247号住居跡実測図……189

第241図　247号住居跡竈実測図 …… 189
第242図　247号住居跡出土遺物実測図 …… 190
第243図　248号住居跡実測図 …… 192
第244図　248号住居跡竈実測図 …… 192
第245図　248号住居跡出土遺物実測図(1) …… 193
第246図　248号住居跡出土遺物実測図(2) …… 194
第247図　252号住居跡実測図 …… 195
第248図　252号住居跡竈実測図 …… 196
第249図　252号住居跡出土遺物実測図 …… 196
第250図　253号住居跡実測図 …… 197
第251図　253号住居跡竈実測図 …… 197
第252図　253号住居跡出土遺物実測図 …… 198
第253図　254号住居跡実測図 …… 200
第254図　254号住居跡竈実測図 …… 200
第255図　254号住居跡出土遺物実測図 …… 201
第256図　273号住居跡・床下実測図 …… 203
第257図　273号住居跡竈実測図 …… 204
第258図　273号住居跡出土遺物実測図(1) …… 204
第259図　273号住居跡出土遺物実測図(2) …… 205
第260図　299号住居跡実測図 …… 206
第261図　299号住居跡周辺遺構重複関係図 …… 207
第262図　299号住居跡出土遺物実測図 …… 208
第263図　315号住居跡実測図 …… 209
第264図　315号住居跡床下実測図 …… 210
第265図　315号住居跡竈実測図 …… 210
第266図　315号住居跡出土遺物実測図(1) …… 210
第267図　315号住居跡出土遺物実測図(2) …… 211
第268図　322号住居跡実測図 …… 212
第269図　322号住居跡竈実測図 …… 213
第270図　322号住居跡出土遺物実測図 …… 213
第271図　323号住居跡実測図 …… 215
第272図　323号住居跡竈実測図 …… 215
第273図　323号住居跡出土遺物実測図 …… 215
第274図　336号住居跡実測図 …… 216
第275図　336号住居跡・土坑・竈実測図 …… 216
第276図　336号住居跡出土遺物実測図 …… 217
第277図　341号住居跡実測図 …… 218
第278図　341号住居跡出土遺物実測図 …… 219
第279図　349号住居跡実測図 …… 220
第280図　349号住居跡竈実測図 …… 220
第281図　349号住居跡出土遺物実測図(1) …… 221
第282図　349号住居跡出土遺物実測図(2) …… 222
第283図　373号住居跡・出土遺物実測図 …… 223
第284図　378号住居跡実測図 …… 224
第285図　378号住居跡竈実測図 …… 225
第286図　378号住居跡出土遺物実測図 …… 225
第287図　380号住居跡実測図 …… 226
第288図　380号住居跡出土遺物実測図 …… 226
第289図　381号住居跡実測図 …… 227
第290図　381号住居跡竈実測図(1) …… 228
第291図　381号住居跡竈実測図(2) …… 229
第292図　381号住居跡竈想定復元図・出土遺物実測図 …… 230
第293図　390号住居跡実測図 …… 232
第294図　390号住居跡竈実測図 …… 232
第295図　390号住居跡出土遺物実測図(1) …… 232
第296図　390号住居跡出土遺物実測図(2) …… 233
第297図　392号住居跡実測図 …… 234
第298図　392号住居跡床下実測図 …… 235
第299図　392号住居跡竈実測図 …… 235
第300図　392号住居跡出土遺物実測図 …… 236
第301図　399号住居跡実測図 …… 237
第302図　399号住居跡床下実測図 …… 238
第303図　399号住居跡竈実測図 …… 238
第304図　399号住居跡出土遺物実測図 …… 238
第305図　409号住居跡実測図 …… 239
第306図　409号住居跡出土遺物実測図 …… 240
第307図　413号住居跡実測図 …… 241
第308図　413号住居跡竈実測図 …… 241
第309図　413号住居跡出土遺物実測図 …… 242
第310図　429号住居跡・出土遺物実測図 …… 242
第311図　431号住居跡実測図 …… 243
第312図　431号住居跡竈実測図 …… 244
第313図　431号住居跡出土遺物実測図 …… 244
第314図　436号住居跡実測図 …… 245
第315図　438号住居跡実測図 …… 246
第316図　438号住居跡竈実測図 …… 246
第317図　438号住居跡出土遺物実測図 …… 247
第318図　439号住居跡実測図 …… 248
第319図　439号住居跡竈実測図 …… 248
第320図　439号住居跡出土遺物実測図 …… 249
第321図　447号住居跡実測図 …… 250
第322図　447号住居跡竈実測図 …… 250
第323図　447号住居跡出土遺物実測図 …… 251
第324図　455号住居跡実測図 …… 252
第325図　455号住居跡竈実測図 …… 252
第326図　455号住居跡出土遺物実測図 …… 252
第327図　458号住居跡実測図 …… 253
第328図　458号住居跡竈実測図 …… 254
第329図　458号住居跡出土遺物実測図(1) …… 254
第330図　458号住居跡出土遺物実測図(2) …… 255
第331図　473号住居跡実測図 …… 257
第332図　473号住居跡床下実測図 …… 257
第333図　473号住居跡竈実測図 …… 258
第334図　473号住居跡出土遺物実測図 …… 258
第335図　487号住居跡実測図 …… 259
第336図　487号住居跡竈実測図 …… 260
第337図　487号住居跡出土遺物実測図 …… 260
第338図　488号住居跡実測図 …… 261
第339図　488号住居跡竈実測図 …… 261
第340図　488号住居跡出土遺物実測図 …… 262
第341図　490号住居跡実測図 …… 263
第342図　490号住居跡竈実測図 …… 263
第343図　490号住居跡出土遺物実測図 …… 264
第344図　493・494号住居跡実測図 …… 267
第345図　493・494号住居跡床下実測図 …… 267
第346図　493号住居跡竈実測図 …… 268
第347図　494号住居跡竈実測図 …… 268
第348図　493号住居跡出土遺物実測図 …… 268
第349図　494号住居跡出土遺物実測図 …… 269
第350図　496号住居跡実測図 …… 270
第351図　496号住居跡竈実測図 …… 270
第352図　496号住居跡出土遺物実測図 …… 271
第353図　507号住居跡実測図 …… 272
第354図　507号住居跡竈実測図 …… 272
第355図　507号住居跡出土遺物実測図 …… 273
第356図　516号住居跡実測図 …… 274
第357図　516号住居跡竈実測図 …… 274
第358図　516号住居跡出土遺物実測図 …… 275
第359図　522号住居跡実測図 …… 276
第360図　522号住居跡竈実測図 …… 276
第361図　522号住居跡出土遺物実測図 …… 276
第362図　527号住居跡実測図 …… 277
第363図　527号住居跡竈実測図 …… 278
第364図　527号住居跡出土遺物実測図 …… 278

第365図 543号住居跡実測図 ……280
第366図 543号住居跡新東電・旧東電実測図 ……280
第367図 543号住居跡出土遺物実測図 ……281
第368図 546号住居跡実測図 ……282
第369図 546号住居跡電実測図 ……283
第370図 546号住居跡出土遺物実測図 ……283
第371図 550号住居跡実測図 ……284
第372図 550号住居跡電実測図 ……284
第373図 551号住居跡実測図 ……285
第374図 551号住居跡電実測図 ……286
第375図 551号住居跡出土遺物実測図 ……286
第376図 552号住居跡実測図 ……287
第377図 552号住居跡電実測図 ……288
第378図 552号住居跡出土遺物実測図 ……288
第379図 555・557号住居跡実測図 ……290
第380図 557号住居跡電実測図 ……290
第381図 555号住居跡出土遺物実測図 ……291
第382図 557号住居跡出土遺物実測図 ……291
第383図 559号住居跡実測図 ……292
第384図 559号住居跡電実測図 ……292
第385図 559号住居跡出土遺物実測図 ……293
第386図 560号住居跡実測図 ……294
第387図 560号住居跡床下実測図 ……295
第388図 560号住居跡電実測図 ……295
第389図 560号住居跡出土遺物実測図 ……296
第390図 565号住居跡実測図 ……297
第391図 565号住居跡電実測図 ……297
第392図 565号住居跡出土遺物実測図 ……298
第393図 571号住居跡実測図 ……299
第394図 571号住居跡電・出土遺物実測図 ……299
第395図 572号住居跡実測図 ……300
第396図 572号住居跡電実測図 ……300
第397図 572号住居跡出土遺物実測図 ……301
第398図 577号住居跡実測図 ……301
第399図 577号住居跡電実測図 ……302
第400図 577号住居跡出土遺物実測図 ……302
第401図 583号住居跡実測図 ……303
第402図 583号住居跡床下実測図 ……304
第403図 583号住居跡電実測図 ……304
第404図 583号住居跡出土遺物実測図 ……304
第405図 593号住居跡実測図 ……305
第406図 593号住居跡電実測図 ……305
第407図 593号住居跡出土遺物実測図(1) ……306
第408図 593号住居跡出土遺物実測図(2) ……307
第409図 594号住居跡実測図 ……308
第410図 594号住居跡電実測図 ……308
第411図 594号住居跡出土遺物実測図 ……308
第412図 598号住居跡実測図 ……309
第413図 598号住居跡電実測図 ……309
第414図 599号住居跡実測図 ……310
第415図 599号住居跡電実測図 ……310
第416図 599号住居跡出土遺物実測図 ……311
第417図 605号住居跡実測図 ……312
第418図 605号住居跡出土遺物実測図 ……312
第419図 611号住居跡実測図 ……313
第420図 611号住居跡電実測図 ……314
第421図 611号住居跡出土遺物実測図 ……314
第422図 614号住居跡実測図 ……315
第423図 614号住居跡出土遺物実測図 ……315
第424図 616号住居跡実測図 ……316
第425図 616号住居跡電実測図 ……317
第426図 616号住居跡出土遺物実測図 ……317
第427図 617号住居跡実測図 ……318
第428図 617号住居跡電実測図 ……318
第429図 617号住居跡出土遺物実測図 ……319
第430図 618号住居跡実測図 ……320
第431図 618号住居跡出土遺物実測図 ……321
第432図 627号住居跡実測図 ……322
第433図 627号住居跡電実測図 ……322
第434図 627号住居跡出土遺物実測図 ……323
第435図 628号住居跡実測図 ……324
第436図 628号住居跡新東電実測図 ……325
第437図 628号住居跡出北電実測図 ……325
第438図 628号住居跡出土遺物実測図(1) ……325
第439図 628号住居跡出土遺物実測図(2) ……326
第440図 634号住居跡・床下実測図 ……328
第441図 634号住居跡電実測図 ……329
第442図 634号住居跡出土遺物実測図 ……329
第443図 639号住居跡実測図 ……330
第444図 639号住居跡電実測図 ……330
第445図 639号住居跡出土遺物実測図 ……330
第446図 641号住居跡実測図 ……331
第447図 641号住居跡電実測図 ……332
第448図 641号住居跡出土遺物実測図 ……332
第449図 645号住居跡実測図 ……332
第450図 645号住居跡電実測図 ……333
第451図 645号住居跡出土遺物実測図 ……333
第452図 648号住居跡・出土遺物実測図 ……334
第453図 649号住居跡実測図 ……335
第454図 649号住居跡出土遺物実測図 ……336
第455図 655号住居跡実測図 ……337
第456図 655号住居跡床下実測図 ……338
第457図 655号住居跡電実測図 ……338
第458図 655号住居跡出土遺物実測図 ……339
第459図 665号住居跡実測図 ……341
第460図 665号住居跡出土遺物実測図 ……341
第461図 671号住居跡実測図 ……342
第462図 671号住居跡電実測図 ……343
第463図 671号住居跡出土遺物実測図 ……343
第464図 701号住居跡実測図 ……344
第465図 701号住居跡電・出土遺物実測図 ……344
第466図 710号住居跡実測図 ……345
第467図 710号住居跡出土遺物実測図 ……345
第468図 713号住居跡実測図 ……346
第469図 713号住居跡床下実測図 ……347
第470図 713号住居跡電実測図 ……347
第471図 713号住居跡出土遺物実測図 ……347
第472図 717号住居跡実測図 ……348
第473図 717号住居跡床下実測図 ……349
第474図 717号住居跡新北電実測図 ……349
第475図 717号住居跡旧東電実測図 ……349
第476図 717号住居跡出土遺物実測図 ……350
第477図 727号住居跡実測図 ……351
第478図 727号住居跡電実測図 ……352
第479図 727号住居跡出土遺物実測図 ……352
第480図 728号住居跡実測図 ……353
第481図 728号住居跡電実測図 ……354
第482図 728号住居跡出土遺物実測図(1) ……354
第483図 728号住居跡出土遺物実測図(2) ……355
第484図 730号住居跡実測図 ……356
第485図 730号住居跡床下実測図 ……357
第486図 730号住居跡電実測図 ……357
第487図 730号住居跡出土遺物実測図(1) ……357
第488図 730号住居跡出土遺物実測図(2) ……358

第489図　731・736号住居跡実測図……359
第490図　731号住居跡電実測図……359
第491図　731号住居跡出土遺物実測図……359
第492図　732号住居跡・電実測図……360
第493図　732号住居跡出土遺物実測図……361
第494図　733号住居跡実測図……361
第495図　733号住居跡電・出土遺物実測図……362
第496図　737号住居跡・床下実測図……363
第497図　737号住居跡電実測図……363
第498図　737号住居跡出土遺物実測図……363
第499図　742号住居跡・出土遺物実測図……364
第500図　744号住居跡実測図……364
第501図　744号住居跡電実測図……365
第502図　744号住居跡出土遺物実測図……365
第503図　745号住居跡実測図……366
第504図　745号住居跡電実測図……366
第505図　745号住居跡出土遺物実測図……367
第506図　746号住居跡実測図……367
第507図　746号住居跡床下実測図……368
第508図　746号住居跡出土遺物実測図……368
第509図　749号住居跡実測図……369
第510図　20号住居跡実測図……370
第511図　20号住居跡出土遺物実測図……370
第512図　213号住居跡実測図……371
第513図　213号住居跡電実測図（1）……371
第514図　213号住居跡電実測図（2）……372
第515図　213号住居跡出土遺物実測図……372
第516図　366号住居跡実測図……373
第517図　366号住居跡床下実測図……374
第518図　366号住居跡電実測図……374
第519図　366号住居跡出土遺物実測図（1）……374
第520図　366号住居跡出土遺物実測図（2）……375
第521図　405号住居跡実測図……376
第522図　405号住居跡電実測図……377
第523図　405号住居跡出土遺物実測図……377
第524図　480号住居跡実測図……378
第525図　480号住居跡電実測図……379
第526図　480号住居跡出土遺物実測図……379
第527図　630号住居跡実測図……380
第528図　630号住居跡電実測図……380
第529図　630号住居跡出土遺物実測図（1）……380
第530図　630号住居跡出土遺物実測図（2）……381
第531図　688号住居跡実測図……381
第532図　688号住居跡電実測図……382
第533図　688号住居跡出土遺物実測図……382
第534図　27号住居跡・出土遺物実測図……383
第535図　32号住居跡実測図……384
第536図　103号住居跡実測図……385
第537図　192号住居跡実測図……385
第538図　195号住居跡実測図……386
第539図　204号住居跡実測図……387
第540図　215号住居跡実測図……387
第541図　242号住居跡実測図……388
第542図　243号住居跡実測図……389
第543図　279号住居跡実測図……389
第544図　301号住居跡実測図……390
第545図　422号住居跡実測図……390
第546図　497号住居跡実測図……391
第547図　569号住居跡実測図……391
第548図　597号住居跡実測図……392
第549図　712号住居跡・電実測図……392
第550図　735号住居跡・電実測図……393
第551図　740号住居跡・電実測図……394
第552図　740号住居跡出土遺物実測図……394
第553図　743号住居跡実測図……395
第554図　1・2号住居状遺構実測図……396
第555図　1号住居状遺構出土遺物実測図……396
第556図　4号住居状遺構実測図……397
第557図　6号住居状遺構実測図……397
第558図　6号住居状遺構出土遺物実測図……397
第559図　7号住居状遺構実測図……398
第560図　10号住居状遺構実測図……398
第561図　11号住居状遺構実測図……399
第562図　13号住居状遺構実測図……399
第563図　14号住居状遺構実測図……400
第564図　15号住居状遺構・出土遺物実測図……401
第565図　17号住居状遺構実測図……401
第566図　17号住居状遺構出土遺物実測図……402
第567図　23号住居状遺構実測図……402
第568図　23号住居状遺構出土遺物実測図……402
第569図　24号住居状遺構位置図・遺物出土状況図……403
第570図　24号住居状遺構出土遺物実測図（1）……403
第571図　24号住居状遺構出土遺物実測図（2）……404
第572図　報告済住居の記載漏れ遺物実測図（1）……405
第573図　報告済住居の記載漏れ遺物実測図（2）……406
第574図　報告済住居の記載漏れ遺物実測図（3）……407
第575図　時期別住居軒数……411
第576図　吉井町＋高崎市山名（推定古代多胡郡内）時期別・
遺跡別住居数……413
第577図　古墳時代住居分布図……415
第578図　奈良時代住居分布図……417
第579図　平安時代住居分布図（1）……419
第580図　平安時代住居分布図（2）……421
第581図　時期別住居規模……424
第582図　時期別住居規模の比率……424
第583図　柱穴を持つ住居……425
第584図　貯蔵穴を持つ住居……427
第585図　時期別にみた電の作られている壁面……427
第586図　時期別にみた電の作られている壁面の比率……428
第587図　複数の電を持つ住居……429
第588図　6世紀代の竪穴住居分布図……455
第589図　竪穴住居の集団関係図……457
第590図　矢田遺跡を中心とした古墳時代土器編年図（1）……462
第591図　矢田遺跡を中心とした古墳時代土器編年図（2）……463
第592図　矢田遺跡を中心とした奈良時代土器編年図（1）……466
第593図　矢田遺跡を中心とした奈良時代土器編年図（2）……467
第594図　矢田遺跡を中心とした平安時代土器編年図（1）……470
第595図　矢田遺跡を中心とした平安時代土器編年図（2）……471
第596図　矢田遺跡を中心とした平安時代土器編年図（3）……474
第597図　矢田遺跡を中心とした平安時代土器編年図（4）……475
第598図　矢田遺跡を中心とした平安時代土器編年図（5）……476
第599図　矢田遺跡を中心とした平安時代土器編年図（6）……477
第600図　土師質土器皿を出土する土坑実測図……478
第601図　時期別に見た鈴鹿車出土率……489
第602図　矢田遺跡の鈴鹿車出土分布図（古墳時代）……491
第603図　矢田遺跡の鈴鹿車出土分布図（奈良時代）……492
第604図　矢田遺跡の鈴鹿車出土分布図（平安時代・1）……493
第605図　矢田遺跡の鈴鹿車出土分布図（平安時代・2）……494

図 版 目 次

巻頭図版　矢田遺跡（現 吉井インターチェンジ）と周辺の地形
178号住居跡全景・179号住居跡竈
本年度報告の紡錘車
矢田遺跡古代村野外展示（事業団創立10周年記念）
図版 1　矢田遺跡全景航空写真
図版 2　矢田遺跡遠景、調査終了段階に近い矢田遺跡
図版 3　第1・3～5次調査区
図版 4　第1～4次調査区住居群
図版 5　第1・2次調査区航空写真
図版 6　第3次調査区航空写真
図版 7　第4・5次調査区航空写真
図版 8　第5～7次調査区航空写真
図版 9　第7・8次調査区航空写真
図版 10　第7・8次調査区航空写真
図版 11　第8・9次調査区航空写真
図版 12　第10・11次調査区航空写真
図版 13　第12次調査区航空写真
図版 14　2・9・10号住居跡
図版 15　26・28・35・93号住居跡
図版 16　93・128・161号住居跡
図版 17　161・166・178号住居跡
図版 18　178・193・286号住居跡
図版 19　286・291・345・360号住居跡
図版 20　365・369号住居跡
図版 21　369・375・411号住居跡
図版 22　412・414・440号住居跡
図版 23　440・452号住居跡
図版 24　463・468・470号住居跡
図版 25　470・472・474・484号住居跡
図版 26　484・494・503・537・542号住居跡
図版 27　542・573・636号住居跡
図版 28　636・714・715・721・722・724号住居跡
図版 29　724・729・734・751号住居跡
図版 30　11・19・24・25号住居跡
図版 31　29・61・80号住居跡
図版 32　80・81・82号住居跡
図版 33　82・84・88・95号住居跡
図版 34　95・96・110・112号住居跡
図版 35　112・116・120・131号住居跡
図版 36　131・136・159・169号住居跡
図版 37　169・170・172・174号住居跡
図版 38　174・176・179号住居跡
図版 39　179号住居跡
図版 40　180・185・187号住居跡
図版 41　187・222・224・241号住居跡
図版 42　246・247号住居跡
図版 43　248・252・253号住居跡
図版 44　254・273・299号住居跡
図版 45　299・315・322号住居跡
図版 46　323・336・341・349号住居跡
図版 47　349・373・378・381号住居跡
図版 48　381・390・392号住居跡
図版 49　392・399・409・413・429号住居跡
図版 50　431・436・438・439号住居跡
図版 51　439・447・455・458号住居跡
図版 52　458・473・487・488号住居跡
図版 53　488・490・493号住居跡
図版 54　493・496・507号住居跡
図版 55　507・516・522号住居跡
図版 56　527・543・546号住居跡
図版 57　546・550・551・552号住居跡
図版 58　552・555・557号住居跡
図版 59　559・560・565号住居跡
図版 60　565・571・572号住居跡
図版 61　577・583・593・594号住居跡
図版 62　598・599・605・611号住居跡
図版 63　614・616・617号住居跡
図版 64　618・627・628号住居跡
図版 65　628・634号住居跡
図版 66　639・641・645・648・649号住居跡
図版 67　655・665・671・701・710・713号住居跡
図版 68　713・717・727・728号住居跡
図版 69　728・730・731・736号住居跡
図版 70　732・733・737・742・744号住居跡
図版 71　744・745・746・749号居跡
図版 72　20・213・366号住居跡
図版 73　405・480・630号住居跡
図版 74　688・27・103・192・195・204・215号住居跡
図版 75　242・243・279・301・497・569・597号住居跡
図版 76　712・735・740・743号住居跡、1・2・4号住居状遺構
図版 77　6・10・11・13・17・23・24号住居状遺構
図版 78　9・35・93・128号住居跡出土土器
図版 79　128・161・166・178号住居跡出土土器
図版 80　193・286号住居跡出土土器
図版 81　286・291・345・365・369・375・411・440号住居跡出土土器
図版 82　440・452・468・470・472・474・484号住居跡出土土器
図版 83　484・503・542・573・636号住居跡出土土器
図版 84　636・714・722・724・729・734号住居跡出土土器
図版 85　734・751・11・19・24・29・61号住居跡出土土器
図版 86　61・80号住居跡出土土器
図版 87　81・82・84・88号住居跡出土土器
図版 88　88・95・96・110・112号住居跡出土土器
図版 89　112・116・120・136・159・169・172号住居跡出土土器
図版 90　172・174・176・179号住居跡出土土器
図版 91　179号住居跡出土土器
図版 92　179・180号住居跡出土土器
図版 93　187・222・241号住居跡出土土器
図版 94　241・246号住居跡出土土器
図版 95　246・247・248・252・253号住居跡出土土器
図版 96　253・254・273号住居跡出土土器
図版 97　273・299・315・322・336・341号住居跡出土土器
図版 98　349・381・390号住居跡出土土器
図版 99　390・392・399・409・413・429号住居跡出土土器
図版100　431・438・439・447・455・458・473・488・490号住居跡出土土器
図版101　490・493・496・507号住居跡出土土器
図版102　507・516・522・527・543号住居跡出土土器
図版103　546・551・552・557・559・560・565号住居跡出土土器
図版104　565・571・572・577・583号住居跡出土土器
図版105　593・599号住居跡出土土器
図版106　599・605・611・616・617・618号住居跡出土土器
図版107　627・628・639・641・645・648・649号住居跡出土土器
図版108　649・655・665・671・701・710・713・717号住居跡出土土器
図版109　717・727・728号住居跡出土土器
図版110　730・731・732・737・744・746号住居跡出土土器
図版111　213・366・405・688号住居跡出土土器

図版112　1・6・24号住居状遺構出土土器
　　報告済み住居跡記載漏れ出土土器
図版113　鉄製品
図版114　鉄製品
図版115　土玉、臼玉、勾玉、紡錘車
図版116　紡錘車
図版117　紡錘車
図版118　紡錘車
図版119　紡錘車
図版120　紡錘車、飾り石、巡方、分銅、砥石
図版121　砥石
図版122　炭火米、原石、2・35号住居跡出土こも編み石
図版123　35・166・178・286・369号住居跡出土こも編み石
図版124　440・452・468・636号住居跡出土こも編み石
図版125　29・61・88・95・179号住居跡出土こも編み石
図版126　179・180・187・247・248・273・315号住居跡出土
　　こも編み石
図版127　315・322・373・381・409・458号住居跡出土こも編み石
図版128　490・493・522・546・559号住居跡出土こも編み石
図版129　605・366号住居跡出土こも編み石

抄　　録

1　遺跡の概略

本遺跡は群馬県多野郡吉井町大字矢田に位置する。本遺跡の発掘調査は、昭和61年4月1日から開始され、平成3年11月26日を以て終了した。調査報告書の作成は調査と平行しながら平成元年から開始され、これまでに『矢田遺跡』（平安時代住居跡編(1)1990）、『矢田遺跡Ⅱ』（平安時代住居跡編(2)1991）、『矢田遺跡Ⅲ』（平安時代住居跡編(3)1992）、『矢田遺跡Ⅳ』（旧石器・縄文時代と古墳時代住居跡編(1)1993）、『矢田遺跡Ⅴ』（古墳時住居跡編(2)1994）、『矢田遺跡Ⅵ』（古墳時代住居跡編(3)1996）が刊行された。本年度で矢田遺跡の整理事業は終了し、本年度刊行される本書『矢田遺跡Ⅶ』（古墳時代住居跡編(4)奈良時代住居跡編 平安時代住居跡編(4)1997）と『矢田遺跡Ⅷ』（中近世編・併古代以前非竪穴遺構編1997）をもって報告書は終結する。

本遺跡は旧石器、縄文、古墳、奈良、平安、中世の遺構が検出された複合遺跡である。これまで本遺跡付近は、北方1.5kmにある「多胡碑」や『続日本紀』との関連から、『和名類聚抄』郷名の「上野国多胡郡八（矢）田郷」に比定されてきた。今回の調査は、史料上の問題としての「八（矢）田郷」について、より具体的に考古学的アプローチが行われたという意義がある。調査の成果には、これに対応する集落の存在、「八田郷」「物部郷長」の線刻のある紡錘車をはじめとする各種の文字資料出土などがあり、調査規模の大きさと相俟って、今後分析が進展すれば、当地の古代史研究の発展に寄与するところ大となるであろう。

2　遺構数量

種　別	時　代	数　量	備　考
石器ブロック	旧　石　器	1	黒曜石製・台形様石器他総数12点
礫　群	旧　石　器	1	5点の礫により構成される
	縄　文　中　期	3	加曽利E3、埋甕（屋外）7、土壙が検出されている
	古　墳　前　期	5	遺物は少量である
	古　墳　中　期	9	
竪穴住居跡	古　墳　後　期	297	
	奈　　良	135	
	平　　安	267	
	時　期　不　明	21	
住居状遺構		13	
以上の住居の他に古代～中近世・近代に属する多くの遺構が発掘されている それらの遺構は溝、井戸、掘立、小鍛冶、道路、土器集積、館跡、土坑等である			

◎本報告は古墳時代の竪穴住居跡43軒、奈良時代の竪穴住居跡125軒、平安時代の竪穴住居跡7軒、時期不明の竪穴住居跡21軒、住居状遺構13軒を対象としている。

3　ま と め

調査範囲からは、旧石器時代の遺構・遺物を始め、縄文時代中期の集落の存在が判明した。弥生時代の遺構は知られていないが、古墳時代前期には再び集落が形成される。同後期から安定的に集落が営まれ、奈良・平安時代、中近世・近代まで生活や生産活動の場として使用され続け現代に至っている。現在は関越道上信越吉井インターチェンジ及びその周辺の本線部分となっている。

矢田遺跡 VII

第１章　発掘調査に至る経緯及び経過

第１節　発掘調査に至る経緯

上信越自動車道(関越自動車道上越線)は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道で、東京練馬～群馬県藤岡市までは関越自動車道新潟線との併用、藤岡ＪＣから藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・妙義町・松井田町・下仁田町を経て長野県佐久市に至り、長野県内を通過して新潟県上越市までの約280kmの自動車道である。

藤岡市～長野市間の基本計画が昭和47年に決定してから、整備計画策定のための関連公共事業調査(昭和49年)をはじめとし、文化財に関係する調査は昭和55～56年に行われている。昭和49年には基本計画ルートに対する文化財の基本的な考え方、即ち文化財保護法の遵守・指定文化財の扱い・文化財に対しては県教委と協議すること等を示し、昭和55～56年にかけての調査は想定されるルートを中心に埋蔵文化財包蔵地の面積を約100万㎡とした。 以後、日本道路公団による計画は進捗し、昭和56～57年にかけて路線の発表があった。昭和59年11月、道路公団より県教委に対し分布調査の依頼があり、それをうけ文化財保護課は調査を実施、同60年３月、発掘想定面積を約100万㎡とする回答を行っている。その後、上越線地域埋蔵文化財調査計画の策定が行われ、調査実施年度は昭和61～66年の６年間(後、修正があり昭和65年度＝平成２年度までの５年間に変更)、藤岡市～富岡市の約76万㎡を群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当し、他は市町村で調査会を組織し実施することになった。

昭和61年４月、県埋蔵文化財調査事業団は多野郡吉井町南陽台に、上越線の埋蔵文化財発掘調査を担当する「関越道上越線調査事務所」を開所し調査に入った。

矢田遺跡は、羽田倉遺跡・田篠遺跡・内匠下高瀬遺跡と同じく昭和61年当初から調査を行っている。吉井インターチェンジにあたる当遺跡は、インター中心部・それにつながる東側本線部分と西側本線部分及び料金所方向に向かう北側部分の約90,000㎡にわたる広大な面積を占めるが、地形等からみて一つの遺跡としたものである。 調査期間は約５年を見込み、インター中心部から北側方面、そしてインター東側本線部分へと進む大まかな計画を立て、建設工事の進展があればそれぞれに対応することで公団と協議を行った。

調査はＳＴＡ№109～111にかけてのインターにつながる東側部分から開始された。進捗につれ次々と住居跡が出現し、大規模な集落跡が展開することが確実となった。最終的に古墳時代後期から平安時代に至る竪穴住居跡を中心に750軒余を調査した。

矢田遺跡の整理は遺物・遺構ともに厖大な量であることから、のべ９年の期間が必要であるとし、平成元年度より毎年継続して行うこととした。整理の基本方針として、地域を区切ることが困難なため、時代別(地域を加味する)に実施してきた。

第２節　調査の方法と経過

１　調査の方法

本調査区は、吉井インターチェンジ予定地域及び、その前後の本線部分よりなる。建設工事用測量杭のＳＴＡ№106～113がほぼ矢田遺跡の調査範囲に該当する。この範囲内を、調査区南西端の国家座標Ｘ＝＋26.800，Ｙ＝－75.400を原点として5m四方のグリットを設定した。グリットの設定水準点の移動は、(株)測設が実施した。なお発掘調査は、地形及び道路等の条件から、便宜的に第１次調査区～第12次調査区に区分し、ほぼこれに応じて進行した。

２　調査の経過

発掘調査は1986～91年度の都合六年度に亘って行われたが、未買収地の取得状況との関連や、全体の調査工程との関係で若干の前後関係があり、調査を一時中断し中山（多胡蛇黒）遺跡等の調査を行っていた時期などもある。そのため調査自体に丸六年を費やした訳ではない。調査の経過を記した「調査日誌」はＢ5ファイル５冊にもなり、経過報告では残念ながらかなりの部分を削除せざるを得なかった。以下、「調査日誌(抄録)」を掲出してみる。

調査日誌（抄）

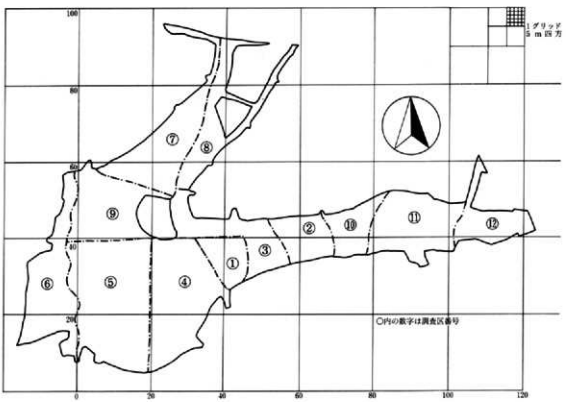
◎1986年度の調査

５月21日　現場作業の開始、第１次調査区の表土掘削開始。

　　29日　発掘作業員の雇用を始める。

６月２日　第１次調査区の調査を開始する。

７月１日　第１次調査区と並行して、第２次調査区の調査を開始する。



第１図　矢田遺跡調査区及びグリッド配置図

9月10日　第１・２次調査区の空撮を行う。
22日　第４次調査区の調査を開始する。
10月６日　第３次調査区の調査を開始する。
24日　第２次調査区の調査を終了する。
12月11日　第３・４次調査区の空撮を行う。
1月９日　第４次調査区79号住居跡から「八田郷」と線刻された石製紡錘車が出土する。
3月12日　第４次調査区の空撮を行う。
14日　現地見学会（～15日）、２日間で1200名程の見学者が訪れる。
25日　1986年度の調査を終了する。
◎1987年度の調査
4月15日　1987年度の調査を開始する。
5月８日　第４次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
6月11日　第４次調査区188号住居跡から「八中寸」の文字瓦が出土する。
10月２日　第４次調査区の空撮を行う。
7日　第５次調査区を開始する。
11月６日　吉井町郷土資料館特別展開催に伴い、矢田遺跡出土の文字瓦を展示する。
1月21日　第４次調査区の調査を終了する。
3月８日　第５次調査区の空撮を行う。
12日　現地見学会（～13日）、２日間で655人程が見学に訪れる。
25日　1987年度の調査を終了する。
◎1988年度の調査
4月15日　1988年度の調査を開始する。
6月７日　第６次調査区の調査を開始する。
7月19日　第７次調査区の調査を開始する。
10月８日　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団創立10周年記念事業の一環として、本遺跡において遺跡見学会を実施する。
総数7685名にのぼる見学者が訪れる。
27日　第５次調査区の空撮を行う。
11月７日　第５次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
14日　第６次調査区の旧河川・石組遺構の調査を終了する。
12月１日　第５次調査区の調査を進める。
18日　第10次調査区の調査を開始する。
2月13日　第８次調査区の表土掘削を開始する。
23日　第７次調査区の空撮を行う。
28日　第９次調査区の表土掘削を開始する。
3月24日　1988年度の調査を終了する。
◎1989年度の調査
4月10日　1989年度の調査を開始する。
7月10日　第７次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
9月26日　第８次調査区（北側部分）の空撮を行う。
12月21日　第８次調査区の空撮を行う。
22日　第９次調査区の679号住居跡から「物ア（部）・一八」と線刻された石製紡錘車が出土する。
1月８日　第８次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
2月27日　第11次調査区の表土掘削を開始する。
3月９日　第９次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
23日　1989年度の調査を終了する。
◎1990年度の調査
4月９日　1990年度の調査を開始する。
5月１日　第11次調査区の728号住居跡から「八田」と線刻された石製紡錘車が検出される。
11日　第８・10次調査区の空撮を行う。
14日　矢田遺跡の調査と並行して中山遺跡の表土掘削を開始する。
16日　第８次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
21日　第10次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
6月18日　第11次調査区の空撮を行う。
20日　第11時調査区の旧石器試掘調査を開始する。
21日　第11次調査区の50－88グリッドＡＴ層下から、矢田遺跡で初めて黒曜石製の台形様石器が１点検出される。
7月２日　第11次調査区に330㎡の旧石器本調査区を設定して、本日より６日まで調査を行う。
ＡＴ層下からチャート・安山岩製の台形様石器２点を含む総数12点の石器が検出された。
8月27日　第12次調査区の空撮を行う。未買収地関連で調査不能の地点を残して調査を中断し、多胡蛇黒（中山）遺跡の調査に入る。
◎1991年度の調査
11月５日　未買収地関連の調査を開始する。
12日　旧石器試掘調査を開始する。
26日　空撮を行う。矢田遺跡の全調査を終了する。

第２章　地理的環境及び歴史的環境

第１節　地 理 的 環 境

群馬県は関東地方北西部の内陸に位置しており、周囲に新潟県・長野県・埼玉県・栃木県・福島県が接している。地形的には、北部及び西部が山地をなしており、中央部から東部にかけてが平野部である。

矢田遺跡は、群馬県南西部の多野郡吉井町大字矢田字天王原他に所在する。本遺跡の北方には鏑(かぶら)川が東流する。この鏑川は長野県境に源を発し、甘楽郡南牧村、下仁田町、富岡市、甘楽町、多野郡吉井町を経て、藤岡市上落合付近で鮎川を合わせ、高崎市倉賀野町で利根川支流の烏（からす）川に合流する。鏑川右岸域においては顕著な河岸段丘が発達しており、大きく分けて上位と下位の段丘面に分けられる。河床面からの比高は、下位段丘面で10～15mを、上位段丘面で50～60mを測る。この段丘面は各時代を通じて様々な土地利用がなされてきたが、現在は下位段丘面が水田として、上位段丘面が主に桑畑として耕地利用されている。

本遺跡は上位段丘面上の多胡(たご)丘陵東部に位置し、西は西谷川、東は土合川に挟まれた南北にのびる台地上に存在し、標高は150～160m前後を測る。この台地も実際には細かい侵食をうけ、南北や東西方向の小支谷が形成され、複雑な地形を呈している。なお調査の結果、西谷川の旧河川流路が確認されている。

第２節　歴 史 的 環 境

当遺跡周辺は、上野三碑の一つである「多胡碑」の存在や多くの古墳等が知られ、古くから地域の歴史に深い関心がもたれている。最近では開発に伴い多くの遺跡が発掘調査され、調査報告書も多く刊行されている。それらの研究成果から地域史における当遺跡の位置付けがなされる必要がある。ここでは、他の報告書等を参考にしつつ周辺遺跡を簡単にまとめてみた。

旧石器時代

吉井町周辺においての調査例は少ない。発掘調査された遺跡として当矢田遺跡をはじめ神保富士塚遺跡・多胡蛇黒遺跡・多比良追部野遺跡等がある。姶良・丹沢火山灰（ＡＴ）を含む時期の粘土層中を中心として多くの石器が出土している。特に甘楽町の天引向原遺跡・白倉下原遺跡で大量の石器の出土が認められた。また、藤岡市内では北山遺跡が良好な内容を示し、緑野遺跡群でＡＴ層に伴う剥片が確認されている。

縄文時代

当遺跡からは中期の住居跡が３軒と埋甕や土壙が検出されており、旧石器とともにすでに「矢田遺跡Ⅳ」で報告されている。他に遺構の発掘調査された遺跡として多比良追部野遺跡・入野遺跡・神保植松遺跡・神保富士塚遺跡・長根安坪遺跡等が知られる。しかし吉井町内においては大きな集落遺跡は発掘調査されていない。

弥生時代

当遺跡からこの時代の遺物はわずかに出土しているが、遺構は確認されていない。この地域で多く発掘調査されている遺跡の中で、黒熊遺跡から多くの住居と方形周溝墓が、川内遺跡からは20軒の住居と方形周溝墓、長根安坪遺跡から36軒の住居が、さらに甘楽町天引狐崎遺跡で40軒の住居と４基の方形周溝墓、また天引狐崎遺跡の西に接する白倉下原・天引向原遺跡では57軒の住居と２基の方形周溝墓が検出されている。こ

のように規模の大きな集落が点在する一方、当遺跡や長根羽田倉遺跡では大規模調査にもかかわらず遺構は全く検出されず、また他の多比良追部野遺跡や神保植松遺跡等の遺跡では検出されても極めて少ない。このように、大きな集落遺跡と小規模な遺跡が分布するといった遺跡の様子が想定される。

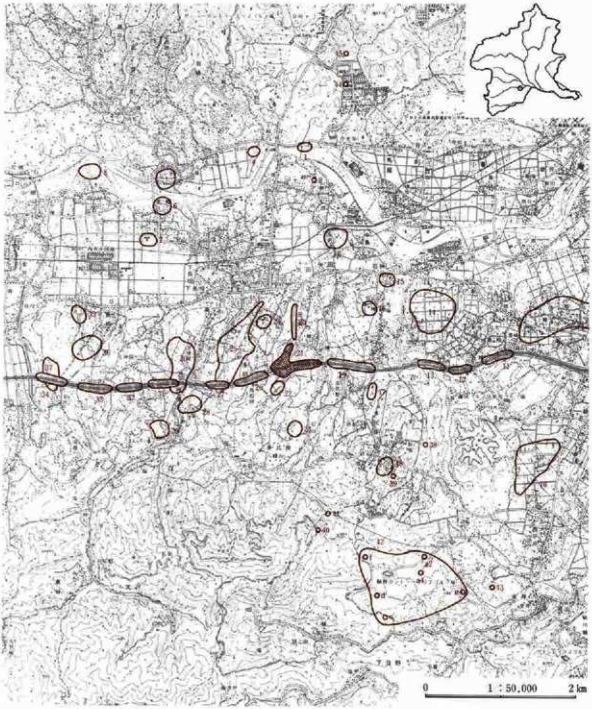
古墳時代

前期～中期に於ける集落遺跡の規模は甘楽町の白倉下原・天引向原遺跡から31軒の住居と1基の方形周溝墓が調査されているが、他の遺跡での検出例は少ない。近くの遺跡としては神保下條遺跡や神保富士塚遺跡、また長根羽田倉遺跡等で知られるがいずれも2～4軒と少ない。しかし後期になると集落遺跡の数と住居数は爆発的に拡大してくるようである。当遺跡ではこの時期よりおおくの住居が造られるようになり、隣の多胡蛇黒遺跡や多比良追部野遺跡等でもこの時期をもって一気に集落が大規模に形成されて行く。また入野遺跡や黒熊遺跡群においてもこの時期に多くの集落が営まれている。墳墓としての古墳も群集墳として多胡古墳群・塩Ⅰ・Ⅱ古墳群・山の神古墳群をはじめとして多く認められるようになる。なおこの地域の古墳に関しては右島和夫「遺跡の立地と環境」『神保下條遺跡』1992に詳しい。

また、当遺跡でも出土の認められる石製模造品を出土する遺跡が、この時期から多く認められるようになる。特に甘楽の谷では、原石の滑石や蛇紋岩が鏑川の上流の雄川や大沢川から採集されるため石製模造品を製作する遺跡も多く確認されている。報告書の刊行されている石製模造品を製作した主な遺跡として、甘楽町教育委員会『甘楽条里遺跡』1989、梅沢重昭「笹遺跡一鏑川流域の滑石製品出土遺跡の研究」『群馬県立博物館研究報告』第一集・第三集　1963・1966、藤岡市教育委員会『F－1竹沼遺跡』1978等があげられる。

奈良時代・平安時代

古墳時代後期の大きな集落遺跡は、多比良追部野遺跡のように奈良時代・平安時代になると住居数が減少する遺跡も認められるが、当遺跡や隣の多胡蛇黒遺跡のように多くの遺跡では住居数が大きく増減することなく、継続的につくられ続けているようである。住居以外の遺構として黒熊中西遺跡において平安時代の寺院跡が検出されている。礎石建物が6～7棟、テラス遺構9面からなり、礎石建物は寺院の主体となる堂宇、テラス遺構は付属的な施設や工房あるいは空間面等と考えられている。また黒熊八幡遺跡・多比良追部野遺跡・長根羽田倉遺跡では、天仁元年(1108)に降下した浅間噴出のB軽石下の水田遺構が調査されている。「多胡碑」は当遺跡北方約2.5kmに位置する。この碑は多胡郡設置に関する記念碑とされ多くの研究がなされている。古代律令制下における動きの一つとして上野国分寺に供給した瓦生産に見られるような古代窯業生産もこの地域で開始される。県内の須恵器生産窯はそれ以前の限定された地域での生産と異なり、8世紀前後をもって各地で窯が築かれて多くの製品が生産されるようになってゆく。この地域では吉井町多比良から藤岡市下日野・藤岡市金井の一帯にかけての山林部分を中心として多くの窯が築かれるようになる。この地域では8世紀前後から10世紀にかけて11箇所27基前後の窯が確認または想定されている。その中の21基が発掘調査されており、この地区には更に多くの窯の存在が想定される。これらの窯は須恵器と瓦を生産し、金山瓦窯跡で焼成された瓦は上野国分寺創建時に築かれ、また滝の前窯跡においては国分寺補修段階において多く瓦が生産された事が指摘されている。



〔国土地理院１：25,000「富岡」「上野吉井」「高崎」「藤岡」を縮小して使用〕

1　川福遺跡　2　多胡碑　3　塚原古墳群　4　富岡遺跡　5　東吹上遺跡　6　本郷古墳群　7　道六神遺跡　8　片山古墳群
9　白石古墳群　10　竹沼遺跡　11　黒熊薬崎遺跡　12　黒熊八幡遺跡　13　黒熊中西遺跡　14　黒熊遺跡群　15　桜神古墳群
16　入野遺跡　17　東沢遺跡　18　中ノ原古墳群　19　多比良追部野遺跡　20　椿谷戸遺跡　21　矢田遺跡　22　柳田遺跡
23　山の神古墳群　24　川内遺跡　25　多胡古墳群　26　多胡城原遺跡　27　神保下郷遺跡　28　塩Ⅰ古墳群　29　塩Ⅱ古墳群
30　神保古墳群　31　神保植松遺跡　32　神保富士塚遺跡　33　長根羽田倉遺跡　34　長根安坪遺跡　35　長根宿遺跡　36　西場脇遺跡
37　安坪古墳群　38　下五反田窯跡　39　滝の前窯跡　40　東沢Ⅰ窯跡　41　東沢Ⅱ窯跡　42　下日野・金井窯跡群　43　金山瓦窯跡
44　彦田谷窯址　45　ヌカリ沢Ａ窯址

第２図　矢田遺跡と周辺の遺跡分布図

第3図　矢田遺跡周辺図

周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名（所在地）	遺跡の概要	文献その他
1	川福遺跡（吉井町馬庭）	奈良・平安時代の住居跡５軒、溝２条等、土器集中地点あり。８世紀前後の須恵器蓋を多く出土。	吉井町教育委員会1986『川福遺跡調査報告書』
2	多胡碑（吉井町池）	吉井町大字池字御門に所在。日本三碑の一つに数えられる。和銅４年（711）多胡郡設置に関する記念碑とされる。	『吉井町誌』1974『群馬県史・資料編４』1985ほか
3	塚原古墳群（吉井町池）	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳綜覧では44基をあげている。	平成元年、蛇塚を調査。
4	富岡遺跡（吉井町岩崎）	縄文時代中期の遺物包含層。平安時代住居跡４軒、浅間Ｂ軽石の純層堆積。	吉井町教育委員会1989『富岡遺跡』
5	東吹上遺跡（吉井町岩崎）	縄文時代前期、中期、弥生中期、後期包含層。古墳時代後期住居跡１軒、平安時代１軒。	群馬県立博物館研究報告第８集1973『東吹上遺跡』
6	本郷古墳群（吉井町本郷）	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳綜覧では21基あげている。	
7	道六神遺跡（吉井町本郷）	平安時代住居跡１軒、溝６条等。	吉井町教育委員会1986『道六神遺跡』
8	片山古墳群（吉井町片山）	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳綜覧では７基をあげている。	
9	白石古墳群（藤岡市白石）	古墳時代中期から後期にかけての大型前方後円墳と後期の大群集墳からなり、終末古墳も含む。	
10	竹沼遺跡（藤岡市西平井・緑埜）	旧石器時代の石器、縄文時代中期住居跡３軒、弥生時代後期から古墳時代前期４軒、古墳時代後期17軒、滑石工房址９軒ほか。	藤岡市教育委員会1978『Ｆ１群馬県藤岡市竹沼遺跡』
11	黒熊栗崎遺跡（吉井町黒熊）	古墳時代と平安時代の住居跡と小鍛冶、掘立柱建物跡、平地神社跡等。	財群馬県埋蔵文化財調査事業団1995『黒熊栗崎遺跡』
12	黒熊八幡遺跡（吉井町黒熊）	旧石器時代の石器、縄文時代埋設土器、奈良・平安時代の住居跡130軒以上、礎石建物、掘立柱建物跡等検出。	財群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『年報10』
13	黒熊中西遺跡（吉井町黒熊）	古墳～奈良・平安時代住居跡78軒、平安時代の礎石建物跡６棟、平安時代の道路遺構７条、井戸、土坑、鬼瓦、緑釉陶等出土。寺院跡を特色とする遺跡。	財群馬県埋蔵文化財調査事業団1992・94『黒熊中西遺跡(1)・(2)』
14	黒熊遺跡群（吉井町黒熊）	縄文・古墳・奈良・平安時代の大集落。	吉井町教育委員会1981～85『黒熊遺跡群調査報告書』(3)(4)等
15	祝神古墳群（吉井町多比良）	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳綜覧では11基をあげている。	
16	入野遺跡（吉井町石神）	縄文時代前期、古墳時代前期・後期の住居跡、中世の墓壙。	尾崎喜佐雄1962『入野遺跡』他吉井町教育委員会1985・1986
17	東沢遺跡（吉井町多比良）	古墳時代後期、奈良・平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会1987『東沢遺跡・折茂東遺跡』
18	中ノ原古墳群（吉井町多比良）	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳綜覧では10基をあげている。	
19	多比良道部野遺跡（吉井町多比良）	旧石器時代の石器類430点出土。縄文・古墳・平安時代の住居跡、平安時代の水田、江戸時代の溜池等。	財群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『年報10』
20	椿谷戸遺跡（吉井町矢田）	縄文時代中期、古墳前後期、奈良・平安時代の住居、中世土坑等。	吉井町教育委員会1989『椿谷戸遺跡発掘調査報告書』
21	矢田遺跡（吉井町矢田）	本報告。	財群馬県埋蔵文化財調査事業団1990～96『矢田遺跡１～Ⅵ』
22	柳田遺跡（吉井町矢田）	古墳～平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会1989『柳田遺跡』
23	山の神古墳群（吉井町多比良）	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳綜覧では７基をあげている。	
24	川内遺跡（吉井町吉井）	縄文時代中期の土壙、弥生～平安時代の住居跡、弥生時代の方形周溝墓。中世の井戸。	吉井町教育委員会1982『川内遺跡一図版編一』
25	多胡古墳群（吉井町多胡）	古墳時代後期を中心とした群集墳。上毛古墳綜覧では91基をあげている。下條１～３号墳を含む。	

番号	遺跡名（所在地）	遺跡の概要	文献その他
26	多胡蛇黒遺跡（吉井町多胡）	旧石器時代の石器・礫、古墳時代後期～平安時代の住居跡174軒、掘立柱建物跡、溝など。	㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『多胡蛇黒遺跡』
27	神保下條遺跡（吉井町神保）	5基の古墳、古墳時代前期3軒・奈良3軒の住居跡、中世の掘跡・溝等。大量の埴輪・古墳時代前期の住居跡より鏡・鉄斧・鑓・管玉・ガラス玉等出土。	㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団1992『神保下條遺跡』
28	塩I古墳群（吉井町塩）	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳綜覧では16基をあげている。	
29	塩II古墳群（吉井町塩）	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳綜覧では12基をあげている。	
30	神保古墳群（吉井町神保）	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳綜覧では63基をあげている。	
31	神保植松遺跡（吉井町神保）	縄文～平安時代の住居、中世を主とした掘立柱建物跡・土壙・井戸・城の堀、古墳時代の方形周溝墓等。遺物として板碑・石臼・五輪塔・陶磁器等出土。	㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『年報8』
32	神保富士塚遺跡（吉井町神保）	縄文・古墳・奈良・平安時代の住居跡。掘立柱建物跡・溝・土坑・土器集積祭祀跡等。出土遺物として石器・紡錘車・勾玉等。	㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団1993『神保富士塚遺跡』
33	長根羽田倉遺跡（吉井町長根）	古墳～平安時代の住居跡133軒、掘立柱建物跡11棟、井戸11基、土坑93基、溝18条、祭祀遺構2基等。出土遺物として滑石製模造品・紡錘車等の滑石製品。	㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『長根羽田倉遺跡』
34	長根安坪遺跡（吉井町長根）	縄文～平安時代の住居跡、古墳時代の方形周溝墓、古墳、土坑、配石遺構等。出土遺物として勾玉・紡錘車・鉄鏃・ガラス小玉・金環等。	㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『年報8』
35	長根宿遺跡（吉井町長根）	中世の溝2条検出。	吉井町教育委員会1987『西場脇・長根宿遺跡』
36	西場脇遺跡（吉井町長根）	古墳・平安時代の住居跡、奈良時代の遺物集中地点等。	吉井町教育委員会1987『西場脇・長根宿遺跡』
37	安坪古墳群（吉井町長根）	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳綜覧では44基をあげている。古墳群南側の一部を、長根安坪遺跡で平成元年に発掘調査。	
38	下五反田窯跡（吉井町多比良）	3基あったと思われ、2基発掘。1号窯は全長7mの地下式無段無階窯。2号窯は、全長5.5mの地下式無段登窯。坏・甕・瓦・風字硯・羽釜等出土。9～10世紀。	国士舘大学文学部考古学研究室1984『考古学研究室発掘調査報告書』
39	滝の前窯跡（吉井町多比良）	窯跡あるいは灰原の一部と思われる部分が露出。坏・甕・文字瓦出土。9世紀末～10世紀前半、瓦は上野国分寺に供給されており、国分寺補修期の瓦生産窯。	須田茂1989『吉井町・滝の前窯跡の採集遺物とその性格』『群馬文化』
40	宋沢I窯跡（吉井町多比良）	2～3基あったと思われる。林道脱置で一部切断されている。1基を発掘調査。窯体の北約½は無い。地下式無段無階登窯と思われる。蓋・坏・盤・甕・瓦・土鈴等。8世紀前半代を中心としている。	国士舘大学文学部考古学研究室1984『考古学研究室発掘調査報告書』
41	宋沢II窯跡（吉井町多比良）	1と同様に、道路拡張により窯体の一部が2基、灰原と思われる一個所が確認されている。	
42	下日野・金井窯跡群（藤岡市下日野・金井）	藤岡市教育委員会により、ゴルフ場建設に先だって分布調査が行われ、地点ごとにa2・a4・c・d・f・gと表記された。発掘調査が行われた。a2地点で3基、a4地点で1基、c地点で4基、他に2～3基の窯体が存在していると思われる。d地点で1基、他に製鉄遺構3基調査、g地点で5基の計16基の窯跡が調査された。8～10世紀。	近日中に報告書が刊行される予定である。発掘担当者、古都正志氏の御教示による。
43	金山瓦窯跡（藤岡市金井）	3基の窯体が存在し、2基が発掘調査されている。1・2号窯ともトンネル式無段登窯で、全長4.4～4.5m。鐙・字・男・女・文字瓦のほか、須恵器甕等出土。上野国分寺の建造に伴って関窯されたものと考えられている。	坂詰秀一1966『上野・金山瓦窯跡』
44	彦田谷窯址（吉井町馬庭）	彦田谷窯址は、昭和53年南陽台住宅団地の造成工事中に発見された。同年8月吉井町郷土資料館で発掘調査され2基の窯址が検出された。出土遺物は須恵器で瓦は出土していない。器種は坏・盤・埦・蓋・鉢・甕等である。	吉井町教育委員会1995『メカリ沢A窯址発掘調査報告書』
45	ヌカリ沢A窯址（吉井町馬庭）	ヌカリ沢A窯址はゴルフ場建設に伴い平成5年12月から平成6年2月にかけて調査が行われた。調査の結果1基の窯址が発掘され須恵器の坏・埦・皿・高坏・壺・鉢・甑・甕・瓶等が出土した。須恵器の坏の底部は回転糸切りが主流である。また高坏がこの段階まで生産されていることが特徴である。	吉井町教育委員会1995『メカリ沢A窯址発掘調査報告書』

第３節　基　本　層　序

矢田遺跡は、前章で述べたように鏑川右岸の上位段丘上に位置している。南から北へ向かって緩やかな傾斜で下る段丘面では、表土の耕作土の堆積が薄く、これを除去すると直ちにいわゆる関東ローム層が現れる。これは段丘を浸食・分断する谷部への土砂の流出に加えて、広い段丘上は通年日照度が高く、冬季は西方から甘楽の谷を吹き抜ける「浅間おろし」の影響による、風化・浸食作用が大きいことに起因している。

本遺跡の基本土層は以下に示すとおりである。

第Ⅰ層　いわゆる表土。黒褐色を呈する耕作土であり、多量の浅間Ａ軽石（Ap-Ap）を含有する。層厚は地点により大きく異なり、尾根上では50cm以上を測るが、傾斜部では10cm以下である。

第Ⅱ層～第Ⅶ層は、いわゆる関東ローム層である。

第Ⅱ層　明黄褐色ローム層。層厚は平均20cmほどである。浅間板鼻黄色軽石（As-Yp）を含み、特に下部では密度が高く一部ブロック状を成す。全体に粒子は粗く、粘性は弱い。

第Ⅲ層　暗黄褐色ローム層。層厚は平均40cmである。白色細粒子（径２～３㎜）を若干含む。第Ⅱ層に比して粒子は細かく粘性をもつ。

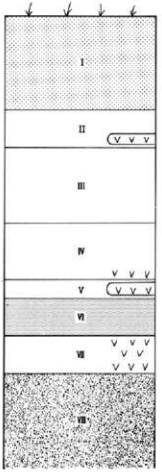
第Ⅳ層　暗黄褐色ローム層。層厚は平均30cmを測る。第Ⅲ層に比較して粒子が粗く、下部には浅間板鼻褐色軽石（As-Bp）を含む。

第Ⅴ層　明黄褐色ローム層。浅間板鼻褐色軽石がブロック状に多量含まれ、非常に堅緻である。層厚は平均10cmである。

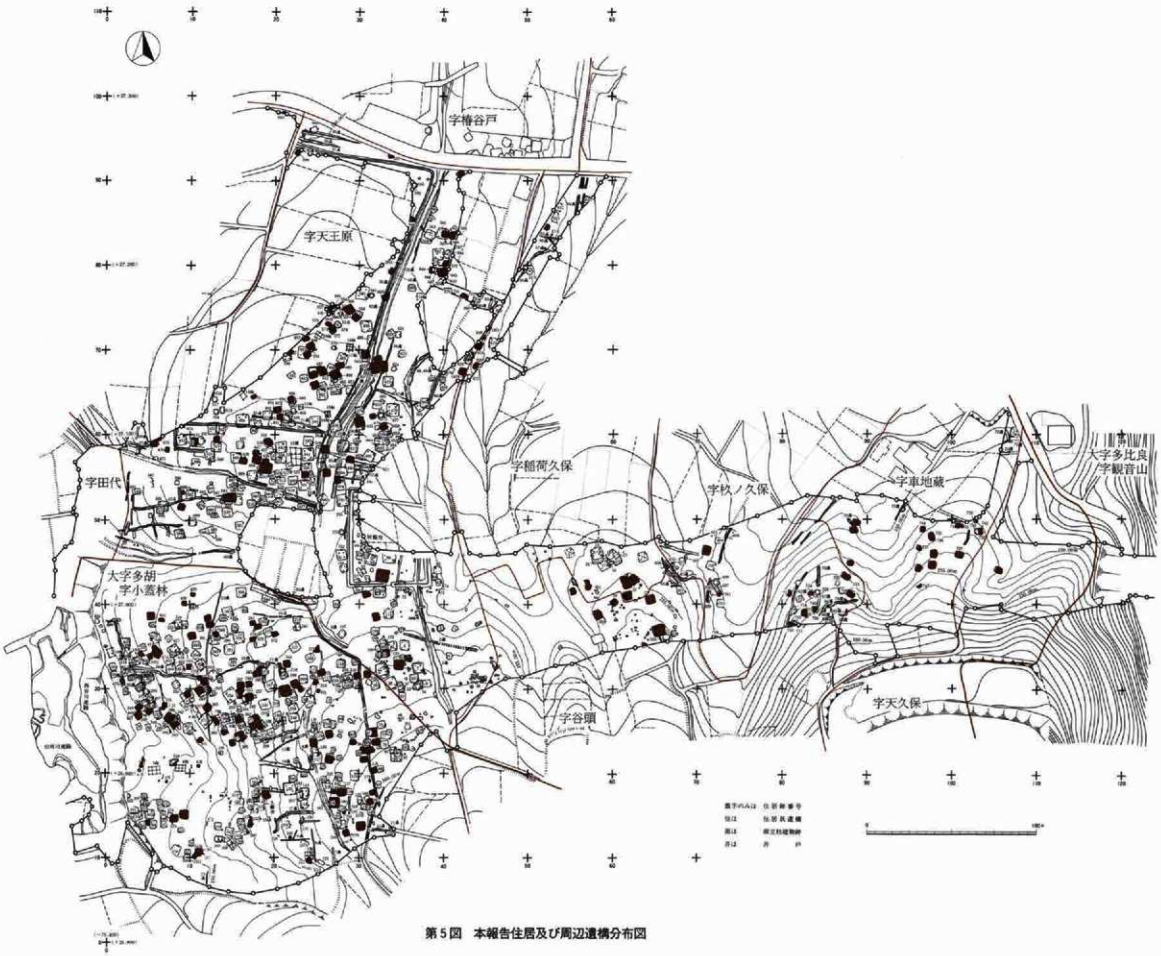
第Ⅵ層　暗褐色ローム層。層厚は平均20cmを測る。少量の浅間室田軽石（As-Mp）を含みやや粘性をもつ。いわゆる暗色帯に類する状況を示すが赤城山麓の暗色帯とは対応しない。

第Ⅶ層　浅間室田軽石を主とする層である。上半部は橙褐色、下半部は乳白色を呈する。通水層であり、非常に多量の水分を含む。層厚は30cmほどである。

第Ⅷ層　灰白色粘土層。本層は、非常に厚く堆積しており、下部は基盤層になる。本層上部に姶良丹沢パミスとみられるガラス質の火山灰が認められる。



第４図　基本層序概念図



第５図　本報告住居及び周辺遺構分布図

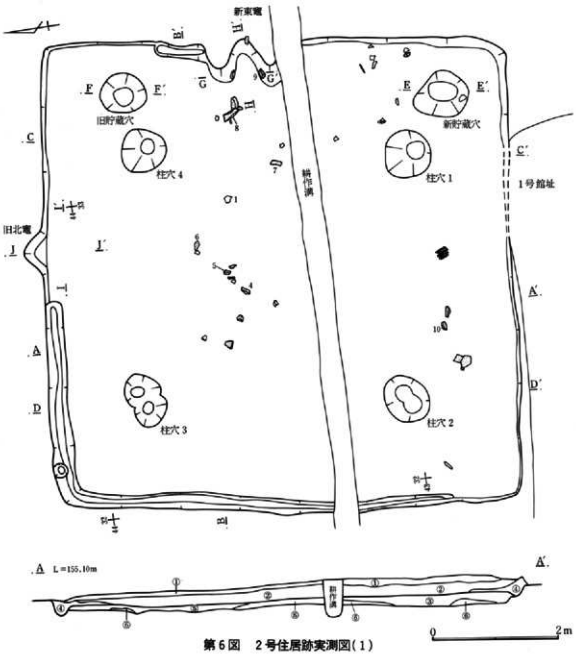
第３章　古墳時代の遺構と遺物

２号住居跡（第6～10図、図版14・122）

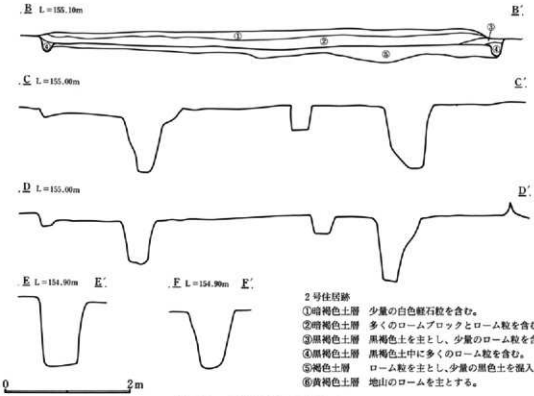
位置　本住居跡は第３次調査区にあり、44－33・34グリッドに位置する。

概要　残りが悪く確認面から床面までが浅い。中央部分を耕作溝により床下まで深く掘り込まれている。また南側の壁面の一部を１号館址の南側の堀により削られている。竈は北壁面と東壁面に造られている。東壁面に造られている竈は袖部分が残っており新東竈である。

構造　床面はローム粒を主とし、少量の黒色土が混入した土で造られている。柱穴が４本掘られており、新旧の竈に伴い２個の貯蔵穴が掘られている。



第６図　２号住居跡実測図（１）



第７図　２号住居跡実測図（２）

規模　東西7.39m、南北7.49mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で42cmである。柱穴１は径71cm深さ92cm、柱穴２は径64cm深さ101cm、柱穴３は径51cm深さ74cm、柱穴４は径68cm深さ102cmである。新貯蔵穴は径71cm深さ108cm、旧貯蔵穴は径67cm深さ102cmである。

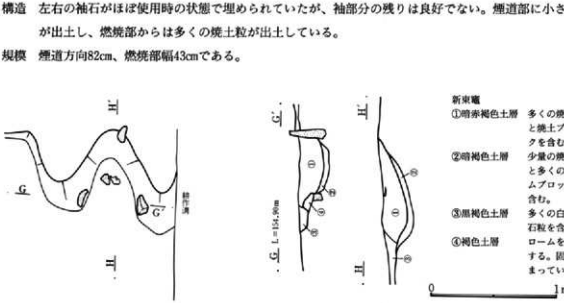
遺物　甕の胴部片が多く出土しているが、図示できたのは３点である。

（新東竈）

位置　住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造　左右の袖石がほぼ使用時の状態で埋められていたが、袖部分の残りは良好でない。煙道部に小さな石が出土し、燃焼部からは多くの焼土粒が出土している。

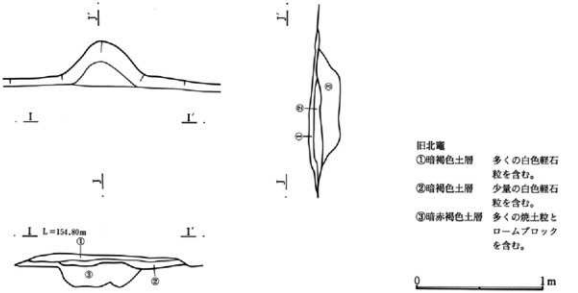
規模　煙道方向82cm、燃焼部幅43cmである。



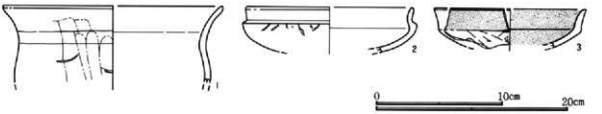
第８図　２号住居跡新東竈実測図

（旧北竈）

概要　住居北壁に造られている。壁面を掘り込んで煙道部が造られているが、床面上に位置する袖部や燃焼部は残っていない。燃焼部下部が床面下に残っており多くの焼土粒と焼土ブロックが出土している。



第９図　２号住居跡旧北竈実測図



第10図　２号住居跡出土遺物実測図

２号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
10－1	土師器 甕	床面直上 口縁小片	口(23.3) 高　－ 底　－	①粗、２～４mmの片岩粒を少量含む。　②微化焔、硬質 ③にぶい黄橙色	胴部外面縦方向ナデ。内面横方向ナデ。 全体に器表面密。
10－2	土師器 坏	覆土 1/4残存	口(13.0) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②微化焔、硬質 ③断面橙色、内面黒色	口縁部外面～内側内面黒漆。 底部外面強炭による黒褐色。
10－3	土師器 坏	覆土 口縁小片	口(11.8) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の砂粒を含む ②微化焔、硬質 ③断面橙色、外面黒褐色	底部ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 口縁部外面～内面底部に黒漆。

遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)	石　材・備　考
4	122	こも編み石	長 15.0　幅 5.4　厚 3.1　重 390	緑輝緑泥片岩
5	122	こも編み石	長 14.5　幅 5.2　厚 4.1　重 415	絹雲母石墨片岩
6	122	こも編み石	長 13.7　幅 7.4　厚 3.3　重 495	安山岩
7	122	こも編み石	長 15.8　幅 5.9　厚 4.4　重 505	安山岩
8	122	こも編み石	長 14.3　幅 4.9　厚 3.2　重 340	絹雲母石墨片岩
9	122	こも編み石	長 12.2　幅 6.2　厚 4.8　重 445	砂岩
10	122	こも編み石	長 13.6　幅 6.6　厚 4.3　重 540	絹雲母石墨片岩
11	122	こも編み石	長 12.6　幅 7.3　厚 3.4　重 510	絹雲母石墨片岩

９号住居跡（第11～13図、図版14・78・120）

位置　本住居跡は第２次調査区にあり、39－59グリッドに位置する。

概要　西側の低くなる傾斜面に位置し、西側の壁面と床面は削られて残っていない。柱穴が掘られているため、住居範囲は点線で表現した。竈の造られている東壁面の残りも良好ではないが、貯蔵穴周辺には多くの土器が残されている。

構造　床面はローム粒を主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が４本掘られており、竈右側に貯蔵穴が掘られている。

規模　東西推定4.50m、南北5.32mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で22cmである。柱穴１は径42cm深さ47cm、柱穴２は径38cm深さ56cm、柱穴３は径53cm深さ58cm、柱穴４は径48cm深さ46cmである。貯蔵穴は径66cm深さ53cmである。

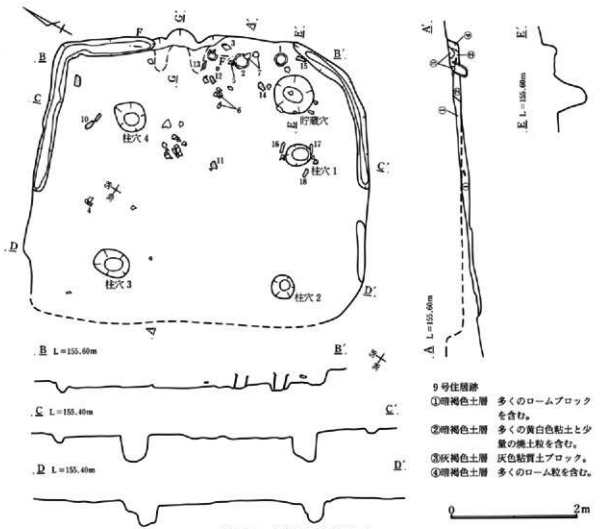
遺物　竈の右側より甕や坏が出土している。

（竈）

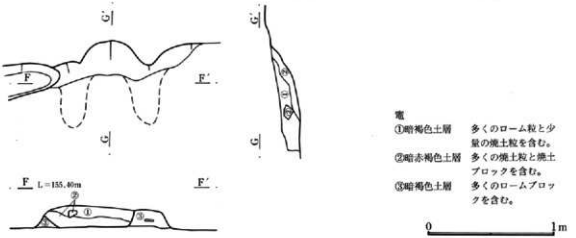
位置　住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造　残りが悪く袖の大部分は残っていない。燃焼部付近の覆土中から多くの焼土粒が出土している。

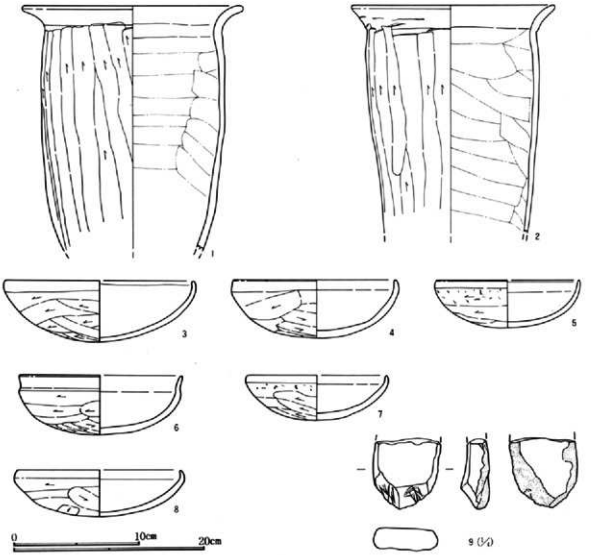
規模　残りが悪く不明である。



第11図　９号住居跡実測図



第12図　９号住居跡竈実測図



第13図　９号住居跡出土遺物実測図

9号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
13－1 78	土師器 甕	床面－7 口縁部1/4 胴部ほぼ完	口 23.4 高 － 底 －	①粗、2～3mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 内面ナデにて器表面密。 口縁部と胴部との境に段はない。
13－2 78	土師器 甕	床面－6 図示部分ほぼ完形	口 21.6 高 － 底 －	①粗、1～3mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り、削りの単位は明瞭である。
13－3 78	土師器 坏	床面＋20 1/2残存	口(14.6) 高 4.8 底 －	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底部ヘラ削り。胎土が密で削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。
13－4 78	土師器 坏	床面－6 1/2残存	口 12.8 高 4.5 底 －	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。 底部外面吸炭により黒色を呈する。
13－5 78	土師器 坏	床面＋8 口縁部1/2 底部1/2	口(11.0) 高 3.7 底 －	①密、角閃石粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底部ヘラ削り。内面ナデにて器表面密。
13－6 78	土師器 坏	床面＋3 1/2残存	口(12.8) 高 4.7 底 －	①密、1mm以下の小さな雲母粒と赤色粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。
13－7	土師器 坏	床面＋13 1/2残存	口(10.8) 高 － 底 －	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りであるが、胎土が密で削りの単位不明瞭。
13－8	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(12.8) 高 3.6 底 －	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	胎土がやや粉状を呈し、粗れているためヘラ削りの単位不明瞭。
13－9 120	石製品 紡錘車	覆土	長 (7.2)　幅 6.7 厚 3.0　重 165		凝灰岩。自然面は少なく、多くの面が磨耗している。 紡錘車は再利用の目的で再加工の未製品か。

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)					石材・備考
10	122	こも編み石	長 15.4	幅 7.2	厚 3.8	重 645		緑簾緑泥片岩
11	122	こも編み石	長 12.0	幅 7.5	厚 3.6	重 460		点紋緑泥片岩
12	122	こも編み石	長 12.3	幅 5.4	厚 4.0	重 380		絹雲母石墨片岩
13	122	こも編み石	長 13.1	幅 6.1	厚 1.9	重 260		点紋絹雲母石墨片岩
14	122	こも編み石	長 12.8	幅 6.0	厚 3.2	重 430		緑簾緑泥片岩
15	122	こも編み石	長 15.0	幅 6.1	厚 3.7	重 610		緑簾緑泥片岩
16	122	こも編み石	長 16.4	幅 6.2	厚 3.0	重 430		絹雲母石墨片岩
17	122	こも編み石	長 15.0	幅 5.8	厚 1.7	重 230		点紋絹雲母石墨片岩
18	122	こも編み石	長 17.5	幅 6.8	厚 4.5	重 900		緑簾緑泥片岩

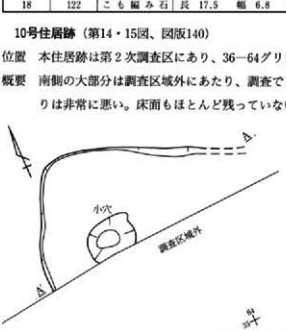
10号住居跡（第14・15図、図版140）

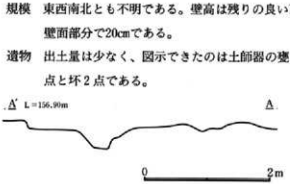
位置　本住居跡は第2次調査区にあり、36―64グリッドに位置する。

概要　南側の大部分は調査区域外にあたり、調査できたのは北側の一部である。表土の堆積が薄く住居の残りは非常に悪い。床面もほとんど残っていない。小穴が1本確認されたが、柱穴や貯蔵穴さらに竈は確認されていない。

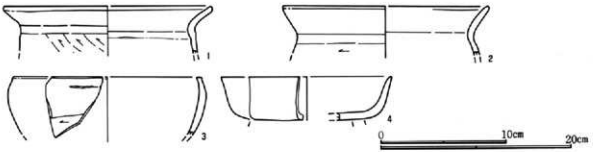
規模　東西南北とも不明である。壁高は残りの良い西壁面部分で20cmである。

遺物　出土量は少なく、図示できたのは土師器の甕2点と坏2点である。





第14図　10号住居跡実測図



第15図　10号住居跡出土遺物実測図

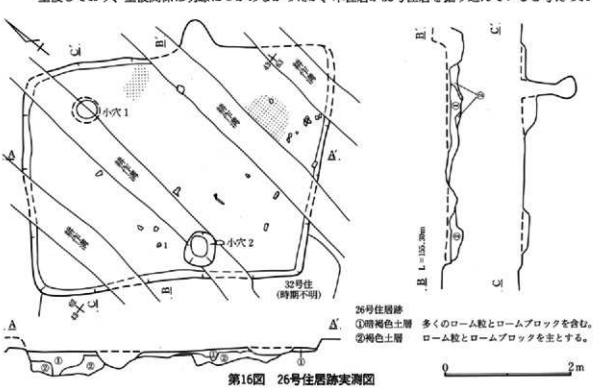
10号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
15－1	土師器 甕	覆土 口縁破片	口(22.0) 高　－ 底　－	①やや粗、２～４mmの片岩粒をわずかに含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部ヘラ削りで器肉を薄く仕上げている。 口縁部内側にわずかな凹線あり。
15－2	土師器 甕	覆土 口縁小片	口(22.0) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。
15－3	土師器 鉢？	覆土 小破片	口(20.0) 高　－ 底　－	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。口唇部は平らに仕上げている。 小さな破片であり全体像不明。
15－4	須恵器 坏	覆土 小破片	口(13.4) 高　－ 底　－	①密、少量の白色粒を含む ②還元焔、硬質 ③灰色	高台の付いていた痕跡が明瞭に残っている。 底面ヘラ削り。

26号住居跡（第16・17図、図版15）

位置　本住居跡は第２次調査区にあり、43・44―63グリッドに位置する。

概要　５軒の重複する住居の中の１軒である。掘り込み面が浅いうえに南北方向の多くの耕作溝により床下部分まで深く掘り込まれているため残りが悪い。本住居は住居規模や時代の不明な32号住居と西側で重複しており、重複関係は明瞭につかめなかったが、本住居が32号住居を掘り込んでいると考えられ



第16図　26号住居跡実測図

る。新旧関係は32→26号住居である。竈は東壁面に造られているが、残りが悪く焼土粒の出土も少ない。貯蔵穴は明らかでないが、耕作溝により削られている南東コーナーに掘られていた可能性が考えられる。南東部分の床面に焼土粒が多く出土している。

構造　床面は残りが悪く、多くのローム粒とロームブロックの混入した土で造られている。柱穴は掘られていないが、小穴が２本掘られている。貯蔵穴も掘られていない。

規模　東西3.51m、南北4.75mである。壁高は残りの良い西壁面部分で10cmである。小穴１は径34cm深さ75cm、小穴２は径54cm深さ29cmである。

遺物　図示できたのは坏の破片３点である。

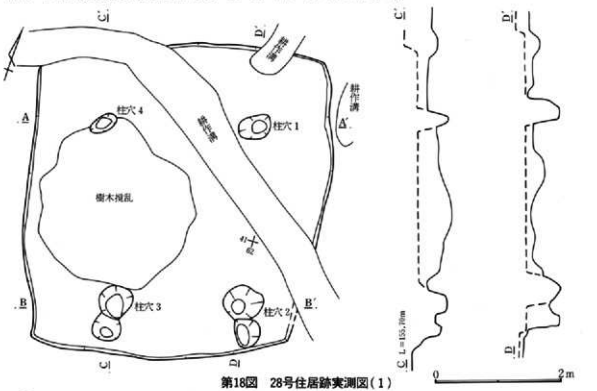
第17図　26号住居跡出土遺物実測図

26号住居跡出土遺物観察表

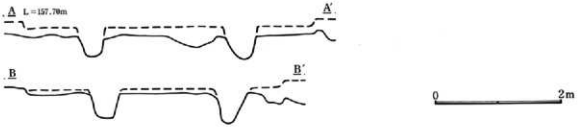
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (K)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
17－1	土師器 坏	床面＋19 口縁部1/4	口(14.0) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、器表面が粗れており、削りの単位不明。
17－2	土師器 坏	覆土 口縁部1/2	口(13.0) 高　－ 底　－	①密、粉状を足する ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面と体部ヘラ削り。内面に暗文は認められない。
17－3	須恵器 坏	覆土 口縁部1/6	口(12.4) 高　－ 底　－	①やや粗、1～2mmの片岩粒を含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面糸切痕。体部下半分ヘラ削り。 多くの片岩粒が目立つ。

28号住居跡（第18～20図、図版15）

位置　本住居跡は第２次調査区にあり、41・42－62グリッドに位置する。



第18図　28号住居跡実測図（１）



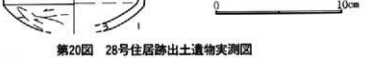
第19図　28号住居跡実測図(2)

概要　全体に残りが悪く、床面はほとんど残っていないため床下部分の調査となった。住居の南東部分から北西部分にかけて、地境の溝により床下部分まで掘り込まれている。また西側の床面は大きな木の移植に伴い深く掘り込まれている。竈は全く不明である。

構造　柱穴が4本掘られており、南側の2本の柱穴に接してそれぞれ小穴が掘られている。貯蔵穴も不明である。

規模　東西4.80m、南北4.95mである。柱穴1は径57cm深さ53cm、柱穴2は径62cm深さ55cm、柱穴3は径52cm深さ44cm、柱穴4は径49cm深さ49cmである。小穴1は径48cm深さ56cm、小穴2は径46cm深さ36cmである。

遺物　破片を含め出土量は少ない。



第20図　28号住居跡出土遺物実測図

28号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
20－1	土師器 坏	覆土 口縁部1/4	口(11.2) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が多く移動してやや粗い。 内側器表面密。 少しゆがんでいる。

35号住居跡（第21～24図、図版15・78・113・120・122・123）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、33・34－35グリッドに位置する。

概要　北側で古墳時代の39号住居と重複しており、本住居が39号住居の南側を床下部分まで掘り込んでいる。

構造　床面はローム粒を主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本と竈の右側に貯蔵穴が掘られている。

規模　東西5.76m、南北5.78mである。壁高は残りの良い東壁面部分で25cmである。貯蔵穴は径68cm深さ75cmである。柱穴1は径64cm深さ84cm、柱穴2は径56cm深さ56cm、柱穴3は径48cm深さ44cm、柱穴4は径68cm深さ75cmである。

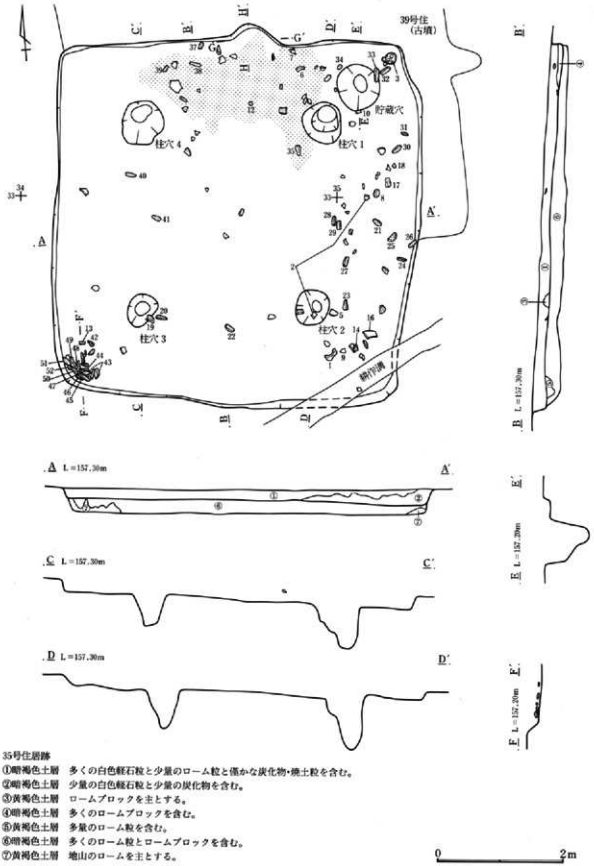
遺物　図示した他にも甕の破片が多く、また南西コーナー部分の床面上から多くのこも編み石がまとまって出土している。耳環や砥石の出土が注目される。覆土中に平安時代の遺物が混入している。

（竈）

位置　住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

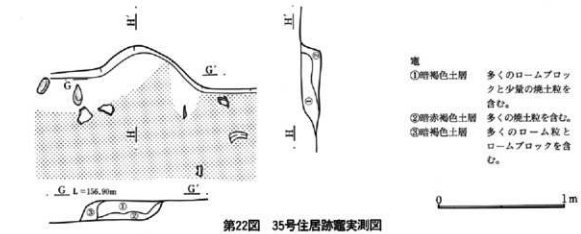
構造　39号住居の覆土を掘り込んで造られており、残りが悪く袖部分はほとんど残っていない。また意識的に壊されていたためか、竈周辺に多くの焼土粒が散乱している。燃焼部付近の竈内より多くの焼土粒が出土している。

規模　燃焼部の大部分が残っていないため不明である。

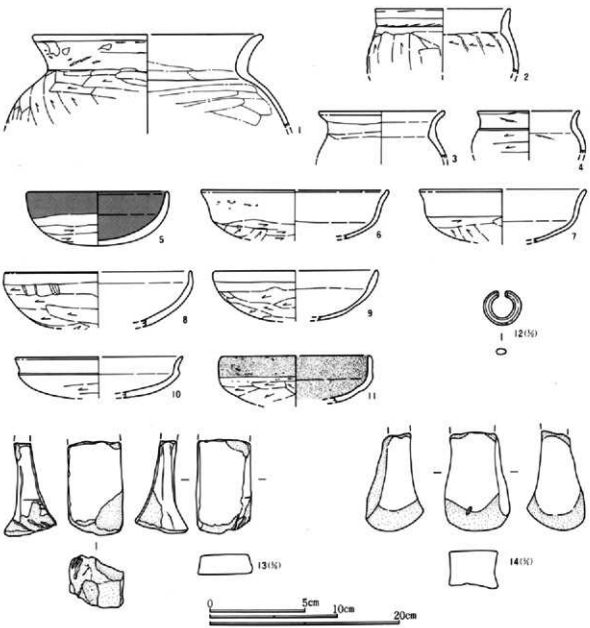


35号住居跡
①暗褐色土層　多くの白色軽石粒と少量のローム粒と僅かな炭化物・焼土粒を含む。
②暗褐色土層　少量の白色軽石粒と少量の炭化物を含む。
③黄褐色土層　ロームブロックを主とする。
④暗褐色土層　多くのロームブロックを含む。
⑤黄褐色土層　多量のローム粒を含む。
⑥暗褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。
⑦黄褐色土層　地山のロームを主とする。

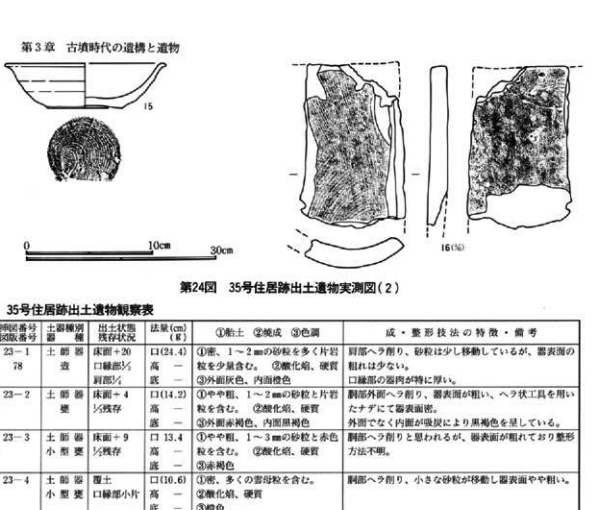
第21図　35号住居跡実測図



第22図　35号住居跡竈実測図



第23図　35号住居跡出土遺物実測図（１）



第24図　35号住居跡出土遺物実測図（２）

35号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
23－1 78	土師器 壺	床面＋20 口縁部½ 胴部½	口(24.4) 高　－ 底　－	①密、１～２mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③外面灰色、内面橙色	胴部ヘラ削り、砂粒は少し移動しているが、器表面の粗れは少ない。 口縁部の器肉が特に厚い。
23－2	土師器 甕	床面＋４ ½残存	口(14.2) 高　－ 底　－	①やや粗、１～２mmの砂粒と片岩粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③外面赤褐色、内面黒褐色	胴部外面へヘラ削り、器表面が粗い、ヘラ状工具を用いたナデにて器表面密。 外面でなく内面が吸炭により黒褐色を呈している。
23－3	土師器 小型甕	床面＋９ ½残存	口 13.4 高　－ 底　－	①やや粗、１～３mmの砂粒と赤色粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③赤褐色	胴部ヘラ削りと思われるが、器表面が粗れており整形方法不明。
23－4	土師器 小型甕	覆土 口縁部小片	口(10.6) 高　－ 底　－	①密、多くの雲母粒を含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。
23－5 78	土師器 坏	床面＋３ ½残存	口 12.0 高 4.2 底　－	①密、１mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③外面橙色、内面黒色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。 内面は吸炭により黒色で光沢を持つ、吸炭は断面に及ぶ。
23－6 78	土師器 坏	床面＋８ ½残存	口(14.5) 高　－ 底　－	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③においが赤褐色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。 ていねいなつくりである。
23－7 78	土師器 坏	床面＋７ ½残存	口(13.0) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の小さな雲母粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③においが黄褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。全体に器肉が薄く、焼成温度が高い。
23－8 78	土師器 坏	床面＋３ ½残存	口(14.6) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が多く移動している。 内面ナデにて器表面密。
23－9	土師器 坏	床面－５ ½残存	口(13.0) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③表面においが赤褐色	底部強いヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。
23－10	土師器 坏	床面＋４ ½残存	口(13.0) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 口縁部～内側底面の器表面密。
23－11	土師器 坏	覆土 小片	口(11.6) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③断面橙色、表面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。 底部外面吸炭により黒褐色。 口縁部外面～内側底面に黒鉛。
23－12 113	鉄製品 耳　環	覆土	広径 2.0　　狭径 1.8 厚 0.55　　重 5.8		表面金メッキ、メッキが多くの部分に残っている。 素地は青銅である。
23－13 120	石製品 砥　石	床面＋３	長 9.7　　幅 5.8 厚 5.5　　重 260		流紋岩。４側面を砥石として使用している。 欠損後再加工の痕跡なし。
23－14 120	石製品 砥　石	床面＋８	長 10.3　　幅 5.0 厚 4.0　　重 450		流紋岩。砥石として３側面使用している。 破損後再加工の痕跡なし。
24－15	須恵器 坏	覆土 口縁部½ 底部完形	口(12.1) 高 3.5 底 5.8	①密、少量の片岩粒を含む ②還元焔、硬質 ③灰色	均整がとれており、器表面が密である。
24－16	平　瓦	床面＋26 破片	－ －	①粗、３～６mmの長石粒を含む ②還元焔、硬質　③灰色	凹面に布目。 側面ナデ、凸面ナデ、ナデの方向は一定でない。

遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)				石　材　・　備　考
17	122	こも編み石	長 13.8	幅 6.3	厚 2.6	重 365	石墨緑泥片岩
18	122	こも編み石	長 15.6	幅 6.0	厚 4.3	重 560	絹雲母石墨片岩
19	122	こも編み石	長 13.0	幅 5.6	厚 3.9	重 400	絹雲母石墨片岩
20	122	こも編み石	長 17.7	幅 5.0	厚 3.6	重 505	緑簾緑泥片岩
21	122	こも編み石	長 16.4	幅 7.2	厚 3.4	重 420	絹雲母石墨片岩
22	122	こも編み石	長 17.1	幅 6.7	厚 2.8	重 610	緑簾緑泥片岩
23	122	こも編み石	長 15.1	幅 6.5	厚 3.2	重 485	点紋緑泥片岩　一部炎を受けている
24	122	こも編み石	長 13.3	幅 4.7	厚 3.8	重 455	緑泥片岩
25	122	こも編み石	長 16.8	幅 6.9	厚 4.1	重 765	絹雲母石墨片岩
26	122	こも編み石	長 16.7	幅 7.3	厚 4.7	重 860	絹雲母石墨緑泥片岩
27	122	こも編み石	長 16.4	幅 6.7	厚 3.2	重 530	絹雲母石墨片岩
28	122	こも編み石	長 15.6	幅 6.7	厚 3.3	重 440	点紋絹雲母石墨片岩　黒斑が一部あり
29	122	こも編み石	長 14.8	幅 8.5	厚 4.1	重 815	絹雲母石墨片岩
30	122	こも編み石	長 17.3	幅 7.8	厚 2.5	重 430	絹雲母石墨片岩
31	122	こも編み石	長 13.0	幅 7.2	厚 2.6	重 335	石墨緑泥片岩
32	122	こも編み石	長 15.9	幅 6.7	厚 4.5	重 755	緑簾緑泥片岩　片側面に打ち欠いた凹状
33	122	こも編み石	長 18.7	幅 7.5	厚 4.0	重 910	絹雲母石墨片岩
34	122	こも編み石	長 12.1	幅 5.2	厚 2.7	重 260	絹雲母石墨片岩
35	122	こも編み石	長 16.9	幅 7.5	厚 2.9	重 585	緑簾緑泥片岩　黒斑が一部認められる
36	122	こも編み石	長 18.3	幅 6.7	厚 3.4	重 570	絹雲母石墨片岩
37	122	こも編み石	長 14.5	幅 6.5	厚 2.3	重 375	絹雲母石墨片岩
38	122	こも編み石	長 18.0	幅 6.3	厚 3.4	重 545	絹雲母石墨片岩
39	122	こも編み石	長 11.6	幅 6.2	厚 4.1	重 490	絹雲母石墨片岩
40	122	こも編み石	長 17.0	幅 6.4	厚 2.1	重 360	緑簾緑泥片岩　片側面に打ち欠いた凹状
41	122	こも編み石	長 14.8	幅 7.5	厚 2.9	重 520	緑簾緑泥片岩
42	122	こも編み石	長 12.6	幅 6.0	厚 3.5	重 375	石墨緑泥片岩
43	123	こも編み石	長 17.3	幅 6.8	厚 3.7	重 625	絹雲母石墨片岩
44	123	こも編み石	長 14.4	幅 6.5	厚 3.4	重 620	緑簾緑泥片岩
45	123	こも編み石	長 15.2	幅 4.0	厚 4.2	重 320	石墨緑泥片岩
46	123	こも編み石	長 17.2	幅 4.8	厚 3.9	重 445	石墨緑泥片岩
47	123	こも編み石	長 13.9	幅 5.8	厚 2.8	重 315	絹雲母石墨片岩　一部炎を受けている
48	123	こも編み石	長 17.7	幅 6.4	厚 3.2	重 565	緑簾緑泥片岩　両側面に打ち欠いた凹状
49	123	こも編み石	長 15.0	幅 5.8	厚 2.8	重 355	石墨緑泥片岩
50	123	こも編み石	長 15.0	幅 6.1	厚 3.0	重 405	絹雲母石墨片岩　一部炎を受けている
51	123	こも編み石	長 15.2	幅 6.6	厚 3.3	重 370	絹雲母石墨片岩
52	123	こも編み石	長 15.3	幅 5.8	厚 3.3	重 390	絹雲母石墨片岩
53	123	こも編み石	長 9.1	幅 5.5	厚 2.4	重 160	絹雲母石墨片岩

93号住居跡（第25～28図、図版15・16・78）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、21―32グリッドに位置する。

概要　東側で平安時代の94号住居と重複しており、94号住居により覆土上面が掘り込まれている。西壁面部分は3号溝により床面に近い覆土上面まで掘り込まれているが、壁面下部は残っているため住居範囲はほぼ全面にわたり確認できる。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模　東西3.86m、南北3.34mである。壁高は残りの良い南壁面部分で43cmである。

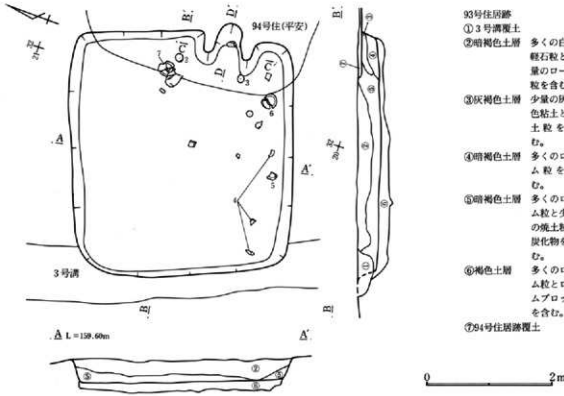
遺物　破片を含め出土量は多くないが、須恵器の高坏が出土している。

（竈）

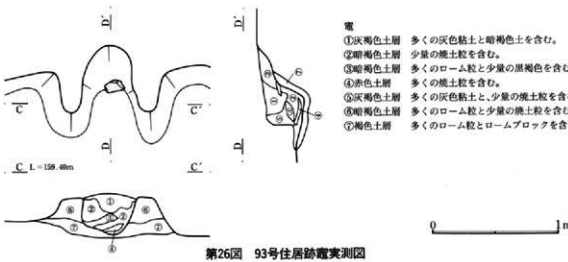
位置　住居東壁面の南寄りに造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　両袖部分の残りは比較的良好である。煙道部付近に1個の石が出土したが、袖石は使われていないようである。燃焼部よりまとまって焼土粒が出土している。

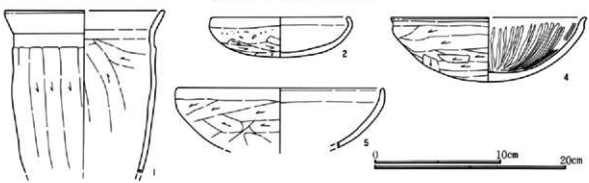
規模　煙道方向78cm、燃焼部幅42cmである。



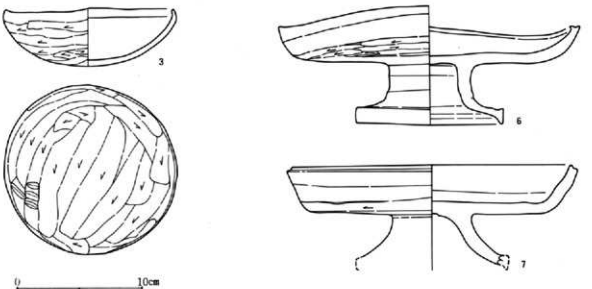
第25図　93号住居跡実測図



第26図　93号住居跡竈実測図



第27図　93号住居跡出土遺物実測図（１）



第28図　93号住居跡出土遺物実測図(2)

93号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
27－1	土師器 甕	床面直上 小破片	口(16.8) 高　－ 底　－	①粗、2～4mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焔、硬質 ③によい黄橙色	外面ていねいなヘラ削り。内面ヘラ削り。 内外面とも器表面の粗れは少ない。 小さな甕と思われる。
27－2 78	土師器 坏	床面直上 口縁一部欠 他完形	口 10.9 高 3.1 底　－	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③によい橙色	底面わずかにヘラナデ。周辺部ナデ。内面ナデにて器表面密。 内面に黒色物付着、吸炭ではない。
28－3 78	土師器 坏	床面直上 完形	口 13.2 高 4.5 底　－	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③によい橙色、一部黒褐色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。 内面ノ吸炭により黒褐色。
27－4 78	土師器 坏	覆土 ½残存	口(15.3) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 口縁部は直立後外反する。 内面は全面にわたり放射状暗文。
27－5 78	土師器 坏	床面直上 口縁部½ 底部½	口 16.3 高 5.8 底　－	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③によい赤褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。 固く焼かれている。
28－6 78	須恵器 高　坏	床面直上 坏完形 脚一部欠	口 23.8 高 9.4 底　－	①密、1～2mmの長石粒を多く含む。 ②還元焔、硬質 ③灰色	盤底面回転ヘラ削り。脚の端部は幅広く垂直に立つ。 脚上半部もほぼ垂直である。 口縁部中央が凹状を呈している。
28－7 78	須恵器 高　坏	床面直上 坏一部欠損 脚端部欠損	口 22.0 高 8.0 底　－	①やや粗、1～3mmの長石粒を多く含む。 ②還元焔、硬質 ③灰色	底面～体部下半右回転ヘラ削り。 内側底面多く使用のためか器表面が粗れている。 器形のゆがみは少ない。

128号住居跡（第29～31図、図版16・78・79・113・120）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、24－25グリッドに位置する。

概要　住居の西壁部分は4号溝により削られて残っていない。南東コーナー部分は小さな土坑により壁面の一部が掘り込まれている。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本と貯蔵穴が竈の右側に掘られている。

規模　東西不明、南北5.14mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で42cmである。貯蔵穴は径58cm深さ68cmである。柱穴1は径62cm深さ77cm、柱穴2は径63cm深さ78cm、柱穴3は径68cm深さ95cm、柱穴4は径64cm深さ74cmである。

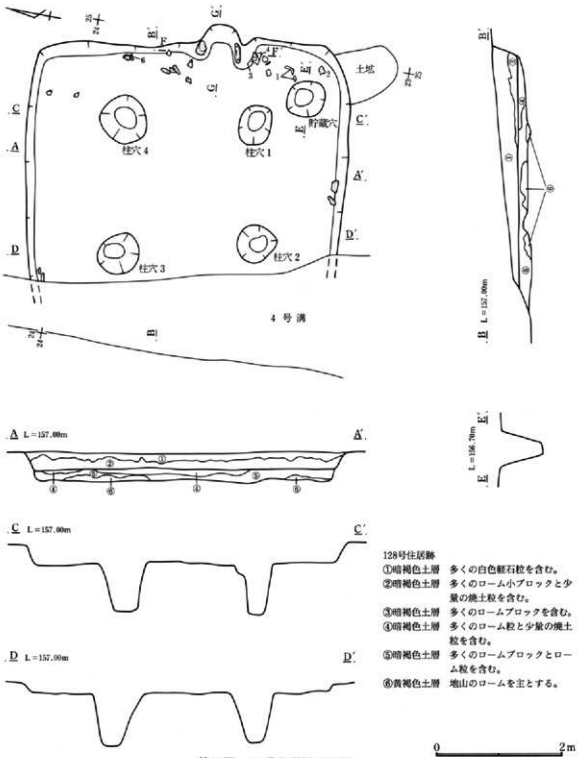
遺物　甕の破片が多く出土しているが、坏は破片を含めても8点である。

（竈）

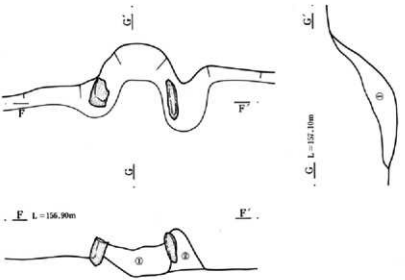
位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　両袖石は少しずれた状態で残っていたが、竈全体の残りは良好ではない。周辺から天井石は出土していない。燃焼部床面からの焼土粒の出土は少ない。

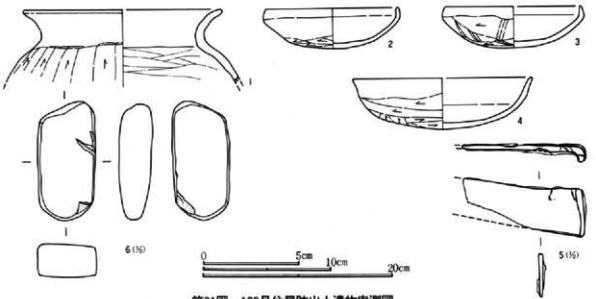
規模　煙道方向67cm、燃焼部幅47cmである。



第29図　128号住居跡実測図



第30図　128号住居跡竈実測図



第31図　128号住居跡出土遺物実測図

128号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
31－1 78	土師器 壺	床面＋３ ½残存	口(21.0) 高　－ 底　－	①やや粗、３～４mmの片岩粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面粗れていない。内面ナデにて器表面密。 全体に器肉が厚い。
31－2 79	土師器 坏	床面＋８ ほぼ完形	口 10.6 高　3.2 底　－	①密、１mm以下の小さな砂粒含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底部中央ヘラ削り。周辺部ナデ。内外面とも器表面が斑点状に剥離している。 黒斑全く認められず。
31－3 79	土師器 坏	床面＋７ ½残存	口(11.0) 高　3.2 底　－	①密、１mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色、一部黒色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内側器表面は密で光沢を持つ。 底部外面の一部吸炭により黒色を呈している。
31－4 79	土師器 坏	床面＋10 ½残存	口(14.0) 高　4.0 底　－	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③褐色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。口縁部～内側底面の器表面密。 底部外面は吸炭により黒色を呈している。
31－5 113	鉄製品 鎌	覆土	長　(6.5) 厚　0.4	幅　2.5 重　15.5	鎌の基部の破片である。刃部中央は使用により幅が狭くなり折れたものと思われる。錆化の進化著しい。
31－6 120	石製品 不　明	床面＋16	長　6.3 厚　1.7	幅　3.0 重　50.8	用途不明。ほぼ全面が磨かれている。中央部がわずかに凸状を呈している。砥石ではないと思われる。

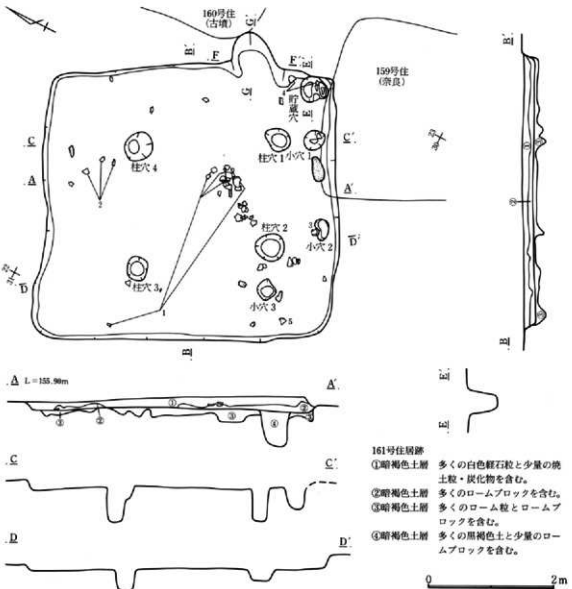
161号住居跡（第32～35図、図版16・17・79）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、31－23グリッドに位置する。

概要　南東壁面部分で奈良時代の159号住居と重複しており、159号住居により本住居の壁面と床面を掘り込まれている。重複部分はわずかである。また竈の煙道部分は古墳時代の160号住居と重複しており160号住居の覆土を掘り込んで煙道部が造られている。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本と竈の右側に貯蔵穴が掘られている。南壁面に沿って柱穴1と柱穴2の南側に小穴1と小穴2が、柱穴2の西側に小穴3がそれぞれ確認されている。

規模　東西4.62m、南北4.38mである。壁高は残りの良い南壁面部分で26cmである。貯蔵穴は径42cm深さ38cmである。柱穴1は径40cm深さ46cm、柱穴2は径46cm深さ20cm、柱穴3は径36cm深さ36cm、柱穴4は径44cm深さ16cmである。小穴1は径34cm深さ28cm、小穴2は楕円形で径34×20cm深さ26cm、小穴3は径32cm深さ15cmである。



第32図　161号住居跡実測図

床下　床下に多くの小穴が掘られている。一定の方向性はなく、用途は不明である。

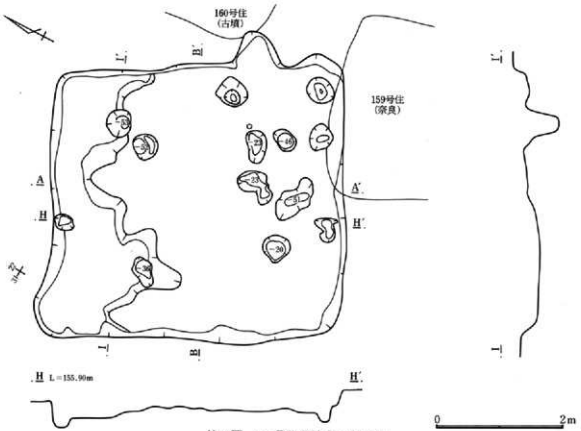
遺物　少量の土師器の甕と坏が出土している。

（竈）

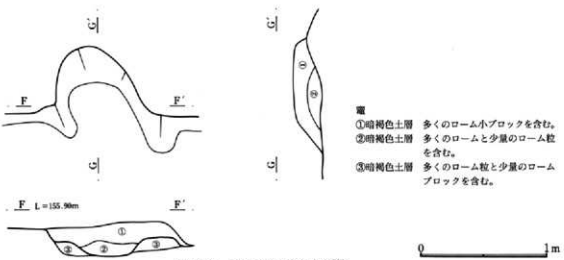
位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　両袖部はほとんど残っておらず、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。燃焼部覆土中からの焼土粒の出土も少ない。このように残りの悪い竈である。

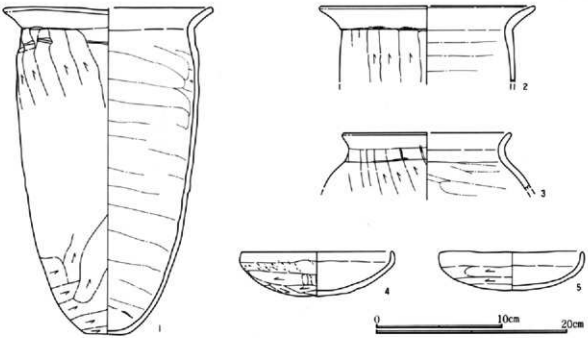
規模　煙道方向82cm、燃焼部幅は約48cmである。



第33図　161号住居跡床下実測図



第34図　161号住居跡竈実測図



第35図　161号住居跡出土遺物実測図

161号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
35－1 79	土師器 甕	床面＋4 ½残存	口(22.0) 高 33.9 底 4.4	①粗、1～3mm片岩粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面強いヘラ削り。中央部は表面が剥離している。 内面ナデにて器表面密。 底径は小さく器肉が薄い。
35－2	土師器 甕	床面＋6 ½残存	口(22.0) 高　－ 底　－	①粗、1～2mm砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。削りの行なわれない口縁部との境に段差あり。
35－3	土師器 甕	床面＋5 口縁破片	口(17.5) 高　－ 底　－	①やや粗、1mm前後の砂粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面弱いヘラ削り。器表面は比較的密である。 内面ナデ。
35－4 79	土師器 坏	床面＋8 完形	口 11.8 高 3.5 底　－	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。
35－5 79	土師器 坏	床面＋11 ½残存	口 11.4 高 3.0 底　－	①密、少量の角閃石と片岩粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。削りの単位は明瞭でない。 内側器表面粗れている。

166号住居跡（第36～42図、図版17・79・113・120・122・123）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、30・31—22グリッドに位置する。

概要　西側壁面部分の一部を耕作溝により掘り込まれている。残りの良い竈が東壁面に造られている。北壁面中央部の床面付近から少量の焼土粒が出土している。袖部分は全く残っておらず、煙道部として壁面の掘り込みも全く認められないが、旧北竈が存在した可能性が考えられる。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本と新東竈の右側に貯蔵穴が掘られている。旧北竈に伴う貯蔵穴は掘られていない。

規模　東西6.15m、南北6.63mである。壁高は残りの良い東壁面部分で68cmである。貯蔵穴は径43cm深さ53cmである。柱穴1は径69cm深さ42cm、柱穴2は径51cm深さ78cm、柱穴3は径54cm深さ82cm、柱穴4は径56cm深さ66cmである。

床下　床下に多くの小穴が掘られている。また柱穴付近にも多くの小穴が掘られており、柱穴の掘り直しも

考えられるが、確認はできない。

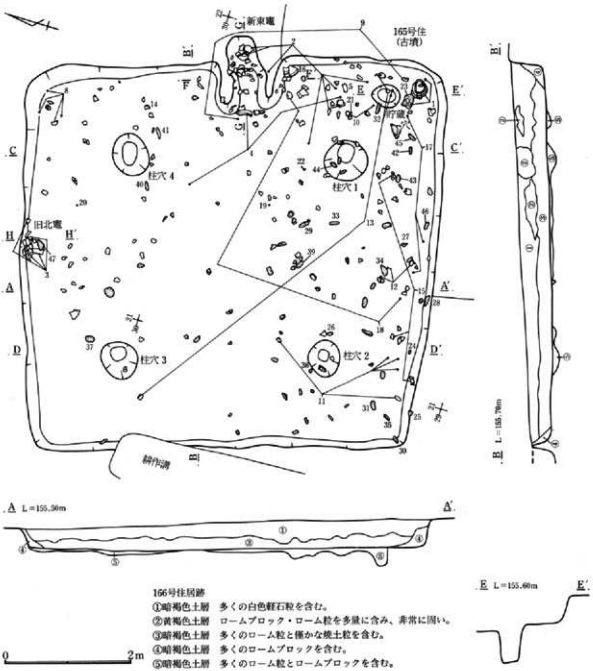
遺物　土師器の甕や坏が多く、また須恵器の高坏が出土している。

（新東竈）

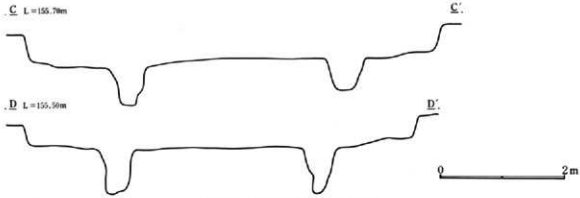
位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　両袖部分の多くは比較的良く残っている。煙道部は壁面を掘り込んで土師器甕の口縁部を下にして煙道としている。袖上部が焼けて焼土化している。また燃焼部より多くの焼土粒が出土している。

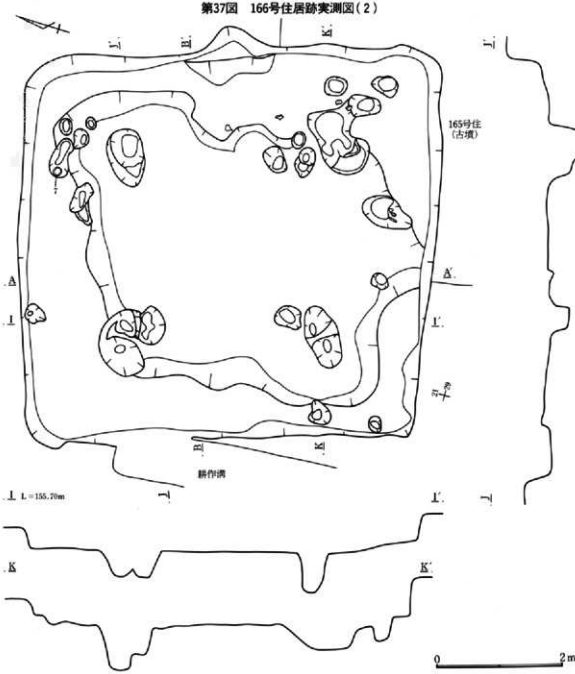
規模　煙道方向112cm、燃焼部幅約45cmである。



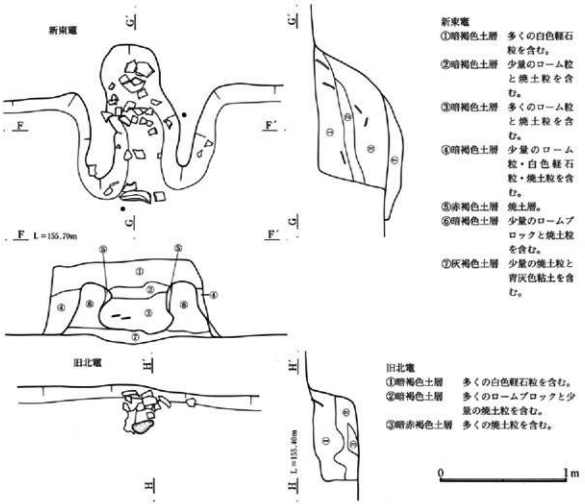
第36図　166号住居跡実測図（１）



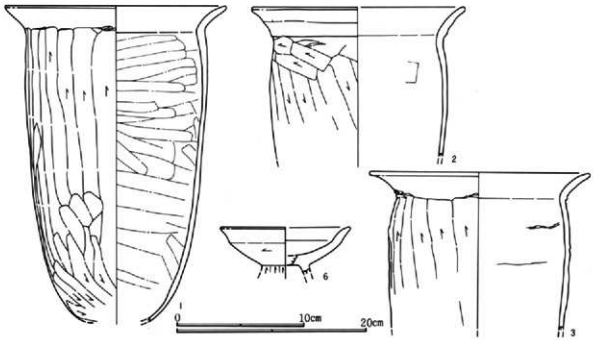
第37図　166号住居跡実測図（２）



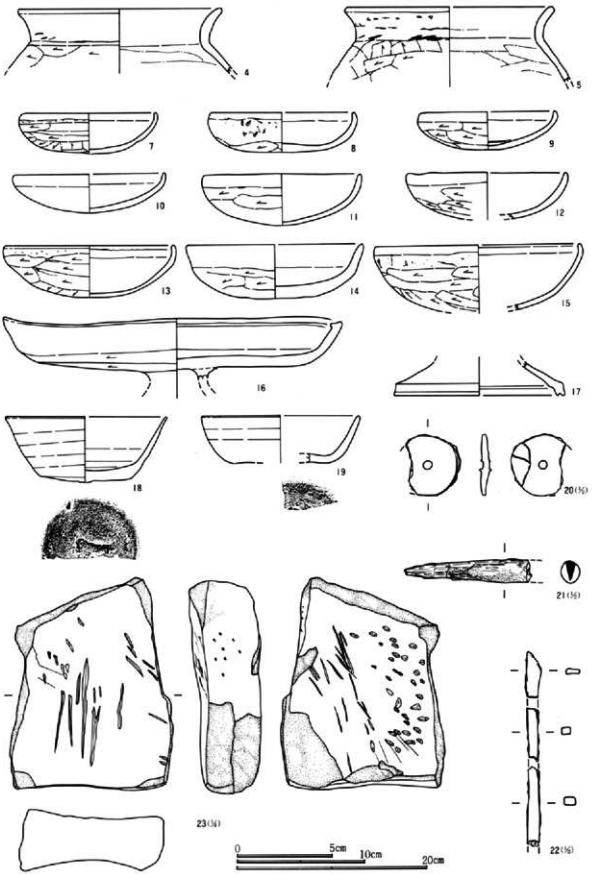
第38図　166号住居跡床下実測図



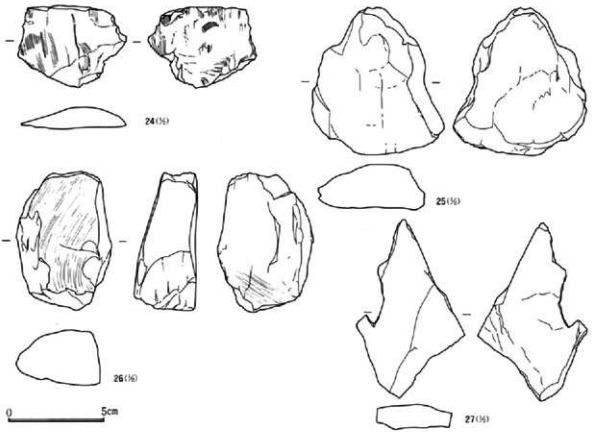
第39図　166号住居跡新東竈・旧北竈実測図



第40図　166号住居跡出土遺物実測図（１）



第41図　166号住居跡出土遺物実測図（２）



第42図　166号住居跡出土遺物実測図（３）

166号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
40－1 79	土師器 甕	口～胴上 完・胴下半 ½	口 23.6 高　－ 底　－	①密、１㎜前後の白色粒と２～３㎜の片岩粒を少量含む。　②酸化焔、硬質　③橙色、一部黒褐色	胴部外面強いヘラ削り。削りの単位が明瞭である。 内面ナデにて器表面密。
40－2 79	土師器 甕	床面＋６ 口縁部½ 胴部½残存	口(22.6) 高　－ 底　－	①密、１～２㎜の赤色粒を多量に含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部との境に段を持つ。口縁部の器肉が厚い。
40－3 79	土師器 甕	床面＋８ 口縁部½ 胴部½残存	口 22.6 高　－ 底　－	①密、１～２㎜の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。口縁部との境に段を持つ。
41－4	土師器 甕	床面＋４ 口縁部½ 肩部½残存	口 21.3 高 (6.3) 底　－	①密、１㎜以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	肩部ヘラ削り。砂粒の移動ほとんどなく器表面比較的密。内面ナデにて器表面密。
41－5	土師器 甕	床面＋３ 口縁部½ 肩部½残存	口(21.7) 高　－ 底　－	①密、１㎜以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	肩部ヘラ削り。小さな砂粒が多く移動している。 口縁部に輪積痕。
40－6	土師器 高　坏	床面＋18 坏部½残存	口(10.4) 高　－ 底　－	①やや粗、１～２㎜の砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	脚部外面幅の広いヘラ削り。坏底面ヘラ削り。 ヘラの単位不明。内面ナデ。
41－7 79	土師器 坏	床面＋84 ほぼ完形	口 10.6 高 3.2 底　－	①密、１㎜以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。
41－8 79	土師器 坏	床面＋23 ½残存	口(11.3) 高 3.1 底　－	①密、１㎜以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。ヘラ削りの単位は明瞭でない。 体部はナデ、内面ナデにて器表面密。
41－9 79	土師器 坏	床面＋３ ½残存	口(10.6) 高 3.0 底　－	①密、１㎜以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。内面ナデにて器表面密。

166号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
41－10 79	土師器 坏	床面＋32 ½残存	口(11.9) 高　3.1 底　－	①密、1mm前後の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、ヘラの単位不明。口縁部～内側底面ナデにて器表面密。硬質な焼成である。
41－11 79	土師器 坏	床面＋24 ほぼ完形	口 12.5 高　4.1 底　－	①密、1mm以下の少量の砂粒を含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りであるが胎土がやや粉状を呈しておりヘラの単位不明瞭。内面ナデにて器表面密。 やや雑な感じの坏である。
41－12	土師器 坏	床面＋17 ½残存	口(12.5) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焔、硬質 ③内面橙色、外面にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。内面ナデにより器表面密でやや光沢あり。
41－13 79	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.4 高　4.1 底　－	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁下部はナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。
41－14	土師器 坏	床面＋32 ½残存	口(14.0) 高　－ 底　－	①やや粗、1～3mmの砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。器表面やや粗い。内面ナデにて器表面密。器内が特に厚い。
41－15	土師器 坏	床面＋33 ½残存	口(16.4) 高　－ 底　－	①密 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。
41－16 79	須恵器 高　坏	床面＋8 ½残存、高台欠	口 26.6 高　－ 底　－	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	体部下半～底面ヘラ削り。口唇部は平らで内傾し、中央部がやや凹状を呈する。
41－17	須恵器 高　坏	床面＋17 破片(脚部)	口　－ 高　－ 底　－	①密、1～2mmの長石粒を含む。 ②還元焔、硬質 ③灰色	脚下端中央部に一条の凹線あり。
41－18 79	須恵器 坏	床面＋6 ½残存	口(12.6) 高　5.1 底　7.0	①密、1mm前後の石英と長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰白色	底面ヘラ切り。体部ロクロ目。底部の器肉が厚くやや丸底である。
41－19	須恵器 坏	床面＋26 破片	口(12.4) 高　－ 底　－	①やや粗、2～3mmの片岩粒を少量含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面の残りが少なく明確でないがヘラ削りと思われる。
41－20 113	鉄製品 紡錘車	床面＋26 ½残存	長　3.2 厚　0.3	幅　－ 重　6.6	紡茎が欠けていてその部分に痕跡が残っている。紡輪であり鉄製紡輪としては最も小さなものである。
41－21 113	鉄製品 刀　子	床面＋6	長　(6.2) 厚　1.0	幅　1.2 重　9.1	刀子の茎部分。外側は全て木質に被われている。
41－22 113	鉄製品 鉄　茎	床面＋45	長　－ 厚　0.5	幅　0.8 重　5.6	鉄鏃の茎部分の破片と思われる。錆化がはげしい。
41－23 120	石製品 砥　石	床面＋12	長　22.3 厚　4.4	幅　16.5 重　3040	砂岩。3側面と底面を砥石として使用している。砥石面全体に刃物でつけられたような痕跡が残る。
42－24 122	原　石	床面＋31	長　4.3 厚　1.1	幅　5.7 重　27.8	滑石片岩。加工を目的として集落内に持ち込まれた原石と思われる。加工痕なし。
42－25 122	原　石	床面＋34	長　7.8 厚　2.3	幅　7.0 重　155	滑石片岩。加工を目的として集落内に持ち込まれた原石と思われる。加工痕なし。
42－26 122	原　石	床面＋30	長　7.4 厚　2.9	幅　5.1 重　148	滑石片岩。紡錘車等を作るために集落内に持ち込まれた原石と思われる。一部に荒砥削りの加工痕あり。
42－27 122	原　石	床面直上	長　9.4 厚　1.4	幅　5.8 重　62	滑石片岩。加工を目的として集落内に持ち込まれた原石と思われる。加工痕なし。

遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)	石材・備考
28	123	こも編み石	長 16.0　幅 6.1　厚 3.1　重 420	緑簾緑泥片岩
29	123	こも編み石	長 14.2　幅 5.9　厚 3.3　重 370	石墨緑泥片岩
30	123	こも編み石	長 12.4　幅 5.1　厚 3.0　重 260	緑簾緑泥片岩
31	123	こも編み石	長 16.0　幅 5.7　厚 3.7　重 430	絹雲母石墨片岩
32	123	こも編み石	長 17.4　幅 7.0　厚 5.5　重 800	石墨緑泥片岩
33	123	こも編み石	長 16.1　幅 5.5　厚 5.6　重 740	緑簾緑泥片岩
34	123	こも編み石	長 17.5　幅 6.3　厚 5.0　重 840	絹雲母石墨緑泥片岩
35	123	こも編み石	長 10.8　幅 4.0　厚 2.4　重 185	緑簾緑泥片岩
36	123	こも編み石	長 13.2　幅 5.3　厚 4.5　重 430	緑簾緑泥片岩
37	123	こも編み石	長 15.2　幅 8.1　厚 2.6　重 540	絹雲母石墨片岩
38	123	こも編み石	長 12.4　幅 4.4　厚 3.8　重 270	絹雲母石墨片岩
39	123	こも編み石	長 13.4　幅 5.8　厚 3.8　重 410	絹雲母石墨片岩
40	123	こも編み石	長 13.2　幅 5.5　厚 3.2　重 340	緑簾緑泥片岩
41	123	こも編み石	長 13.3　幅 4.2　厚 2.9　重 510	絹雲母石墨片岩

166号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
42	123	こも編み石	長 19.1	幅 5.3	厚 4.1	重 280	緑簾緑泥片岩
43	123	こも編み石	長 13.6	幅 7.6	厚 2.7	重 400	絹雲母石墨片岩
44	123	こも編み石	長 12.4	幅 5.7	厚 2.9	重 350	絹雲母石墨片岩
45	123	こも編み石	長 15.4	幅 5.6	厚 2.6	重 310	絹雲母石墨片岩
46	123	こも編み石	長 12.3	幅 5.6	厚 2.9	重 275	絹雲母石墨片岩
47	123	こも編み石	長 17.6	幅 7.3	厚 1.9	重 345	絹雲母石墨緑泥片岩

178号住居跡（第43・44図、図版17・18・79・123）

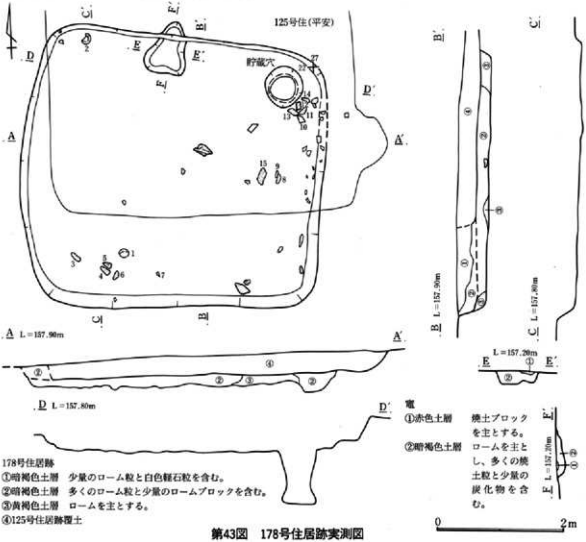
位置　本住居跡は第4次調査区にあり、22—27グリッドに位置する。

概要　北側約2/3の範囲で平安時代の125号住居と重複しており、125号住居により床面から上の部分を削り取られている。また全体に攪乱を受けているためか、明瞭な床面の検出はできない。竈は北壁面に造られていたが、大部分が削られてほとんど残っていない。

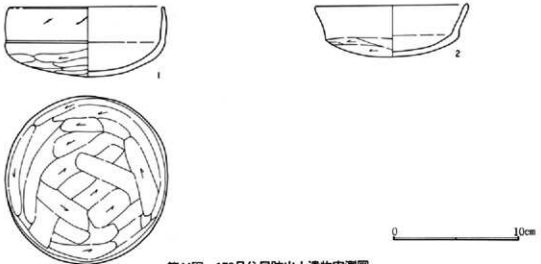
構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に掘られていたが、柱穴は掘られていない。

規模　東西4.58m、南北4.24mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で39cmである。貯蔵穴は径64cm深さ83cmである。

遺物　図示できたのは土師器の坏2点である。



第43図　178号住居跡実測図



第44図　178号住居跡出土遺物実測図

178号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
44－1 79	土師器 坏	床面＋5 完形	口 12.2 高 5.4 底 －	①密、1mm以下の赤色粒を大量に含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。稜は低く口縁部が長く直立する。
44－2 79	土師器 坏	床面＋4 1/2残存	口 12.0 高 4.0 底 －	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面へラ削り。胎土が粉状を呈しており削りの単位不明瞭。口縁部に少し黒斑あり。

遺物番号	図版番号	器　種	法量(cm)(g)	石材・備考
3	123	こも編み石	長 16.7　幅 5.8　厚 4.5　重 720	緑簾緑泥片岩
4	123	こも編み石	長 15.2　幅 8.0　厚 3.6　重 650	点紋絹雲母石墨片岩　片側面に凹状を呈する
5	123	こも編み石	長 13.6　幅 5.9　厚 2.9　重 360	絹雲母石墨片岩
6	123	こも編み石	長 14.0　幅 6.8　厚 4.3　重 610	点紋絹雲母石墨片岩
7	123	こも編み石	長 16.6　幅 7.6　厚 2.8　重 310	絹雲母石墨片岩
8	123	こも編み石	長 15.0　幅 7.5　厚 2.4　重 445	絹雲母石墨片岩
9	123	こも編み石	長 10.6　幅 5.0　厚 3.1　重 270	緑簾緑泥片岩
10	123	こも編み石	長 15.6　幅 9.7　厚 4.2　重 885	絹雲母石墨片岩　片側面に凹状を呈する
11	123	こも編み石	長 17.6　幅 8.6　厚 3.0　重 805	点紋緑泥片岩
12	123	こも編み石	長 12.9　幅 7.1　厚 3.9　重 405	絹雲母石墨片岩
13	123	こも編み石	長 14.3　幅 9.6　厚 3.2　重 710	絹雲母石墨片岩
14	123	こも編み石	長 13.7　幅 6.1　厚 3.9　重 525	絹雲母石墨片岩
15	123	こも編み石	長 14.8　幅 7.1　厚 4.1　重 760	絹雲母石墨片岩

193号住居跡（第45～47図、図版18・80）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、14・15－31グリッドに位置する。

概要　南西部分の低くなるなだらかな傾斜面に位置し、北東部分で床面と壁面がわずかに残っているが、南西部分の壁面と床面は残っていない。床下部分の調査から住居範囲の確認ができた。確認できた床面範囲は線で示した。このように残りの悪い住居である。

構造　わずかに残っている床面は少量のローム粒と暗褐色土の混入した土で造られている。柱穴が4本、貯蔵穴が竈の右側に掘られている。北東の柱穴4の北に小穴が掘られており、この小穴は南東コーナー部分の貯蔵穴より竈に近いため、貯蔵穴の可能性も高いがここでは小穴と呼称した。

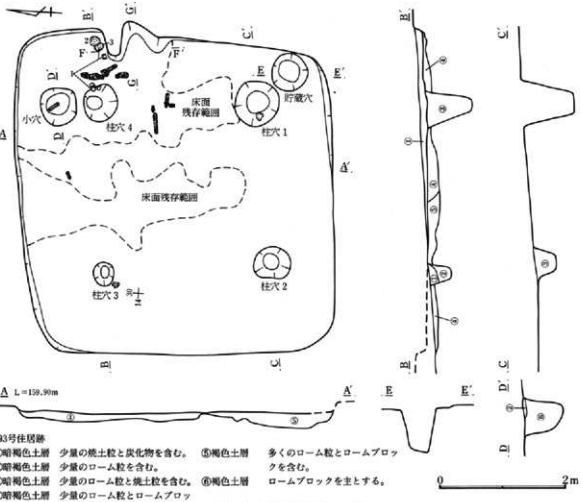
規模　東西5.13m、南北4.92mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で17cmである。柱穴1は径71cm深さ81cm、柱穴2は径59cm深さ51cm、柱穴3は径34cm深さ40cm、柱穴4は径53cm深さ74cmである。貯蔵穴は径68cm深さ64cm、小穴は径65cm深さ61cmである。

遺物　竈の左袖外側にほぼ完形の坏が2点、また左袖付近から炭が出土している。

（竈）

位置　住居東壁面北寄りに造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

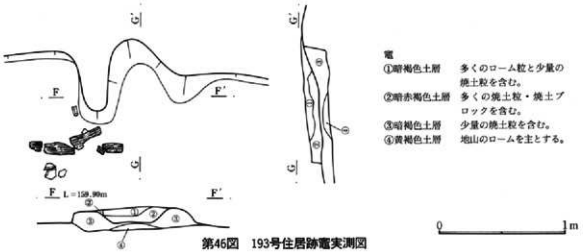
概要　住居同様に残りが悪く、竈の大部分は削り取られて残っていない。左袖部分の一部が残っているが、右袖部分はほとんど残っていない。残りの悪い竈であるが、竈内より多くの焼土粒が出土している。規模等は不明である。



193号住居跡

①暗褐色土層　少量の焼土粒と炭化物を含む。
②暗褐色土層　少量のローム粒を含む。
③暗褐色土層　少量のローム粒と焼土粒を含む。
④暗褐色土層　少量のローム粒とローム ブロックを含む。
⑤褐色土層　多くのローム粒とローム ブロックを含む。
⑥褐色土層　ローム ブロックを主とする。

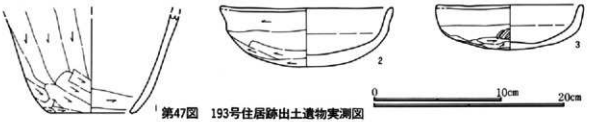
第45図　193号住居跡実測図



竈

①暗褐色土層　多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
②暗赤褐色土層　多くの焼土粒・焼土ブロックを含む。
③暗褐色土層　少量の焼土粒を含む。
④黄褐色土層　地山のロームを主とする。

第46図　193号住居跡竈実測図



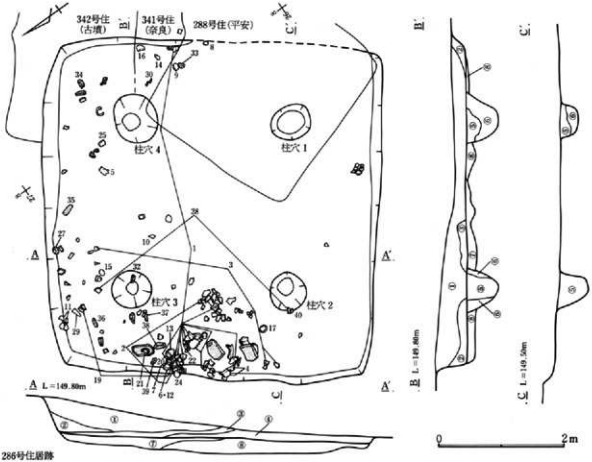
第47図　193号住居跡出土遺物実測図

193号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
47－1	土師器 甕	床面直上 底部1/4	口　－ 高　－ 底　－	①粗、2～3mmの片岩粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。胴部内側下端部ヘラ削り。
47－2 80	土師器 坏	床面－3 ほぼ完形	口 13.4 高 4.6 底　－	①密、1～2mmの砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。底面の周辺部ナデ。口縁部横ナデ。全体に器肉が厚く洗練されていない。 内面の器表面が部分的に剥落している。
47－3 80	土師器 坏	床面－2 完形	口 11.3 高 3.5 底　－	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動はなく粘土がササラ状にめくれている。口縁部～内面ナデ。 全体に器肉が厚く重量感がある。

286号住居跡（第48～50図、図版18・19・80・81・113・115・123）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、27－8グリッドに位置する。



286号住居跡
①暗褐色土層　多くの白色軽石粒を含む。
②暗褐色土層　少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
③暗褐色土層　少量の白色軽石粒と焼土粒を含む。
④暗褐色土層　少量のローム粒とロームブロックを含む。
⑤暗褐色土層　多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
⑥暗褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。
⑦暗褐色土層　ローム粒・ロームブロック・焼土粒の混入層。
⑧黄褐色土層　ローム粒とロームブロックを主とする。

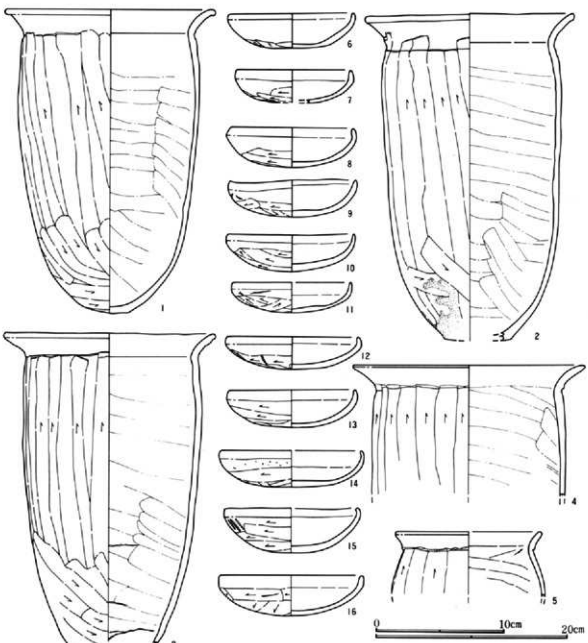
第48図　286号住居跡実測図

概要　本住居を含めて４軒が重複していた。本住居は北東部分で古墳時代の342号住居を床下部分まで掘り込み、東側部分を奈良時代の341号住居により覆土上面を、また平安時代の288号住居により床面付近まで掘り込まれていた。４軒の新旧関係は342→286→341→288号住居である。竈はどこに造られたのか確認できないが、288号住居の竈と同じ位置に造られていた可能性が考えられる。

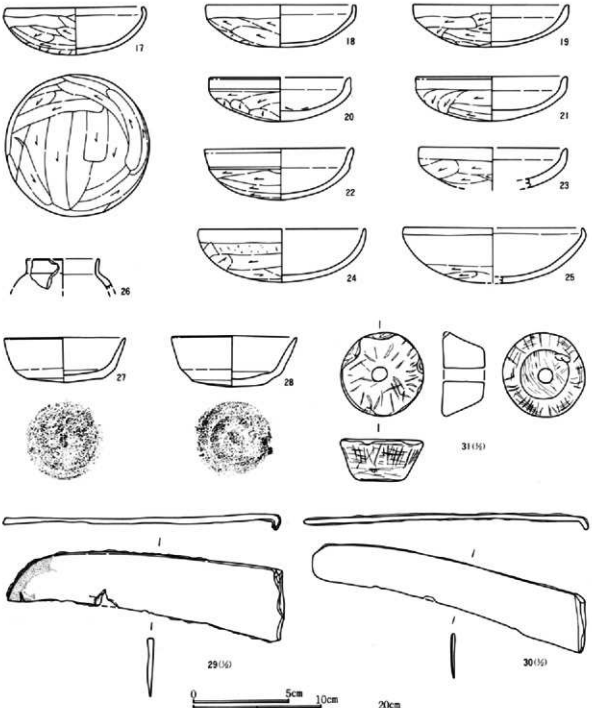
構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴は４本掘られていたが、貯蔵穴は掘られていない。

規模　東西5.26m、南北5.40mである。壁高は残りの良い北壁面部分で65cmである。柱穴１は径66cm深さ39cm、柱穴２は径60cm深さ52cm、柱穴３は径62cm深さ54cm、柱穴４は径75cm深さ53cmである。

遺物　西壁付近より土師器の甕や坏が多く出土している。



第49図　286号住居跡出土遺物実測図（１）



第50図　286号住居跡出土遺物実測図(2)

286号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
49－1 80	土師器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 21.8 高 31.6 底 4.6	①やや粗、1～3mmの砂粒と片岩粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③内面橙色、外面黒褐色	胴部外面ヘラナデ。多くの砂粒が目立つが移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。
49－2 80	土師器 甕	床面＋8 口縁部完形 胴部弓	口 21.8 高 34.0 底 6.9	①やや粗、1～2mmの砂粒と片岩粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ。ヘラの単位は明瞭。 砂粒の移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。

286号住居跡出土遺物観察表

桶図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
49－3 80	土師器 甕	床面＋８ 口～胴上ﾗ 胴下部ﾗ	口 21.8 高　－ 底　－	①やや粗、１～２mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焔、硬質 ③口縁部橙色、外面黒褐色	胴部外面ヘラナデ、ヘラの単位は明瞭。 砂粒の移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。
49－4 80	土師器 甕	床面＋18 口縁ほぼ完 胴上部ﾗ	口 24.2 高　－ 底　－	①粗、１～２mmの砂粒を大量に含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り。砂粒が移動し器表面やや粗い。 口縁部との境に段を持つ。
49－5 80	土師器 小型甕	床面＋11 口縁～ 胴上部ﾗ	口(14.8) 高　－ 底　－	①密、１mm前後の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。頸部に段差を持つ。 内面ナデにより器表面密。
49－6 80	土師器 坏	床面＋25 完形	口　9.7 高　2.7 底　－	①密、１mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色、表面の多く黒色	底面ヘラ削り。 底部外面も含めた器表面全体に黒漆が塗布されている。
49－7 80	土師器 坏	床面＋24 底部の一部欠、他完形	口　9.1 高　2.6 底　－	①密、１mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。 口縁部～内面ナデにより器表面密。 口縁外面～内側底面に黒漆。
49－8 80	土師器 坏	床面＋12 ほぼ完形	口　9.7 高　3.2 底　－	①密、１mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 内外面に黒漆は認められない。
49－9 80	土師器 坏	床面＋11 ﾗ残存	口　9.8 高　2.9 底　－	①密、１mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 口縁部の内側は少ない。 全体にゆがんでいる。
49－10 80	土師器 坏	床面＋７ ほぼ完形	口　9.8 高　2.9 底　－	①密、１mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 底部外面に吸炭による黒斑あり。
49－11 80	土師器 坏	床面＋12 ﾗ残存	口 (9.1) 高　2.4 底　－	①密、１mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 特に小さな坏である。
49－12 80	土師器 坏	床面＋25 ほぼ完形	口 10.2 高　2.5 底　－	①密、１mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 口縁部が大きく内屈している。
49－13 80	土師器 坏	床面直上 ﾗ残存	口　9.8 高　3.0 底　－	①密、１mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 胎土が少し粉状を呈している。
49－14 80	土師器 坏	床面＋３ ﾗ残存	口(11.0) 高　2.8 底　－	①密、１mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。
49－15 80	土師器 坏	床面直上 ﾗ残存	口(10.3) 高　3.5 底　－	①密 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 胎土が粉状を呈しておりヘラの単位は明瞭でない。
49－16 80	土師器 坏	床面＋１ ﾗ残存	口 11.1 高　3.1 底　－	①密、多くの小さな雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。 口縁部横ナデ。 内面ナデ。
50－17 80	土師器 坏	床面＋17 ほぼ完形	口 10.8 高　3.7 底　－	①密、１mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。 内側底面の器表面密でやや光沢を持つ。
50－18 80	土師器 坏	覆土 ﾗ残存	口 11.6 高　3.3 底　－	①密、１mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。 口縁～内面器表面密。 黒斑全く認められず。
50－19 80	土師器 坏	床面＋６ ﾗ残存	口 11.9 高　3.3 底　－	①密、多くの小さな雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。 内面の器表面密でやや光沢を持つ。 全体に赤味の強い色調に特色がある。
50－20 80	土師器 坏	床面＋８ ﾗ残存	口(10.8) 高　3.4 底　－	①密、多くの小さな雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。 内側底面の器表面密でやや光沢を持つ。
50－21 80	土師器 坏	床面＋28 ﾗ残存	口 11.6 高　3.4 底　－	①密、多くの小さな雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し、器表面やや粗い。 内側底面の器表面密でやや光沢を持つ。
50－22 80	土師器 坏	床面直上 ﾗ残存	口 11.4 高　4.0 底　－	①密、多くの小さな雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。 内側底面の器表面特に密。

286号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
50－23 80	土師器 坏	覆土 口縁～体部 1/3残存	口(11.4) 高　－ 底　－	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、削り が残くヘラの単位明瞭でない。 内側底面の器表面密でやや光沢を持つ。 全体に器肉が厚い。
50－24	土師器 坏	床面＋32 1/3残存	口(13.0) 高　4.1 底　－	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③赤褐色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 全体に器表面は密である。 内面は赤味が強い。
50－25	土師器 坏	床面＋18 1/3残存	口(14.0) 高　－ 底　－	①密、胎土が粉状を呈する ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。内面ナデにて器表面密。 黒斑は全く認められない。
50－26	須恵器 小型短頸壺	カマド内 口縁部小片	口 (8.0) 高　－ 底　－	①密、1～2mmの砂粒を含む ②還元焔、硬質 ③灰色	内外面横ナデにより器表面密。
50－27 81	須恵器 坏	床面＋14 完形	口　9.4 高　3.6 底　6.0	①やや粗、1～3mmの長石粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰白色	底面ナデ、中央部にヘラ切り時にできる凸状部の痕跡が残る。
50－28 81	須恵器 坏	床面直上 ほぼ完形	口　9.7 高　4.0 底　5.9	①やや粗、2～3mmの長石粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰白色	底面ナデ、ヘラ切りと思われる痕跡が多く残る。 3～6mmの大きな長石粒を少量含む。
50－29 113	鉄製品 鎌	床面＋8 ほぼ完形	長　14.5　幅　3.8 厚　0.3　重　32.9		鎌のほぼ完形品である。
50－30 113	鉄製品 鎌	床面＋4 完形	長　14.9　幅　2.9 厚　0.3　重　31.6		鎌の完形品である。 使用による刃部の目減りは少ない。
50－31 115	石製品 紡錘車	床面＋15 ほぼ完形	径　4.3/2.5　孔径　0.7 厚　2.2　重　58.9	滑石片岩	広面と側面に太いノミによる打痕。狭面は磨かれて光沢を持つ。広面中央部がやや凹状を呈する。

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)	石材・備考
32	123	こも編み石	長 13.1　幅 5.6　厚 1.8　重 240	点紋絹雲母石墨片岩
33	123	こも編み石	長 13.7　幅 8.7　厚 3.1　重 625	絹雲母石墨片岩
34	123	こも編み石	長 13.8　幅 6.6　厚 3.4　重 460	絹雲母石墨片岩
35	123	こも編み石	長 17.0　幅 7.0　厚 3.2　重 700	絹雲母石墨片岩
36	123	こも編み石	長 16.0　幅 6.3　厚 3.4　重 555	絹雲母石墨緑泥片岩
37	123	こも編み石	長 19.5　幅 6.9　厚 2.8　重 650	絹雲母石墨片岩
38	123	こも編み石	長 16.0　幅 8.3　厚 4.5　重 850	絹雲母石墨片岩
39	123	こも編み石	長 14.1　幅 5.6　厚 2.4　重 270	絹雲母石墨片岩
40	123	こも編み石	長 13.6　幅 5.5　厚 4.1　重 510	点紋緑泥片岩

291号住居跡（第51～53図、図版19・81）

位置　本住居跡は第6次調査区にあり、21・22—5グリッドに位置する。

概要　調査区の中で最も低地に位置し、地山のロームは流されたためかほとんど残っていない。当住居の西側は西谷川となっている。住居の残りは悪く、低い西側は残っておらず北東部分は基本杭が打たれているために調査できない。

構造　床面は粘性の強い黒褐色土を主とした土で造られている。貯蔵穴は竈の右側に掘られているが、柱穴は確認できない。

規模　東西不明、南北5.12mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で29cmである。貯蔵穴は径96cm深さ27cmである。

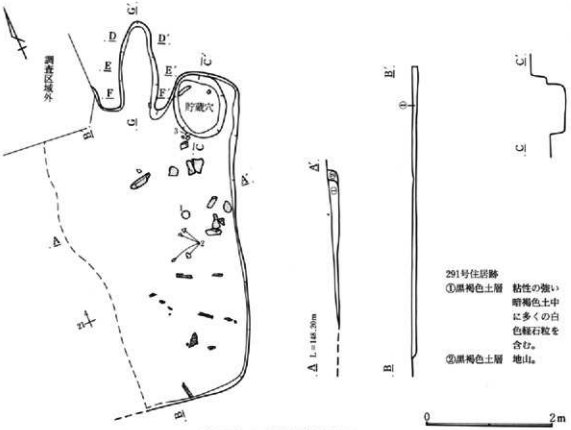
遺物　出土量は少なく、破片を含め総数で16点である。

（竈）

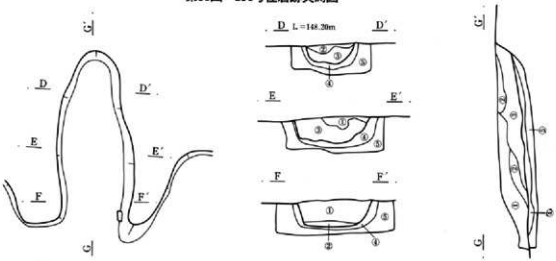
位置　住居北壁面に造られている。燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

概要　袖部分は明瞭ではないが、竈の大部分は地山の土が粘土質のためか壁面を掘り込んで造られていたものと思われる。竈内から大量の焼土粒が出土し、また竈全体が焼けて焼土化している。

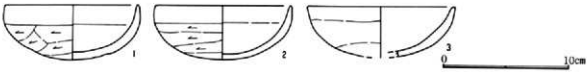
規模　煙道方向152cm、燃焼部幅56cmである。



第51図　291号住居跡実測図



第52図　291号住居跡竈実測図



第53図　291号住居跡出土遺物実測図

291号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
53－1 81	土師器 坏	床面直上 完形	口 10.4 高 4.3 底 －	①粗、3～6mmの長石粒や片岩粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面わずかにヘラ削り。大量の砂粒が目立つが移動は少ない。内面ナデ。内面にも多くの砂粒が目立つ。
53－2 81	土師器 坏	床面直上 ほぼ残存	口 10.6 高 4.2 底 －	①密、3～6mmの長石粒や片岩粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面わずかにヘラ削り。大量の砂粒が目立つが移動は少ない。内面ナデ。内面にも多くの砂粒が目立つ。
53－3	土師器 坏	床面直上 ほぼ残存	口 11.6 高 － 底 －	①粗、2～4mmの片岩粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい黄橙色	底面ヘラ削り。大粒の片岩粒が目立つ。口縁部～内側底面横ナデ。

345号住居跡（第54～56図、図版19・81）

位置　本住居跡は第6次調査区にあり、30－10グリッドに位置する。

概要　住居の大部分は古墳時代の346号住居の北側を床下部分まで掘り込んで造られている。規模の小さな住居である。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とする土で造られている。柱穴は掘られておらず、貯蔵穴が竈の右側に掘られている。

規模　東西3.63m、南北3.01mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で43cmである。貯蔵穴は径30cm深さ46cmである。

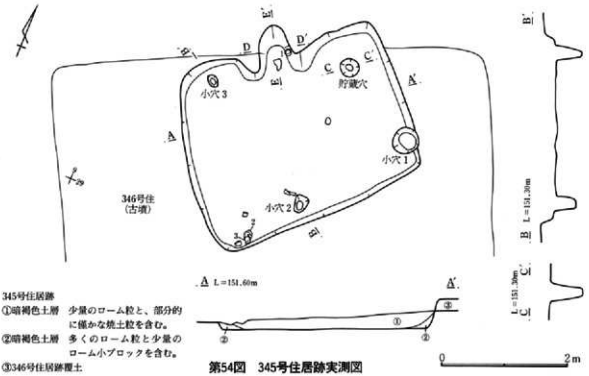
遺物　甕の破片は出土しているが、図示できたのは土師器の坏4点である。

（竈）

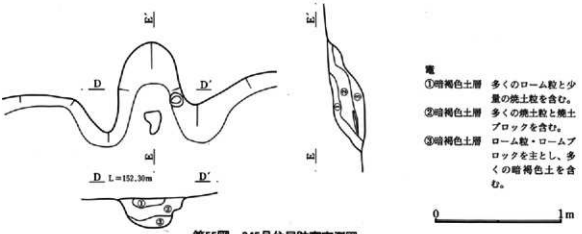
位置　住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　両袖部分は346号住居の覆土を用いており、新たに粘土を持ち込んだ様子は確認できない。そのためか残りは悪い。

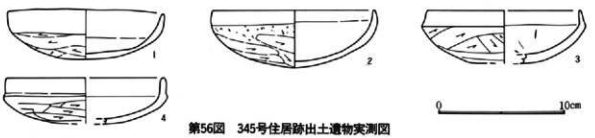
規模　煙道方向79cm、燃焼部幅46cmである。



第54図　345号住居跡実測図



第55図　345号住居跡竈実測図



第56図　345号住居跡出土遺物実測図

345号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
56－1 81	土師器 坏	竈内 完形	口 12.4 高 3.9 底 －	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく底面比較的密。内面ナデにて器表面密。
56－2 81	土師器 坏	床面直上 ½残存	口 12.8 高 4.6 底 －	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。 固く焼成されている。
56－3	土師器 坏	床面＋14 ½残存	口(12.0) 高 － 底 －	①密、砂粒をほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部外面～内側底面黒漆。
56－4	土師器 坏	覆土 小破片	口(12.4) 高 － 底 －	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③浅黄橙色	底面ヘラ削り。口縁部外面～内側底面黒漆。

360号住居跡（第57～59図、図版19）

位置　本住居跡は第５次調査区にあり、26―19グリッドに位置する。

概要　残りが悪く覆土の大部分が削り取られて残っていない。北側で同じ古墳時代の369号住居と重複している。重複関係は明瞭でないが、調査段階で本住居が新しいと判断された。また東側部分で3号掘立柱建物跡と重複しており、覆土を掘り込まれている。

構造　床面はほとんど残っていない。貯蔵穴や柱穴も掘られていない。

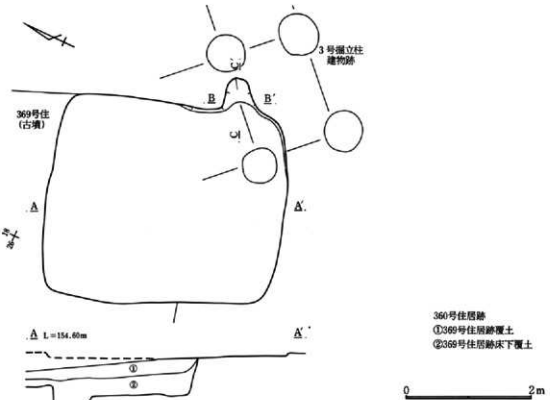
規模　東西3.08m、南北3.80mである。

遺物　出土量は少なく、図示できたのは土師器の坏１点である。

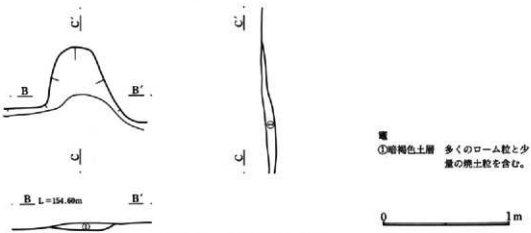
（竈）

位置　住居東壁面に造られている。

概要　大部分が削り取られて残っておらず、燃焼下部が残っていた程度である。覆土中の焼土粒も僅かである。



第57図　360号住居跡実測図



第58図　360号住居跡竈実測図

第59図　360号住居跡出土遺物実測図

360号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
59－1	土師器 坏	竈内 小破片	口(11.0) 高　－ 底　－	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りであるが、ヘラの単位や方向不明。

365号住居跡（第60～63図、図版20・81・120）

位置　本住居跡は第６次調査区にあり、28―12・13グリッドに位置する。

概要　残りの悪い住居であり、東側の床面や竈は残っていたが、西側の床面は残っていない。南側を流路と南北方向の23号溝により覆土上面が掘り込まれている。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に掘られており、貯蔵穴をＬ字形に囲むように帯状の僅かな高まりが造られている。柱穴は掘られていない。

規模　東西4.42m、南北4.38mである。壁高は残りの良い東壁面部分で18cmである。貯蔵穴は径62cm深さ66cmである。

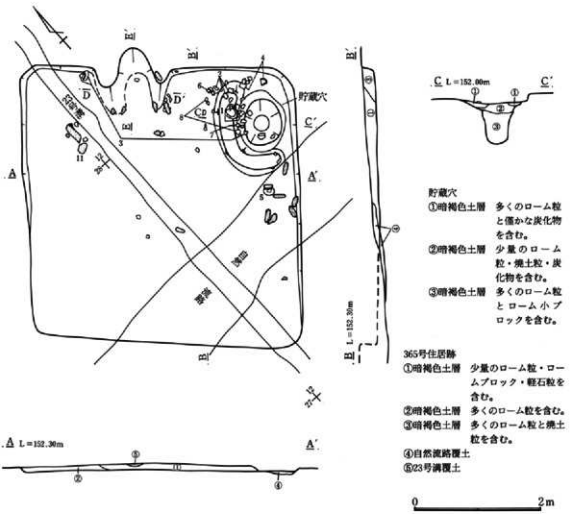
遺物　貯蔵穴周辺から土師器の甕、朱塗りの高坏や坏が出土している。

（竈）

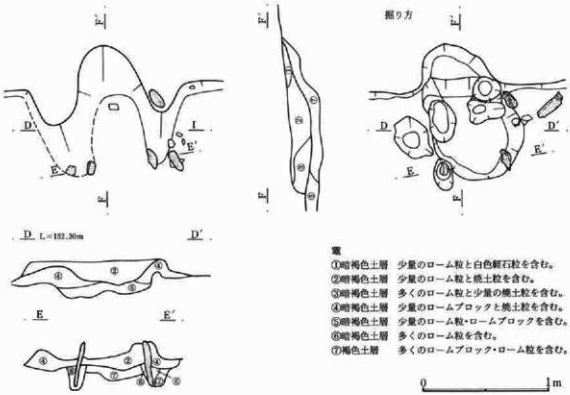
位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　残りが良好でなかったために、竈の燃焼部中心の認識を間違えて調査を進め、その後修正して調査を進めた。焚口部分に袖石がほぼ据えられた状態で残っている。また右奥壁部分にも石が据えられている。燃焼部から焼土粒の出土は少ない。

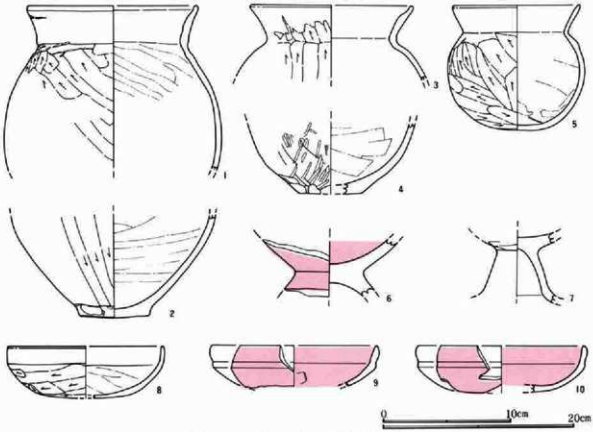
規模　煙道方向98cm、燃焼部幅46cmである。



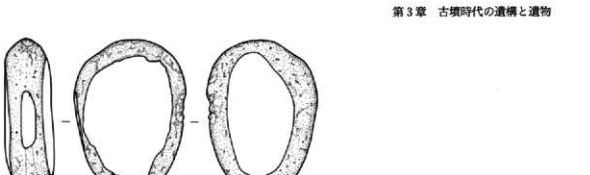
第60図　365号住居跡実測図



第61図　365号住居跡竈実測図



第62図　365号住居跡出土遺物実測図(１)



第63図　365号住居跡出土遺物実測図（２）

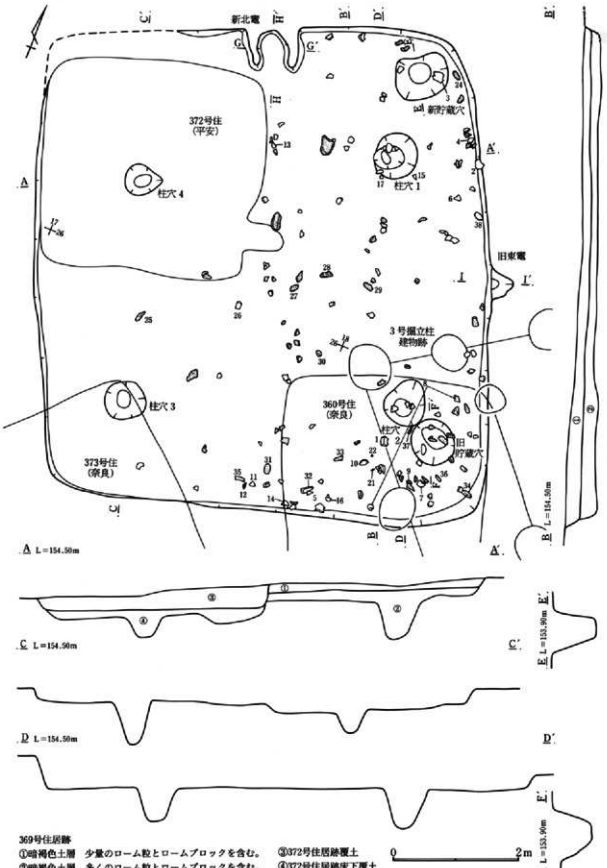
365号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
62－1 81	土師器 甕	床面＋３ 口～胴部½	口(18.2) 高　－ 底　－	①やや粗、２～３mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動はほとんどなく器表面密。内面ナデにて器表面密。
62－2	土師器 甕	床面＋６ 底部½残存	口　－ 高　－ 底 7.4	①粗、１～２mmの砂粒を多く、２～３mmの片岩粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。内面ナデにて器表面密。
62－3 81	土師器 甕	床面－１ 口縁部½ 胴部½残存	口(17.0) 高　－ 底　－	①粗、１～４mmの砂粒を大量に含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ。ナデは口縁部まで及ぶ。内面ナデにて器表面密。
62－4	土師器 甕	床面＋５ 底部½残存	口　－ 高　－ 底 (6.7)	①やや粗、１～３mmの砂粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③明褐色一部黒色	底面ナデ。胴部外面ナデ後、ほぼ全面にわたりヘラ磨き。内面ナデにより器表面密。
62－5 81	土師器 小型甕	床面－10 ほぼ完形	口 13.5 高 13.2 底　－	①やや粗、２～３mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動はほとんどなく器表面密。内面ナデにて器表面密。
62－6	土師器 高　坏	床面＋９ 脚ほぼ完形	口　－ 高　－ 底　－	①密、多くの赤色粒を含む ②酸化焔、硬質 ③表面赤色塗彩、断面赤褐色	内外面とも器表面密。坏の内外面と脚外面に赤色塗彩。
62－7 81	土師器 高　坏	床面＋10 坏底部～脚 筒部½	口　－ 高　－ 底　－	①密、１～２mmの長石粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③赤褐色	脚部外面ナデにて器表面密。内面は器表面が縦。坏の内外面と脚外面に赤色塗彩。
62－8 81	土師器 坏	床面＋４ ½残存	口(12.4) 高　－ 底　－	①密、２～３mmの長石粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③外面によい赤褐色、内面丹彩	底面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。内面ナデにて器表面密。口縁部外面～内側全面赤色塗彩されている。
62－9	土師器 坏	覆土 破片	口(13.0) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の赤色粒を含む ②酸化焔、硬質 ③断面橙色、表面赤色	内外面とも、器表面密で赤色塗彩されている。
62－10	土師器 坏	覆土 破片	口(13.0) 高　－ 底　－	①密、２～３mmの片岩粒をわずかに含む。②酸化焔、硬質 ③赤色	内外器表面密に整形後赤色塗彩されている。
63－11 120	石製品 砥　石	床面－３	長 16.0　幅 11.8 厚 5.0　重 1480		安山岩。３側面を砥石として使用している。

369号住居跡（第64～67図、図版20・21・81・113・115・123）

位置　本住居跡は第５次調査区にあり、26・27－18グリッドに位置する。

概要　本住居を含めて４軒が重複している。北西部分を平安時代の372号住居により床下部分まで掘り込まれ、南東コーナー部分では奈良時代の360号住居により覆土上面が、また南西コーナー部分を奈良時代の373号住居により床面付近まで掘り込まれている。新旧関係は369→360号住居、369→373号住居であ



第64図　369号住居跡実測図

る。なお本住居と360号住居及び373号住居は重複部分の土層が浅く、本住居以外では土器の出土も少ないため、新旧関係の決定に疑問も残る。また南東部分で３号掘立柱建物跡と重複しており、覆土の一部が掘り込まれている。竈は東と北壁面に造られているが、いずれも残りが悪い。東壁面の竈は、床面上に位置する袖や燃焼部が取り除かれていたため旧竈である。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴が４本と新旧の竈の右側にそれぞれ貯蔵穴が掘られている。

規模　東西7.10m、南北7.60mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で56cmである。新貯蔵穴は径66cm深さ65cm、旧貯蔵穴は径64cm深さ71cm、柱穴１は径68cm深さ79cm、柱穴２は径72cm深さ69cm、柱穴３は径68cm深さ46cm、柱穴４は径60cm深さ79cmである。

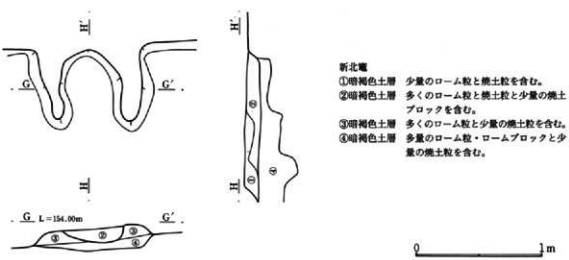
遺物　住居南東部分より甕や坏、またこも編み石が多く出土している。

（新北竈）

位置　住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

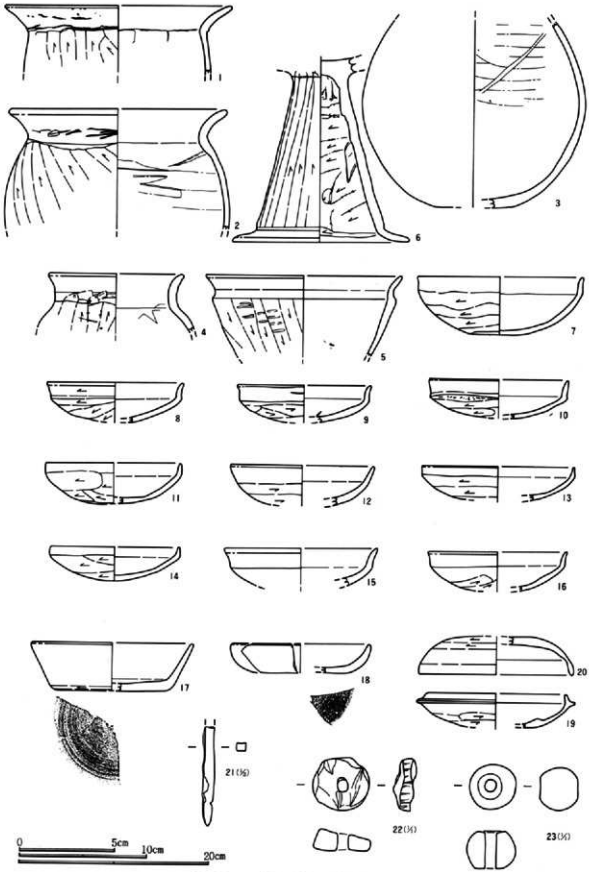
概要　袖部分は残っていたが、全体に残りが悪い。燃焼部からは比較的多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向63cm、燃焼部幅48cmである。



第65図　369号住居跡新北竈実測図

第66図　369号住居跡旧東竈実測図



第67図　369号住居跡出土遺物実測図

369号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②構成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
67－1	土師器 甕	床面＋13 1/4残存	口(23.6) 高 － 底 －	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面強いヘラ削り。口縁部との境に段を持つ。 内面ナデにて器表面密。
67－2	土師器 壺	床面＋22 1/4残存	口(22.6) 高 － 底 －	①やや粗、1～2mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面粗い。 内面ナデにて器表面密。
67－3	土師器 壺	床面－32 胴～底1/4	口 － 高 － 底 －	①密、2～3mmの赤色粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③内面浅黄橙色、外面橙色	底面～胴部全体ヘラナデにより器表面密。内面ナデ。 残存部分が少なく器形不明。
67－4	土師器 小型壺	床面＋9 口縁小片	口(14.0) 高 － 底 －	①やや粗、1～2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにて器表面密。
67－5	土師器 鉢	床面＋17 口縁1/4	口(20.3) 高 － 底 －	①やや粗、1～2mmの砂粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③暗褐色	胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。
67－6 81	土師器 高坏脚	床面＋14 脚の3/4	口 － 脚高12.9 底(13.7)	①やや粗 ②酸化焔、硬質 ③橙色	脚外面ヘラナデ。多くの砂粒が目立つ。脚内面ヘラ削り。脚下端部横ナデ。
67－7 81	土師器 坏	床面＋5 1/4残存	口(12.8) 高 4.6 底 －	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少なく器表面の粗れは少ない。器肉が薄くほぼ均一である。
67－8 81	土師器 坏	床面＋23 1/4残存	口 10.5 高 － 底 －	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。 黒斑全く認められず。
67－9	土師器 坏	床面＋9 1/4残存	口(10.4) 高 － 底 －	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。 黒斑は全く認められず。
67－10 81	土師器 坏	床面＋5 1/4残存	口(11.0) 高(3.0) 底 －	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。ヘラの単位は明瞭でない。内面ナデにて器表面密。黒斑全く認められず。
67－11	土師器 坏	床面－13 1/4残存	口(10.6) 高 － 底 －	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動少なくヘラ削りの単位不明瞭。黒斑全く認められず。
67－12	土師器 坏	床面－14 1/4残存	口(11.2) 高 － 底 －	①密、粉状を呈している ②酸化焔、硬質 ③におい橙色	底面ヘラ削りであるが、胎土が密で砂粒の移動少なくヘラ削りの単位不明瞭。
67－13	土師器 坏	床面＋9 小片	口(11.9) 高 － 底 －	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③におい橙色	底面ヘラ削り。器表面密でヘラの単位不明瞭。 黒斑全く認められず。
67－14	土師器 坏	床面＋5 1/4残存	口(10.2) 高 2.7 底 －	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部～内面ナデにより器表面密。 黒斑は全く認められない。
67－15	土師器 坏	床面＋8 小破片	口(11.8) 高 － 底 －	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、器表面が粗れているためヘラ削りの単位不明瞭。
67－16	土師器 坏	床面＋19 小片	口(10.8) 高 － 底 －	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胎土が密でヘラ削りの単位不明瞭。黒斑全く認められず。
67－17	須恵器 坏	床面＋18 口縁～底1/4	口(12.6) 高 － 底(8.2)	①密、極めて小さな白色粒を含む ②還元焔、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り後右回転ヘラ削り。 器表面全体が密である。
67－18	須恵器 皿	覆土 破片	口(10.8) 高 － 底 －	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焔、硬質 ③灰白色	底面右回転ヘラ削り。口縁部の器肉が厚い。 器表面全体が密である。
67－19	須恵器 坏	覆土 破片	口(10.9) 高 － 底 －	①密、1mm前後の片岩粒を含む ②酸化焔、硬質 ③褐灰色	底面手持ヘラ削り。
67－20	須恵器 蓋	覆土 破片	口(12.0) 高 － 底 －	①密 ②還元焔、硬質 ③灰色	天井部左回転ヘラ削り。

369号住居跡出土遺物観察表

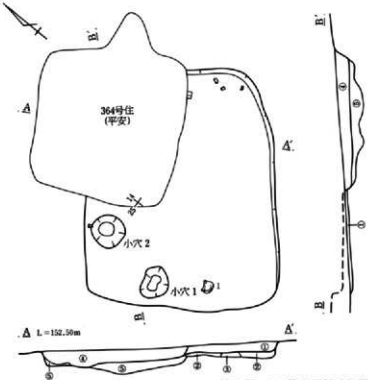
掲図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm)(g)			①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
67—21	鉄製品 鉄　鏃	床面＋10	長 (5.2) 厚 0.4	幅 0.5 重 2.6			鉄鏃の茎部分と思われる。 断面形は方形で残りは比較的良好である。
67—22 115	石製品 臼　玉	床面−20	径 1.4 厚 0.6	孔径 0.3 重 2.1			滑石片岩。横断面の形は少しゆがんでいるがほぼ円形。 側面は荒底削り、上下面はわずかに再調整。
67—23 115	土製品 丸　玉	床面−10	径 1.2 厚 1.0	孔径 0.3 重 2.9			上下面を平らに削り、中央に穿孔されている。横面は円形であり、よく磨かれて黒光りしている。

遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)				石材・備考
24	123	こも編み石	長 15.2	幅 4.6	厚 4.3	重 500	点紋緑泥片岩
25	123	こも編み石	長 17.9	幅 6.3	厚 4.0	重 790	点紋緑泥片岩
26	123	こも編み石	長 11.5	幅 6.8	厚 4.2	重 490	絹雲母石墨片岩
27	123	こも編み石	長 11.5	幅 5.8	厚 3.9	重 380	点紋絹雲母石墨片岩
28	123	こも編み石	長 14.1	幅 6.6	厚 4.9	重 555	絹雲母石墨片岩
29	123	こも編み石	長 12.8	幅 6.7	厚 2.9	重 360	緑簾緑泥片岩
30	123	こも編み石	長 14.2	幅 5.9	厚 3.0	重 355	緑簾緑泥片岩
31	123	こも編み石	長 14.2	幅 8.1	厚 3.6	重 590	点紋絹雲母石墨片岩
32	123	こも編み石	長 16.0	幅 6.4	厚 4.0	重 635	緑泥片岩
33	123	こも編み石	長 12.6	幅 4.5	厚 3.0	重 270	絹雲母石墨片岩
34	123	こも編み石	長 15.9	幅 5.3	厚 3.7	重 550	緑簾緑泥片岩
35	123	こも編み石	長 12.8	幅 5.5	厚 3.6	重 375	絹雲母石墨片岩
36	123	こも編み石	長 16.6	幅 6.6	厚 3.6	重 655	絹雲母石墨片岩
37	123	こも編み石	長 15.7	幅 6.9	厚 2.8	重 415	絹雲母石墨片岩
38	123	こも編み石	長 14.5	幅 6.8	厚 2.6	重 330	点紋絹雲母石墨片岩

375号住居跡（第68・69図、図版21・81）

位置　本住居跡は第5次調査区にあり、25—14・15グリッドに位置する。

概要　北東部分で平安時代の364号住居と重複しており、その部分は床下部分まで深く掘り込まれている。また重複していない部分の残りも悪く、西側の壁面や床面は残っていない。このように残りの悪い住居である。竈もこの時期頃から使われていると思われるが不明である。小穴が2本掘られていたが、柱穴は掘られていない。



第68図　375号住居跡実測図

規模　東西3.82m、南北3.04mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で25cmである。小穴1は径42cm深さ23cm、小穴2は径54cm深さ69cmである。

遺物　出土量は少なく、図示できたのは完形の小型甕1点と朱塗りの坏の破片2点である。

375号住居跡
①暗褐色土層　多くのローム粒と少量の炭化物を含む。
②暗褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。
③褐色土層　ローム粒を主とする。
④364号住居跡覆土
⑤364号住居跡床下覆土

0　2m

第69図　375号住居跡出土遺物実測図

375号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
69－1 81	土師器 甕	床面－10 口縁～底部 ½	口 13.4 高 14.5 底　－	①やや粗、2～4㎜の砂粒を少量含む。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、多くの輪積痕が残る。 胴部内面ナデ、一部に輪積痕が残る。 底部中央は焼成後穿孔されている。
69－2	土師器 坏	覆土 小破片	口(14.0) 高　－ 底　－	①密、1㎜以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③断面表面とも赤褐色	体部ヘラ削り。 内外全面にわたり赤色塗彩されている。
69－3	土師器 坏	覆土 口縁片	口(14.0) 高　－ 底　－	①密 ②酸化焔、硬質 ③赤色	底部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内外面に赤色塗彩されている。

411号住居跡・427号住居跡（第70～73図、図版21・81・115）

位置　本住居跡は第５次調査区にあり、27―4・5グリッドに位置する。

概要　西に向かって低くなるなだらかな傾斜面で、一部黒色土を掘り込む12軒の竪穴住居が複雑に重複している住居群であり、調査は非常に困難であった。本住居はその中で最も西側で低い場所に位置する。直接には３軒の重複である。東壁面でわずかに奈良時代の409号住居と重複しており、その部分の壁面と覆土が削り取られている。また竈の北に接してもう一基の竈が確認されている。本住居の古い段階の竈の可能性も考えられるが、別の住居の竈であり、その住居を427号住居として扱った。また本住居の竈の使用面の調査終了後、竈床下部分の調査を実施したところ、小さな土坑状の掘り込みが確認され、口縁部を一部欠くがほぼ完形の甕が出土している。この土坑は本住居に伴うものとして扱った。重複住居の新旧関係は427→411→409号住居の順である。重複関係については第261図参照

構造　床面は黄褐色ロームではなく黒褐色土層中に多量の灰褐色ロームを含む土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に掘られているが、柱穴は掘られていない。左袖付近の床面に小穴が1つ掘られている。

規模　住居規模は東西3.72m、南北4.22mである。壁高は残りの良い北壁の東部分で25cmである。貯蔵穴は径48cm深さ46cm、小穴は径27cm深さ29cmである。427号住居の竈は残りが悪いが、現状で煙道方向78cm燃焼部幅46cmである。

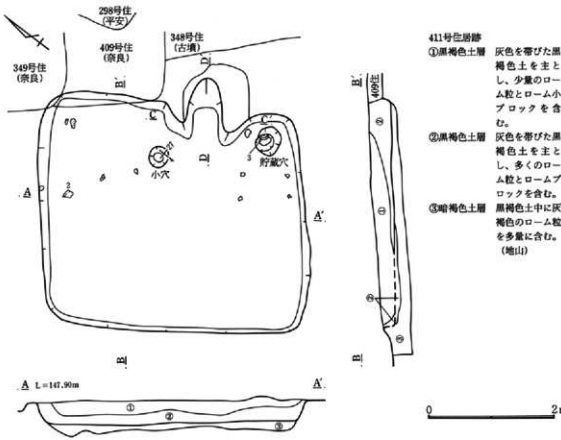
遺物　甕の破片は多いが、図示できたのは竈床下部分より出土している１点である。他に土師器の坏や紡錘車が出土している。427号住居の竈内から出土した長25.7cm幅8.9cm厚3.6cm重1090gの石が先端の１/３に火を受けて変色している。支脚石として使われていたものと思われる。

（411号住居竈）

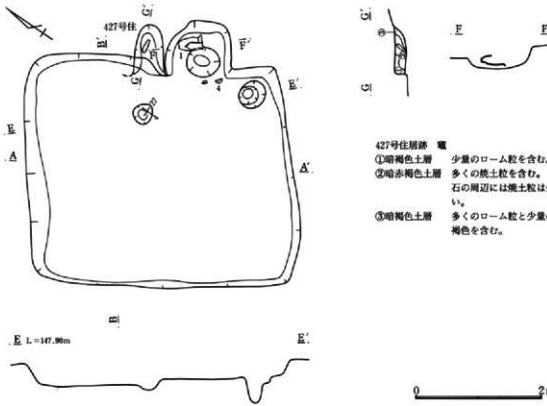
位置　住居東壁面に造られている。住居が小さいためか燃焼部の一部は壁面を掘り込んで造られている。

構造　径100cm前後のほぼ円形の土坑を掘り、そこに煙道とは直交する方向に甕をすえ黒褐色土で少し埋めた段階で竈が造られたものと考えられる。なぜこのようなことが行なわれたのかは不明である。燃焼部奥壁部分や側壁上部分から多くの焼土粒が出土している。

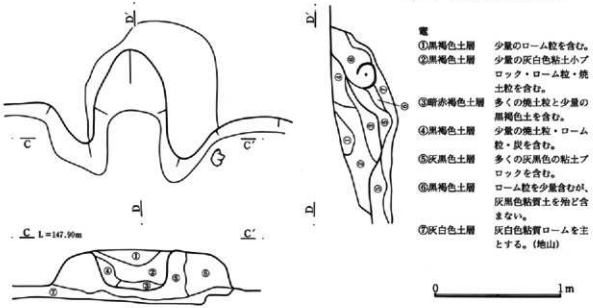
規模　煙道方向105cm、燃焼部幅53cmである。



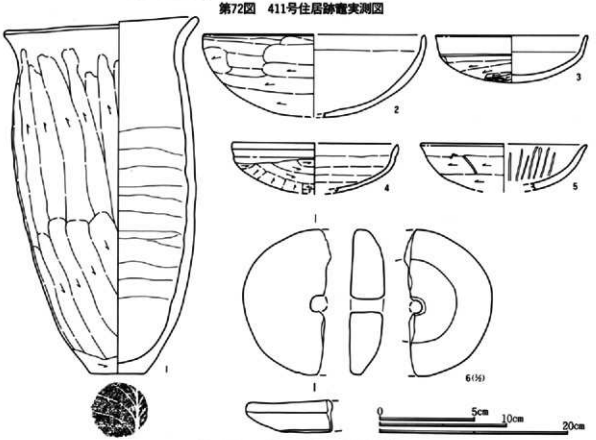
第70図　411号住居跡実測図



第71図　411号住居跡床下・427号住居跡実測図



第72図　411号住居跡竈実測図



第73図　411号住居跡出土遺物実測図

411号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土師器 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
73－1 81	土師器 甕	竈内 1/4残存 胴下半完形	口 20.2 高 37.6 底 5.6	①やや粗、1～3mmの砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③黄褐色	底面木葉痕。胴部ナデ。粘土と砂粒の移動は少ない。 口縁部横ナデ。内面ナデ。 全体に器内が厚い。
73－2	土師器 坏	床面＋5 1/4残存	口(17.6) 高　－ 底　－	①密 ②酸化焔、硬質 ③橙色	胎土が粉状を呈しておりヘラ削りの単位不明瞭。

411号住居跡出土遺物観察表

図版番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
73－3 81	土師器 坏	床面直上 ½残存	口 12.0 高 3.7 底 －	①密、1mm以下の小さな雲母粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面へラ削り、胎土が密で削りの単位は明瞭でない。 内面ナデにて器表面特に密。 黒斑もなく固く焼かれた坏である。
73－4 81	土師器 坏	床面－2 ½残存	口(13.0) 高 － 底 －	①密、1～2mmの砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面へラ削り。内面は幅1.2cm前後の刷毛状工具により同心円状に整形されている。 かなり異質な整形の坏である。
73－5 81	土師器 坏	覆土 ½残存	口(13.2) 高 － 底 －	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部下半ヘラ削り。 砂粒や粘土の移動少なく器表面密。 内面に多くの暗文あり。
73－6 115	石製品 紡錘車	覆土 ½残存	径 (7.7/4.4)　孔径 0.7 厚 1.8　重 67.1		砂岩。大きな紡錘車と思われる。 表面全面を加工している。

412号住居跡（第74～76図、図版22・115）

位置　本住居跡は第5次調査区にあり、35－6・7グリッドに位置する。

概要　本住居を含めて3軒の住居が重複しており、その3軒を縦断するように2本の耕作溝により床下部分まで掘られている。本住居が奈良時代の413号住居により北壁面の一部を掘り込まれ、また414号住居の中央部分を床下まで掘り込んで造られている。新旧関係は414→412→413号住居である。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。住居規模が小さいためか貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模　東西3.76m、南北2.42mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で27cmである。

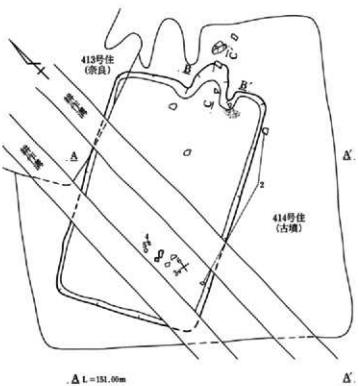
遺物　鞴と紡錘車が出土している。

（竈）

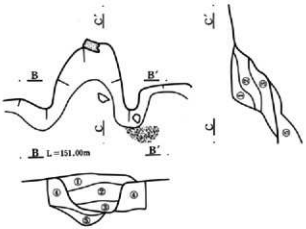
位置　住居東壁面に造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部が壁面を掘り込んで造られている。

構造　袖は暗褐色土を用いて造られており、袖石等は出土していない。燃焼部床面付近から多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向68cm、燃焼部幅43cmである。



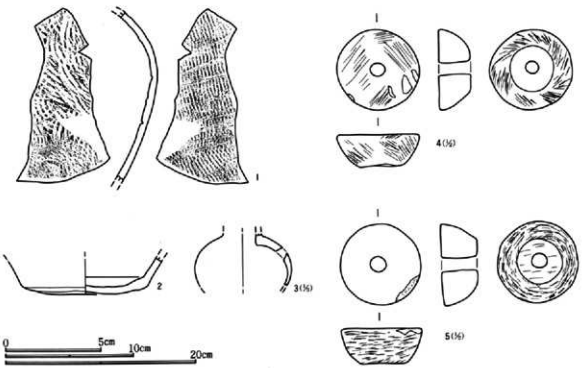
第74図　412号住居跡実測図



竈
①暗褐色土層　少量のローム粒とロームブロックを含む。
②暗褐色土層　少量のローム粒と焼土粒を含む。
③暗褐色土層　多くの焼土粒を含む。
④暗褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。
⑤黄褐色土層　地山のロームを主とする。

0　1m

第75図　412号住居跡竈実測図



第76図　412号住居跡出土遺物実測図

412号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (※)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
76－1	須恵器 横瓶	覆土 小破片	口　－ 高　－ 底　－	①密、少量の長石粒を含む ②還元焔、硬質、焼締 ③表面灰色、断面に赤い橙色	胴部外面平行叩き目、その後ほぼ等間隔に垂直方向のナデ。 内面薄い青海波文。
76－2	須恵器 甕	床面＋3 底部ﾉ3残存	口　－ 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焔、硬質 ③灰白色	底面ナデ。胴部外面平行叩き。 内面篠文の当て目となっている。 全体がゆがんでおり、雑な作りである。
76－3	須恵器 甕　？	覆土 ﾉ2残存	口　－ 高　－ 底　－	①密、多くの小さな白色細石粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	器表面密。 胴部に縄で見られるような小穴が１個認められた。 出土例が少なく器種は明らかでない。
76－4 115	石製品 紡錘車	床面直上 ほぼ完形	径　4.3／2.4　孔径　0.7 厚　1.7　重　45.0		蛇紋岩。表面全体が中砥削りにより削られており、全面に細い削り痕が残る。
76－5 115	石製品 紡錘車	床面直上 ほぼ完形	径　4.0／2.4　孔径　0.7 厚　1.9　重　44.7		凝灰岩。広面と狭面は磨かれてほとんど削痕なし。側面に細い多くの削痕が残る。

414号住居跡（第77～79図、図版22・113）

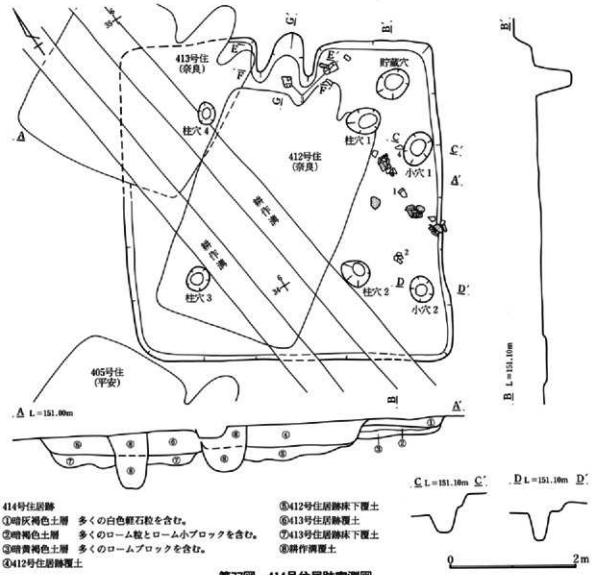
位置　本住居跡は第５次調査区にあり、35－6・7グリッドに位置する。

概要　本住居を含めて３軒の住居が重複しており、その３軒を縦断するように２本の耕作溝により床下部分まで掘られている。本住居の北西部分を奈良時代の413号住居により床下部分まで深く掘り込まれている。また住居中央部分を奈良時代の412号住居により同じく床下部分まで深く掘り込まれている。412号住居と413号住居は一部重複しており412号住居が新しいと考えられる。新旧関係は414→413→412号住居である。南西部分で奈良時代の405号住居と重複はしていないが近接している。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴が竈の右側に、柱穴が４本掘られている。また南壁面により接して２個の小穴が掘られている。

規模　東西4.98m、南北5.00mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で38cmである。貯蔵穴は径56cm深さ52cmである。柱穴１は径48cm深さ64cm、柱穴２は径46cm深さ77cm、柱穴３は径36cm深さ83cm、柱穴４は径32cm深さ67cmである。

遺物　出土量は少なく、図示した遺物のほかは破片９片で全てである。



414号住居跡
①暗灰褐色土層　多くの白色軽石粒を含む。
②暗褐色土層　多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
③暗黄褐色土層　多くのロームブロックを含む。
④412号住居跡覆土
⑤412号住居跡床下覆土
⑥413号住居跡覆土
⑦413号住居跡床下覆土
⑧耕作溝覆土

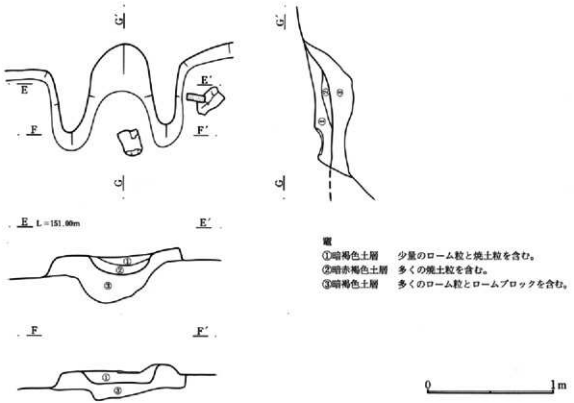
第77図　414号住居跡実測図

（竈）

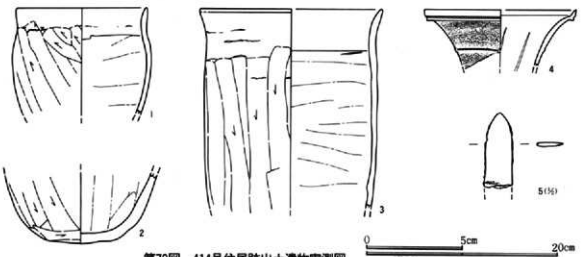
位置　住居北壁面に造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部が壁面を掘り込んで造られている。

構造　袖部は暗褐色土を用いて造られており、袖石等の出土はなかった。燃焼部床面付近から多くの焼土粒が出土した。

規模　煙道方向83cm、燃焼部幅56cmである。



第78図　414号住居跡竈実測図



第79図　414号住居跡出土遺物実測図

414号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (度)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
79－1	土師器 小型甕	覆土 口縁部⅓ 胴部⅓	口 15.8 高　－ 底　－	①やや粗、２～３㎜の砂粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	胴部外面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。
79－2	土師器 甕	床面＋３ 底部のみ	口　－ 高　－ 底　－	①粗、２～３㎜の片岩粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③褐色	底面ナデ。胴部外面弱いヘラ削り。 砂粒の移動は少ないが、多くの砂粒が目立つ。 全体に雑なつくりである。
79－3	土師器 甕	床面＋５ ⅓残存	口(19.0) 高　－ 底　－	①粗、２～３㎜の砂粒を多く、片岩粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面雑なヘラ削り、多くの砂粒が移動し器表面粗い。内面ナデにて器表面密。 胴部内面にも砂粒が目立つ。
79－4	須恵器 壺	床面－１ ⅓残存	口(16.0) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焔、硬質 ③灰色	頸部中央にわずかな凸帯を持ち、上下面に目の細い櫛描波状文を持つ。 器肉が薄い。
79－5 113	鉄製品 鉄　鏃	覆土	長　4.0 厚　0.2	幅　1.5 重　2.7	薄くて小さな破片のため明確でないが鉄鏃の茎部と思われる。

440号住居跡（第80～84図、図版22・23・81・82・115・116・120・124）

位置　本住居跡は第７次調査区にあり、56・57－19・20グリッドに位置する。

概要　本住居を含めて３軒の住居が重複している。本住居は南西部分で古墳時代の441号住居を床下部分まで掘り込み、北側で奈良時代の439号住居により新北竈の上部分と住居の床下部分まで掘り込まれている。新旧関係は441→440→439号住居である。竈と貯蔵穴が２箇所で確認されている。東竈は床面上に位置する部分は削り取られ、床面として使用されていたため旧竈と思われる。北竈は439号住居により削られて残りは非常に悪い。北竈に伴うと思われる北東コーナー部分の貯蔵穴は床面調査段階で確認されたが、東竈に伴うと思われる南東コーナー部分の貯蔵穴は床下調査段階で確認されたため旧貯蔵穴と思われる。これらのことから北竈が新しいものと思われ新北竈とし、東竈を旧東竈と呼称した。また貯蔵穴にも新旧を付けて呼称した。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。新旧竈の右側に貯蔵穴がそれぞれ掘られており、床面に柱穴が４本掘られている。南壁面中央部に接した床面部分に小穴が１本掘られており、それをU字状に囲むように床面より２～３cm程高い部分が確認された。出入り口にも関する遺構の可能性を指摘しておきたい。

規模　東西6.82m、南北6.22mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で35cmである。新貯蔵穴は径74cm深さ58cm、旧貯蔵穴は径72cm深さ75cmである。柱穴１は径72cm深さ73cm、柱穴２は径50cm深さ39cm、柱穴３は径60cm深さ96cm、柱穴４は径68cm深さ85cm、小穴は径60cm深さ38cmである。

遺物　土師器の甕や坏が多く、また紡錘車等が出土している。

（新北竈）

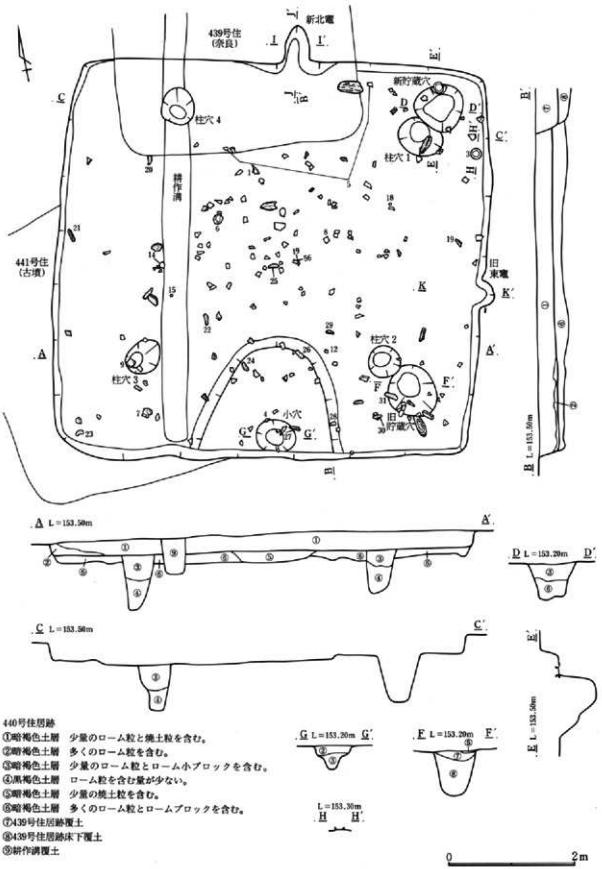
位置　北壁面を掘り込んで造られている。

概要　439号住居により竈上面の大部分が削り取られて、残りが極めて悪い。燃焼下部から少量の焼土粒が出土している。

（旧東竈）

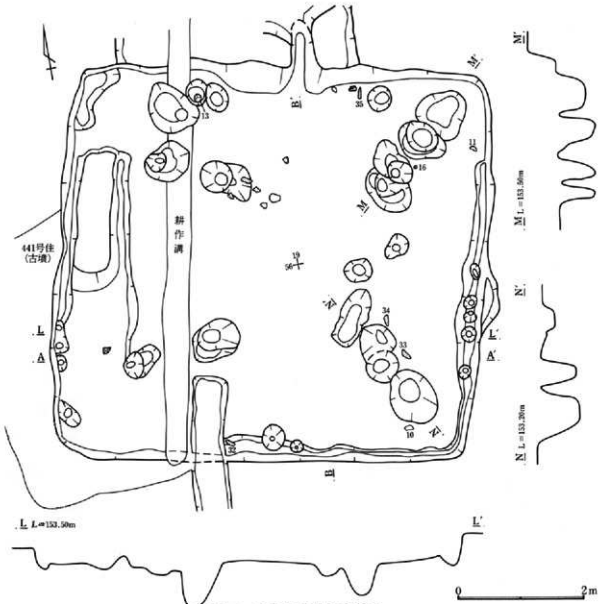
位置　東壁面を掘り込んで造られている。

概要　床面上に位置する袖と燃焼部の多くは取り除かれ、堅く踏み固められて床面として使用されている。壁面を掘り込んで造られた煙道部には多くの焼土粒が残っていたが、床面上や床下に位置する燃焼下部からは焼土粒の出土は少ない。

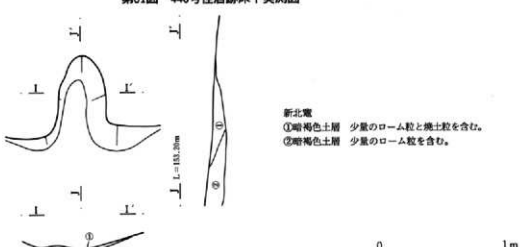


440号住居跡
①暗褐色土層　少量のローム粒と焼土粒を含む。
②暗褐色土層　多くのローム粒を含む。
③暗褐色土層　少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
④黒褐色土層　ローム粒を含む量が少ない。
⑤暗褐色土層　少量の焼土粒を含む。
⑥暗褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。
⑦439号住居跡覆土
⑧439号住居跡床下覆土
⑨耕作溝覆土

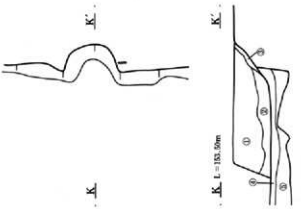
第80図　440号住居跡実測図



第81図　440号住居跡床下実測図



第82図　440号住居跡新北竈実測図

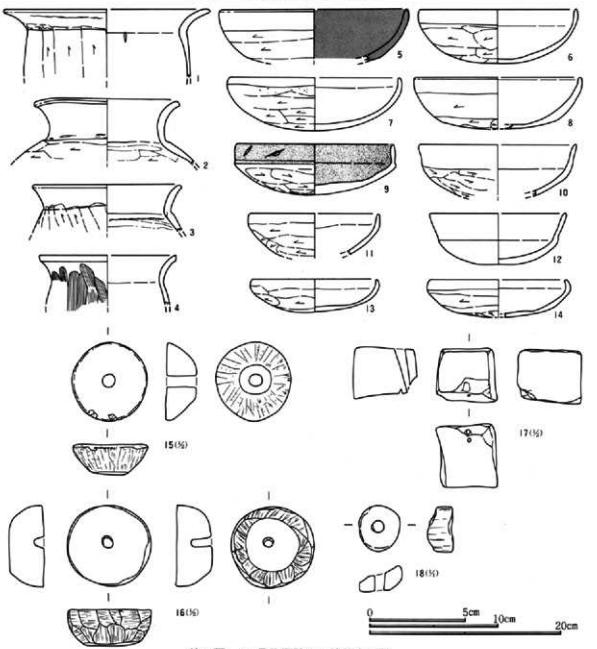


旧東竈

①暗褐色土層	少量のローム粒・白色軽石粒・焼土粒を含む。
②暗褐色土層	多くのローム粒と焼土粒を含む。
③暗赤褐色土層	多くの焼土粒を含む。
④暗褐色土層	多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。 上面は床として踏み固められている。
⑤暗褐色土層	多くのローム粒とローム小ブロックを含む

0　1m

第83図　440号住居跡旧東竈実測図



第84図　440号住居跡出土遺物実測図

440号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
84－1	土師器 甕	床面＋18 口縁部⅓ 胴部⅓	口(21.8) 高　－ 底　－	①粗、２～４mmの砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 多くの砂粒が移動し器表面粗い。 口縁部僅ナデ、輪積痕が残る。
84－2 81	土師器 甕	床面直上 口縁部完形	口 15.2 高　－ 底　－	①密、１～２mmの赤色粒と片岩粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 砂粒の移動少なく器表面比較的密。 内面ナデにて器表面密。
84－3	土師器 小型甕	床面直上 口縁部～ 肩部完形	口 15.8 高　－ 底　－	①やや粗、１～３mmの砂粒を大量に含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 多くの砂粒が移動し器表面が粗れている。 頸部内側に接合痕が残る。
84－4	土師器 小型甕	床面＋５ 口縁部⅓	口(14.4) 高　－ 底　－	①密、１～２mmの赤色粒をやや多目に含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面刷毛目。 口縁部は、やや平らに仕上げている。 刷毛目整形の甕の出土は類例が少ない。
84－5	土師器 坏	床面直上 口縁部⅓ 底部⅓	口(15.6) 高　－ 底　－	①密、１～２mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。内面ナデ。 内面全体が吸炭により黒色、吸炭は断面まで及ぶ。
84－6 81	土師器 坏	床面＋10 ⅓残存	口 12.4 高 4.2 底　－	①密、１mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	底部ヘラ削り。 砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。
84－7	土師器 坏	床面＋６ 口縁部⅓ 底部⅓	口(13.6) 高 4.2 底　－	①密、１mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。
84－8	土師器 坏	床面＋５ 口縁部⅓ 底部⅓	口(13.2) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底部ヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。 内面に暗文は摂かれていない。
84－9 82	土師器 坏	床面＋22 ⅓残存	口 12.5 高 4.1 底　－	①密、１mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、ヘラの単位は明瞭である。 口縁部外面～内側底面に黒斑。
84－10	土師器 坏	床面－10 ⅓残存	口(12.4) 高　－ 底　－	①密、１mm前後の砂粒と雲母粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。 内面に多くの雲母粒が光っている。
84－11	土師器 坏	床面－10 ⅓残存	口(10.5) 高　－ 底　－	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、器表面密で削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
84－12	土師器 坏	床面＋24 ⅓残存	口(10.6) 高　－ 底　－	①密、少量の片岩粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、削りの単位不明。 器表面全体が粗れている。
84－13 82	土師器 坏	床面－40 ⅓残存	口 10.0 高 2.6 底　－	①密、粉状を呈する ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りであるが、胎土が粉状のためヘラの単位不明瞭。
84－14 82	土師器 坏	床面＋18 ⅓残存	口(10.7) 高 3.0 底　－	①密、やや粉状を呈する ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りであるが、胎土がやや粉状を呈するためヘラの単位不明瞭。
84－15 116	石製品 紡錘車	床面直上 ほぼ完形	径 3.9／1.8 厚 1.6	孔径　0.65　滑石片岩 重　33.6	広面と狭面は磨かれて光沢を持つ。側面は鉄製工具により細長く削られその後磨かれて光沢を持つ。
84－16 116	石製品 紡錘車	床面＋10 ほぼ完形	径 4.4／2.8 厚 2.0	孔径　0.4　滑石片岩 重　63.1	未製品。広面と狭面は自然面。側面下半は荒砥削り。 上半はその後研磨。穿孔は途中で中止されている。
84－17 120	石製品 飾石	覆土	長 3.3 孔径0.5～0.2	幅　3.2/2.9　砥沢石 重　50.0	砥石の破片を再加工。穿孔は一方向からである。完形品。狭い穿孔面の下に目印と思われる凹部あり。
84－18 115	石製品 臼玉	床面＋３	径 1.1 厚 0.7	孔径　0.3 重　1.5	滑石片岩。横断面形はほぼ円形を呈し、側面は荒砥削りにより丸く整形。上下面は切り離した後調整。

遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)	石材・備考
19	124	こも編み石	長 13.5　幅 5.9　厚 4.0　重 405	朝雲母石墨片岩
20	124	こも編み石	長 13.5　幅 4.9　厚 2.6　重 320	点紋緑泥片岩
21	124	こも編み石	長 16.5　幅 5.5　厚 4.0　重 550	朝雲母石墨片岩
22	124	こも編み石	長 15.6　幅 5.8　厚 2.3　重 330	緑簾緑泥片岩
23	124	こも編み石	長 12.9　幅 6.2　厚 3.1　重 335	朝雲母石墨片岩
24	124	こも編み石	長 13.4　幅 6.9　厚 2.6　重 370	朝雲母石墨片岩
25	124	こも編み石	長 15.7　幅 6.3　厚 3.4　重 460	緑簾緑泥片岩
26	124	こも編み石	長 14.7　幅 5.1　厚 2.9　重 360	点紋朝雲母石墨片岩

440号住居跡出土遺物観察表

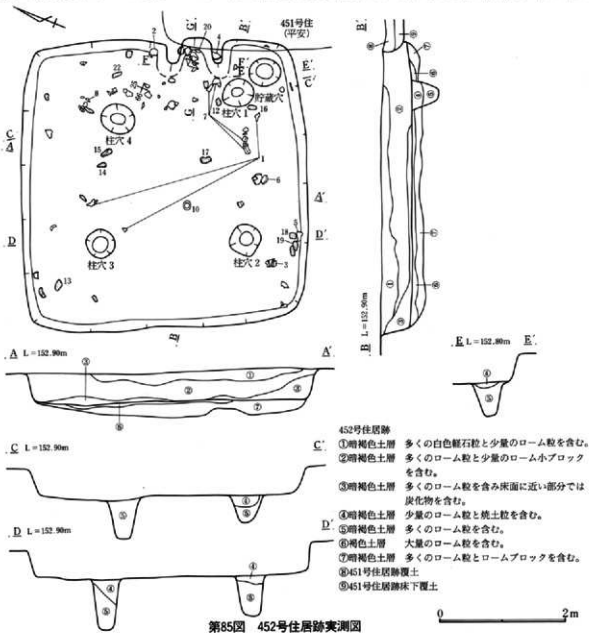
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
27	124	こも編み石	長 15.0	幅 4.4	厚 4.6	重 475	点紋網雲母石墨片岩
28	124	こも編み石	長 13.8	幅 5.3	厚 3.1	重 325	網雲母石墨片岩
29	124	こも編み石	長 15.7	幅 6.3	厚 3.4	重 315	網雲母石墨片岩
30	124	こも編み石	長 20.4	幅 6.1	厚 2.4	重 455	網雲母石墨片岩
31	124	こも編み石	長 14.6	幅 4.9	厚 2.6	重 290	点紋緑泥片岩
32	124	こも編み石	長 14.9	幅 5.1	厚 4.5	重 515	網雲母石墨片岩
33	124	こも編み石	長 17.2	幅 7.2	厚 2.9	重 495	緑黒緑泥片岩
34	124	こも編み石	長 15.0	幅 6.5	厚 4.0	重 645	緑黒緑泥片岩
35	124	こも編み石	長 18.5	幅 5.3	厚 3.6	重 605	石墨緑泥片岩

452号住居跡（第85～88図、図版23・82・113・120・124）

位置　本住居跡は第7次調査区にあり、66・67－25グリッドに位置する。

概要　東側で平安時代の451号住居とわずかに重複しており、本住居は451号住居により壁面と覆土を掘り込まれている。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。竈の左側に貯蔵穴が、また柱



第85図　452号住居跡実測図

穴が４本掘られている。

規模　東西4.60m、南北4.52mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で53cmである。貯蔵穴は径50cm深さ50cmである。柱穴１は径50cm深さ43cm、柱穴２は径52cm深さ64cm、柱穴３は径44cm深さ83cm、柱穴４は径50cm深さ67cmである。

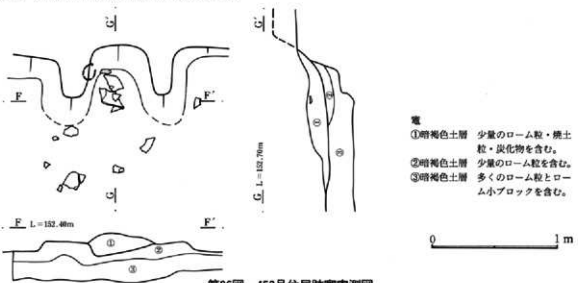
遺物　須恵器の鉢や高坏等が出土している。

（竈）

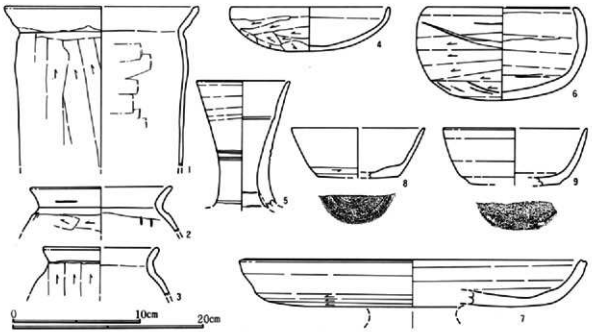
位置　東壁面を掘り込んで造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造　煙道部は451号住居により削られている。また袖と燃焼部の多くは削られて残っていない。竈内より焼土粒の出土も少ない。

規模　煙道方向不明、燃焼部幅44cmである。



第86図　452号住居跡竈実測図



第87図　452号住居跡出土遺物実測図（１）

第88図　452号住居跡出土遺物実測図(2)

452号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
87－1	土師器 甕	床面＋11 口縁～胴部 1/4残存	口(20.0) 高　－ 底　－	①粗、2～3mmの砂粒と片岩粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③赤褐色	胴部外面ヘラ削り、多くの砂粒が移動し器表面粗い。 大量の砂粒が目立つ。 内面ナデにて器表面密。
87－2	土師器 小型甕	床面直上 口縁1/2残存	口(14.7) 高　－ 底　－	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③赤褐色	胴部横方向ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。内面にヘラの圧痕あり。
87－3	土師器 甕	床面＋6 口縁～胴部 1/4残存	口(11.8) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の多くの赤色粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③表面黒褐色、断面赤褐色	胴部ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。 内外面とも吸炭により黒褐色を呈する。
87－4 82	土師器 坏	床面＋20 1/4残存	口 12.4 高 3.5 底　－	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒の移動は少量で器表面の粗れは少ない。
87－5 82	須恵器 長頸壺	床面直上 頸部完形	口 9.6 高　－ 底　－	①密、1～2mmの長石粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	頸部に2本の沈線が一周している。 頸部下端内側に内置あり。
87－6 82	須恵器 鉢	床面＋10 口縁部1/2 底部1/2	口 15.0 高 9.7 底　－	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	底面手持ヘラ削り。底部周辺～体部外面右回転ヘラ削り。内面ナデ。 3～5mmの片岩粒を少量含む。
87－7 82	須恵器 高坏	床面直上 坏部1/2	口 26.0 高　－ 底　－	①密、3～5mmの長石粒と片岩粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	底部中央手持ヘラ削り、周辺部右回転ヘラ削り。 口唇部中央が凹状となっている。 底部外面中央の整形痕から短脚付と思われる。
87－8 82	須恵器 坏	床面＋13 1/4残存	口(10.2) 高　－ 底　－	①密、小さな白色粒を多く含む ②還元焔、硬質、焼締 ③灰色	底面左回転ヘラ削り。 体部下端左回転ヘラ削り。 底部周辺の器肉厚い。
87－9	須恵器 坏	覆土 1/4残存	口(11.2) 高　－ 底　－	①密、片岩粒を含む ②還元焔、硬質 ③内面灰色、外面暗灰色	底面手持ヘラ削り。
88－10 82	須恵器 壺	床面＋7 完形	口 10.4 高　－ 底　－	①密、1mm以下の長石粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	天井部は口縁端部以外ほぼ全面ヘラ削り、カエリは低く強く内傾している。 少し歪んでいる。
88－11 113	鉄製品 鍵	覆土 完形	長 7.0　幅 2.3 厚 0.3　重 13.6		小さな鍵であるが、完形品と思われる。
88－12 120	石製品 砥石	床面＋4	長 18.0　幅 8.2 厚 3.0　重 680		砂岩。1側面のみ砥石として使用される。

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)					石材・備考
13	124	こも編み石	長 14.0	幅 6.4	厚 3.9	重 485		絹雲母石墨片岩
14	124	こも編み石	長 14.8	幅 6.7	厚 2.1	重 320		絹雲母石墨片岩、火を受けて変色している。
15	124	こも編み石	長 13.9	幅 7.3	厚 3.5	重 490		緑泥片岩
16	124	こも編み石	長 16.0	幅 6.7	厚 3.5	重 470		緑簾緑泥片岩
17	124	こも編み石	長 15.4	幅 8.2	厚 2.7	重 430		点紋絹雲母石墨片岩、両側面一箇所凹状。
18	124	こも編み石	長 14.2	幅 6.3	厚 4.7	重 665		絹雲母石墨片岩
19	124	こも編み石	長 18.1	幅 6.1	厚 4.4	重 730		点紋緑泥片岩
20	124	こも編み石	長 16.5	幅 6.7	厚 3.0	重 470		絹雲母石墨片岩
21	124	こも編み石	長 13.1	幅 5.2	厚 2.3	重 210		絹雲母石墨片岩
22	124	こも編み石	長 14.8	幅 5.9	厚 3.9	重 520		絹雲母石墨片岩

463号住居跡（第89～91図、図版24・82・115）

位置　本住居跡は第７次調査区にあり、67・68―25グリッドに位置する。

概要　方形周溝状遺構と重複しており、本住居が方形周溝状遺構を掘り込んでいる。重複関係については第94図を参照。

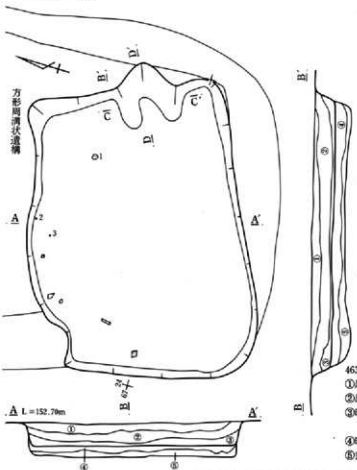
構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模　東西4.7m、南北3.09mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で39cmである。

遺物　破片は多いが、図示できる土器は須恵器の１点である。勾玉が２点出土している。

（竈）

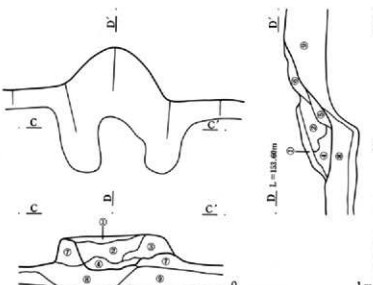
位置　東壁面を掘り込んで造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。



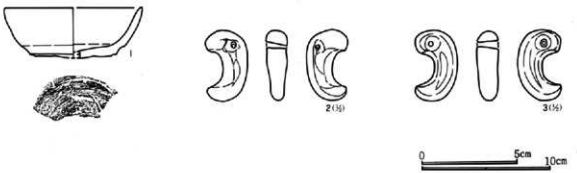
第89図　463号住居跡実測図

構造　残りが悪く特に右袖部分は残っていない。袖部分は少量のローム粒を含む黒褐色土で造られている。竈内の奥壁に近い覆土中より多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向96cm、燃焼部幅46cmである。



第90図　463号住居跡竈実測図



第91図　463号住居跡出土遺物実測図

463号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
91－1	須恵器 坏	床面＋35 口～底部¼	口(10.8) 高　－ 底　－	①粗、２～４㎜の片岩粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。
91－2 115	石製品 勾玉	床面直上 完形	長　3.7 厚　1.1	孔径　0.1～0.3 重　10.0	石材（玉髄）。表面全体が磨かれて光沢を持つ。 頭部の穿孔は片側からである。
91－3 115	石製品 勾玉	床面＋20 完形	長　3.8 厚　1.2	孔径　0.2～0.4 重　11.1	石材（玉髄）。穿孔は片側から行なわれている。 玉髄の中では材質は良好でない。部分的に亀裂。

468号住居跡（第92～95図、図版24・82・124）

位置　本住居跡は第７次調査区にあり、66・67－27・28グリッドに位置する。

概要　本住居を含め10軒の住居が重複している。本住居は直接には６軒の重複である。本住居は古墳時代の511号住居のほぼ全面と469号住居の南東部分、466号住居南西壁面部分の覆土上面を掘り込んで造られている。また北東コーナー部分では奈良時代の480号住居により覆土を、また南西部分では平安時代の465号住居により床面部分まで掘り込まれている。６軒の新旧関係は511→469→466→468→480→465号住居である。貯蔵穴を囲むように高さ２～３㎝のロームを中心とした帯状の僅かな高まりが、貯蔵穴の西側にＬ字状に造られている。重複関係については第94図を参照

構造　床面の多くは511号住居や469号住居の覆土を削り込んで造られており、通常は検出が困難である。しかし本住居では比較的良好な状態で確認できた。貯蔵穴が竈の右側に掘られていたが、柱穴は確認できなかったが、おそらく掘られていたものと思われる。

規模　東西5.70m、南北5.38mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で34㎝である。貯蔵穴は径56㎝深さ61㎝である。

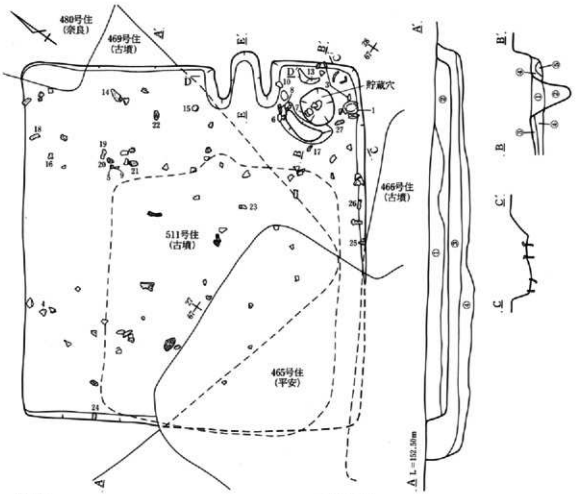
遺物　甕の破片が大量に、また貯蔵穴付近に土師器の甕・高坏・坏が多く出土している。須恵器の高坏が注目される。

（竈）

位置　東壁面の南寄りに造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造　残りは比較的良好である。袖部分は少量のローム粒を含む暗褐色土で造られている。竈内や煙道部周辺から多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向86㎝、燃焼部幅43㎝である。

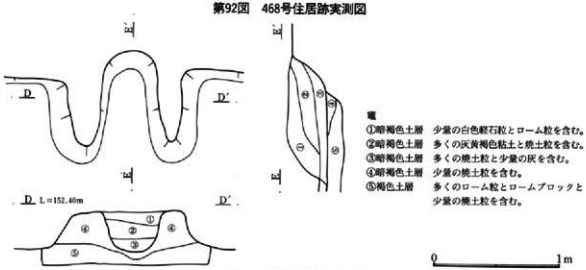


貯蔵穴
①暗褐色土層　ローム粒・粘質土・炭化物を含む。
②暗褐色土層　多くのローム粒を含む。
③褐色土層　多くのローム粒を含む。固く踏み固められている。
④褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。
⑤黄褐色土層　地山のロームを主とする。

468号住居跡
①暗褐色土層　多くの白色軽石粒と少量のローム粒を含む。
②暗褐色土層　少量のローム粒と炭を含む。
③469号住居跡覆土
④469号住居跡床下覆土

0　2m

第92図　468号住居跡実測図



竈
①暗褐色土層　少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
②暗褐色土層　多くの灰黄褐色粘土と焼土粒を含む。
③暗褐色土層　多くの焼土粒と少量の灰を含む。
④暗褐色土層　少量の焼土粒を含む。
⑤褐色土層　多くのローム粒とロームブロックと少量の焼土粒を含む。

0　1m

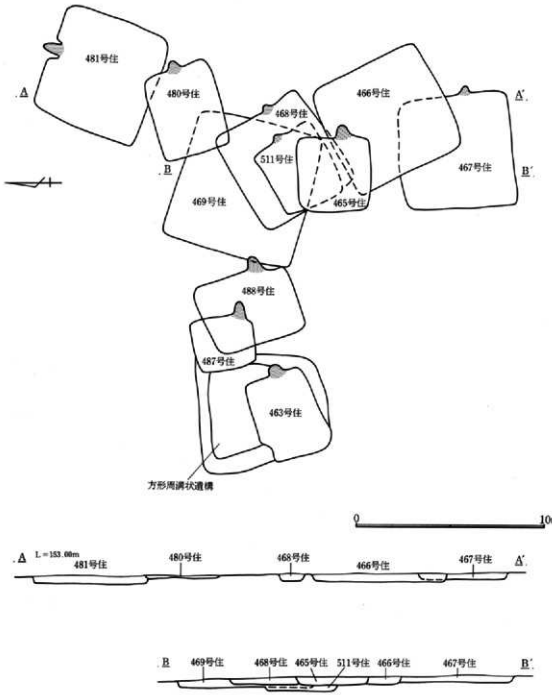
第93図　468号住居跡竈実測図

各住居跡の所属年代を整理すれば次のようになる。

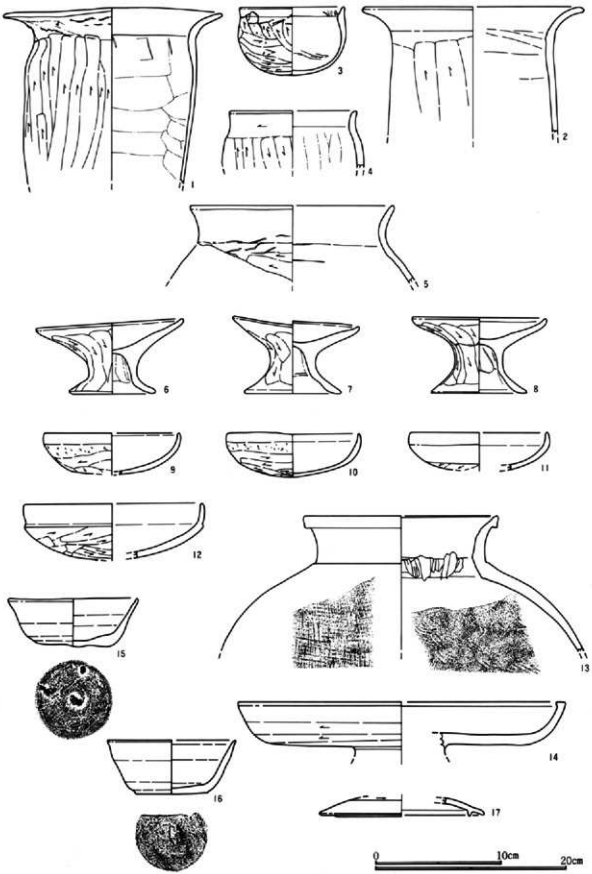
◎古墳時代……463・468号住居跡（今回報告）466・467・469・481・511号住居跡（矢田遺跡Ⅳ報告済）

◎奈良時代……487・488号住居跡（今回報告）

◎平安時代……465号住居跡（矢田遺跡Ⅲ報告済）480号住居跡（今回報告）



第94図　468号住居跡周辺遺構重複関係図



第95図　468号住居跡出土遺物実測図

468号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
95－1 82	土師器 甕	床面＋20 ½残存	口 23.0 高　－ 底　－	①やや粗、2～3mmの砂粒と片岩粒を含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部強いヘラ削り、削りの単位明瞭。 内面ナデにて器表面密。 全体に少し歪んでいる。
95－2	土師器 甕	床面＋6 ½残存	口(22.5) 高　－ 底　－	①粗、2～4mmの砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り、多くの砂粒が移動し器表面が粗い。
95－3 82	土師器 小型甕	床面＋7 ½残存	口 10.7 高 7.2 底　－	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③断面橙色、表面暗赤褐色	胴部外面ヘラ削り、器表面の粗れは少なく削りの単位は明瞭である。 多くの吸炭が認められる。
95－4	土師器 小型甕	床面＋21 ½残存	口(13.2) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の白色粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③黒色	胴部ヘラ削り、その後口縁部横ナデ。 胴部内面ナデ。 内外断面とも吸炭により黒色を呈している。
95－5	土師器 壺	床面＋5 破片	口(21.2) 高　－ 底　－	①密、1～3mmの片岩粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい黄橙色	胴部外面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れ少ない。
95－6 82	土師器 高　坪	床面＋1 完形	口 11.6 高 5.9 底 6.8	①密、1～2mmの砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	脚と坪外面ヘラ削り、脚内面ナデ、坪内面ナデにて器表面密。 全体に少し歪んでいる。
95－7 82	土師器 高　坪	床面－2 完形	口 10.0 高 6.0 底 7.6	①密、1～2mmの砂粒を多く含む、片岩粒少量含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	脚と坪外面ヘラ削り、脚内面ナデ、坪内面ナデにて器表面密。 全体に少し歪んでいる。
95－8 82	土師器 高　坪	床面＋4 完形	口 10.4 高 6.0 底 7.5	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く、片岩粒を少量含む。②酸化焔、硬質　③明赤褐色	脚と坪外面ヘラ削り、脚外面下部ヘラ削り、上部ナデ、坪内面ナデにて器表面密。 坪部が浅く、皿状を呈する高坪である。
95－9 82	土師器 坪	床面＋5 ½残存	口(10.6) 高・底一	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質③にぶい橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
95－10 82	土師器 坪	床面＋9 ½残存	口 10.3 高 3.5 底　－	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色、底面黒色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 底面の多くは吸炭により黒色を呈している。
95－11	土師器 坪	覆土 ½残存	口(10.7) 高・底一	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質　③にぶい橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。
95－12	土師器 坪	覆土 ½残存	口(14.0) 高・底一	①密、2～3mmの赤色粒を少量含む。②酸化焔、硬質。③橙色	底面ヘラナデ、ナデの幅が狭く砂粒の移動が少ない。 内面ナデにて器表面密。
95－13	須恵器 甕	床面直上 口縁～ 胴上部½	口(20.1) 高　－ 底　－	①密、小さな白色粒を含む ②還元焔、硬質、焼締 ③外面灰色、内面褐色	胴部外面格子状叩き。 内面青海波文。 ていねいなつくりである。
95－14	須恵器 高　坪	床面＋6 ½残存 脚部欠損	口(25.4) 高　－ 底　－	①密、1～3mmの白色粒を多く含む ②還元焔、硬質 ③灰褐色	底面回転ヘラ削り。 口縁端部、口唇部は平らで幅広くなっている。
95－15 82	須恵器 坪	床面＋4 口縁一部欠 他完形	口 10.0 高 3.7 底 6.0	①密、1mm前後の長石粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り。 中央部に凸状部残る。
95－16 82	須恵器 坪	床面＋14 ½残存	口(10.0) 高 4.2 底 5.6	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面手持ヘラ削り、ヘラ切り後の再調整と思われる。
95－17	須恵器 蓋	床面＋4 口縁部½	口(12.8) 高　－ 底　－	①やや粗、1～3mmの片岩粒を少量含む。②還元焔、硬質 ③灰色	天井ヘラ削り。 摘みは細長く、口縁端部より下方へ延びている。

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
18	124	こも編み石	長 14.8	幅 5.8	厚 3.1	重 380	絹雲母石墨片岩
19	124	こも編み石	長 14.7	幅 6.2	厚 3.7	重 510	緑泥片岩
20	124	こも編み石	長 12.9	幅 5.8	厚 3.5	重 420	石墨緑泥片岩
21	124	こも編み石	長 12.2	幅 8.0	厚 2.4	重 320	雲母石墨片岩
22	124	こも編み石	長 14.4	幅 7.6	厚 2.6	重 470	点紋石墨緑泥片岩
23	124	こも編み石	長 13.5	幅 6.9	厚 5.7	重 685	絹雲母石墨片岩
24	124	こも編み石	長 14.4	幅 6.6	厚 3.0	重 425	石墨緑泥片岩
25	124	こも編み石	長 13.5	幅 6.6	厚 3.3	重 510	点紋緑泥片岩
26	124	こも編み石	長 15.0	幅 4.4	厚 3.9	重 420	点紋緑泥片岩
27	124	こも編み石	長 15.7	幅 5.4	厚 2.0	重 265	緑泥片岩

470号住居跡（第96・97図、図版24・25・82）

位置　本住居跡は第７次調査区にあり、59—8グリッドに位置する。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模　東西2.45m、南北2.90mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で30cmである。

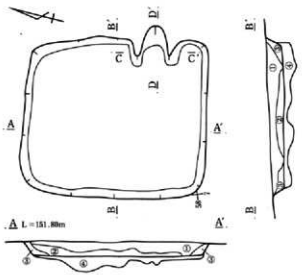
遺物　出土量は少なく、図示できたのは土師器の坏１点である。

（竈）

位置　東壁面の南寄りに造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造　住居が小さいためか竈も小さい。袖部分は少量のローム粒とローム小ブロックを含む暗褐色土で造られている。竈内から焼土粒の出土は少ない。

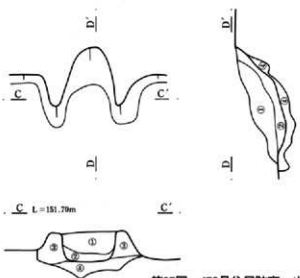
規模　煙道方向63cm、燃焼部幅38cmである。



470号住居跡
①暗褐色土層　少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
②褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。
③暗黄褐色土層　多くのローム粒を含む。
④暗黄褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。

0　2m

第96図　470号住居跡実測図



竈
①暗褐色土層　少量のローム粒と焼土粒を含む。
②暗褐色土層　少量のローム粒とやや多くの焼土粒を含む。
③暗褐色土層　やや多くのローム粒とローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
④黒褐色土層　少量のロームブロック・炭・焼土粒を含む。

0　1m

0　10cm

第97図　470号住居跡竈・出土遺物実測図

470号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (実)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
97—1 82	土師器 坏	覆土 口縁部片 底部片	口 10.4 高　— 底　—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化鉄、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。

472号住居跡（第98～100図、図版25・82・120）

位置　本住居跡は第7次調査区にあり、60—7グリッドに位置する。

概要　北側部分は調査区域外で、住居の約1/2の調査である。西側で奈良時代の473号住居と重複している。重複部分が狭い範囲であることや、その部分の一部に攪乱土坑が掘られていることにより、新旧関係は明確でなかったが、調査の結果473号住居により重複部分を床下部分まで掘り込まれている。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。調査範囲内において貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模　東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南東コーナー部分で22cmである。

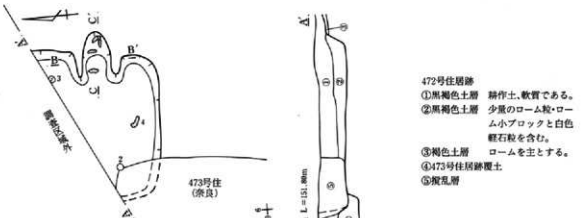
遺物　土器の出土は少なく、破片20片と図示した坏3点である。

（竈）

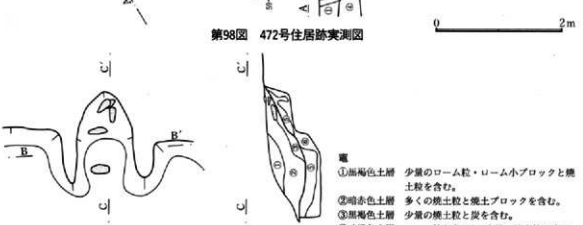
位置　東壁面を掘り込んで造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造　比較的残りは良好である。竈内より5個のこも編石が出土しているが、袖石等は使用されていない。袖部分は少量のローム粒を含む暗褐色土で造られている。竈内より多くの焼土粒が出土している。

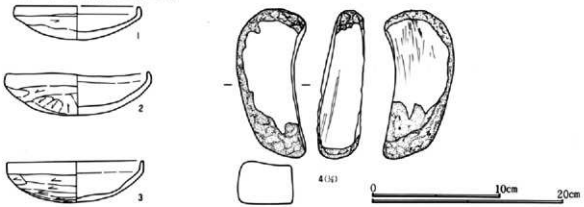
規模　煙道方向82cm、燃焼部幅48cmである。



第98図　472号住居跡実測図



第99図　472号住居跡実測図



第100図　472号住居跡出土遺物実測図

472号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (※)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
100－1	土師器 坏	覆土 ヶ残存	口(10.0) 高　2.7 底　－	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。 内側底面に黒漆に似た黒色塗料が付着。
100－2 82	土師器 坏	床面直上 完形	口 10.6 高 3.2 底　－	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位明瞭。 小さな砂粒が移動し、器表面やや粗れている。
100－3 82	土師器 坏	床面直上 完形	口 11.1 高 3.1 底　－	①やや粗、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し、器表面やや粗い。 内側器表面密。
100－4 120	石製品 砥石	床面直上 完形	長　15.7 厚　4.0	幅　6.0 重　695	流紋岩。3側面を砥石として使用している。 砥石面に細長い工具痕が多く残る。

474号住居跡（第101図、図版25・82）

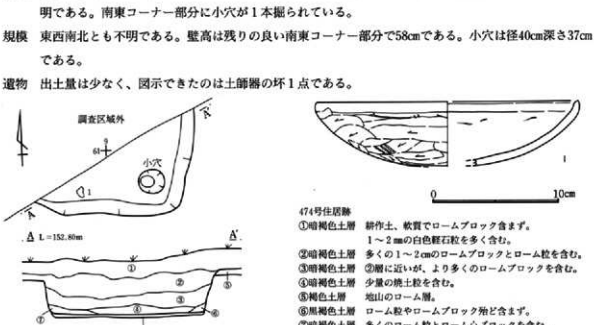
位置　本住居跡は第7次調査区にあり、61―9・10グリッドに位置する。

概要　北側部分は調査区域外であり、住居の一部しか調査できなかった。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。竈や貯蔵穴及び柱穴は全く不明である。南東コーナー部分に小穴が1本掘られている。

規模　東西南北とも不明である。壁高は残りの良い南東コーナー部分で58cmである。小穴は径40cm深さ37cmである。

遺物　出土量は少なく、図示できたのは土師器の坏1点である。



474号住居跡
①暗褐色土層　耕作土、軟質でロームブロック含まず。
　1～2mmの白色軽石粒を多く含む。
②暗褐色土層　多くの1～2cmのロームブロックとローム粒を含む。
③暗褐色土層　②層に近いが、より多くのロームブロックを含む。
④暗褐色土層　少量の焼土粒を含む。
⑤褐色土層　地山のローム層。
⑥黒褐色土層　ローム粒やロームブロック殆ど含まず。
⑦暗褐色土層　多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
⑧黄褐色土層　地山のロームを主とする。

第101図　474号住居跡・出土遺物実測図

474号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
101－1 82	土師器 坏	床面＋24 ½残存	口(21.0) 高　－ 底　－	①密、1㎜内外の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面比較的密。 内面ナデにて器表面密。

484号住居跡（第102～105図、図版25・26・82・83・115）

位置　本住居跡は第7次調査区にあり、64・65―22・23グリッドに位置する。

概要　本住居の覆土上面を平安時代の483号住居により削られている。また南壁面に接して平安時代の482号住居が造られている。覆土上面は削られていたが、掘り込みが深いため住居の残りは良好である。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。床下土坑が1本掘られていたが、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模　東西3.36m、南北3.50mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で48cmである。床下土坑は径110cm深さ27cmである。

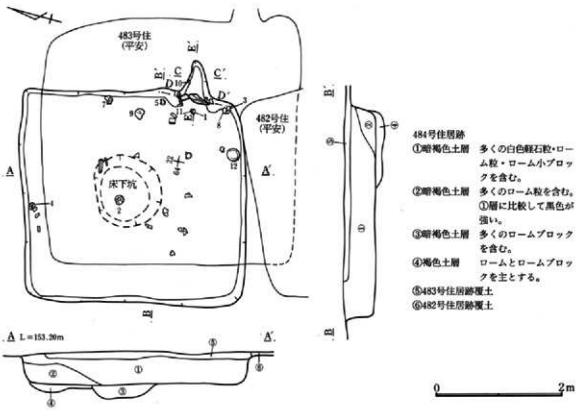
遺物　竈手前より土師器の坏が多く出土している。須恵器の高坏と勾玉が注目される。

（竈）

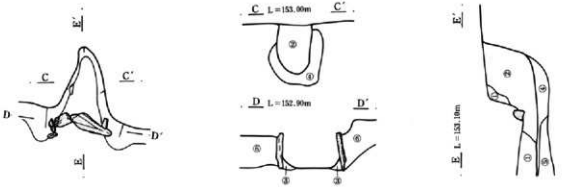
位置　東壁面南寄りを掘り込んで造られている。袖部分は床面上に位置するが、燃焼部と煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

概要　両袖石がほぼ使用時に近い状態で残っている。また天井石が焚口部分に落ちた状態で残っている。煙道部の天井は残っていない。竈内より焼土粒の出土は少量である。

規模　煙道方向83cm、燃焼部幅44cmである。



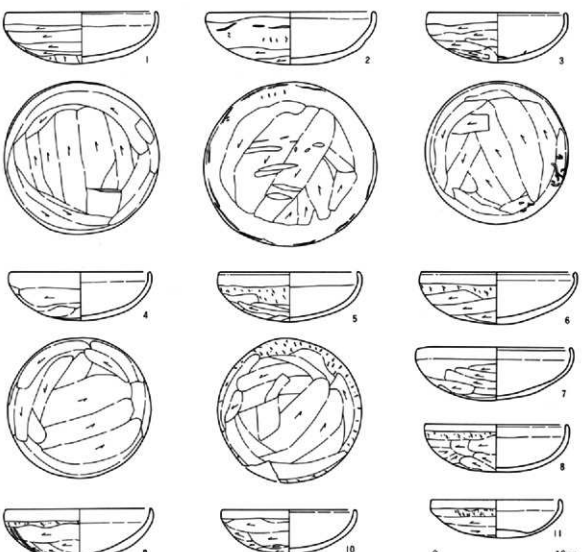
第102図　484号住居跡実測図



竈
①暗褐色土層　少量の白色軽石粒と焼土粒を含む。
②暗褐色土層　多くのローム小ブロックと焼土粒と少量の炭化物を含む。
③褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。
④暗褐色土層　多くのローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
⑤褐色土層　多くのロームブロックを含む。
⑥黄褐色土層　地山のロームを主とする。

0　1m

第103図　484号住居跡竈実測図



第104図　484号住居跡出土遺物実測図（１）

第105図　484号住居跡出土遺物実測図（２）

484号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
104－1 82	土師器 坏	床面＋2 完形	口 11.8 高 4.0 底 －	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒や粘土が移動し器表面やや粗い。固く焼成されている。
104－2 82	土師器 坏	床面＋5 ほぼ完形	口 13.3 高 4.0 底 －	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。製作時の粘土の接合痕多く残る。内面ナデにて器表面密。 内側底面中央に小さな砂粒が目立つ。
104－3 82	土師器 坏	床面＋5 完形	口 11.0 高 3.9 底 －	①密、1～2mmの赤色粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は比較的明瞭である。 内外器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104－4 82	土師器 坏	床面直上 完形	口 11.2 高 3.8 底 －	①密、1～2mmの赤色粒を含む ②酸化焔、硬質 ③赤褐色	底面ヘラ削り、削りの単位は比較的明瞭。 内外器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104－5 82	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 10.9 高 3.9 底 －	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は比較的明瞭。 体部ナデ。
104－6 82	土師器 坏	覆土 ほぼ完形	口 12.0 高 4.0 底 －	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。 内側器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104－7 83	土師器 坏	床面＋6 ほぼ完形	口 12.2 高 4.2 底 －	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、削りの単位は比較的明瞭。 口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。 内外器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104－8 83	土師器 坏	床面直上 ½残存	口 11.0 高 3.3 底 －	①密、1～2mmの赤色粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	底部ヘラ削り。体部ナデ。内面ナデにて器表面密。 内外器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104－9 83	土師器 坏	床面直上 ½残存	口 11.4 高 4.0 底 －	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。 内外器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104－10 83	土師器 坏	床面直上 ½残存	口 10.6 高 3.5 底 －	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。 内外器表面に黒漆と思われる黒色物が多く付着。
104－11 83	土師器 坏	床面直上 口縁一部欠 他完形	口 10.2 高 3.0 底 －	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色、一部黒色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。 底面の一部吸炭により黒色を呈する。
105－12 83	須恵器 高　坏	床面直上 ほぼ完形	口 24.2 高 6.0 底 13.0	①密、3～5mmの長石粒と片岩粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	坏底面右回転ヘラ削り。 口唇部はほぼ平らでわずかに中央部が凹状となっている。ゆがみの少ない、ていねいなつくりである。
105－13 115	石製品 臼　玉	床面＋5	径 1.1　孔径 0.2 厚 0.6　重 2.0		滑石片岩。横断面は円形。側面は荒砥削り。 上下面は無調整か。
105－14 115	石製品 臼　玉	床面－25	径 1.0　孔径 0.2 厚 0.8　重 1.2		滑石片岩。横断面はほぼ円形。側面は荒砥削り。 上下面はわずかに再調整。小さな臼玉である。

503号住居跡（第106～109図、図版26・83・116）

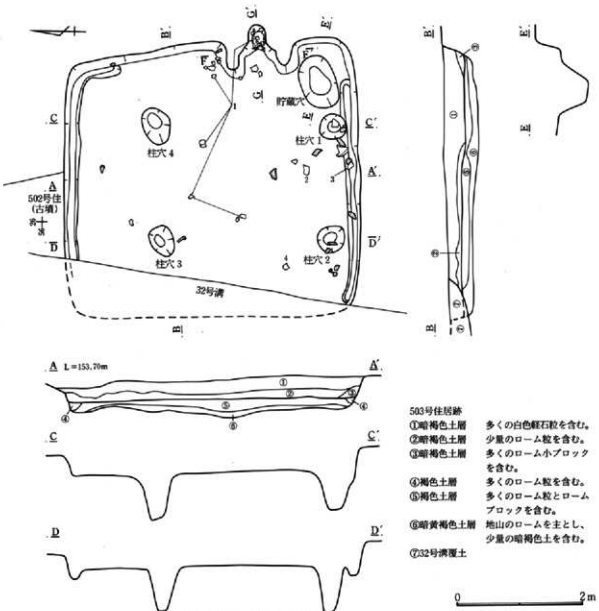
位置　本住居跡は第7次調査区にあり、56－26・27グリッドに位置する。

概要　北西部分で古墳時代の502号住居と重複しており、さらに重複部分を32号溝により床下部分まで深く掘り込まれている。そのため西側の住居範囲は確認できなかった。

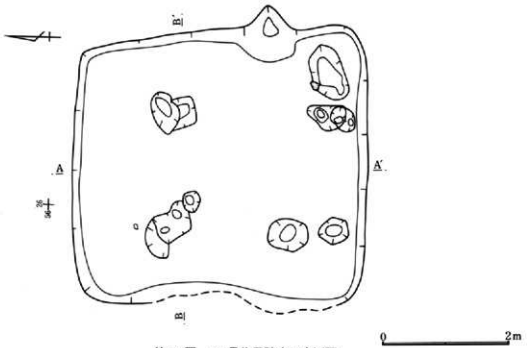
構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴は4本掘られているが、床下調査によりそれぞれの柱穴に接して別の柱穴が掘られていたため、柱穴の掘り直しが行われていたものと思われる。やや不定形であるが貯蔵穴が竈の右側に掘られている。

規模　東西4.40m、南北4.66mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で37cmである。貯蔵穴は長径88cm短径58cm深さ46cmである。柱穴1は径43cm深さ58cm、柱穴2は径42cm深さ76cm、柱穴3は径49cm深さ59cm、柱穴4は径55cm深さ79cmである。

遺物　甕の破片は多いが、図示できたのは竈煙道部より出土した1点である。



第106図　503号住居跡実測図



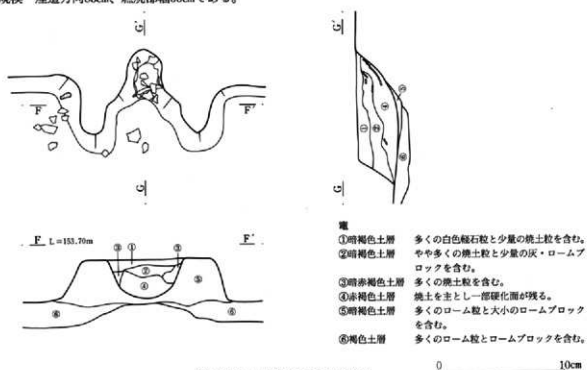
第107図　503号住居跡床下実測図

（竈）

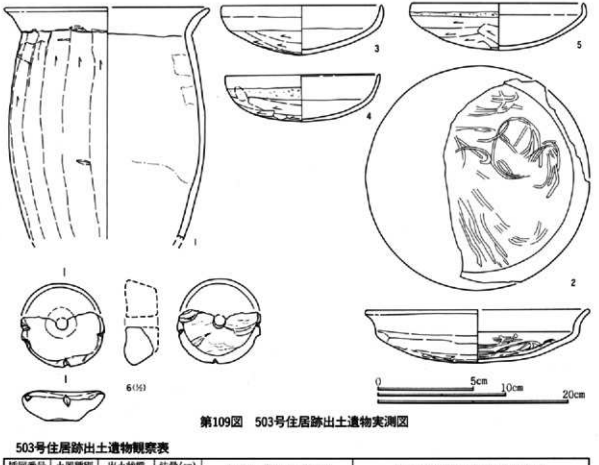
位置　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くが床面上に造られており、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。

構造　暗褐色土を主とした土で造られており、袖石等は出土していない。燃焼部を中心に竈内から多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向83cm、燃焼部幅53cmである。



第108図　503号住居跡竈実測図



第109図　503号住居跡出土遺物実測図

503号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
109－1 83	土師器 甕　？	床面＋9 口縁部½ 胴部½	□(21.8) 高　－ 底　－	①密、1～2mmの砂粒と赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面強いヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。
109－2	土師器 坏	床面＋26 口縁部½ 底部½	□(17.8) 高　4.2 底　－	①密、2～3mmの赤色粒と長石粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り後全面ヘラ磨き。 内側底面に円と直線の暗文状の磨き。 507住の5とほぼ同じ。
109－3 83	土師器 坏	床面直上 ½残存	□ 12.6 高　3.8 底　－	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。 内面ナデにて器表面密。 黒斑認められず。
109－4 83	土師器 坏	床面＋17 ½残存	□ 12.2 高　3.6 底　－	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色、底面黒褐色	底面ヘラ削り、削りの単位明瞭である。 体部ナデ。内面ナデにて器表面密。 底部中央の器肉が薄い。
109－5 83	土師器 坏	覆土 ½残存	□ 13.6 高　3.7 底　－	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。 内面ナデにて器表面密。
109－6 116	石製品 紡錘車	覆土	長径　(4.3)　短径　(3.8) 厚　1.5　重　22.5		滑石片岩。上面中央がやや低くなる。側面は良く磨かれている。4箇所に凹状の刻目あり、文様か。

537号住居跡（第110～112図、図版26）

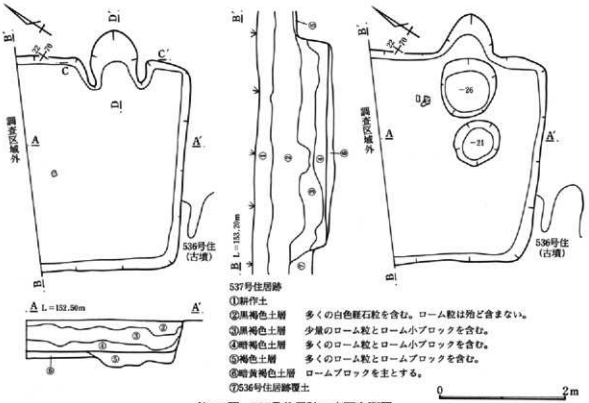
位置　本住居跡は第7次調査区にあり、70－22・23グリッドに位置する。

概要　西側で古墳時代の536号住居と重複しており、本住居は536号住居の北東部分を床下まで深く掘り込んで造られている。また西北部分は調査区域外である。床下土坑が竈手前部分に掘られている。

構造　床面は多くのロームブロックとローム粒を含む土で造られている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模　東西3.38m、南北方向は不明である。壁高は残りの良い南西コーナー部分で56cmである。

遺物　甕胴部は多く出土しているが、図示できたのは土師器の甕の口縁2点と坏1点である。



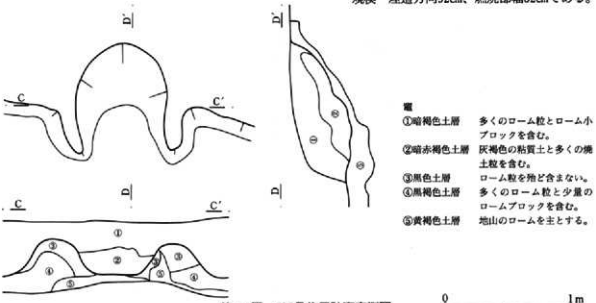
第110図　537号住居跡・床下実測図

（竈）

位置　東壁を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造　ローム粒をほとんど含まない黒色土を主に用いて袖部分は造られている。燃焼部覆土中に灰褐色粘質土が多く含まれていたため、天井部付近にはこの灰褐色粘質土が多く使われていたようである。竈内より多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向92cm、燃焼部幅52cmである。



第111図　537号住居跡竈実測図

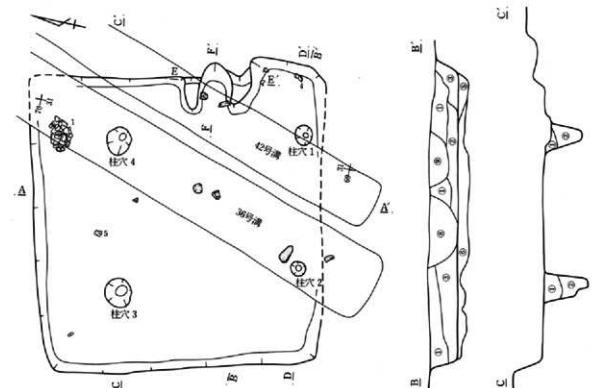
第112図　537号住居跡出土遺物実測図

537号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
112－1	土師器 甕	覆土 口縁部½	口(21.4) 高・底－	①密、多くの赤色粒を含む ②酸化焔、硬質。③橙色	胴部外面ヘラ削り、多くの砂粒が移動し器表面粗い。 口縁部横ナデ。胴部内面ナデ。
112－2	土師器 甕	覆土 口縁部½	口(21.8) 高・底－	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む②酸化焔、硬質　③におい橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部中央に輪積痕。内面ナデにて器表面密。
112－3	土師器 坏	覆土 ½残存	口(10.4) 高・底－	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。②酸化焔、硬質　③橙色	底面例いへラ削り、削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。

542号住居跡（第113・114図、図版26・27・83）

位置　本住居跡は第7次調査区にあり、70－31グリッドに位置する。



542号住居跡
①暗褐色土層　多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。
②暗褐色土層　少量のローム粒を含む。
③暗褐色土層　多くのローム粒を含む。
④暗褐色土層　②層に近いが、より多くのローム粒を含む。
⑤暗褐色土層　少量の焼土粒と炭化物を含む。
⑥褐色土層　多くのロームブロックを含む。
⑦黄褐色土層　地山のロームを主とする。
⑧42号溝覆土

柱穴
①暗褐色土層　少量のローム粒を含む。
②明褐色土層　多量のローム粒を含む。

第113図　542号住居跡実測図

概要　東側を36号溝により床面まで、42号溝により床面に近い覆土部分を掘り込まれている。南壁面部分は攪乱を受けており、壁面部分の多くは残っていない。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。柱穴は４本掘られていたが、貯蔵穴は掘られていない。

規模　東西4.80m、南北4.50mである。壁高は残りの良い北西コーナー部分で46cmである。柱穴１は径36cm深さ40cm、柱穴２は径25cm深さ29cm、柱穴３は径46cm深さ70cm、柱穴４は径45cm深さ61cmである。

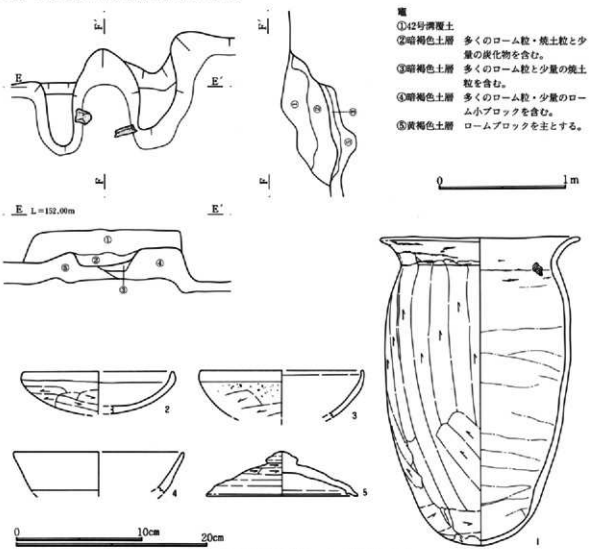
遺物　全体に出土量は少ない。

（竈）

位置　東壁を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、煙道部は壁面を掘り込んで造られている。

構造　焚口から燃焼部にかけての上面は42号溝により削られている。燃焼部覆土中より薄い石が２個割れた状態で出土したが、他に石は出土していない。袖は多くのローム粒を含む土で造られている。燃焼部覆土中から多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向84cm、燃焼部幅46cmである。



第114図　542号住居跡竈・出土遺物実測図

542号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
114－1 83	土師器 甕	床面－6 口縁部⅓ 他ほぼ完形	口 21.1 高 32.4 底　－	①やや粗、２～３mmの砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③によい橙色	胴部外面ヘラナデ。砂粒の移動はほとんどなく器表面やや密。胴部内面ナデにて器表面密。
114－2	土師器 坏	覆土 ⅓残存	口(12.0) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 内面に黒斑と思われる痕跡あるが不明である。
114－3	土師器 坏	覆土 小破片	口(13.0) 高　－ 底　－	①密 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底部ヘラ削り。 口唇部が少し内側に折り込まれている。
114－4	須恵器 坏	床面－16 口縁部⅓	口(13.6) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の砂粒を多く含む ②還元焔、硬質 ③灰色	口縁部横ナデ。 底面欠。
114－5	須恵器 蓋	床面＋5 ⅓残存、 摘のみ完形	口(12.0) 高　－ 底　－	①やや粗 ②還元焔、硬質 ③灰色	天井部手持ヘラ削り。 天井部内側に輪積の痕跡が残る。 カエリは低いがていねいな整形である。

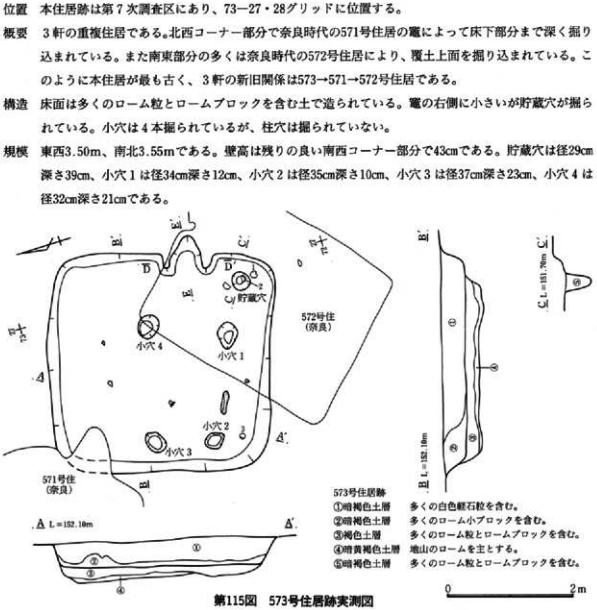
573号住居跡（第115～118図、図版27・83・113）

位置　本住居跡は第７次調査区にあり、73－27・28グリッドに位置する。

概要　３軒の重複住居である。北西コーナー部分で奈良時代の571号住居の竈によって床下部分まで深く掘り込まれている。また南東部分の多くは奈良時代の572号住居により、覆土上面を掘り込まれている。このように本住居が最も古く、３軒の新旧関係は573→571→572号住居である。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。竈の右側に小さいが貯蔵穴が掘られている。小穴は４本掘られているが、柱穴は掘られていない。

規模　東西3.50m、南北3.55mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で43cmである。貯蔵穴は径29cm深さ39cm、小穴１は径34cm深さ12cm、小穴２は径35cm深さ10cm、小穴３は径37cm深さ23cm、小穴４は径32cm深さ21cmである。



第115図　573号住居跡実測図

床下　重複している３軒とも床下土坑が掘られており、まとめて図示した。床下土坑の中に書かれた数字は床面からの深さを表している。

遺物　貯蔵穴付近より土師器の坏が出土している。

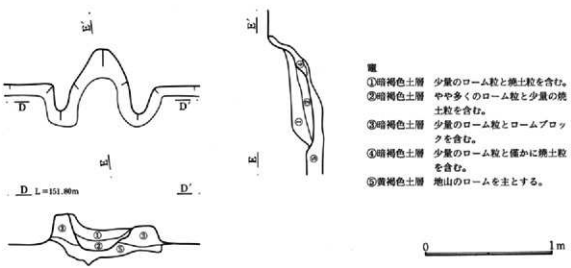
（竈）

位置　東壁面の南寄りに造られている。焚口と燃焼部の多くは床面上に位置する。

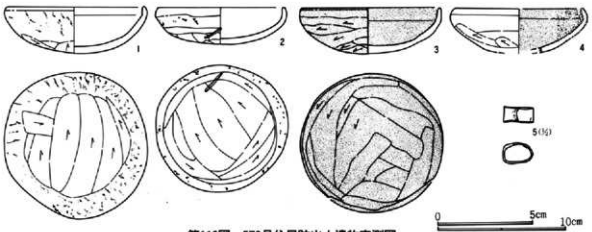
構造　上部は572号住居により削られており、全体に残りが悪かった。袖石等は全く出土していない。袖部分からローム粒の出土は少なく、竈内からの焼土粒の出土も少なかった。

規模　煙道方向61cm、燃焼部幅46cmである。

第116図　573号住居跡床下実測図



第117図　573号住居跡竈実測図



第118図　573号住居跡出土遺物実測図

573号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
118－1 83	土師器 坏	床面＋7 完形	口 11.2 高 3.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
118－2 83	土師器 坏	床面－25 口縁部⅓ 底部完形	口 10.8 高 3.6 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 内外器表面に黒漆と思われる黒色物が付着。
118－3 83	土師器 坏	床面＋8 ほぼ完形	口 10.0 高 2.8 底 —	①密、1～2mmの黒色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。中央部は特に強い削り。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
118－4	土師器 坏	覆土 ⅓残存	口(10.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③表面一部黒色、断面橙色	底面ヘラ削り、器表面の粗れは少ない。 内面に黒漆と思われる痕跡が多く残る。
118－5 113	銅製品 とめ金具	覆土	長 0.8　幅 1.6 厚 0.1　重 1.1		銅主材。合せ目あり。横断面形やや楕円形。 刀子の鞘口か鞘金具か。

636号住居跡（第119～122図、図版27・28・83・84・124）

位置　本住居跡は第８次調査区にあり、62－30・31グリッドに位置する。

概要　南側約半分で同じ古墳時代の635号住居と重複しており、本住居が635号住居を床下部分まで掘り込んでいる。北西コーナー部分を水道管埋設工事に伴い床下部分まで、また34号溝により覆土上面を掘り込まれている。竈を中心にして床面に多くの焼土粒が出土し、一部床面が焼土化している部分も確認された。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを含む土で造られている。竈の右側に深い小穴が３本掘られているが、どの小穴が貯蔵穴にあたるのか確認はできなかった。床面には柱穴が４本掘られているが、床下調査で柱穴に接して小穴が掘られているため、柱穴の掘り直しが行われていたものと思われる。

規模　東西5.58m、南北5.82mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で44cmである。柱穴１は径58cm深さ67cm、柱穴２は径56cm深さ61cm、柱穴３は径68cm深さ82cm、柱穴４は径58cm深さ83cmである。

遺物　東・南壁面付近より多くの土師器の甕や坏が、また住居北東部分から須恵器の蓋が３点出土している。

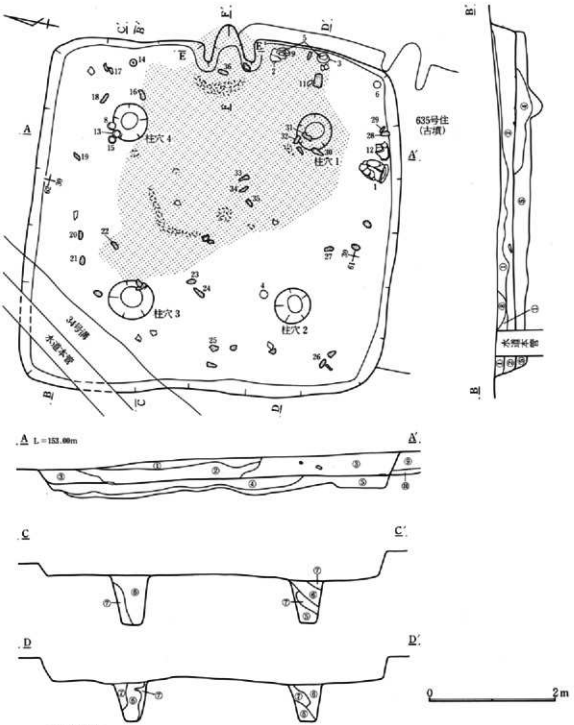
（竈）

位置　東壁面を掘り込んで造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、煙道部が壁面を掘り込んで造られている。

構造　右袖石は出土しているが、左袖石は残っていない。袖は多くのローム粒を含む土で造られている。燃

焼部床面付近から多くの焼土粒が出土している。

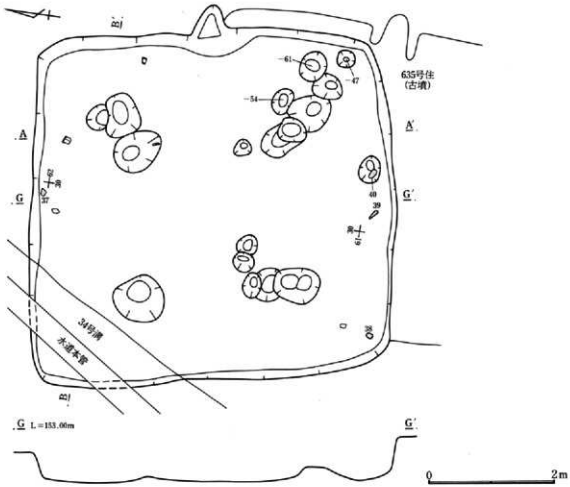
規模　煙道方向73cm、燃焼部幅46cmである。



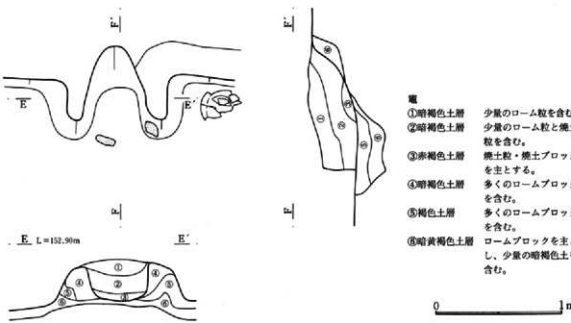
636号住居跡

①暗褐色土層	少量のローム粒を含む。	⑥暗褐色土層	少量のローム粒を含む。
②暗褐色土層	多くのローム粒とローム小ブロックを含む。	⑦暗褐色土層	多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
③暗褐色土層	少量のローム粒を含む。	⑧34号溝覆土	
④褐色土層	多くのローム粒とロームブロックを含む。	⑨635号住居跡覆土	
⑤暗黄褐色土層	ロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。	⑩635号住居跡床下覆土	

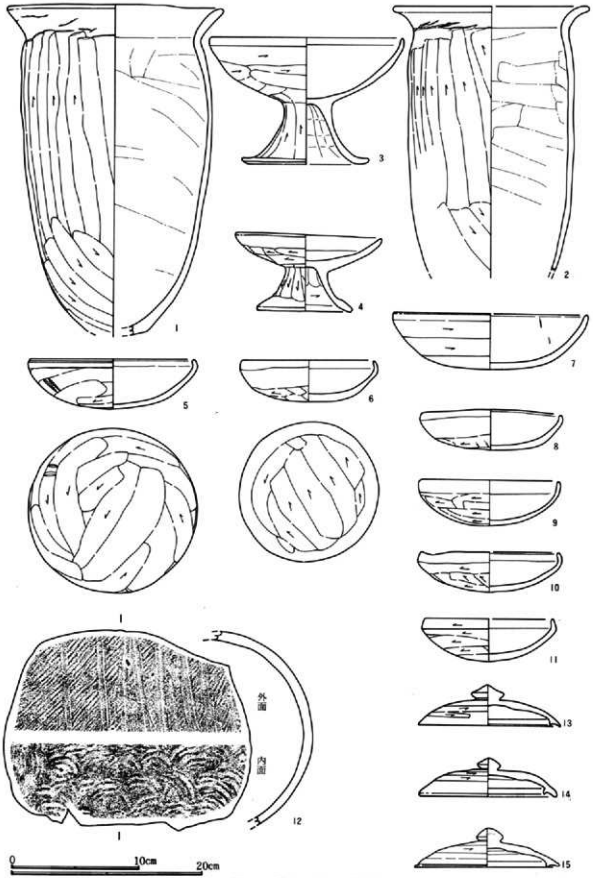
第119図　636号住居跡実測図



第120図　636号住居跡床下実測図



第121図　636号住居跡竈実測図



第122図　636号住居跡出土遺物実測図

636号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
122－1 83	土師器 甕	床面直上 底部以外は ほ完形	口 22.5 高 － 底 －	①やや粗、1～2㎜の片岩粒を含む。②酸化焔、硬質 ③明赤褐色、下部暗赤褐色	胴部外面ヘラ削り、多くの砂粒が移動し器表面やや粗い。口縁部との境に段はほとんどなし。 内面ナデにて器表面密。
122－2 83	土師器 甕	床面＋4 1/3残存	口(20.7) 高 － 底 －	①やや粗、片岩粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部ヘラ削り、削られていない口縁部との境に段を持つ。器表面の粗れは少ない。
122－3 84	土師器 高　坪	床面直上 坪部完形 脚部1/3	口 15.0 高 10.0 底 9.0	①密、1～2㎜の片岩粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	脚部～坪底面ヘラ削り。 脚内面ナデ。
122－4 83	土師器 高　坪	床面直上 完形	口 11.7 高 6.1 底 7.4	①密、1㎜前後の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	坪底面ヘラ削り。脚外面ヘラ削り。 脚内面上半ナデ、下半ヘラ削り。 黒斑認められず。
122－5 83	土師器 坪	床面＋5 完形	口 12.8 高 3.9 底 －	①密、1～2㎜の黒色粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	底部ヘラ削り。 口縁部に一条の沈線が一周している。 黒斑なし。
122－6 84	土師器 坪	床面＋8 完形	口 10.4 高 3.2 底 －	①密、1㎜以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面特に密。 底部外面に吸炭による黒色部分あり。
122－7 84	土師器 坪	覆土 1/3残存	口(15.2) 高 4.4 底 －	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。
122－8 84	土師器 坪	床面＋4 完形	口 11.1 高 3.2 底 －	①密、角閃石安山岩を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 口縁部は短く内傾。全体に砂質である。 内面に一部黒斑あり。
122－9 84	土師器 坪	床面＋6 1/3残存	口 10.9 高 3.6 底 －	①密、1㎜前後の黒色粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
122－10 84	土師器 坪	覆土 1/3残存	口(10.9) 高 3.2 底 －	①密、角閃石をわずかに含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色、底面黒色	底面ヘラ削り。内傾する短い口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 底部外面吸炭により黒色。
122－11	土師器 坪	床面＋8 1/3残存	口(10.2) 高 3.3 底 －	①密、1㎜以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、ヘラの単位は明瞭でない。 内面ナデにて器表面密。
122－12	須恵器 横　瓶	床面＋9 胴部破片	口 － 高 － 底 －	①密、気泡化した2㎜前後の黒色粒を含む。②還元焔、硬質 ③灰色	内面青海波文。 外面平行叩き後、ほぼ等間隔に垂直方向の線上のナデ。
122－13 84	須恵器 蓋	床面＋4 完形	口 11.2 高 － 底 －	①密、1㎜以下の石英粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰白色	天井部右回転ヘラ削り、削りは口縁端部近くまで及ぶ。
122－14 84	須恵器 蓋	床面＋6 完形	口 10.8 高 － 底 －	①密、1㎜以下の石英粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	天井部右回転ヘラ削り、カエリは短く端部は鋭利である。
122－15 84	須恵器 蓋	床面＋3 完形	口 11.4 高 － 底 －	①密、1㎜以下の小さな石英粒を大量に含む。②還元焔、硬質 ③黄灰色、一部オリーブ黒色	天井部右回転ヘラ削り。 端部に近い口縁部外側に沈線が一周している。 吸炭により全体が黒色を帯びている。

遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)	石　材　・　備　考
16	124	こも編み石	長 15.1　幅 5.3　厚 2.4　重 260	絹雲母石墨片岩
17	124	こも編み石	長 13.2　幅 5.9　厚 3.1　重 410	点紋緑泥片岩
18	124	こも編み石	長 15.4　幅 6.9　厚 4.0　重 580	安山岩
19	124	こも編み石	長 16.3　幅 4.5　厚 3.1　重 360	緑簾緑泥片岩
20	124	こも編み石	長 15.8　幅 5.2　厚 2.2　重 290	点紋緑泥片岩
21	124	こも編み石	長 14.1　幅 4.9　厚 5.2　重 610	絹雲母石墨片岩
22	124	こも編み石	長 13.2　幅 7.5　厚 2.5　重 380	緑簾緑泥片岩
23	124	こも編み石	長 16.5　幅 6.6　厚 2.8　重 400	絹雲母石墨片岩　一部炎を受けている。
24	124	こも編み石	長 17.9　幅 5.1　厚 2.8　重 500	緑簾緑泥片岩
25	124	こも編み石	長 15.9　幅 7.3　厚 2.6　重 470	緑簾緑泥片岩
26	124	こも編み石	長 14.3　幅 5.2　厚 2.8　重 310	緑簾緑泥片岩
27	124	こも編み石	長 13.6　幅 5.6　厚 2.5　重 260	緑簾緑泥片岩
28	124	こも編み石	長 13.5　幅 6.5　厚 3.8　重 580	緑簾緑泥片岩

636号住居跡出土遺物観察表

遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)	石　材　・　備　考
29	124	こも編み石	長 15.1　幅 5.3　厚 3.0　重 300	緑簾緑泥片岩
30	124	こも編み石	長 18.0　幅 6.1　厚 3.4　重 460	絹雲母石墨片岩
31	124	こも編み石	長 16.1　幅 6.5　厚 2.9　重 340	絹雲母石墨片岩
32	124	こも編み石	長 15.5　幅 6.9　厚 2.3　重 350	点紋緑泥片岩
33	124	こも編み石	長 16.4　幅 6.5　厚 2.6　重 520	緑簾緑泥片岩
34	124	こも編み石	長 14.8　幅 5.2　厚 4.8　重 510	絹雲母石墨片岩
35	124	こも編み石	長 12.5　幅 4.7　厚 3.9　重 360	点紋絹雲母石墨片岩
36	124	こも編み石	長 15.2　幅 5.5　厚 3.1　重 440	緑簾緑泥片岩
37	124	こも編み石	長 12.4　幅 6.0　厚 1.6　重 300	絹雲母石墨片岩
38	124	こも編み石	長 13.6　幅 7.2　厚 3.0　重 480	石墨絹雲母片岩
39	124	こも編み石	長 16.6　幅 6.0　厚 4.2　重 490	絹雲母石墨片岩
40	124	こも編み石	長 14.2　幅 6.6　厚 3.6　重 560	絹雲母石墨片岩

714号住居跡（第123～125図、図版28・84・116）

位置　本住居跡は第11次調査区にあり、42－88・89グリッドに位置する。

概要　西側で同じ古墳時代の715号住居と重複しており、本住居が715号住居を床下部分まで掘り込んでいる。床面の高さがほとんど同じことや、本住居の竈の位置が少し西側に片寄っていること等から重複関係にやや疑問も残るが、発掘調査時の所見に従った。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模　東西3.78m、南北2.90mである。壁高は残りの良い南壁面部分で70cmである。

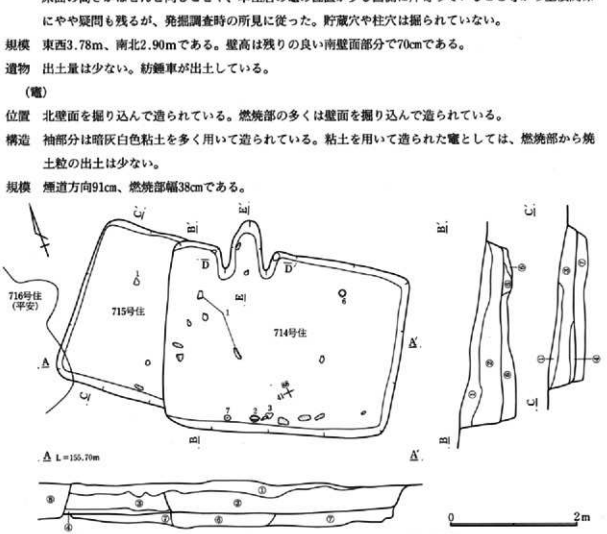
遺物　出土量は少ない。紡錘車が出土している。

（竈）

位置　北壁面を掘り込んで造られている。燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

構造　袖部分は暗灰白色粘土を多く用いて造られている。粘土を用いて造られた竈としては、燃焼部から焼土粒の出土は少ない。

規模　煙道方向91cm、燃焼部幅38cmである。



714・715号住居跡

①暗褐色土層　少量の白色軽石粒を含む。

②暗褐色土層　少量のローム粒を含む。(714号住居跡覆土)

③暗褐色土層　②層に近いがローム粒を含む量がやや多い。(715号住居跡覆土)

④暗褐色土層　少量のローム小ブロックと黒褐色土を含む。(715号住居跡覆土)

⑤暗褐色土層　少量の焼土粒・粘質土・炭化物を含む。

⑥暗褐色土層　少量のローム粒を含み軟質。暗い褐色土である。

⑦褐色土層　多くのローム粒とローム小ブロックを含む。

⑧716号住居跡覆土

第123図　714・715号住居跡実測図

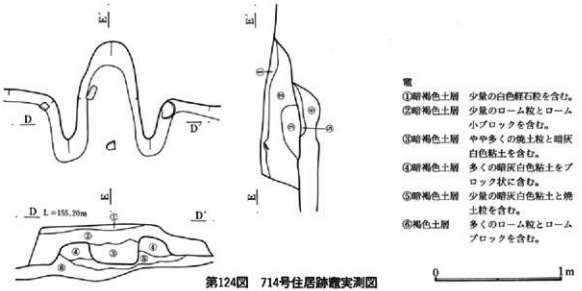
715号住居跡（第123・126図、図版28）

位置　本住居跡は第11次調査区にあり、42−88グリッドに位置する。

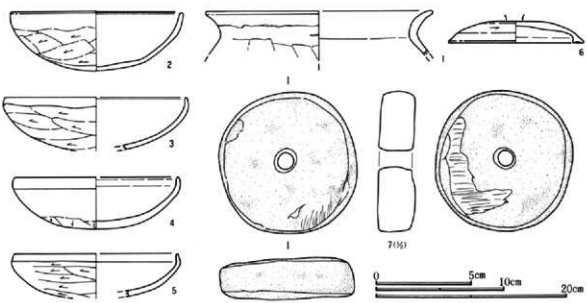
概要　東側で同じ古墳時代の714号住居と重複しており、714号住居により住居の約半分以上が床下部分まで掘り込まれている。竈も714号住居によって掘り取られているためか不明である。柱穴は掘られていない。南西コーナー部分で平安時代の716号住居と重複しており、その部分は床下部分まで掘り込まれている。

規模　東西不明、南北2.64mである。壁高は残りの良い南壁面部分で52cmである。

遺物　須恵器の甕の破片が多く出土しているが、図示できたのは土師器の坏１点である。



第124図　714号住居跡竈実測図



第125図　714号住居跡出土遺物実測図

第126図　715号住居跡出土遺物実測図

714号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
125－1 変	土師器 壺	床面＋18 口縁1/4	口(23.7) 高　－ 底　－	①密、1mm内外の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③におい赤褐色	胴部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
125－2 84	土師器 坏	床面＋4 完形	口 13.4 高 4.6 底　－	①密、1mm以下の小さな雲母粒を大量に含む。　②酸化焔、硬質 ③におい橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は比較的明瞭である。 内面ナデにて器表面密。
125－3 84	土師器 坏	床面＋21 1/4残存	口 14.0 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。 内面ナデにて器表面密。 内側器表面が底点状にやや剥離。
125－4	土師器 坏	竈掘り方 1/4残存	口(12.8) 高 4.0 底　－	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、器表面密でヘラ削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。
125－5	土師器 坏	覆土 1/4残存	口(12.8) 高　－ 底　－	①密、少量の雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
125－6 84	須恵器 蓋	床面＋4 鋼以外完形	口 10.5 高　－ 底　－	①密、1～2mmの長石粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	天井部右回転ヘラ削り。 鋼みは残っていない。 端部はカエリを細く仕上げている。
125－7 116	石製品 紡錘車	床面＋13	径　7.5　孔径　0.8 厚　2.1　重　157.2	砂岩。広・狭面磨かれており整形痕不明。側面も良く磨かれている。狭面の一部に自然面が残る。	

715号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
126－1	土師器 坏	床面＋12 口縁～底部 1/4残存	口(14.0) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく削りの単位不明瞭。 内側器表面が粗れている。

721号住居跡（第127・128図、図版28）

位置　本住居跡は第11次調査区にあり、40—83グリッドに位置する。

概要　南東部分で古墳時代の722号住居と重複しており、本住居は722号住居により深く床下部分まで掘り込まれている。住居の残りが悪く、出土遺物もないため時代も不明である。残っている範囲では貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模　東西2.79m、南北は不明である。壁高は残りの良い南東壁面コーナー部分で21cmである。

遺物　出土遺物は確認されない。

（竈）

位置　西壁面を掘り込んで造られている。残りが悪く不明な点が多いが、燃焼部の大部分は壁面を掘り込んで造られていたようである。

構造　掘り込みが浅く残りが悪いため不明な点が多い。柔らかいロームを掘り込んで造られていたようである。白色粘土や袖石等は出土していない。焼土粒の出土も少ない。

規模　煙道方向72cm、燃焼部幅42cmである。

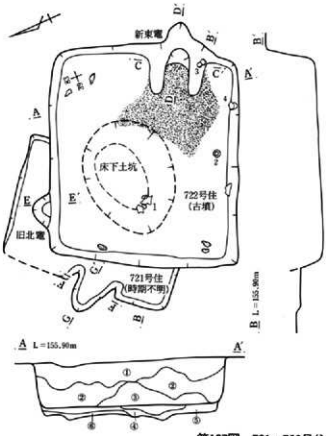
722号住居跡（第127～129図、図版28・84）

位置　本住居跡は第11次調査区にあり、39・40—83グリッドに位置する。

概要　北東部分で721号住居と重複しており、本住居が721号住居を深く床下部分まで掘り込んでいる。掘り込みが深く残りは良好である。竈は新東竈と旧北竈が造られている。旧北竈は壁面を掘り込んで造られている煙道部が僅かに残っていただけである。その部分から少量の焼土粒が出土している。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。竈手前部分に多くの粘土がばらまかれたような状態で出土している。竈が使用されなくなった状態で壊され、粘土が散乱したものと思われる。床下土坑が掘られている。

規模　東西3.42m、南北3.0mである。壁高は残りの良い南東壁面コーナー部分で85cmである。床下土坑は径184×142cm深さ34cmである。

遺物　土師・須恵器の甕・坏が出土している。



（新東竈）

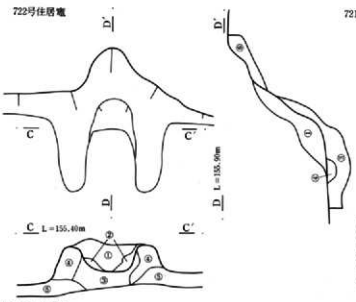
位置　東壁面を掘り込んで造られている。袖部分や燃焼部の大部分は壁面を掘り込んで造られている。

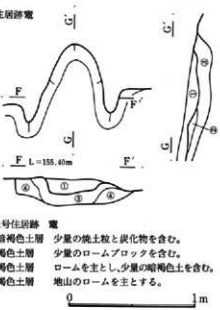
構造　灰白色粘土を多く用いて造られており、燃焼部や袖部分から多くの灰白色粘土が出土している。しかし全体に崩れていたため残りは悪い。燃焼部床面に近い覆土から多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向114cm、燃焼部幅42cmである。

721・722号住居跡
①暗褐色土層　少量の白色軽石粒を含む。
②暗褐色土層　多くのローム粒を含む。
③暗灰白色土層　暗灰白色粘土を多く含む。
④暗灰白色土層　暗灰白色粘土を主とする。
⑤褐色土層　ロームを主とし、少量の焼土粒を含む。
⑥黄褐色土層　地山のロームを主とする。
⑦暗黄褐色土層　ロームを主とし、多くの焼土粒を含む。

第127図　721・722号住居跡実測図

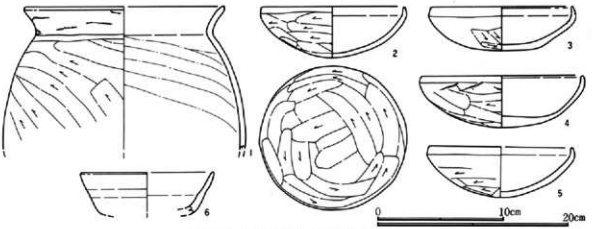




721号住居跡　竈
①暗褐色土層　少量の焼土粒と炭化物を含む。
②褐色土層　少量のロームブロックを含む。
③褐色土層　ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。
④褐色土層　地山のロームを主とする。

新東竈・旧北竈
①暗灰白色土層　粘土を主とし、少量の焼土粒を含む。
②暗灰白色土層　多くの焼土粒と少量の炭化物を含む。
③暗灰白色土層　暗灰白色粘土を主とし、少量の焼土粒を含む。
④灰白色土層　灰白色粘土を主体とし固く締まっている。
⑤褐色土層　地山のロームを主とし固い。
⑥褐色土層　地山のロームを主とし軟質であり、暗褐色土を多く含む。

第128図　721・722号住居跡竈実測図



第129図　722号住居跡出土遺物実測図

722号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
129－1 84	土師器 壺	床面直上 1/3残存	口(21.0) 高・底－	①密、1～2mmの片岩粒を多く含む。②酸化焔、硬質　③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、多くの砂粒が目立つ。口縁部に輪積痕が残る。
129－2 84	土師器 坏	床面－11 完形	口 11.2 高 4.0 底 －	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内側器表面の多くが剥離している。黒斑認められず。
129－3 84	土師器 坏	竈 ほぼ完形	口 11.0 高 3.4 底 －	①密、わずかに角閃石を含む ②酸化焔、硬質 ③におい橙色	底面わずかにヘラナデ。他はほとんどナデ。内面ナデ。内側器表面の多くが剥離している。全体にやや雑なつくりである。
129－4 84	土師器 坏	床面＋26 1/3残存	口 12.5 高 － 底 －	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。口縁部は短く内傾する。内面ナデにて器表面密。底部外面に斑点状の黒斑あり。
129－5 84	土師器 坏	覆土 口縁～底部 1/3	口(11.2) 高 4.0 底 －	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。口縁はていねいに整形されており少し光沢を持つ。内面に黒漆の痕跡が残る。
129－6 84	須恵器 坏	覆土 口縁部1/4	口(10.4) 高・底－	①やや粗、1～2mmの長石粒を多く含む。②還元焔、硬質　③灰色	口縁部内外面にわずかに凹凸状のロクロ目が残る。

724号住居跡（第130～132図、図版28・29・84）

位置　本住居跡は第11次調査区にあり、42－84グリッドに位置する。

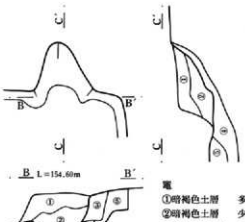
概要　古墳時代の725号住居と重複しており、本住居は725号住居を床下部分まで掘り込んで造られている。極めて小さな住居であり、貯蔵穴や柱穴は掘られていない。

規模　東西2.20m、南北2.06mである。壁高は残りの良い南東壁面コーナー部分で33cmである。

遺物　出土量は少なく、図示できたのは土師器の甕１点である。

724号住居跡
①暗褐色土層　少量の白色軽石粒を含む。
②暗褐色土層　少量のロームブロックを含む。
③暗褐色土層　少量の焼土粒を含む。
④暗褐色土層　少量のローム粒と焼土粒を含む。
⑤黄褐色土層　ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。
⑥暗褐色土層　多くのロームブロックと少量の暗褐色土を含む。
⑦褐色土層　ローム粒とロームブロックを主とする。
⑧725号住居跡覆土
⑨725号住居跡床下覆土

第130図　724号住居跡実測図



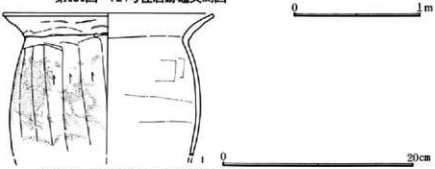
第131図　724号住居跡竈実測図

（竈）

位置　東壁面の南寄りに位置し、725号住居の覆土を掘り込んで造られている。住居が小さいためか燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

構造　竈は多くのローム粒を含む土で造られている。石や粘土等は使われていないようである。焼土粒の出土は少量である。

規模　煙道方向51cm、燃焼部幅約41cmである。



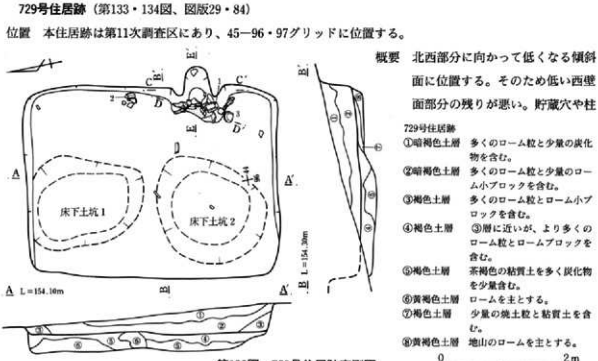
第132図　724号住居跡出土遺物実測図

724号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
132－1 84	土師器 甕	床面直上 口縁部完形 胴部欠	口 22.0 高　－ 底　－	①密、1㎜以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、口縁部との境に段を持つ。 内面ナデにて器表面密。 胴部外面に黒色物が付着している。

729号住居跡（第133・134図、図版29・84）

位置　本住居跡は第11次調査区にあり、45－96・97グリッドに位置する。



第133図　729号住居跡実測図

概要　北西部分に向かって低くなる傾斜面に位置する。そのため低い西壁面部分の残りが悪い。貯蔵穴や柱

穴は掘られていない。床下に床下土坑が２本掘られている。

規模　東西2.96m、南北3.94mである。壁高は残りの良い南壁面付近で59cmである。床下土坑１は床面からの深さ32cm、床下土坑２は床面からの深さ28cmである。

遺物　甕の胴部片が多く出土しているが、図示できたのは１点である。

（竈）

位置　東壁面の南寄りに造られている。住居は小さいが、燃焼部の多くは床面から壁面部分にかけて造られており、壁面を大きく掘り込んではいない。

構造　左右の袖石が全体に右側に傾いていおり、その上に天井石が乗っている。天井石には燃焼部で使われていたと思われる土師器の甕が倒れかかった状態で残っている。土で造られている袖部分は灰褐色粘質土を多く用いて造られている。燃焼部付近の覆土中から多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向88cm、燃焼部幅43cmである。

第134図　729号住居跡竈・出土遺物実測図

729号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②成成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
134－1 84	土師器 甕	床面＋25 口完、胴1/2	口 25.5 高・底－	①密、１～２mmの片岩粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り、削られていない口縁部との境に段を持つ。
134－2	土師器 小型甕	床面＋2 胴部1/2	口 － 高・底－	①密、１～２mmの赤色粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③赤褐色	底面は丸く、胴部と区別できない。 胴部外面ヘラ削り。内面ナデ。
134－3 84	土師器 坏	床面＋6 1/2残存	口 12.8 高 3.8 底 －	①密、１mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 内外器表面の多くが匠点状に剥離して粗れている。

734号住居跡（第135～137図、図版29・84・85）

位置　本住居跡は第11次調査区にあり、50―101グリッドに位置する。

概要　調査区の最も東側に位置する。小さい住居であり、さらに住居北側は調査区域外となっている。貯蔵穴や柱穴は掘られていない。床下に小穴や床下土坑が掘られている。

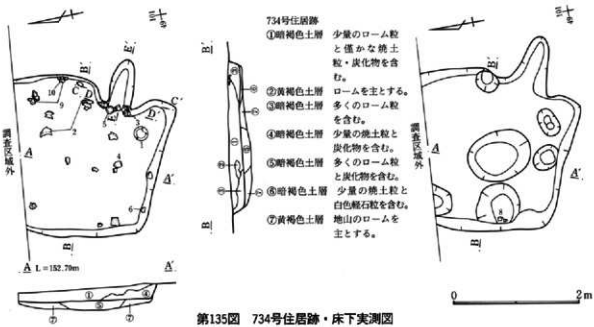
規模　東西2.25m、南北方向は不明である。壁高は残りの良い南東コーナー付近で29cmである。

遺物　竈付近より甕や坏が出土している。

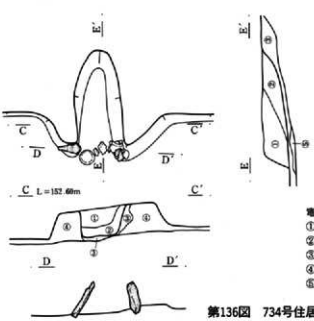
（竈）

位置　東壁面の南寄りを掘り込んで造られている。住居が小さいためか袖部分以外は壁面を掘り込んで造られている。

構造　左右の袖石が一部傾きながらもほぼ据えられた状態で出土している。他に石は出土していない。袖は



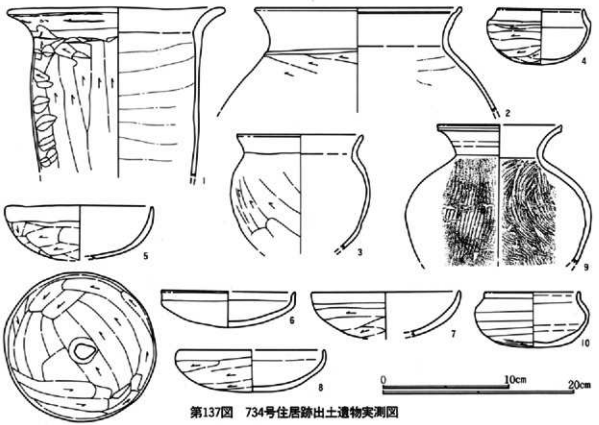
第135図　734号住居跡・床下実測図



多くのローム粒とロームブロックを含んだ土で造られている。竈内から焼土粒の出土は少ない。

規模　煙道方向88cm、燃焼部幅34cmである。

第136図　734号住居跡竈実測図



第137図　734号住居跡出土遺物実測図

734号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
137－1 85	土師器 甕	床面－9 口縁部完形 胴一部欠	口 23.1 高　－ 底　－	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	胴部ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れ少ない。 内面ナデにて器表面密。 胴部は削られて器肉が薄い。
137－2 85	土師器 壺	床面＋4 口縁部ﾘ 肩部ﾘ	口 22.0 高　－ 底　－	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
137－3 84	土師器 小型甕	竈内 口縁ほぼ完 胴部ﾘ	口 13.5 高　－ 底　－	①粗、1～2mmの砂粒を大量に含む。②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、器表面が粗れており削りの単位不明瞭な所が多い。 内外器表面の多くが斑点状に剥離している。
137－4 84	土師器 小型壺	覆土 ほぼ完形	口 9.0 高 5.8 底　－	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、胎土が密で砂粒の動きはほとんどなし。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
137－5 84	土師器 坏	床面＋11 ほぼ完形 底部中央欠	口 11.7 高 4.4 底　－	①密、1～3mmの赤色粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、底部中央に焼成後内側から穿孔された小さな穴あり。 内側器表面の多くが斑点状に剥離している。
137－6 84	土師器 坏	覆土 ﾘ残存	口(10.4) 高 2.8 底　－	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。
137－7 85	土師器 坏	覆土 口縁部ﾘ 底部ﾘ	口 11.6 高　－ 底　－	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。
137－8 85	土師器 坏	床面－16 ﾘ残存	口(11.4) 高 3.3 底　－	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りと思われるが多くの器表面が剥離しており削りの単位不明瞭。 内外面とも器表面の多くが剥離している。
137－9 85	須恵器 壺	覆土 口縁部ﾘ 胴部ﾘ	口(13.0) 高　－ 底　－	①粗、1～2mmの長石粒を多く含む。②還元焔、硬質、焼締 ③灰色	胴部外面平行叩き。 内面青海波文。 口縁端部は鋭利につくられている。
137－10 85	須恵器 小型壺	覆土 ﾘ残存	口 10.0 高 5.8 底 (8.2)	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面手持ヘラ削り。 口縁部は短くほぼ垂直に立ち上がる。

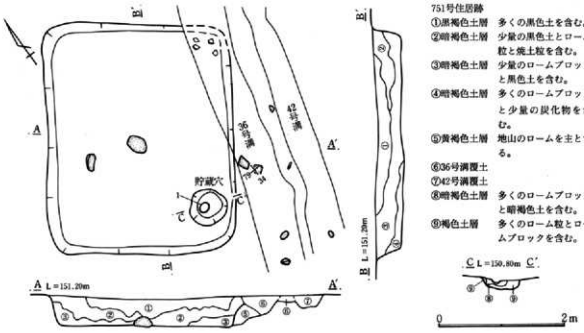
751号住居跡（第138・139図、図版29・85・115）

位置　本住居跡は第７次調査区にあり、80−34グリッドに位置する。

概要　小さい住居で北東部分に36号溝と42号溝があり、36号溝によって北東部分の覆土上面が掘り込まれている。発掘調査段階において12号住居状遺構として扱ったが、ヘラ磨きがある壺の胴部下半分と刷毛目整形を持つＳ字状口縁の甕の破片が９片出土していること、また貯蔵穴が南東コーナー部分に造られていること、また住居中央に炉で用いたと思われる石が出土し、周辺の覆土中より焼土粒が出土していること等より、古墳時代前期後半の住居であることが考えられ751号住居として扱った。柱穴は掘られていない。

規模　東西2.94m、南北3.60mである。壁高は残りの良い南西コーナー付近で48cmである。貯蔵穴は径58cm深さ21cmである。

遺物　甕の胴部片が多く出土しているが、図示できたのは土師器の壺１点と土玉１点である。



第138図　751号住居跡実測図

第139図　751号住居跡出土遺物実測図

0　20cm

751号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
139−1 85	土師器 壺	覆土 胴下〜底部 完形	口　− 高　− 底 4.5	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③によい褐色	底部ナデ。 胴部内外面ヘラ磨きにより器表面密、ヘラ磨きの部分は光沢を持つ、ヘラ磨きの単位不明瞭。
139−2 115	土製品 土　玉	覆土 1/2残存	径 1.9 重 5.5	①密　②酸化焔、硬質 ③断面によい橙色、外面黒褐色	ナデにより器表面を密に仕上げている。 表面は強炭により黒褐色を呈している。

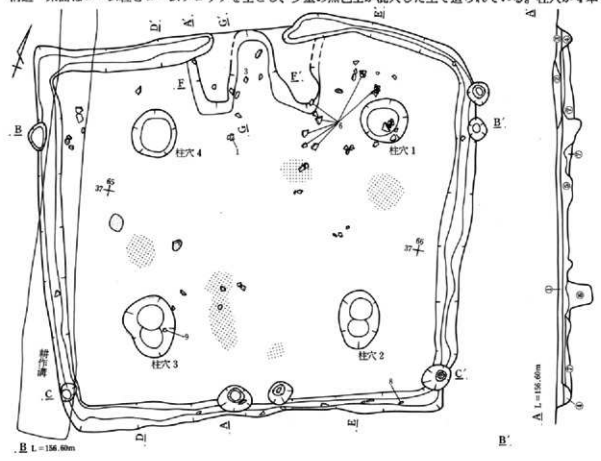
第４章　奈良時代の遺構と遺物

11号住居跡（第140～143図、図版30・85・113・116）

位置　本住居跡は第２次調査区にあり、37・38―66グリッドに位置する。

概要　残りが悪く確認面から床面までが浅い。西側部分を浅い耕作溝により覆土の多くを掘り込まれている。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の黒色土が混入した土で造られている。柱穴が４本



第140図　11号住居跡実測図

掘られており、柱穴2と柱穴3の南に重複して柱穴と思われる小穴が掘られている。

規模　東西6.96m、南北6.09mである。壁高は残りの良い南西コーナー部分で22cmである。柱穴1は径70cm深さ74cm、柱穴2は径68cm深さ62cm、南に重複する小穴の深さは64cm、柱穴3は径79cm深さ56cm、南に重複する小穴の深さは76cm、柱穴4は径72cm深さ53cmである。貯蔵穴は掘られていない。

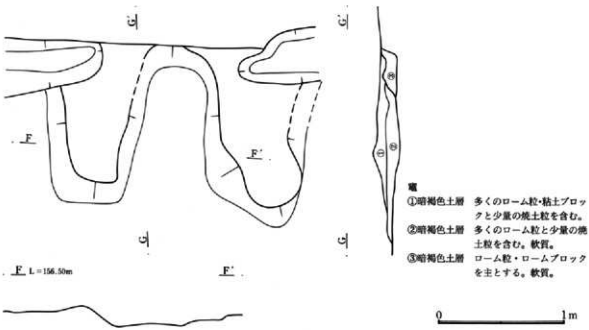
遺物　竈周辺より甕や坏が出土している。

（竈）

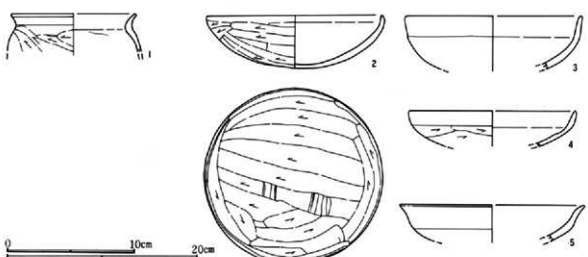
位置　住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造　非常に残りが悪い竈である。袖部分や燃焼部の多くは痕跡をたどって調査した。燃焼部付近の覆土からは少量の焼土粒が出土している。

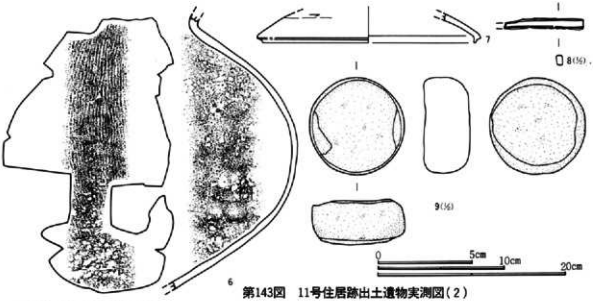
規模　残りが悪く明確でない。



第141図　11号住居跡竈実測図



第142図　11号住居跡出土遺物実測図（1）



第143図　11号住居跡出土遺物実測図（２）

11号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
142－1	土師器 小型甕	床面＋３ 口縁破片	口(13.2) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③褐色	胴部ヘラ削り。 口縁端部がわずかに玉縁状になっている。
142－2 85	土師器 坏	据り方 ほぼ完形	口 13.6 高 4.1 底　－	①密、１mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 内面ナデにより器表面密。
142－3	土師器 坏	床面＋３ 口縁片	口(13.7) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③明褐色	底面はヘラ削りと思われるが、器表面が粗れているため不明。
142－4	土師器 坏	覆土 小破片	口(13.0) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、ヘラの単位は明瞭でない。
142－5	土師器 坏	覆土 口縁部1/4 底部1/4	口(14.3) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるがヘラの単位不明。
143－6	須恵器 甕	床面直上 胴部破片	口　－ 高　－ 底　－	①密、１～２mmの長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰褐色	内面素文の当て目。 外面平行叩き目。 内外器表面が斑点状に剥離している。
143－7	須恵器 蓋	覆土 端部片	口(16.5) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の砂粒を含む ②還元焔、硬質 ③灰色	天井部ヘラ削り。 下端部は細く下方へ折られている。
143－8 113	鉄製品 鉄鏃？	床面＋６ 小破片	長　－　幅　0.7 厚　0.4　重　1.8		小破片であるが、鉄鏃の基部分と思われる。
143－9 116	石製品 紡錘車	床面＋２	径　5.1　孔径　－ 厚　2.4　重　83.1		砂岩。紡錘車の未製品である。広面はやや補であるが、他の面はていねいに削られている。

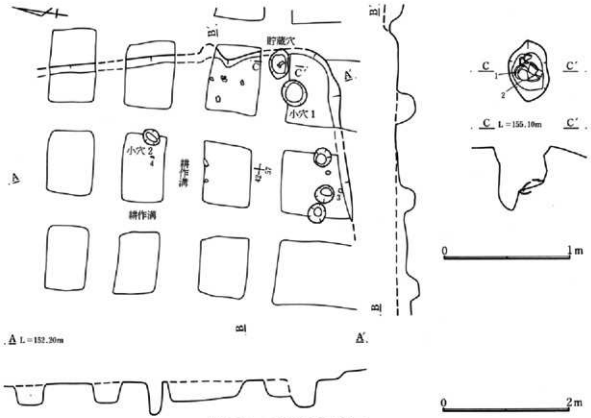
19号住居跡（第144・145図、図版30・85・113・116）

位置　本住居跡は第２次調査区にあり、42・43－57・58グリッドに位置する。

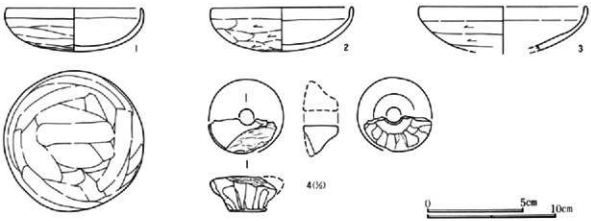
概要　住居の大部分は東西と南北方向に掘り込まれた多くの深い耕作溝により、削り取られてほとんど残っていない。竈の痕跡が東壁面に残っていることと、竈の右側に貯蔵穴と思われる小穴が掘られていることにより住居であることが確認できた。

規模　住居規模は不明である。貯蔵穴は径38cm深さ49cm、小穴１は径39cm深さ43cm、小穴２は径26cm深さ53cmである。

遺物　貯蔵穴の中から土師器の坏が出土している。紡錘車の出土が注目される。



第144図　19号住居跡実測図



第145図　19号住居跡出土遺物実測図

19号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
145－1 85	土師器 坏	床面－30 完形	□ 10.6 高 3.3 底 －	①密、やや粉状を呈する ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、ヘラの単位不明瞭、ヘラ削りの方向もほとんど不明。 黒斑全く認められず。
145－2 85	土師器 坏	床面－30 ½残存	□ 10.8 高 3.4 底 －	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデ、内側器表面が粗れている。 黒斑全く認められず。
145－3	土師器 坏	床面＋3 ½残存	□(13.0) 高 － 底 －	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③明褐色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し底面やや粗い。
145－4 116	石製品 紡錘車	床面－13 ½残存	長径 (3.6)　短径 (2.0) 重 11.6		滑石片岩。側面は刃物により削られている。 上下面はていねいに磨かれている。

24号住居跡（第146～148図、図版30・85・116）

位置　本住居跡は第２次調査区にあり、43―62グリッドに位置する。

概要　４軒の重複する住居の中の１軒である。４軒とも掘り込み面が浅いうえに多くの耕作溝により床下部分まで深く掘り込まれているため残りが悪い。そのため重複関係や住居範囲が明瞭でない箇所もある。本住居は同じ奈良時代の25号住居の南側部分を掘り込んで造られている。東には住居規模や時代の不明な32号住居がある。重複関係は明瞭につかめないが、本住居が32号住居を掘り込んでいると考えられる。また32号住居は古墳時代の26号住居により東側を掘り込まれている。新旧関係は32→25→24号住居、32→26号住居である。南東コーナーに貯蔵穴が掘られているため東壁面の耕作溝により削れた部分に竈が築かれていたものと思われる。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックの混入した土で造られている。柱穴が４本と貯蔵穴が南東コーナー部分に掘られている。

規模　東西4.52m、南北4.62mである。壁高は残りの良い南壁面部分で23cmである。柱穴１は径63cm深さ74cm、柱穴２は径54cm深さ39cm、柱穴３は径54cm深さ63cm、柱穴４は径48cm深さ70cmである。貯蔵穴は径60cm深さ43cmである。

遺物　土師器の破片が大量に出土しているが、図示できたのは３点である。

25号住居跡（第146～148図、図版30・85）

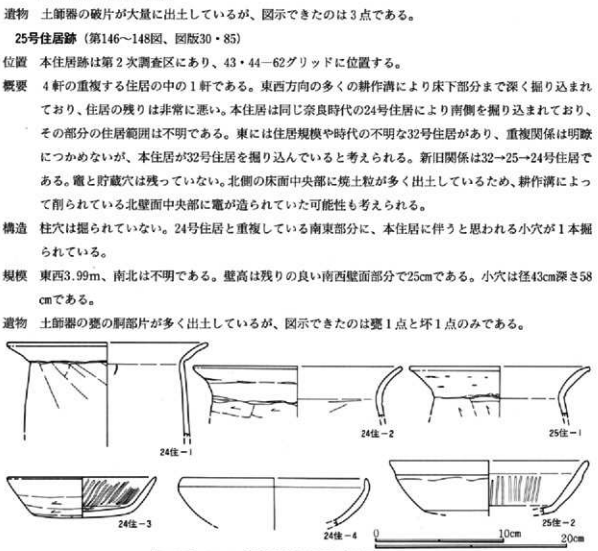
位置　本住居跡は第２次調査区にあり、43・44―62グリッドに位置する。

概要　４軒の重複する住居の中の１軒である。東西方向の多くの耕作溝により床下部分まで深く掘り込まれており、住居の残りは非常に悪い。本住居は同じ奈良時代の24号住居により南側を掘り込まれており、その部分の住居範囲は不明である。東には住居規模や時代の不明な32号住居があり、重複関係は明瞭につかめないが、本住居が32号住居を掘り込んでいると考えられる。新旧関係は32→25→24号住居である。竈と貯蔵穴は残っていない。北側の床面中央部に焼土粒が多く出土しているため、耕作溝によって削られている北壁面中央部に竈が造られていた可能性も考えられる。

構造　柱穴は掘られていない。24号住居と重複している南東部分に、本住居に伴うと思われる小穴が１本掘られている。

規模　東西3.99m、南北は不明である。壁高は残りの良い南西壁面部分で25cmである。小穴は径43cm深さ58cmである。

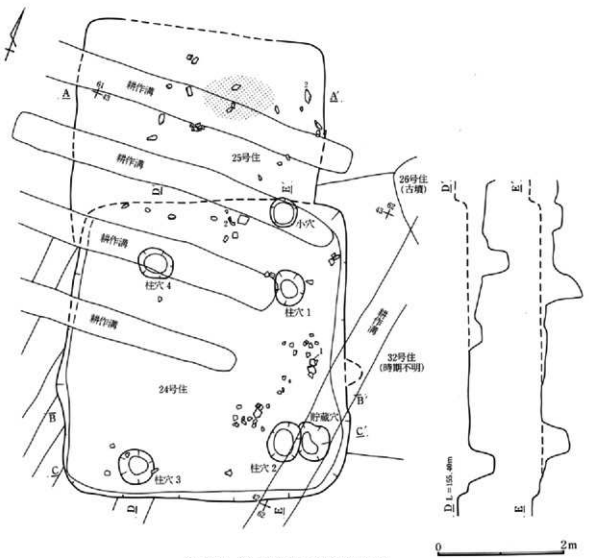
遺物　土師器の甕の胴部片が多く出土しているが、図示できたのは甕１点と坏１点のみである。



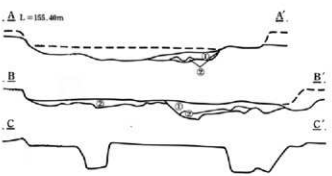
第146図　24・25号住居跡出土遺物実測図

24・25号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
146－1 (24住)	土師器 甕	床面＋5 1/2残存	口(21.0) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、ヘラ削りの行なわれない口縁部との境に段差あり。
146－2 (24住)	土師器 甕	床面－4 1/2残存	口(22.0) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部ヘラ削り。 口縁部に輪積痕が残る。
146－3 (24住) 85	土師器 坏	覆土 口縁一部欠 他完形	口 11.5 高 3.1 底 7.6	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 体部外面ヘラ削り。 内側口縁部に放射状暗文。底部に螺旋状暗文。
146－4 (24住)	土師器 坏	覆土 小破片	口(14.4) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りと思われるが、器表面が暗れているためヘラ削りの単位不明。
146－1 (25住)	土師器 甕	床面＋22 口縁小片	口(18.8) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部に輪積痕が残る。 25号住の床下出土の破片と24号住床面出土の破片と接合。
146－2 (25住)	土師器 坏	床面－35 1/2残存	口(15.4) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず、粉状を呈する。②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 体部外面ヘラ削り。 内面に多くの暗文。



第147図　24・25号住居跡実測図(1)



24・25号住居跡
①暗褐色土層　多くのローム粒と焼土粒を含む。
②褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。

0　2m

第148図　24・25号住居跡実測図(２)

29号住居跡（第149～151図、図版31・85・125）

位置　本住居跡は第２次調査区にあり、41―60・61グリッドに位置する。

概要　北側の低くなる緩やかな傾斜面に位置し、北側の壁面と床面の残りは悪い。

構造　床面はローム粒を主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていない。貯蔵穴としてはやや疑問ではあるが、それと思われる小穴が竈の右側に掘られている。

規模　東西3.90m、南北3.22mである。壁高は残りの良い南壁面部分で19cmである。貯蔵穴は39×24cm深さ31cmである。

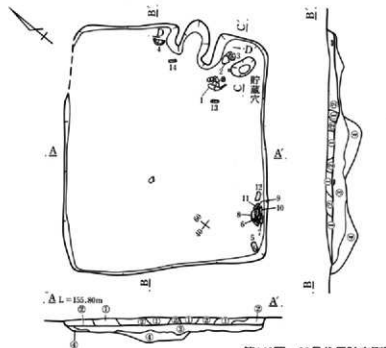
遺物　竈周辺より土師器の甕や坏が、また南壁面付近からこも編み石がまとまって出土している。

（竈）

位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造　残りが悪く袖部の下部が少し残っている。特に左袖部分は残りが悪い。左袖部分から少量の灰白色粘質土が出土しているため、一部で粘土も使用されていたようである。燃焼部付近から多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向71cm、燃焼部幅43cmである。



29号住居跡
①耕作土層　多くの白色軽石粒を含む。
②暗褐色土層　多くのローム粒を含む。
③暗褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。
④褐色土層　地山のロームを主とする。

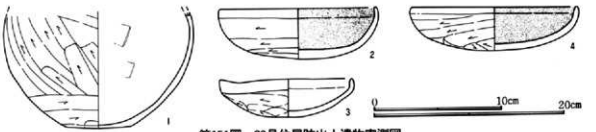
0　2m

第149図　29号住居跡実測図

竈
①暗褐色土層　多くのローム粒を含む。
②暗赤褐色土層　多くの焼土粒を含む。
③暗褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。
④灰白色粘質土層　多くの灰白色粘土を含む。
⑤褐色土層　ロームとローム粒を主とし、少量の焼土粒を含む。

0　1m

第150図　29号住居跡遺実測図



第151図　29号住居跡出土遺物実測図

29号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
151－1	土師器 甕	床面＋5 底部完形	口　－ 高　－ 底　6.8	①密、1～2㎜の長石粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③灰褐色、一部黒褐色	胴部外面ヘラ削り、砂粒は移動しているが器表面の粗れは少ない。 内面ナデにて器表面密。
151－2 85	土師器 坏	床面＋3 ほぼ完形	口 12.4 高　4.0 底　－	①密、1㎜以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。 内面に黒漆と思われる付着物が多い。
151－3 85	土師器 坏	床面＋5 ½残存	口 10.5 高　3.0 底　－	①密、1㎜以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ、砂粒の移動は少ない。 口縁部ナデ、内面ナデ、雑な感じのつくりである。 全体にゆがみが認められる。
151－4 85	土師器 坏	床面＋5 ½残存	口 13.4 高　3.4 底　－	①密、1㎜以下の小さな砂粒を含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動はとんどなく器表面比較的密。口縁部横ナデ。内側器表面密。 内面に黒漆と思われる付着物が多い。

遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)	石　材　・　備　考
5	125	こも編み石	長 14.8　幅 7.4　厚 2.6　重 440	紺雲母石墨片岩
6	125	こも編み石	長 10.5　幅 4.4　厚 3.5　重 240	流紋岩
7	125	こも編み石	長 14.0　幅 4.7　厚 2.9　重 270	緑簾緑泥片岩
8	125	こも編み石	長 16.6　幅 6.4　厚 4.0　重 670	紺雲母石墨片岩
9	125	こも編み石	長 13.4　幅 6.1　厚 2.9　重 350	緑簾緑泥片岩
10	125	こも編み石	長 13.8　幅 5.5　厚 2.4　重 300	緑簾緑泥片岩
11	125	こも編み石	長 11.4　幅 5.4　厚 2.9　重 295	紺雲母石墨片岩
12	125	こも編み石	長 12.9　幅 5.8　厚 2.9　重 370	閃緑岩
13	125	こも編み石	長 14.2　幅 5.8　厚 4.6　重 505	流紋岩
14	125	こも編み石	長 12.0　幅 5.0　厚 1.9　重 210	点紋緑泥片岩

61号住居跡（第152～156図、図版31・85・86・113・116・121・125）

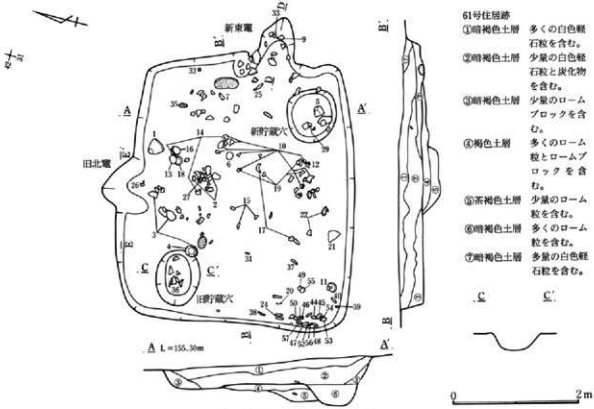
位置　本住居跡は第3次調査区にあり、42－31・32グリッドに位置する。

概要　比較的残りの良好な住居であり、電は新東竈と旧北竈が確認されている。

構造　床面はローム粒を主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていないが、新竈の右側と旧竈の左側に貯蔵穴が掘られている。

規模　東西4.22m、南北3.72mである。壁高は残りの良い南壁面部分で46cmである。新貯蔵穴は径78cm深さ31cmである。旧貯蔵穴は径85×70cm深さ26cmである。

遺物　出土量は全体に多く、多くの鉄製品と紡錘車2点が注目される。南西コーナーより大量のこも編み石が出土している。



第152図　61号住居跡実測図

（新東竈）

位置　住居東壁面南寄りに造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造　両袖部分の残りが悪く、袖石等も残っていない。左袖付近に細長い石が落ちており、天井石の可能性もあるが不明である。燃焼部付近の竈内より多くの焼土粒が出土している。

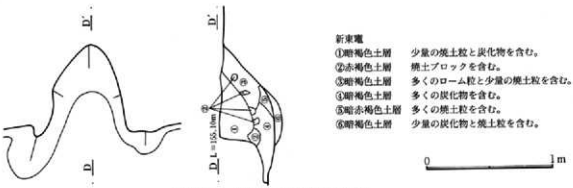
規模　煙道方向88cm、燃焼部幅59cmである。

（旧北竈）

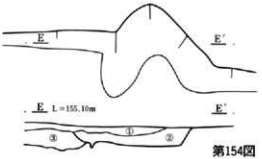
位置　住居北壁面西寄りに造られている。

構造　左袖の下部分が僅かに残っているが、大部分の袖は残っていない。床面上に位置する大部分は取り除かれていたものと思われる。壁面を掘り込んで造られた煙道部と燃焼部の一部が残っており、その部分から少量の焼土粒が出土している。

規模　燃焼部の大部分が残っていないため不明である。



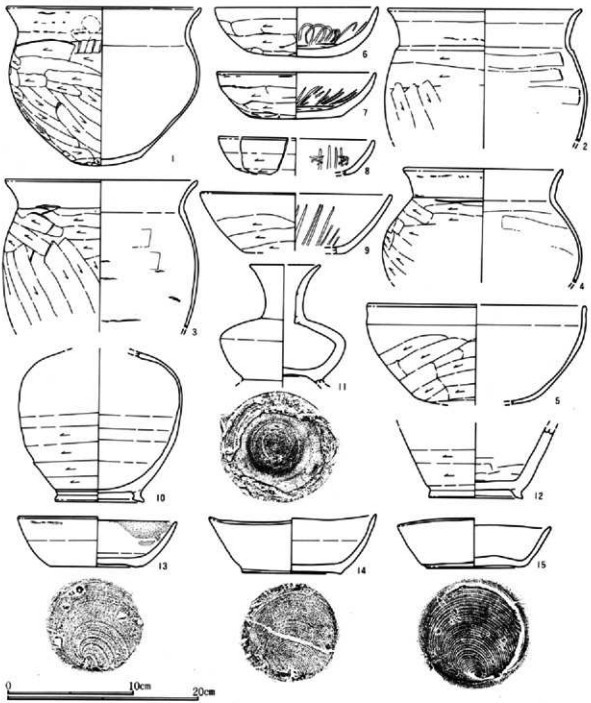
第153図　61号住居跡新東竈実測図



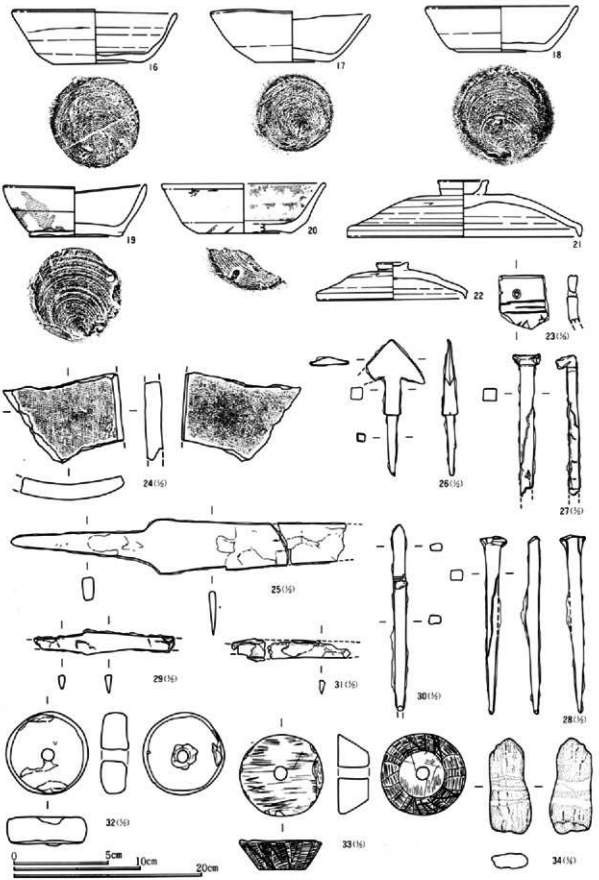
旧北竈
①暗褐色土層　多くの白色軽石粒を含む。
②暗赤褐色土層　少量の焼土ブロックとロームブロックを含む。
③暗褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。

第154図　61号住居跡旧北竈実測図

0　1m



第155図　61号住居跡出土遺物実測図（１）



第156図　61号住居跡出土遺物実測図（２）

61号住居跡出土遺物観察表

橋図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (E)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
155－1 85	土師器 甕	床面＋18 ほぼ完形	口 20.3 高 16.7 底 7.2	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
155－2 85	土師器 甕	床面－20 口縁部ノ 胴部ノ残	口 20.2 高 － 底 －	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
155－3 85	土師器 甕	床面＋21 口縁～ 胴上部ノ残	口 20.0 高 － 底 －	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
155－4 86	土師器 甕	床面＋27 口縁～胴上部 ノ残	口 16.8 高 － 底 －	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部に輪積痕がかすかに残る。 胴部内面ナデにて器表面密。
155－5 85	土師器 鉢	覆土 ノ残存	口(22.6) 高・底－	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質　③にぶい褐色	底面～胴部外面ヘラ削り。器表面全体が粗い。 内面ナデにて器表面密。
155－6 85	土師器 坏	床面直上 完形	口 12.8 高 3.9 底 －	①密、小さな雲母粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ヘラ削り。 口縁部内側に暗文、内側底面に暗文なし。 内側底面と口縁部との境にヘラの圧痕がある。
155－7 86	土師器 坏	床面＋25 ほぼ完形	口 12.6 高 3.7 底 7.2	①やや粗、2～3mmの片岩粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③黒褐色、一部橙色	底面と体部ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内側底面周辺に一条の沈線。口縁部に暗文。 内側底面に明瞭な暗文なし。
155－8	土師器 坏	覆土 破片	口(12.4) 高・底－	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質③にぶい赤褐色	底面と体部ヘラ削り。内面に放射状暗文。 内面に剥離しやすい黒色物が付着。
155－9	土師器 坏	覆土 破片	口(15.0) 高・底－	①密、1mm前後の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。体部ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面に多くの暗文あり。
155－10 86	須恵器 壺	床面＋9 ノ残存	口 － 高 － 底 9.0	①密、1mm以下の長石粒を少量含む。②還元焔、硬質、焼締 ③表面灰色、断面灰赤色	底面右回転ヘラ削り。胴下半ヘラ削り。 上半ナデで器表面密。内面ナデ。 長頸壺と思われる。肩部に多くの自然釉。
155－11 86	須恵器 長頸壺	覆土 口縁小破片 胴部完形	口 (7.2) 高 － 底 －	①密、1mm以下の小さな長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面回転ナデ。 体部～肩部～頸部外面ナデにて器表面密。 降灰により灰白色の自然釉が付着している。
155－12 86	須恵器 壺	床面＋11 底部完形 胴部ノ残存	口 － 高 － 底 9.6	①密、1mm以下の長石粒を大量に含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面回転ナデ。 高台下端部は平らで内傾している。 胴部内面ナデ。
155－13 86	須恵器 坏	床面直上 完形	口 12.6 高 3.9 底 7.5	①密、1～2mmの長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面右回転糸切り痕。 口縁部に多くの炭と思われる黒色物が付着している。 固く焼締めている。
155－14 86	須恵器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.3 高 4.5 底 8.0	①やや粗、1～3mmの長石粒を少量含む。②還元焔、硬質 ③灰オリーブ色	底面糸切り痕。 周辺部に藁の圧痕が残る。 底部中央で割れている。
155－15 86	須恵器 坏	床面＋13 完形	口 12.0 高 3.9 底 7.4	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②還元焔、硬質 ③灰色	底面右回転糸切り痕。 周辺端部は糸切り痕が2段になっている。
156－16 86	須恵器 坏	床面直上 完形	口 12.8 高 4.2 底 6.6	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面糸切り痕。 口縁部外側に輪積と思われる痕跡あり。 底部中央が割れている。
156－17 86	須恵器 坏	床面＋17 完形	口 12.4 高 4.0 底 5.8	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面右回転糸切り痕。 口縁部内外面に明瞭なロクロ痕なし。
156－18 86	須恵器 坏	床面直上 完形	口 11.8 高 3.6 底 6.4	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面糸切り痕。口縁部中央にわずかな稜線。 器肉の厚さがほぼ一定している。 内側口縁部約1/6吸炭により黒色を呈している。
156－19 86	須恵器 坏	床面＋5 ノ残存	口 11.0 高 3.9 底 7.2	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面糸切り痕。体部下端にも糸切り痕が残るため、切り直しが行なわれたものと思われる。 口縁部外側に光沢を持つ黒色物が付着している。
156－20	須恵器 坏	床面＋33 破片	口(13.0) 高 － 底 (7.4)	①密、1mm以下の小さな長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面糸切り痕。 内面に剥離しやすい黒色物が付着している。
156－21 86	須恵器 蓋	床面＋1 ノ残存	口 18.2 高 － 底 －	①密、1～3mmの赤色粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい黄橙色	天井部へラ削り。 摘はリング状である。 口縁端部は折り返しである。

61号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
156－22 86	須恵器 蓋	床面＋11 ほぼ完形	口 11.8 高 － 底 －	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②還元焔、硬質 ③灰白色	天井部回転糸切り。摘はボタン状で小さい。 口縁端部は折り返して短い。 全体に雑な感じのつくりである。
156－23 113	土師器 甕？	覆土 破片	口 － 高・底－	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質　③浅黄橙色	甕又は羽釜の口縁部破片と思われる。 1箇所表面から小さな穴が穿けられている。
156－24 113	平瓦 釘	床面＋7 破片	長 － 厚 －	①粗、1～2mmの砂粒を多く含む ②還元焔、硬質　③表面黒褐色、断面褐灰色	凹面に布目。側面ナデ。 凸面横方向のナデ。
156－25 113	鉄製品 刀子	床面＋18 破片	長 (17.7)　幅 2.9 厚 0.3～0.5　重 25.3		錆化が著しい大型の刀子である。 茎・棟区・刀区と刀身の一部が残っている。
156－26 113	鉄製品 鎌	床面＋7 ほぼ完形	長 6.2　幅 3.1 厚 0.8　重 10.6		鉄鎌の鎌身部・頭部・茎部である。一部欠損している が完形に近い。錆化は進んでいる。
156－27 113	鉄製品 釘	床面直上 ほぼ完形	長 (7.4)　幅 0.8～1.4 厚 0.6　重 15.2		鉄釘である。下半の一部が欠損している。 残存状態は比較的良好である。
156－28 113	鉄製品 釘	掘り方 ほぼ完形	長 9.4　幅 0.7～1.4 厚 0.6　重 12.9		ほぼ完形に残存している釘である。 中央部分の錆がはげしいが、他は比較的残りが良好。
156－29 113	鉄製品 刀子	貯蔵穴内 破片	長 (7.4)　幅 1.3 厚 0.3　重 7.3		刀子の茎部と刃部の破片である。棟区が明瞭に残って いる。使用により刃部が細くなっている。
156－30 113	鉄製品 鎌	掘り方 破片	長 (9.8)　幅 0.9 厚 0.4　重 8.7		鉄鎌の頭部と鎌身部と思われるが、残りが悪いため明 確でない。
156－31 113	鉄製品 刀子？	床面＋26 破片	長 (6.3)　幅 1.2 厚 0.2　重 4.5		残りが悪く明らかでないが、刀子と思われる。 刃棟と思われる部分が残っている。
156－32 116	土製品 紡錘車	覆土 完形	径 4.3/4.3　孔径 0.6 厚 1.5　重 34.0		出土例の少ない土製紡錘車である。表面全体がていね いにつくられて、部分的に光沢を持つ。
156－33 116	石製品 紡錘車	覆土 完形	径 4.4/2.4　孔径 0.7 厚 1.6　重 41.2		滑石片岩。広面中砥siで、狭面は中砥siで後磨かれて 光沢を持つ。側面中砥siで削り。
156－34 121	石製品 こも編み石	覆土 完形	長 10.0　幅 4.3 厚 1.6　重 105		絹雲母石墨片岩。縄を編んだ状態で燒されて全体が黒 色を呈している。縄の部分のみ黒色ではない。

遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)	石材・備考
35	125	こも編み石	長 12.3　幅 4.5　厚 2.3　重 210	点紋絹雲母石墨片岩
36	125	こも編み石	長 12.6　幅 4.3　厚 2.6　重 230	点紋緑泥片岩
37	125	こも編み石	長 13.4　幅 4.0　厚 1.9　重 175	絹雲母石墨片岩
38	125	こも編み石	長 12.0　幅 3.3　厚 3.3　重 180	絹雲母石墨緑泥片岩
39	125	こも編み石	長 13.3　幅 3.5　厚 2.2　重 180	緑簾緑泥片岩
40	125	こも編み石	長 11.8　幅 5.4　厚 2.0　重 180	絹雲母石墨片岩
41	125	こも編み石	長 10.9　幅 4.7　厚 2.2　重 170	絹雲母石墨片岩
42	125	こも編み石	長 12.2　幅 3.6　厚 2.5　重 155	点紋緑泥片岩
43	125	こも編み石	長 13.2　幅 5.0　厚 2.2　重 200	絹雲母石墨片岩
44	125	こも編み石	長 10.1　幅 3.5　厚 3.5　重 195	点紋絹雲母石墨片岩
45	125	こも編み石	長 10.9　幅 4.4　厚 2.3　重 170	点紋緑泥片岩
46	125	こも編み石	長 9.7　幅 4.1　厚 2.5　重 130	点紋緑泥片岩　黒斑が一部認められる。
47	125	こも編み石	長 10.4　幅 4.4　厚 2.7　重 200	緑簾緑泥片岩
48	125	こも編み石	長 11.5　幅 3.0　厚 2.2　重 115	絹雲母石墨片岩　一部炭を受けている。
49	125	こも編み石	長 9.4　幅 4.0　厚 1.9　重 125	絹雲母石墨片岩
50	125	こも編み石	長 10.5　幅 4.3　厚 1.7　重 130	絹雲母石墨片岩　黒斑が一部認められる。
51	125	こも編み石	長 12.7　幅 5.0　厚 2.2　重 165	絹雲母石墨片岩　黒斑が一部認められる。
52	125	こも編み石	長 9.8　幅 3.3　厚 1.8　重 95	絹雲母石墨片岩
53	125	こも編み石	長 10.0　幅 3.6　厚 2.6　重 120	絹雲母石墨片岩
54	125	こも編み石	長 11.6　幅 4.1　厚 1.6　重 130	絹雲母石墨片岩　黒斑が一部認められる。
55	125	こも編み石	長 11.9　幅 4.8　厚 1.6　重 140	絹雲母石墨片岩　黒斑が一部認められる。
56	125	こも編み石	長 9.8　幅 4.5　厚 2.1　重 150	絹雲母石墨片岩
57	125	こも編み石	長 10.8　幅 4.7　厚 2.3　重 175	絹雲母石墨片岩　黒斑が一部認められる。
58	125	こも編み石	長 10.4　幅 3.9　厚 2.1　重 120	絹雲母石墨片岩
59	125	こも編み石	長 10.0　幅 3.3　厚 2.1　重 120	絹雲母石墨片岩
60	125	こも編み石	長 13.4　幅 3.3　厚 3.0　重 205	絹雲母石墨片岩
61	125	こも編み石	長 9.9　幅 4.1　厚 2.3　重 150	緑簾緑泥片岩
62	125	こも編み石	長 12.0　幅 3.8　厚 2.4　重 165	絹雲母石墨片岩
63	125	こも編み石	長 12.0　幅 3.6　厚 2.2　重 155	点紋緑泥片岩
64	125	こも編み石	長 12.3　幅 5.2　厚 1.8　重 170	絹雲母石墨片岩
65	125	こも編み石	長 10.8　幅 3.2　厚 2.4　重 110	緑簾片岩

80号住居跡（第157・158図、図版31・32・86・116）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、24−32・33グリッドに位置する。

概要　東壁面中央部の床面下の部分から、多くの焼土粒が出土している。そのためこの壁面部分の近くに竈の築かれていた可能性が考えられるが、確認はできない。

構造　床面はローム粒を主とし少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。東壁面中央部に小穴が掘られており、中から少量の焼土粒が出土している。

規模　東西4.68m、南北3.60mである。壁高は残りの良い南壁面部分で30cmである。小穴は径72cm深さ52cmである。

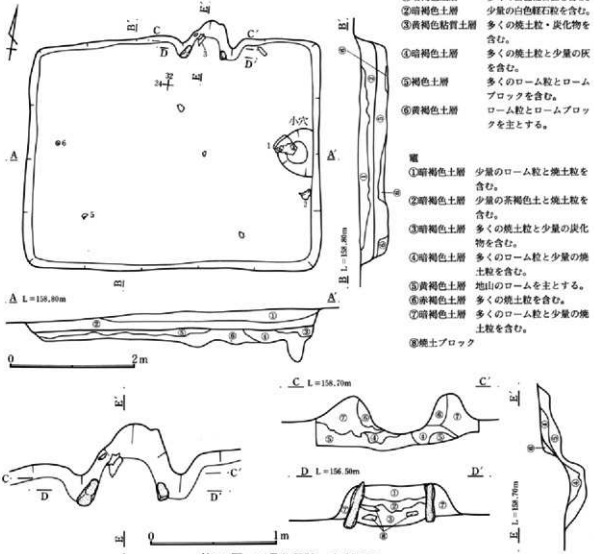
遺物　土師器の甕の破片が多く出土している。紡錘車の出土が注目される。

（竈）

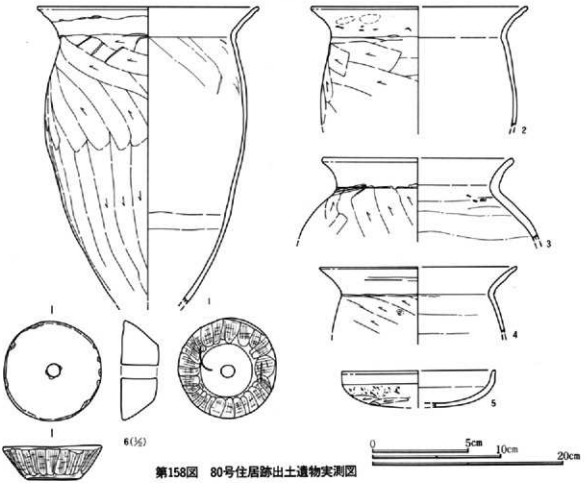
位置　住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造　残りは比較的良好で、両袖石がほぼ据えられた状態で残っている。燃焼部床面に多くの焼土粒が、また袖の上部分が焼けて焼土化している。

規模　煙道方向62cm、燃焼部幅56cmである。



第157図　80号住居跡・竈実測図



第158図　80号住居跡出土遺物実測図

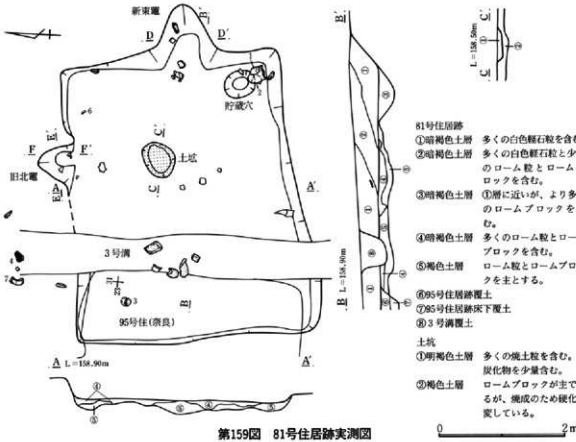
80号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
158－1 86	土師器 甕	床面＋3 口～胴上完 下部1/3残存	口 23.2 高　－ 底　－	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部中央に輪積痕。 胴内面下部に肉厚の違いを持つ接合痕。 胴中央部以下にわずかな吸炭。
158－2 86	土師器 甕	床面＋3 1/3残存	口(22.2) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部に指頭圧痕。 内面ナデにて器表面密。
158－3 86	土師器 甕	竈内 口縁1/3	口(20.0) 高　－ 底　－	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 器内が全体に厚い。
158－4 86	土師器 甕	覆土 小破片	口(20.6) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部ヘラ削りで器内を薄く仕上げている。
158－5 86	土師器 坏	床面＋2 1/3残存	口(12.0) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りで器表面がやや粗い。
158－6 116	石製品 紡錘車	床面＋7 完形	径　2.8/3.2　孔径　0.7 厚　1.9　重　72.3		広面と狭面は磨かれて光沢を持つ。側面は鉄製の工具により細長く削られており、その後磨かれている。

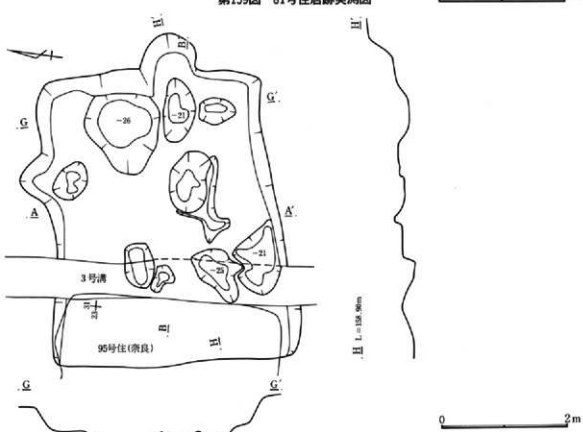
81号住居跡（第159～163図、図版32・87・113・121）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、23・24－32グリッドに位置する。

概要　西側で同じ奈良時代の95号住居と重複しており、本住居が95号住居の東側の覆土を掘り込んでいる。また2軒が重複している付近を、南北方向に掘られている3号溝により床下部分まで深く掘り込まれている。このように残りが悪く、西側部分の住居範囲は不自然であり一部誤認の可能性もある。床面



第159図　81号住居跡実測図



第160図　81号住居跡床下実測図

中央部に炉のように焼けて焼土化した部分が確認された。用途は不明である。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていない。新東竈に伴う貯蔵穴が竈の右側に掘られているが、旧北竈に伴うと思われる貯蔵穴は掘られていない。

規模　東西4.58m、南北3.52mである。壁高は残りの良い南壁面部分で37cmである。貯蔵穴は径50cm深さ25cmである。

遺物　貯蔵穴に接して甕が２点出土している。砥石と鉄鏃が注目される。

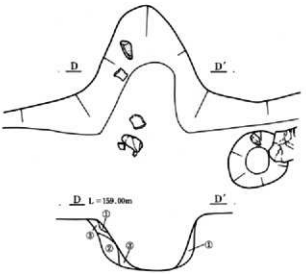
（新東竈）

位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　残りが悪く袖の一部分しか残っていない。煙道部に近い壁面が焼けて焼土化している。規模は竈全体の残りが悪いため不明である。

（旧北竈）

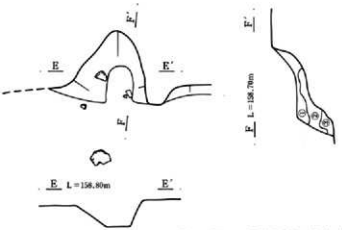
概要　住居北壁面に造られている。床面上に位置する袖と燃焼部の多くは取り除かれたためか残っていない。掘り込まれた壁面部分から多くの焼土粒が出土している。



新東竈
①暗赤褐色土層　多くの焼土粒を含む。
②暗赤褐色土層　多くの焼土粒とローム粒を含む。
③褐色土層　ロームとロームブロックを主とする。

0　1m

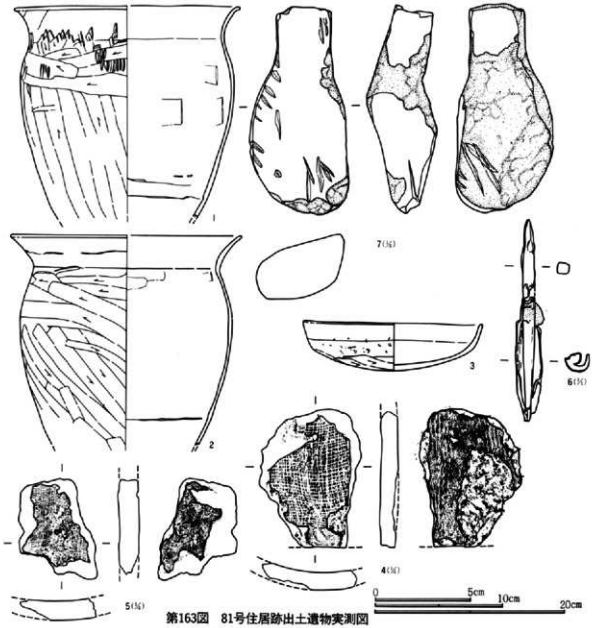
第161図　81号住居跡新東竈実測図



旧北竈
①暗褐色土層　少量の焼土粒と炭化物を含む。
②暗褐色土層　多くのローム粒と焼土粒を含む。
③褐色土層　ロームブロックを主とする。

0　1m

第162図　81号住居跡旧北竈実測図



第163図　81号住居跡出土遺物実測図

81号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
163－1 87	土師器 甕	床面直上 口～胴1/4	口(23.6) 高・底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質。③橙色	胴部外面ヘラ削り。頸部に単位の小さな数多くのヘラ削り。胴下部に肉厚の違う明瞭な接合痕。
163－2 87	土師器 甕	床面直上 口～胴1/4	口(24.4) 高・底—	①密、雲母粒と角閃石を含む ②酸化焔、硬質。　③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部に輪積痕。胴下部に肉厚の違う明瞭な接合痕。
163－3 87	土師器 坏	床面直上 完形	口 14.2 高 3.7 底 —	①密、1～2mmの黒色粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。 体部ナデ。 内面ナデにて器表固密。
163－4	平瓦	床面直上 破片	①粗、1～3mmの砂粒と赤色粒を含む ②酸化焔、硬質。　③橙色	凹面に布目。凸面縄叩き後縦方向すり消し。 1枚造りか。
163－5	平瓦	覆土 破片	①やや粗、1～2mmの砂粒を含む ②酸化焔、硬質。　③橙色	凹面に布目。 凸面縦方向のナデ。
163－6 113	鉄製品 鉄鏃	床面＋2	長　(10.2)　幅　1.3(木質部)　0.5(茎部) 厚　0.9　重　10.0	鉄鏃の茎部分と茎の打ち込まれた柄または矢柄部分と思われる。木質部分は竹類ではないと思われる。
163－7 121	石製品 砥石	床面＋6 完形	長　22.0　幅　10.4 厚　7.5　重　1400.0	3側面を砥石として使用、V字状の打痕多く残る。砥石として使用後中央部打ち欠かれ凹状を呈する。

82号住居跡（第164～166図、図版32・33・87）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、22—31グリッドに位置する。

概要　南西コーナー部分の覆土中に床面から15～18cmほどの高い位置で、平安時代の羽釜が投げ込まれたような状態で出土している。南西コーナー部分の壁面は耕作溝により削られている。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模　東西4.02m、南北3.52mである。壁高は残りの良い南壁面部分で35cmである。

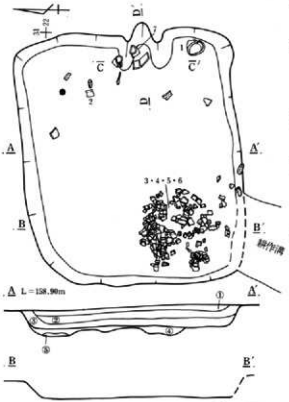
遺物　覆土中より多くの羽釜が投げ込まれたような状態で出土している。

（竈）

位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　両袖部分は残っていたが、焚口部分の袖は残りが悪い。袖石等は全く出土していない。燃焼部覆土中から多くの焼土粒が出土している。

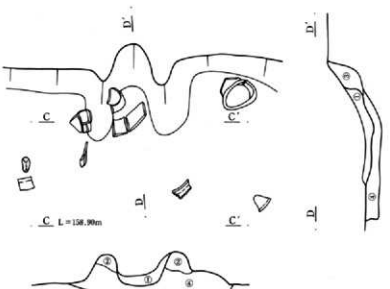
規模　煙道方向75cm、燃焼部幅46cmである。



82号住居跡
①暗褐色土層　多くの白色軽石粒を含む。
②暗褐色土層　少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
③暗褐色土層　多くのローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
④褐色土層　多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
⑤黄褐色土層　ローム粒とロームブロックを主とする。

0　2m

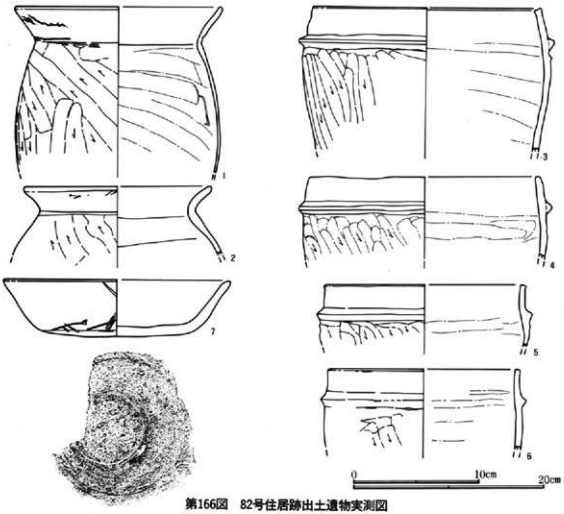
第164図　82号住居跡実測図



竈
①暗褐色土層　少量の焼土粒を含む。
②暗褐色土層　少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
③暗褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。
④暗褐色土層　多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。

0　1m

第165図　82号住居跡竈実測図



第166図　82号住居跡出土遺物実測図

82号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
166－1 87	土師器 甕	床面＋7 口1/5、胴1/4	口(22.0) 高・底－	①密、1mm以下の小砂粒多く含む ②酸化焔、硬質　③におい赤褐色	胴部ヘラ削り。鍔部に胴部ヘラ削り時に削られた凹線多くあり。内面ナデにて器表面密。
166－2	土師器 甕	床面＋3 口縁破片	口(19.8) 高・底－	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質　③橙色	胴部外面ヘラ削り、ヘラ削りは深く単位は明瞭である。
166－3 87	土師器 羽　釜	覆土 口縁～胴1/4	口(24.5) 高・底－	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質　③橙色	胴部外面ヘラ削り。鍔はやや雑に貼り付けてある。口唇部は中央がやや凹状。
166－4 87	土師器 羽　釜	覆土 口縁～胴1/4	口(24.5) 高・底－	①密、1mm内外の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質　③明褐色	胴部外面ヘラ削りでなくナデ。内面ナデにて器表面密。鍔はやや雑に貼り付けてある。
166－5	土師器 羽　釜	覆土 1/2残存	口(21.4) 高・底－	①密、1～3mmの赤色粒少量含む ②酸化焔、硬質③内面橙外面黒褐	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口唇部は平らでやや外傾している。全体に雑なつくりである。
166－6	土師器 羽　釜	覆土 口縁部1/4	口(20.4) 高・底－	①密、1～2mmの赤色粒少量含む ②酸化焔、硬質　③におい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。鍔は断面三角形で雑に貼り付けてある。口唇部は平らでやや外傾している。
166－7 87	須恵器 坏	竈内 1/2残存	口(18.0) 高　4.2 底 11.0	①やや粗、1～2mmの片岩粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	底面右回転ヘラ削り。 内側の器表面密。

84号住居跡（第167～169図、図版33・87）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、24－30グリッドに位置する。

概要　残りは比較的良好であると思われるが、調査の不備のためか良好な状態での検出はできなかった。住居の形がやや不定形の状態を呈しており、竈の残りも悪い。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘

られていない。竈右側にやや不定形な貯蔵穴が掘られている。

規模　東西3.52m、南北3.32mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で44cmである。貯蔵穴は111×82cm深さ24cmである。

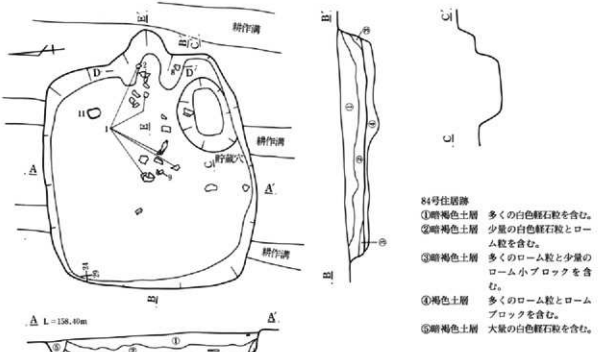
遺物　甕や坏が出土している。

（竈）

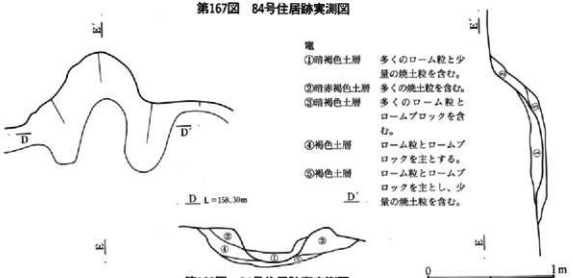
位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　両袖部分は比較的残りが良好である。燃焼部覆土中から少量の焼土粒が、袖上部と煙道部上面の一部が火を受けて多くの焼土粒が出土している。

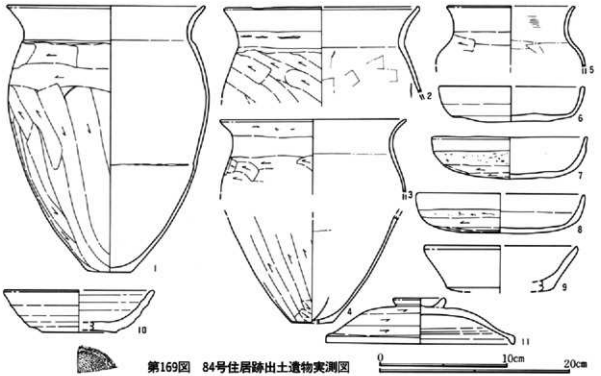
規模　煙道方向96cm、燃焼部幅58cmである。



第167図　84号住居跡実測図



第168図　84号住居跡竈実測図



第169図　84号住居跡出土遺物実測図

84号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
169－1 87	土師器 甕	床面＋9 口縁部完形 胴部½	口 20.8 高 28.1 底 4.6	①密、1㎜以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面～胴部ヘラ削り。口縁部横ナデ。 胴部内側に肉厚の違いによる接合板が明瞭に残る。 吸炭による黒褐色部分なし。未使用の甕か。
169－2	土師器 甕	床面＋13 口縁～ 胴上½	口(20.6) 高　－ 底　－	①密、1㎜以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。 頸部と口縁部に輪積痕が残る。 内面にヘラの整形痕あり。
169－3 87	土師器 甕	覆土 口縁½	口 19.8 高　－ 底　－	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
169－4	土師器 甕	掘り方 胴下半～ 底部½	口　－ 高　－ 底 (4.4)	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	底面～胴外面ヘラ削り。 内面ナデ。
169－5	土師器 小型甕	ベルト内 ½残存	口(13.6) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	外側器表面の多くが剥離していてヘラ削りの単位不明瞭。
169－6	土師器 坏	覆土 口縁～ 底部½	口(12.3) 高 3.3 底　－	①密、少量の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りにより器表面がやや粗い。
169－7	土師器 坏	ベルト内 口縁～ 底部½	口 11.4 高 2.8 底 9.3	①密、1㎜以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、ヘラの単位不明瞭。
169－8	土師器 坏	床面＋10 ½残存	口(13.4) 高 3.1 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、砂粒が少ないため粗れは少ない。
169－9	須恵器 坏	床面＋13 ½残存	口(12.2) 高　－ 底 (8.5)	①密、2～3㎜の片岩粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	底面ヘラ削り。 内面に降灰による自然釉。
169－10	須恵器 坏	覆土 小破片	口(12.0) 高 (3.3) 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焔、硬質 ③灰色	底面糸切り。
196－11 87	須恵器 蓋	床面＋9 口縁一部欠 他完形	口 15.0 高　－ 底　－	①密、1㎜以下の長石粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	口縁部以外の天井部全面右回転ヘラ削り。 摘みはリング状で短い。

88号住居跡（第170～173図、図版33・87・88・116・125）

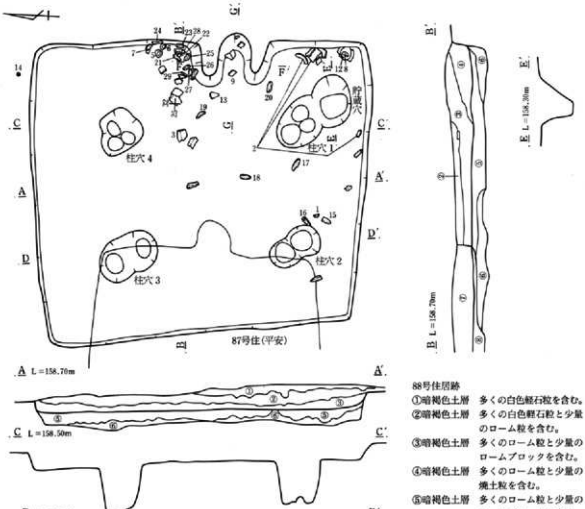
位置　本住居跡は第４次調査区にあり、25・26－32グリッドに位置する。

概要　西側で平安時代の87号住居と重複しており、87号住居により床下部分まで掘り込まれている。柱穴と貯蔵穴は掘り過ぎの所もあったらしく、良好な状態での検出はできなかった。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は４本掘られているが、１箇所に複数の跡が残っていたため、掘り直しの行われた可能性が指摘できそうである。貯蔵穴が竈の右側に掘られている。確認面は柱穴の覆土と重複しており、良好な状態で平面形の確認はできない。

規模　東西4.79m、南北5.42mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で42cmである。貯蔵穴は径76cm深さ52cmである。柱穴１は径54cm深さ67cm、柱穴２は径42cm深さ68cm、柱穴３は径53cm深さ78cm、柱穴４は径43cm深さ77cmである。

遺物　竈左袖部に接してこも編み石がまとまって出土している。紡錘車が注目される。



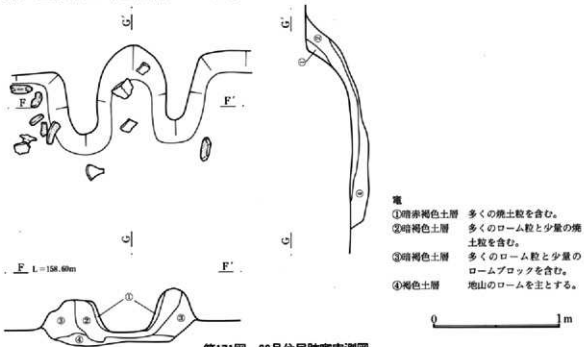
第170図　88号住居跡実測図

（竈）

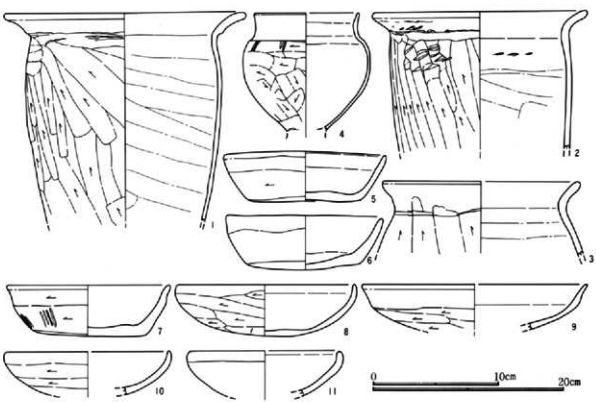
位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　両袖部分の残りは悪い。袖石等は全く出土していない。燃焼部覆土中から少量の焼土粒が、袖上部と煙道部上面の一部が火を受けて多くの焼土粒が出土している。

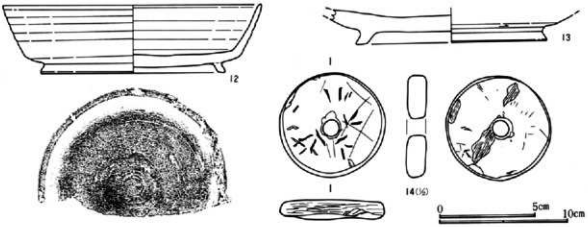
規模　煙道方向85cm、燃焼部幅51cmである。



第171図　88号住居跡竈実測図



第172図　88号住居跡出土遺物実測図（1）



第173図　88号住居跡出土遺物実測図（２）

88号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器 種別	器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
172－1 87	土師器	甕	床面＋12 口縁部½ 胴部ほぼ完	□ 25.4 高　－ 底　－	①やや粗、１～２mmの砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、多くの砂粒が移動し器表面やや粗い。 口縁部との境に段を持つ。
172－2 87	土師器	甕	床面＋21 口縁～ 胴上部½	□ 22.8 高　－ 底　－	①やや粗、２～３mmの砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り。 頸部にヘラ削り時に当ってできた工具痕を多く残す。 0.8mmの片岩粒を少量含む。
172－3 87	土師器	甕	床面＋21 口縁部½	□(21.0) 高　－ 底　－	①粗、２～３mmの片岩粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③におい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、多くの砂粒が移動し器表面が粗い。
172－4 87	土師器 台付甕	覆土 ½残存 底と台部欠	□(11.2) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③におい褐色	胴部外面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。
172－5 88	土師器	坏	床面＋20 完形	□ 12.7 高 3.8 底 9.0	①密、１～２mmの砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面幅広いヘラ削り。体部も幅広いヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面に暗文は認められない。少しゆがんでいる。
172－6 87	土師器	坏	床面＋19 完形	□ 12.2 高 4.3 底 8.8	①やや粗、１～２mmの片岩粒をやや多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面幅広いヘラ削り。体部も幅広いヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面に暗文は認められない。
172－7 87	土師器	坏	床面＋18 ほぼ完形	□ 12.9 高 4.1 底 8.8	①やや粗、１mm前後の砂粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 体部ヘラ削り。
172－8 88	土師器	坏	床面＋21 ½残存	□ 14.0 高 4.0 底　－	①密、１mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。 内側器表面密でやや光沢を持つ。
172－9 88	土師器	坏	床面直上 ½残存	□(17.7) 高　－ 底　－	①密、１mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 器表面全体が粗れている。
172－10	土師器	坏	覆内 ½残存	□(13.0) 高　－ 底　－	①密、少量の片岩粒を含む ②酸化焔、硬質 ③におい橙色	底面ヘラ削り。
172－11	土師器	坏	覆土 ½残存	□(12.0) 高　－ 底　－	①密、粉状を呈している ②酸化焔、軟質 ③橙色	底面はヘラ削りと思われるが、胎土が密で粉状を呈しているためヘラ削りの単位不明。
173－12 88	須恵器	盤	床面＋21 ½残存	□ 20.5 高 5.3 底 14.5	①密、１～２mmの長石粒を多く、５～６mmの長石粒を少量含む。 ②還元焔、硬質　③灰色	底面右回転ヘラ削り。 高台下端は平らに削られ内傾している。
173－13	須恵器	盤	床面＋21 底部¼	□　－ 高　－ 底(15.0)	①密、１mm前後の長石粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	底部中央ヘラ削り。 高台は端部をていねいに造り出している。 体部下半ヘラ削り。
173－14 116	石製品 紡錘車		覆土 完形	径　5.5　孔径　0.9 厚　0.9　重　55.5		表面全体が磨かれて黒光り。側面に「〆」が３箇所、「八」が１ヶ所線刻。裏面に発掘時のキズ３箇所有。

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)(g)				石材・備考
15	125	こも編み石	長 13.2	幅 6.9	厚 2.5	重 350	緑雲母石墨片岩
16	125	こも編み石	長 14.0	幅 5.5	厚 3.2	重 420	点紋緑雲母石墨片岩
17	125	こも編み石	長 16.3	幅 7.3	厚 2.8	重 445	緑雲母石墨片岩
18	125	こも編み石	長 16.5	幅 5.7	厚 2.4	重 350	緑雲母石墨片岩
19	125	こも編み石	長 15.8	幅 7.2	厚 2.8	重 490	石墨緑泥片岩
20	125	こも編み石	長 15.8	幅 6.4	厚 3.9	重 530	緑簾緑泥片岩
21	125	こも編み石	長 13.8	幅 6.1	厚 2.2	重 275	緑簾緑泥片岩
22	125	こも編み石	長 16.4	幅 5.4	厚 2.2	重 275	緑雲母石墨片岩
23	125	こも編み石	長 14.8	幅 5.6	厚 3.0	重 420	緑簾緑泥片岩
24	125	こも編み石	長 15.2	幅 5.0	厚 3.6	重 395	緑雲母石墨片岩
25	125	こも編み石	長 13.0	幅 7.0	厚 2.8	重 480	緑簾緑泥片岩
26	125	こも編み石	長 14.3	幅 5.1	厚 3.3	重 420	石墨緑泥片岩
27	125	こも編み石	長 15.0	幅 4.6	厚 4.1	重 385	緑雲母石墨片岩
28	125	こも編み石	長 15.1	幅 5.3	厚 2.9	重 330	緑雲母石墨片岩
29	125	こも編み石	長 15.3	幅 4.7	厚 3.3	重 355	緑雲母石墨片岩
30	125	こも編み石	長 15.5	幅 6.7	厚 2.8	重 550	点紋緑泥片岩

95号住居跡（第174～176図、図版33・34・88・113・125）

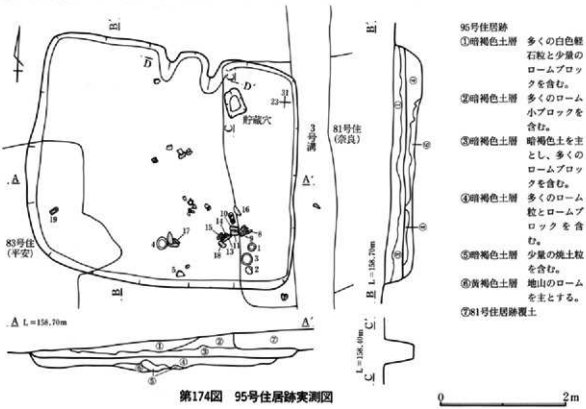
位置　本住居跡は第4次調査区にあり、23―31グリッドに位置する。

概要　南西部分で平安時代の83号住居と重複し、本住居の覆土上面を削られている。また東側を奈良時代の81号住居により覆土上面を削られている。さらに東壁面部分を3号溝により一部削られている。このように残りの悪い住居であり、竈の残りも良好ではない。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていない。竈右側にやや不定形な貯蔵穴が掘られている。

規模　東西4.06m、南北3.80mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で47cmである。貯蔵穴は径43×28cm深さ46cmである。

遺物　南東部分より土師器の坏や須恵器の蓋、こも編み石等が出土している。



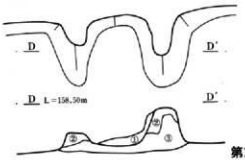
第174図　95号住居跡実測図

（竈）

位置　住居北壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　袖部分は残っているが住居同様に残りが悪く、左袖部の上部分は残っていない。また壁上面を掘り込んだ煙道部はほとんど残っていない。燃焼部に少量の焼土粒が出土している。

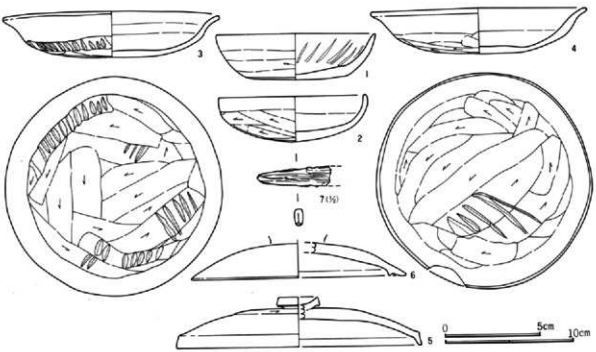
規模　煙道方向54cm、燃焼部幅52cmである。



竈
①暗褐色土層　少量の焼土粒と少量の炭化物を含む。
②暗褐色土層　多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
③暗褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。

0　1m

第175図　95号住居跡竈実測図



第176図　95号住居跡出土遺物実測図

95号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
176－1 88	土師器 坏	床面＋11 完形	口 12.4 高 3.6 底 －	①密、1～2mmの砂粒を多く含む ②酸化焔、軟質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面粗れているが多くの暗文が描かれている。 内側底面に暗文なし。
176－2 88	土師器 坏	床面＋11 口縁一部欠 他完形	口 11.5 高 3.5 底 －	①密、1～2mmの砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラナデ、器表面やや粗い。 内面ナデにて器表面密。 器内が全体的に厚い。
176－3 88	土師器 坏	床面＋13 完形	口 17.0 高 3.6 底 －	①密、1～2mmの砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
176－4 88	土師器 坏	床面＋2 ほぼ完形	口 16.9 高 3.5 底 －	①密、1～2mmの砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れ少ない。 内面ナデにて器表面密。

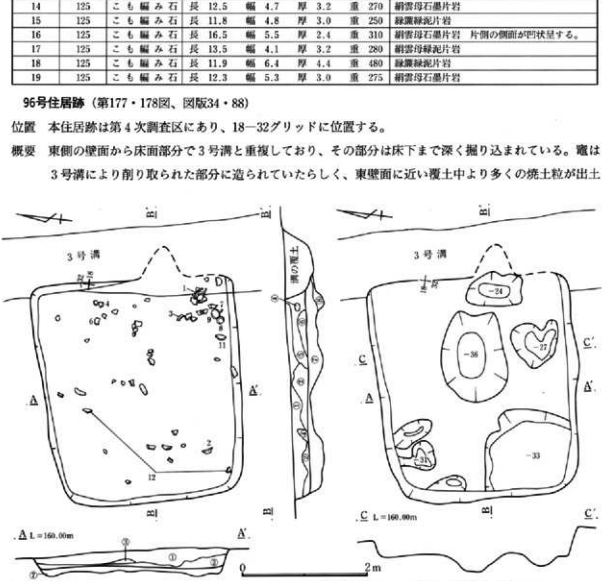
挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
176－5	須恵器 蓋	床面＋2 口縁部1/4	口(19.2) 高(4.0) 底　—	①やや粗、2～3mmの片岩粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	天井部右回転ヘラ削り。 摘みは小さく端部の整形はていねいである。
176－6	須恵器 蓋	掘り方覆土 口縁部1/4	口(16.8) 高　— 底　—	①密、2～3mmの少量の片岩粒を含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	天井部にヘラ削りなし。 カエリは先端部が鋭利になっている。 少しゆがんでいる。
176－7 113	鉄製品 刀　子	掘り方	長　(3.8)　幅　1.0 厚　0.6　重　4.3		刀子の茎部分と思われる。 表面に木質部がわずかに残っている。

遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)	石材・備考
8	125	こも編み石	長 14.0　幅 4.5　厚 4.0　重 380	点紋緑泥片岩
9	125	こも編み石	長 14.7　幅 4.8　厚 3.7　重 390	絹雲母石墨緑泥片岩
10	125	こも編み石	長 13.6　幅 5.8　厚 2.9　重 360	緑簾緑泥片岩
11	125	こも編み石	長 13.0　幅 5.6　厚 2.1　重 250	緑簾緑泥片岩
12	125	こも編み石	長 13.0　幅 6.6　厚 2.4　重 300	点紋絹雲母石墨片岩
13	125	こも編み石	長 15.2　幅 6.4　厚 2.5　重 310	絹雲母石墨片岩
14	125	こも編み石	長 12.5　幅 4.7　厚 3.2　重 270	絹雲母石墨片岩
15	125	こも編み石	長 11.8　幅 4.8　厚 3.0　重 250	緑簾緑泥片岩
16	125	こも編み石	長 16.5　幅 5.5　厚 2.4　重 310	絹雲母石墨片岩　片側の側面が凹状呈する。
17	125	こも編み石	長 13.5　幅 4.1　厚 3.2　重 280	絹雲母緑泥片岩
18	125	こも編み石	長 11.9　幅 6.4　厚 4.4　重 480	緑簾緑泥片岩
19	125	こも編み石	長 12.3　幅 5.3　厚 3.0　重 275	絹雲母石墨片岩

96号住居跡（第177・178図、図版34・88）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、18－32グリッドに位置する。

概要　東側の壁面から床面部分で3号溝と重複しており、その部分は床下まで深く掘り込まれている。竈は3号溝により削り取られた部分に造られていたらしく、東壁面に近い覆土中より多くの焼土粒が出土



96号住居跡
①暗褐色土層　少量の白色軽石粒とローム粒を含む。
②暗褐色土層　少量の炭と焼土粒を含む。
③暗赤褐色土層　多くの焼土ブロック・焼土粒と少量の炭を含む。
④褐色土層　ローム粒を主とする。
⑤暗赤褐色土層　暗褐色土中に少量の焼土粒を含む。
⑥暗褐色土層　少量の焼土粒と炭を含む。
⑦茶褐色粘質土層　非常に粘性が強い。多くの焼土粒と少量の炭化物を含む。
⑧暗褐色土層　ロームブロックを主とし、少量の焼土粒を含む。

第177図　96号住居跡・床下実測図

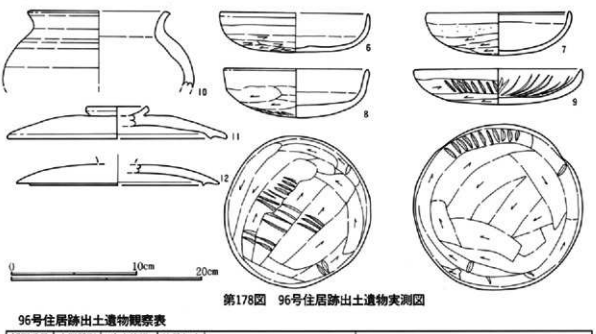
している。

構造　床面はローム粒と粘性の強い茶褐色土を主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模　東西3.48m、南北3.18mである。壁高は残りの良い南壁面部分で40cmである。

床下　床下部分が多くの土坑が掘られている。床面からの深さを数字で記した。

遺物　土師器の甕や坏、須恵器の甕や蓋が出土している。



第178図　96号住居跡出土遺物実測図

96号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
178－1	土師器 壺	床面直上 口縁1/4 胴部1/4	口(20.0) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 口縁部中段に輪積痕。
178－2	土師器 壺	床面＋20 口縁部1/4 胴部1/4	口(20.4) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部ヘラ削り、砂粒の移動ほとんどなく器表面密。
178－3	土師器 小型甕	床面＋6 1/4残存	口(11.5) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部にヘラの打痕が多く残る。
178－4	土師器 坏	床面＋19 1/4残存	口(12.4) 高　－ 底　－	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面に４～５本１組の暗文あり。
178－5	土師器 坏	覆土 1/4残存	口(14.0) 高　－ 底　－	①密、黒色の雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
178－6 88	土師器 坏	床面＋18 口縁部1/4 底部1/4	口(12.0) 高 3.1 底　－	①密、1mm以下の砂粒と角閃石を含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。

96号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (実)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
178—7 88	土師器 坏	床面+7 1/2残存	口 11.3 高 3.5 底 —	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色、一部黒色	底面弱いヘラ削り、削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。 内面約1/3炭素により黒色を呈している。
178—8 88	土師器 坏	床面+10 ほぼ完形	口 11.4 高 3.8 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量、雲母粒を多く含む。　②酸化焔、硬質　③赤褐色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。 固い焼成である。
178—9 88	土師器 坏	床面+1 ほぼ完形	口 13.4 高 2.8 底 —	①密、1mm以下の小さな雲母粒を大量に含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面密。 内面に放射状の暗文あり。
178—10	須恵器 壺	覆土 口縁1/4	口(14.0) 高 — 底 —	①密、1～2mmの長石粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	口唇部は平らでやや外傾している。
178—11	須恵器 蓋	床面+2 1/2残存	口(17.4) 高 — 底 —	①密、1～2mmの片岩粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	天井部ナデ、天井部内側不定方向ナデ。 摘みは高く整形がていねいである。
178—12	須恵器 蓋	床面+10 口縁1/4	口(16.0) 高 — 底 —	①粗 ②還元焔、硬質 ③表面灰色、断面灰赤色	カエリは口縁下端より下方へ出ている。 天井部にヘラ削りなし。 固く焼締めであり、全体に少しゆがんでいる。

110号住居跡（第179・180図、図版34・88）

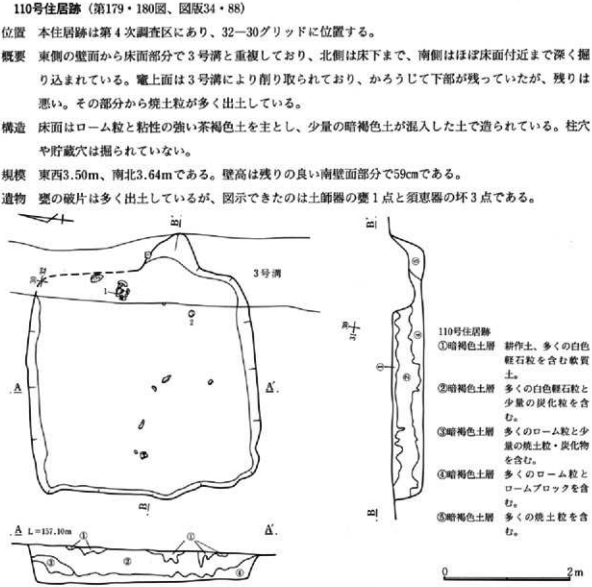
位置　本住居跡は第4次調査区にあり、32—30グリッドに位置する。

概要　東側の壁面から床面部分で3号溝と重複しており、北側は床下まで、南側はほぼ床面付近まで深く掘り込まれている。竈上面は3号溝により削り取られており、かろうじて下部が残っていたが、残りは悪い。その部分から焼土粒が多く出土している。

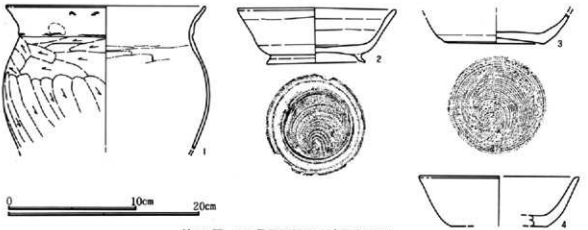
構造　床面はローム粒と粘性の強い茶褐色土を主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模　東西3.50m、南北3.64mである。壁高は残りの良い南壁面部分で59cmである。

遺物　甕の破片は多く出土しているが、図示できたのは土師器の甕1点と須恵器の坏3点である。



第179図　110号住居跡実測図



第180図　110号住居跡出土遺物実測図

110号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
180－1 88	土師器 壺	床面＋12 口縁部⅓ 胴部⅓	口 21.2 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	胴部へラ削り。 口縁部に指頭圧痕が残る。 内面ナデにて器表面密。全体に少しゆがんでいる。
180－2 88	土師器 台付坏	床面直上 口縁部⅓ 底部完形	口 12.6 高 4.4 底 7.9	①密、1mm以下の長石粒を大量に含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面右回転糸切り痕。 高台は細く端部をていねいに削り出している。
180－3	須恵器 坏	掘り方 底部完形	口　－ 高　－ 底 7.6	①粗、2～3mmの片岩粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面左回転糸切り痕。 底部中央が薄く盛り上がっている。
180－4	須恵器 坏	床面＋31 ½残存	口(12.7) 高　－ 底 (7.5)	①粗、2～4mmの片岩粒を少量含む。②還元焔、硬質 ③暗オリーブ灰色	底面糸切り。

112号住居跡（第181～183図、図版34・35・88・89・113・122）

位置　本住居跡は第４次調査区にあり、39―32・33グリッドに位置する。

概要　覆土全体から多くの炭化物が出土しているため、調査開始段階では焼失住居と考え調査を進めた。しかし床面にはまとまった炭化材は出土せずに、覆土中にバラバラな状態で出土しているため、焼失住居ではないと思われる。少量であるが焼土粒も含まれている。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模　東西3.99m、南北4.45mである。壁高は残りの良い南壁面部分で35cmである。

床下　床下中央部に、径120cm深さ27cmの床下土坑が掘られている。その他にも浅い掘り込みが掘られている。

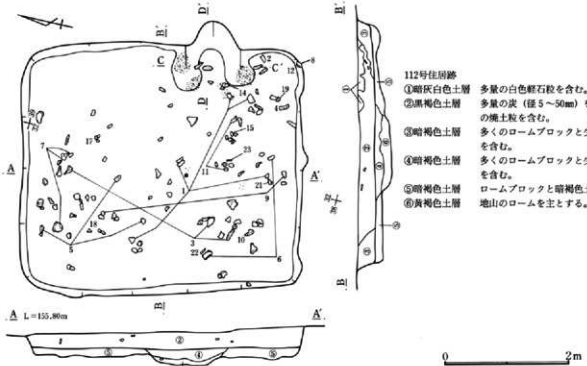
遺物　甕・鉢・坏・鉄等が多く出土している。

（竈）

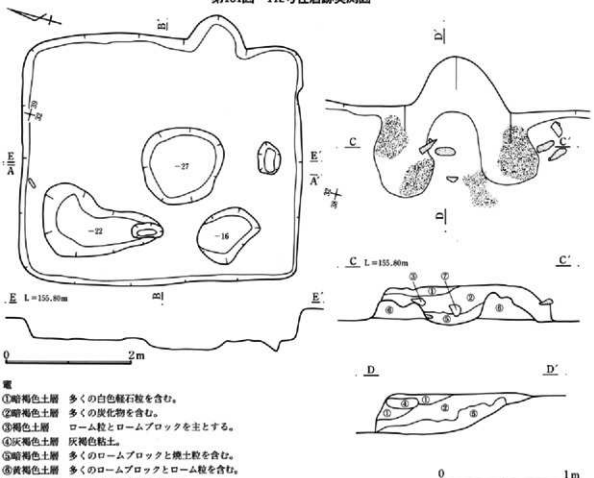
位置　住居東壁面南寄りに造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　袖部は部分的に残っていたが残りが悪く、袖に使われたと思われる灰褐色粘土の残存状況から一部は推定復元した。この粘土の散乱状態から調査担当は竈が意識的に壊されていると指摘している。燃焼部付近より多くの焼土粒が出土している。

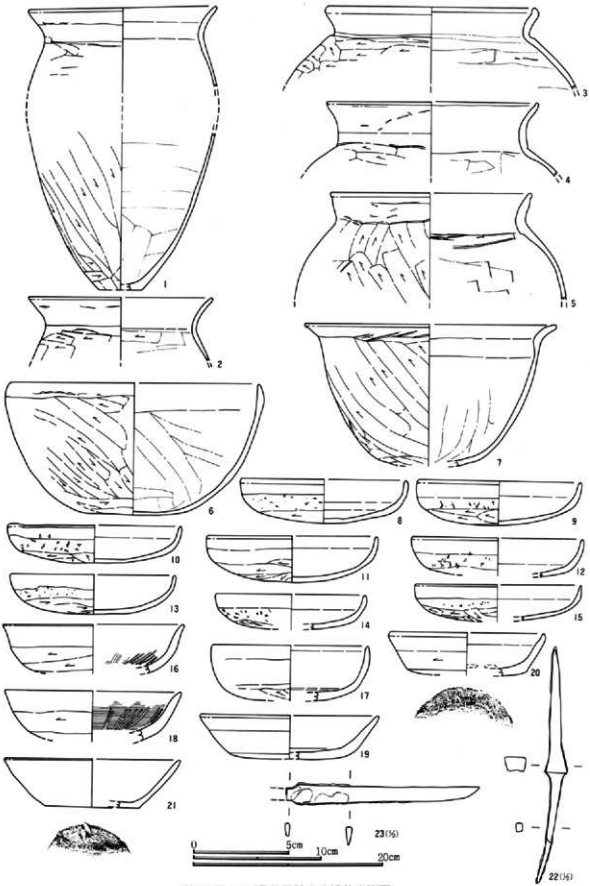
規模　煙道方向104cm、燃焼部幅48cmである。



第181図　112号住居跡実測図



第182図　112号住居跡床下・竈実測図



第183図　112号住居跡出土遺物実測図

112号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
183－1 88	土師器 甕	床面＋9 口縁部½ 胴下半½	口 20.0 高 — 底 (4.4)	①密、1㎜以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	底面と胴部外面へラ削り。口縁部に輪積の痕跡あり。 胴部内面ナデにて器表面密。 口縁部と胴下半部国上復元。
183－2 88	土師器 甕	床面＋16 ½残存	口(19.5) 高・底—	①密、1㎜以下の小砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面へラ削り。内面ナデにて器表面密。 全体に器肉が厚い。
183－3 88	土師器 甕	床面＋4 口縁部½ 胴上部½	口 22.7 高 — 底 —	①密、2～3㎜の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③明褐色	胴部外面へラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。 口唇端部は内厚でやや内傾する。
183－4 88	土師器 甕	床面＋20 口縁部½ 胴部½	口(22.6) 高 — 底 —	①密、1㎜以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へラ削り。 内面ナデにて器表面密。 口縁部は一度直立後外反する。
183－5 88	土師器 甕	床面＋4 口縁½	口(21.4) 高・底—	①密、1㎜前後の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へ削り、砂粒の移動は少ないが胎土がササラ状になっている。
183－6 88	土師器 鉢	床面＋10 口縁部½ 底部½	口(25.6) 高 13.8 底 —	①やや粗、2～4㎜の砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焔、硬質 ③外面にぶい赤褐色、内面赤色	底面と胴部外面へラ削り。 器表面の粗れは少ないが、多くの砂粒が目立つ。 内面ナデにて器表面密。
183－7 89	土師器 鉢？	床面＋5 ½残存	口(26.4) 高・底—	①密、2～3㎜の多くの赤色粒を含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部へラ削り。口縁部にヘラが当たって削られた痕跡が多く残る。内面ナデにて器表面密。
183－8 88	土師器 坏	床面＋7 ½残存	口(13.0) 高 3.5 底 —	①密、1㎜以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面へラ削り、砂粒の移動ほとんどなく器表面の粗れは少ない。 内側器表面密。
183－9 88	土師器 坏	床面＋14 ½残存	口 12.8 高 3.5 底 —	①密、1㎜以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面へラ削り、砂粒の移動は少なく器表面の粗れは少ない。 内側器表面密。
183－10 88	土師器 坏	床面＋14 ½残存	口(13.0) 高 2.9 底 —	①密、1㎜以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	底面へラ削り。 口縁部と底部との間ナデで図のような小さな凹部を多く持つ。全体にゆがんでいる。
183－11 88	土師器 坏	床面＋23 ½残存	口(13.5) 高 3.6 底 —	①密、1㎜以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	底面へラ削り、多くの小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。 部分的に黒斑が残る。
183－12 88	土師器 坏	床面＋7 ½残存	口(13.2) 高・底—	①密、1㎜以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面へラ削り、削りの単位不明瞭。 体部ナデ。内面ナデにて器表面密。
183－13 88	土師器 坏	覆土 ½残存	口(13.0) 高 3.2 底 —	①密、1㎜以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③表面黒色、断面灰黄褐色	底面へラ削り。体部ナデ。 口縁部横ナデ。内面ナデにて器表面密。 内面に光沢を持つ。
183－14 88	土師器 坏	床面＋15 ½残存	口(12.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焔、硬質 ③内面黒色、外面灰色と褐灰色	全体に灰色～黒褐色を呈しており、須恵器を思わせる。 内面黒色を呈し光沢を持つ。
183－15 89	土師器 坏	床面＋18 ½残存	口(13.4) 高・底—	①密、1㎜以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面へラ削り。体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。
183－16 89	土師器 坏	覆土 ½残存	口(14.2) 高・底—	①密、1㎜前後の砂粒を少量含む ②還元焔、軟質 ③灰色	底面へラ削り。胎土が密で削りの単位不明瞭。内面に多くの暗文。還元で焼成させめずらしい例である。
183－17 89	土師器 坏	床面＋3 ½残存	口(12.2) 高・底—	①密、1㎜前後の赤色粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	底面及び体部外面へラ削りであるが、胎土が密で削りの単位不明瞭。内面に暗文なし。
183－18 89	土師器 坏	床面＋9 ½残存	口(13.9) 高 — 底 —	①密、1～2㎜の砂粒をわずかに含む。 ②還元焔、硬質 ③灰黒色	底面と体部外面へラ削り。 内側体部～口縁部全面へラ磨き後暗文。 土師器であるが、還元焔焼成で須恵も認められる。
183－19 89	土師器 坏	床面直上 ½残存	口(14.2) 高・底—	①密 ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	器表面が粗れており整形方法不明。 内側の暗文は確認できなかった。
183－20 89	須恵器 坏	覆土 ½残存	口(12.2) 高 — 底 (9.5)	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焔、軟質 ③灰色	底面へラ削り。体部下半へラ削り。内面ナデ。 内側底面周辺部に指頭圧痕あり。 色調以外は土師器の特徴を持つ。
183－21 89	須恵器 坏	床面＋10 口縁部½ 底部小破片	口(14.0) 高 — 底 (7.4)	①特に密、1㎜以下の小さな石英粒を多く含む。 ②還元焔、硬質 ③灰色	底面は小破片であるが、ヘラ切りと思われる。
183－22 113	鉄製品 鉄鏃	床面＋11 ほぼ完形	長 12.5 厚 0.8	幅 1.3 重 12.7	鉄鏃の茎部・関部・頸部と思われる。頸部は太く鏃身部分に近づくにつれて急に細くなる。残りは良好。
183－23 113	鉄製品 刀子	床面＋10	長 10.3 厚 0.3	幅 1.1 重 9.4	刀子の茎の一部と棟区・刃区・刀身部分である。 錆が少なく刀身の先の部分が今でも使えそうである。

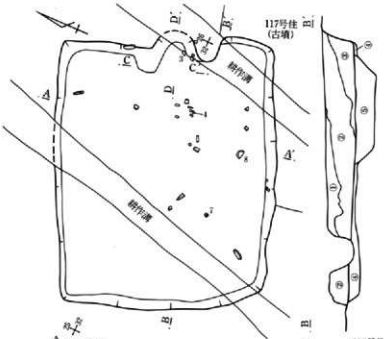
116号住居跡（第184～186図、図版35・89）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、32・33－26グリッドに位置する。

概要　南東部分で古墳時代の117号住居と重複しており、本住居が117号住居を床下部分まで掘り込んでいる。北西部分の残りが悪く、壁面はわずかしか残っていない。南西コーナー付近を耕作溝により掘り込まれ竈の多くが壊されている。耕作溝は西側部分にも掘られており、一部床面まで掘り込んでいる。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模　東西4.29m、南北3.51mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で51cmである。



第184図　116号住居跡実測図

床下　床面中央部の床下に径120cm深さ27cmの床下土坑が掘られていた。その他にも浅い掘り込みが掘られている。

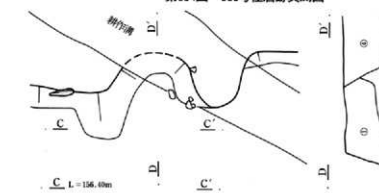
遺物　破片は多い。土師器の甕・坏、須恵器の坏・蓋が出土している。

（竈）

位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　耕作溝により右袖部分から燃焼部や煙道部までの多くの部分が削られ残りが悪い。左袖部分が僅かに残っているのが土層断面で確認できる。平面図ではそれを元に一部復元して作成している。燃焼部覆土中より多くの焼土粒と焼土ブロックが出土している。

規模　煙道方向68cm、燃焼部幅は不明である。



第185図　116号住居跡竈実測図

第186図　116号住居跡出土遺物実測図

116号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
186－1	土師器 小型甕	覆土 口縁破片	口(14.0) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	肩部へラ削り。 口縁部横ナデ、口縁部に輪積痕が残る。 丸胴を呈する。
186－2	土師器 小型甕	掘り方 破片	口(13.0) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の特に小さな砂粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部へラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。 外面に多くの黒斑が認められる。
186－3 89	土師器 坏	床面＋6 ½残存	口 14.0 高 4.0 底 7.8	①密、1～2mmの砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面と体部外面へラ削り。内面に暗文が描かれていたが、器表面が粗れておりほとんど残っていない。底面の一部に吸炭あり。
186－4	土師器 坏	床面＋20 ½残存	口(13.0) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を多く、2～3mmの赤色粒少量含む。　②酸化焔、硬質　③橙色、底面黒色	底面と体部へラ削り。 内面に多くの暗文。 内側底面と体部との境に一本の沈線が一周している。
186－5	土師器 坏	覆土 小片	口(12.3) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面へラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。
186－6	土師器 坏	覆土 ½残存	口(13.0) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	底面へラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表摺密。器表面やや光沢を持つ。 口縁部外面に黒斑あり。
186－7	須恵器 坏	床面＋3 ½残存	口(12.8) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焔、硬質 ③灰色	底面と体部下端回転ヘラ削り。
186－8 89	須恵器 坏	床面＋11 口縁部½ 他½	口(12.6) 高 3.0 底 7.2	①やや粗、2～3mmの長石粒を含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	底部中央右回転糸切り痕。 周辺部回転ヘラ削り。 底部の器肉が厚い。
186－9 89	須恵器 蓋	掘り方覆土 ½残存 摘み完形	口(12.6) 高　－ 底　－	①密、1～2mmの砂粒を少量含む ②還元焔、硬質 ③灰色	天井部へラ削り。摘みはリング状で口縁端部は短く折られている。
186－10	須恵器 蓋	掘り方覆土 小破片	口　－ 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②還元焔、硬質 ③灰色	天井部回転糸切り痕。 周辺部右回転ヘラ削り。 ×の線刻による窯印あり。

120号住居跡（第187・188図、図版35・89）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、35－33・34グリッドに位置する。

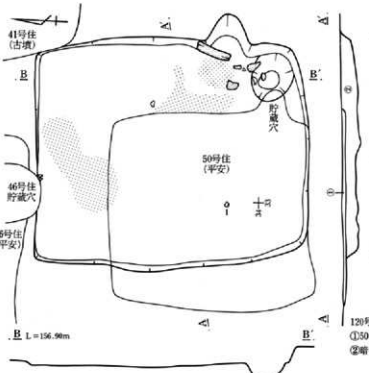
概要　住居の南西側約2/3で平安時代の50号住居と重複しており、50号住居により覆土上面を削り取れらている。50号住居は竈と住居の輪郭がはっきりしないことと、平安時代の遺物も少ないことから、存在に疑問の余地もある。本住居からは明らかな奈良時代の遺物が出土している。竈周辺や北側の床面付近か

ら多くの焼土粒が出土している。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていないが、竈右側に貯蔵穴が掘られている。

規模　東西3.55m、南北4.35mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で31cmである。貯蔵穴は径76cm深さ31cmである。

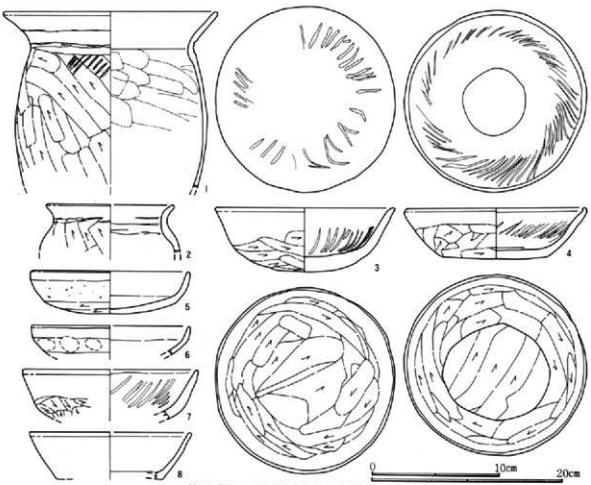
遺物　破片は少ないが、甕や完形の坏が出土している。



120号住居跡
①50号住居跡覆土
②暗褐色土層　多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。

第187図　120号住居跡実測図

0　2m



第188図　120号住居跡出土遺物実測図

（竈）

位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　焚口部分に天井石が落ちた状態で出土している。焚口付近に他の石も出土しているが、袖石と思われる石はない。袖部はほとんど残っていない。焚口付近の床面から多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向58cm、燃焼部幅は不明である。

120号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
188－1 89	土師器 甕	床面＋8 口縁～ 胴上半1/4	口 22.2 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③におい褐色	胴部外面ヘラ削り。 頸部に胴部ヘラ削り時に削られた凹線あり。 内面ナデにて器表面密。
188－2	土師器 小型甕	覆土 口縁部1/4	口(13.2) 高　－ 底　－	①密、1mm前後の砂粒と小さな雲母粒を含む。 ②酸化焔、硬質 ③内面灰黄褐色、外面赤褐色	胴部外面ヘラ削り、ヘラの工具痕が胴部に残る。 口縁部横ナデ。 3mm×7mmの大きな片岩粒を1個含む。
188－3 89	土師器 坏	覆土 完形	口 14.0 高 5.0 底　－	①密、1mm前後の砂粒と片岩粒を大量に含む。 ②酸化焔、硬質 ③におい黄橙色	底面と体部ヘラ削り。内側器表面は粗れているが、多くの暗文が確認できる。 器表面の粗れている内面に多くの砂粒が目立つ。
188－4 89	土師器 坏	覆土 完形	口 14.6 高 4.0 底　－	①密、多量の1mm以下の小さな雲母粒を含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 口縁端部は内傾している。内面に放射状暗文。 黒斑全くなし。
188－5 89	土師器 坏	覆土 ほぼ完形	口 12.4 高 3.4 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
188－6	土師器 坏	覆土 口縁部1/4	口(12.4) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③におい橙色	底面ヘラ削りであるが、ヘラの単位不明瞭。 口縁部下に指頭圧痕あり。 少しゆがんでいる。
188－7	土師器 坏	覆土 口縁部破片	口(13.6) 高　－ 底　－	①やや粗、2～3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	体部細かなヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面に多くの暗文が認められる。
188－8	須恵器 坏	覆土 口縁部小片	口(12.6) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焔、硬質 ③灰色	底面ヘラ削り。 口縁部右回転ロクロ目。

131号住居跡（第189・190図、図版35・36）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、25―27グリッドに位置する。

概要　住居の残りは比較的良好であるが、竈の残りは悪い。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本と貯蔵穴が竈の右側に掘られている。竈の左側にも貯蔵穴にも似た掘り込みが認められる。貯蔵穴2と呼称して扱う。

規模　東西4.18m、南北4.58mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で34cmである。貯蔵穴1は径62cm深さ62cm、貯蔵穴2は径56cm深さ55cmである。柱穴1は径40cm深さ61cm、柱穴2は径48cm深さ72cm、柱穴3は径46cm深さ52cm、柱穴4は径46cm深さ53cmである。

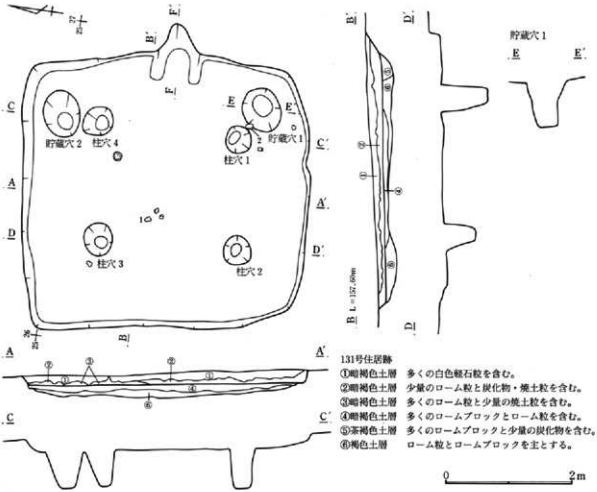
遺物　出土量が少なく、図示できたのは坏2点である。

（竈）

位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　両袖部はほとんど残っていないが、床面に近い下部分の痕跡から両袖部分の復元ができた。床面下に位置する燃焼下部から多くの焼土粒が出土している。竈周辺の残りは良好であるのに対し、竈本体の残りはこのように悪いため、竈の袖をはじめ下部分の多くは最終段階で取り壊されていたのではないだろうか。

規模　煙道方向93cm、燃焼部幅42cmである。



第189図　131号住居跡実測図

第190図　131号住居跡竈・出土遺物実測図

131号住居跡出土遺物観察表

掲図番号 図版番号	土器 器種	種別 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
190－1	土師	器 坏	床面＋12 ⅓残存	口(13.0) 高　－ 底　－	①密、1mm前後の赤色粒と2～3mmの片岩粒を少量含む。　②酸化焔、硬質　③橙色	底面と体部外面へラ削り。 口縁部内側に多くの暗文。
190－2	土師	器 坏	床面＋7 口縁部⅓ 底部⅓	口(13.1) 高　－ 底　－	①密、1mm前後の砂粒を多く含む　②酸化焔、硬質　③にぶい橙色	底面へラナデ、砂粒の移動は少ない。 口縁部横ナデ。 内側底面中央部にヘラの圧痕あり。

136号住居跡（第191～193図、図版36・89・116）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、18・19－27・28グリッドに位置する。

概要　西側部分で平安時代の138号住居と重複しており、138号住居により床面近くまでの覆土が取り除かれている。細長く小さな住居である。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴や貯蔵穴は掘られていない。

規模　東西3.46m、南北2.38mである。壁高は残りの良い東壁面部分で44cmである。

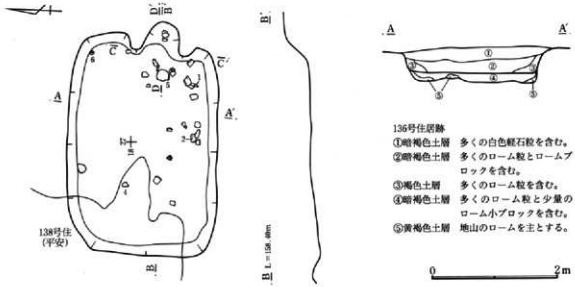
遺物　破片は多いが、図示できた遺物は少ない。紡錘車の出土が注目される。

（竈）

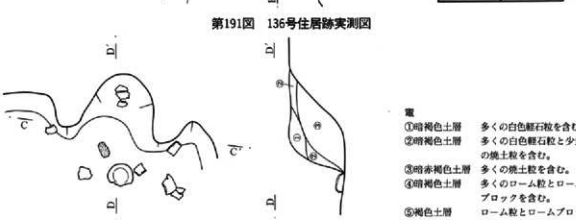
位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　小さな住居であるが、竈は大きな住居同様に造られている。壁面に近い両袖部の残りは良好であるが、焚口付近の袖はほとんど残っていない。燃焼部覆土中から多くの焼土粒が出土している。

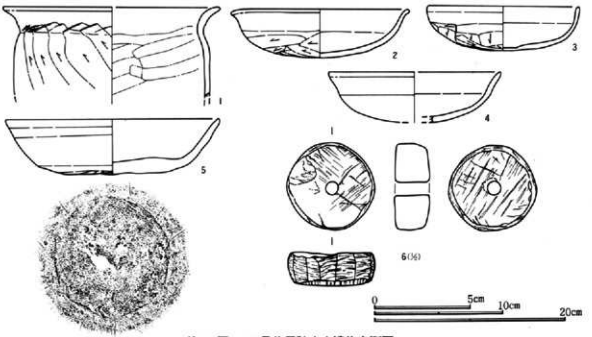
規模　煙道方向60cm、燃焼部幅56cmである。



第191図　136号住居跡実測図



第192図　136号住居跡竈実測図



第193図　136号住居跡出土遺物実測図

136号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
193－1 89	土師器 甕	床面＋2 ½残存	口(23.0) 高　－ 底　－	①密、2～3㎜の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにより器表面密。
193－2 89	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 14.3 高 3.8 底　－	①密、1㎜以下の小さな砂粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面の粗れは少ない。 口唇部が丸く仕上げられている。
193－3 89	土師器 坏	覆土 ½残存	口 11.9 高 3.5 底　－	①密、少量の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒が移動し器表面やや粗い。
193－4 89	土師器 坏	床面直上 ½残存	口(13.6) 高　－ 底　－	①粗、1㎜以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	器表面全体が斑点状に剥離しており整形方法不明。
193－5 89	須恵器 坏	床面＋2 口縁一部欠 他完形	口 16.3 高 4.3 底 9.3	①やや粗、1～3㎜の長石粒を大量に含む。②還元焔、硬質、焼締 ③黄灰色	底面ヘラ切り、中央部に凸状部。 周辺部ヘラ削り。 底部の器肉が厚い。
193－6 116	石製品 紡錘車	覆土	径　4.6 厚　1.8	孔径　0.7 重　65.1	滑石片岩。全面荒紙削りにより仕上げられている。やや雑な感じのつくりである。

159号住居跡（第195～196図、図版36・89）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、30・31－24グリッドに位置する。

概要　北西壁面部分で古墳時代の161号住居と重複しており、本住居が161号住居の壁面と床面を掘り込んでいる。重複部分はわずかである。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていないが、貯蔵穴が竈右側に掘られている。

規模　東西2.74m、南北3.96mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で23cmである。貯蔵穴は径74cm深さ21cmである。

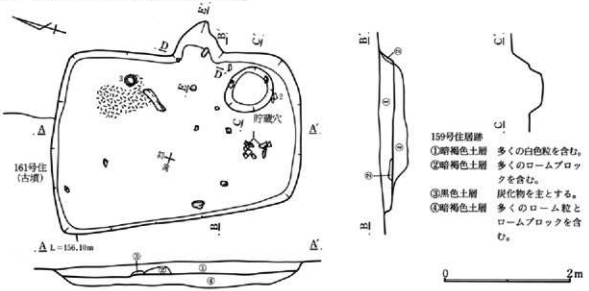
遺物　図示できたのは土師器の甕1点と須恵器の坏2点だけである。

（竈）

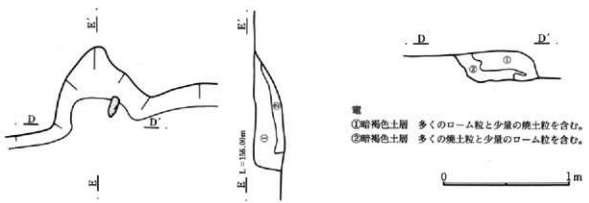
位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　136号住居同様に小さな住居であるが、竈は大きな住居同様に造られている。竈の位置は136号住居と異なり広い壁面部分に造られている。両袖部分はほとんど残っていない。壁面への掘り込みも少なく、全体に残りの悪い竈である。燃焼部覆土中からの焼土粒の出土も少ない。

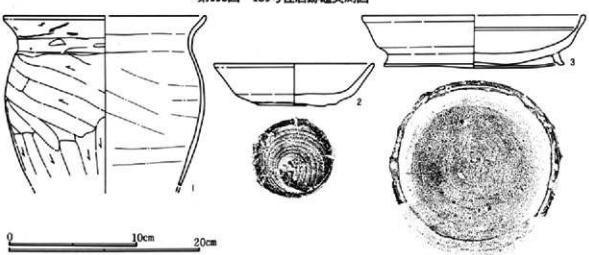
規模　煙道方向64cm、燃焼部幅は不明である。



第194図　159号住居跡実測図



第195図　159号住居跡竈実測図



第196図　159号住居跡出土遺物実測図

159号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (R)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
196－1 89	土師器 甕	床面＋6 ½残存	口(20.8) 高　－ 底　－	①密、1㎜以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
196－2 89	須恵器 坏	床面＋2 ほぼ完形	口 12.4 高 3.3 底 6.1	①密、1～2㎜の黒色粒を含む ②還元焔、硬質 ③灰黄色	底面右回転糸切り痕。 外側底面径は内側底面径より小さい。
196－3 89	須恵器 盤	床面＋12 口縁部¼ 高台½他完	口(17.5) 高 4.1 底 14.0	①密、1～2㎜の長石粒を多く含む。　②酸化焔、硬質、焼締 ③褐灰色	底面右回転ヘラ削り。高台は下端部内側が一段高くなっている。内側全面自然釉。 内側口縁部と底面との境に2条の沈線あり。

159号住居跡（第197～199図、図版36・37・89）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、33・34－22グリッドに位置する。

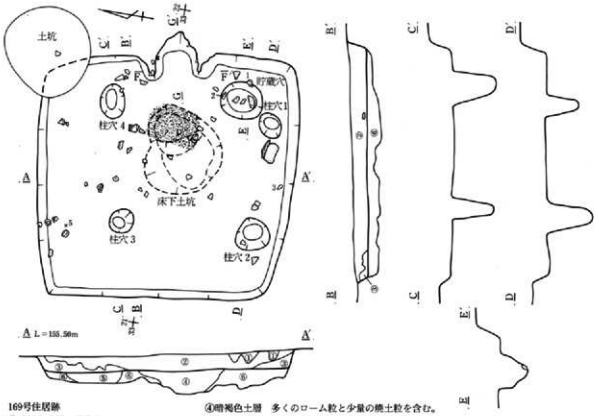
概要　北東コーナー部分を土坑により床面付近まで掘り込まれている。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴が4本、竈の右側に貯蔵穴が掘られている。柱穴の位置がやや不定形である。

規模　東西3.88m、南北4.12mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で42cmである。貯蔵穴は径68cm深さ88cmである。柱穴1は径44cm深さ52cm、柱穴2は径54cm深さ72cm、柱穴3は径42cm深さ68cm、柱穴4は径52cm深さ72cmである。

床下　床下の中央部に径118×125cm深さ37cmの床下土坑が掘られている。その床下土坑の北側からややまとまった灰白色粘土が出土している。

遺物　破片は大量に出土しているが、図示できたのは土師器の坏4点と鉄鎌1点である。



169号住居跡
①暗褐色土層　縞作土。
②暗褐色土層　多くの白色軽石粒を含む。
③暗褐色土層　多くのロームブロックを含む。
④暗褐色土層　多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
⑤暗褐色土層　少量のローム粒と焼土粒を含む。
⑥暗褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。

第197図　169号住居跡実測図

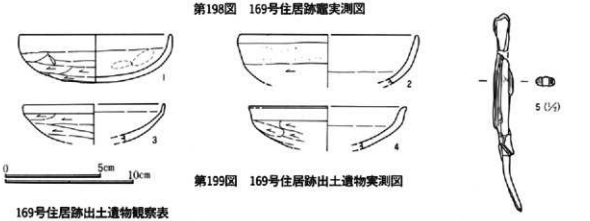
（竈）

位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　両袖部分は残っているが、上部は削られており良好な状態ではない。煙道部は壁面を少し掘り込んで造られている。奥壁に近い部分が焼けて焼土化している。燃焼部からの焼土粒の出土は少ない。

規模　煙道方向76cm、燃焼部幅約52cmである。

第198図　169号住居跡竈実測図



第199図　169号住居跡出土遺物実測図

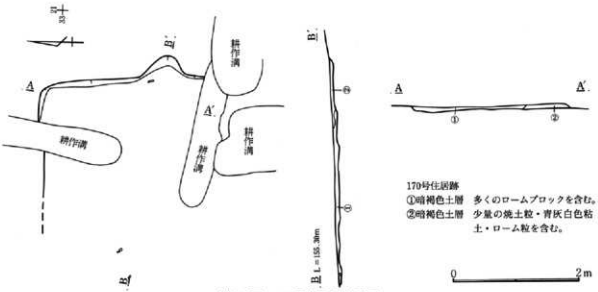
169号住居跡出土遺物観察表

掲図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (E)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
199－1 89	土師器 坏	床面－21 1/3残存	口 12.0 高 3.8 底 －	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位比較的明瞭。 内面ナデにて器表調密。 指頭圧痕あり。
199－2	土師器 坏	床面－53 小破片	口(13.8) 高 － 底 －	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位不明瞭。
199－3	土師器 坏	床面＋16 1/3残存	口(11.0) 高 － 底 －	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、ヘラの単位は明瞭でない。 全体にゆがんでいる。
199－4	土師器 坏	覆土 小破片	口(12.4) 高 － 底 －	①密 ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りにより器表面が粗い。 黒斑が多く認められる。
199－5 113	鉄製品 鉄鏃	掘り方	長 10.4　幅 1.0 厚 0.5　重 8.0		鉄鏃の茎部分と思われる。 木質部が多く残っている。

170号住居跡（第200図、図版37）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、33－21グリッドに位置する。

概要　大部分が削られて残っておらず、確認できたのは僅かに残った北東コーナー部分の床下と竈の下部分だけである。その部分も耕作溝等により多くの部分が掘り込まれている。柱穴や貯蔵穴も確認できなかった。竈の造られていた部分から少量の焼土粒が出土している。図示できる遺物はないが、破片より8世紀前半の遺構と判断した。　遺物　破片2片しか出土していない。



第200図　170号住居跡実測図

172号住居跡（第201～204図、図版37・89・90）

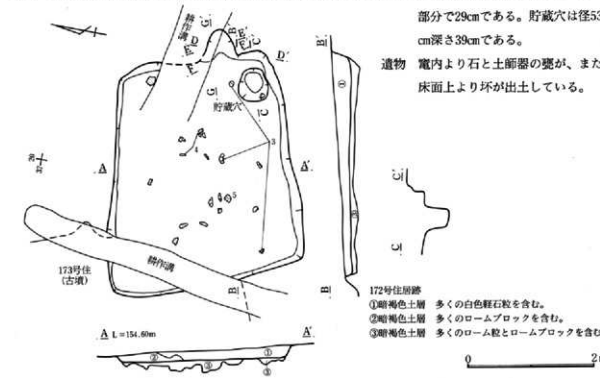
位置　本住居跡は第4次調査区にあり、37－20・21グリッドに位置する。

概要　西壁面部分が広く、東壁面部分が狭いやや不定形をした住居である。東西方向の耕作溝により覆土の多くと竈の左袖部分が、また南北方向の耕作溝により北西部分が床下部分まで深く掘り込まれている。このように残りの悪い住居であるが、竈の残りは良好である。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていない。貯蔵穴は竈の右側に掘られている。

規模　東西3.65m、南北は西壁面部分で3.08m、東壁面部分で2.42mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で29cmである。貯蔵穴は径53cm深さ39cmである。

遺物　竈内より石と土師器の甕が、また床面上より坏が出土している。



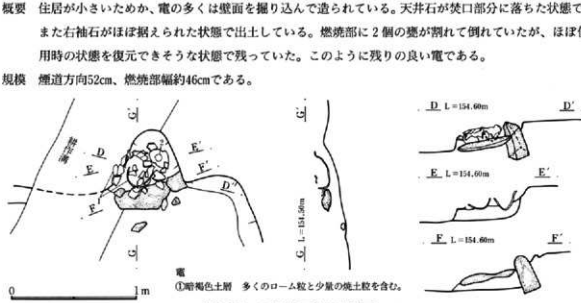
第201図　172号住居跡実測図

（竈）

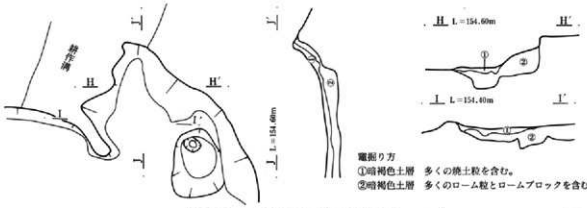
位置　住居東壁面に造られている。燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

概要　住居が小さいためか、竈の多くは壁面を掘り込んで造られている。天井石が焚口部分に落ちた状態で、また右袖石がほぼ据えられた状態で出土している。燃焼部に2個の甕が割れて倒れていたが、ほぼ使用時の状態を復元できそうな状態で残っていた。このように残りの良い竈である。

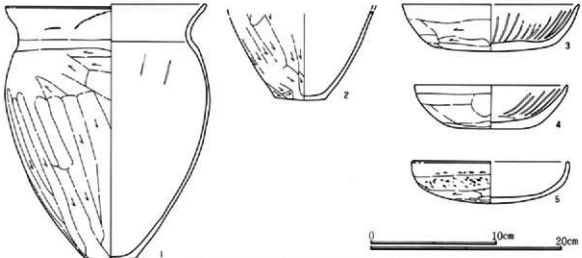
規模　煙道方向52cm、燃焼部幅約46cmである。



第202図　172号住居跡竈実測図



第203図　172号住居跡竈掘り方実測図



第204図　172号住居跡出土遺物実測図

172号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
204－1 89	土師器 甕	床面＋6 口縁～胴下 半ﾐ、他完	口 21.1 高 26.5 底 5.2	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③口縁部赤褐色、胴下半黒褐色	胴部外面ヘラ削りで器内を薄く仕上げている。 内面ナデにて器表面密。 口縁部以下は火を受けて吸炭により黒褐色。
204－2 89	土師器 甕	床面＋11 胴ﾐ、底完	口・高－ 底 5.3	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質　③におい橙色	底面と胴部外面ヘラ削り。 小さな砂粒が多く移動している。
204－3 89	土師器 坏	床面＋5 口縁部ﾐ 底部完形	口(13.8) 高 3.6 底 －	①密、2～3mmの砂粒と赤色粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面と体部へラ削り。 口縁部内側に多くの暗文。
204－4 89	土師器 坏	床面直上 ﾐ残存	口 12.0 高 3.5 底 －	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③におい橙色	底面と体部外面ヘラ削りと思われるが器表面が粗れており不明瞭。 内面に多くの暗文あり。
204－5 90	土師器 坏	床面＋7 ﾐ残存	口(12.4) 高 3.2 底 －	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③におい赤褐色	底面へラ削り。体部外面ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 内面に斑点状の黒漆に似た付着物あり。

174号住居跡（第205～208図、図版37・38・90・117）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、36－18グリッドに位置する。

概要　覆土の多くが削り取られ、南側壁面部分を土坑により、また西側部分を耕作溝により掘り込まれている。東側部分では古墳時代の175号住居と重複しており、本住居が175号住居を掘り込んでいる。竈の残りも悪く、全体的に残りの悪い住居である。

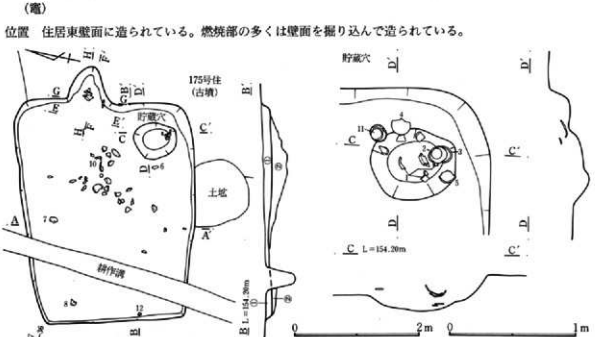
構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていない。貯蔵穴は竈の右側に掘られているが、浅くて疑問も残る。

規模　東西3.5m、南北2.78mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で16cmである。貯蔵穴は径68cm深さ16cmである。

遺物　貯蔵穴より甕や坏が、また西壁に接して紡錘車が出土している。

（竈）

位置　住居東壁面に造られている。燃焼部の多くは壁面を掘り込んで造られている。

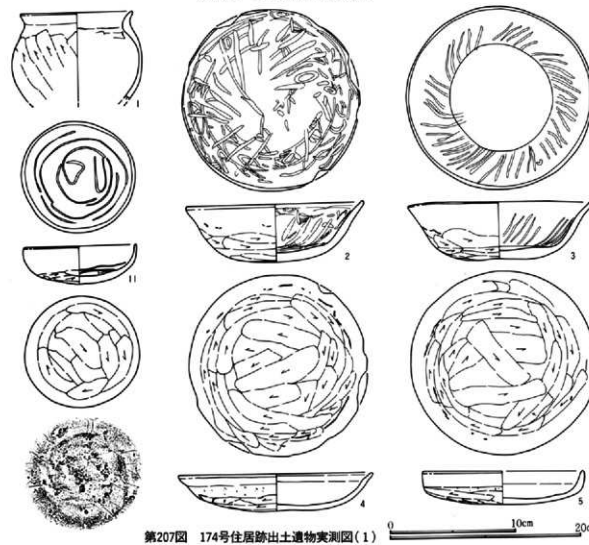


第205図　174号住居跡・貯蔵穴実測図

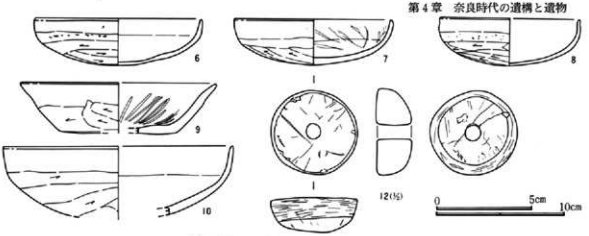
概要　住居が小さいためか、竈の多くは壁面を掘り込んで造られている。天井石は残っていないが、右の袖石と思われる小さな石が直立した状態で残っている。燃焼部から多くの甕の破片が、また燃焼部下部より多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向58cm、燃焼部幅約56cmである。

第206図　174号住居跡竈実測図



第207図　174号住居跡出土遺物実測図(1)



第208図　174号住居跡出土遺物実測図(2)

174号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
207－1 90	土師器 甕	床面＋1 口縁5/ 胴部5/	口 11.7 高 － 底 －	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	外面ヘラ削りと思われるが、器表面が粗れており不明。 内面ナデにて器表面密。
207－2 90	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 14.0 高 4.5 底 －	①密、1～3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラナデ。器表面は比較的密である。 内面に幅広い工具で暗文状の文様、文様は表面を浅く掘り込むように描かれている。
207－3 90	土師器 坏	床面－1 完形	口 14.6 高 4.5 底 －	①密、1mm以下の砂粒少量含む 赤色粒含まず。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	底面と体部外面ヘラナデ。 内面磨かれた後に暗文。 内側器表面は光沢を持つ。
207－4 90	土師器 皿型坏	床面＋3 1/残存	口 15.2 高 2.9 底 －	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 体部ナデ。 口縁部は短く大きく外反する。
207－5 90	土師器 坏	床面＋1 口縁部5/ 底部5/	口(12.6) 高 2.6 底 －	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、削りの単位は明瞭。 体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。
208－6 90	土師器 坏	床面－10 ほぼ完形	口 13.0 高 3.7 底 －	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。
208－7 90	土師器 坏	床面－8 1/残存	口 12.4 高 3.6 底 －	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。 内面放射状の文様が描かれている。 暗文とは異なる。
208－8 90	土師器 坏	床面－6 1/残存	口(11.0) 高 3.7 底 －	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りでササラ状を呈する。 口縁部と底部との間はナデ。
208－9 90	土師器 坏	床面＋7 口縁部5/弱 底部1/	口(15.6) 高 (4.0) 底 (9.2)	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面に放射状暗文。
208－10 90	土師器 坏	床面－5 口縁部5/ 底部1/	口(18.0) 高 － 底 －	①密、1mmより下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 内面ナデにて器表面密。
207－11 90	須恵器 坏	床面－3 完形	口 9.0 高 3.0 底 －	①密、1mm以下の黒色粒を少量含む。 ②還元焔、硬質 ③灰色	底面ヘラナデ。 口縁部横ナデ。 内側内面に沈線による円形の文様が描かれている。
208－12 117	石製品 紡錘車	床面－8	径 4.5/3.6 厚 1.8	孔径 0.8 重 59.1	滑石片岩。広面と狭面は磨かれて光沢を持つ。 側面は中砥削りで細い削痕を多く持つ。

176号住居跡（第209・210図、図版38・90・117）

位置　本住居跡は第5次調査区にあり、38―18・19グリッドに位置する。

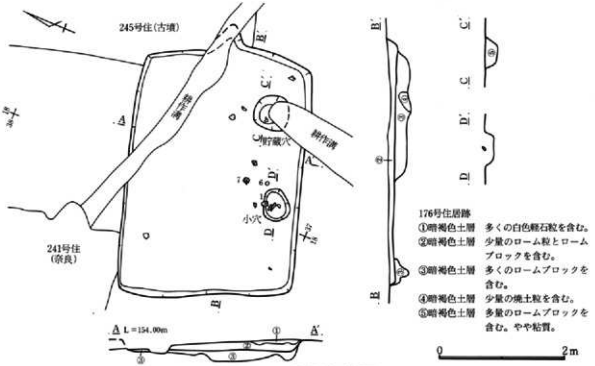
概要　北東の壁面部分と竈の部分で古墳時代の245号住居と重複しており、本住居が245号住居の覆土を掘り込んで住居と竈が造られている。また北西の壁面部分で奈良時代の241号住居とわずかに重複している。切り合い部分が少なく新旧関係は明らかでないが、本住居が241号住居より新しいと思われる。南

壁面近くに浅い小穴が1本掘られている。電部分から北西部分にかけてと南東部分を耕作溝により床下部分まで掘り込まれている。電が東壁面に造られていたが、耕作溝により大部分が削り取られており残りはわずかである。

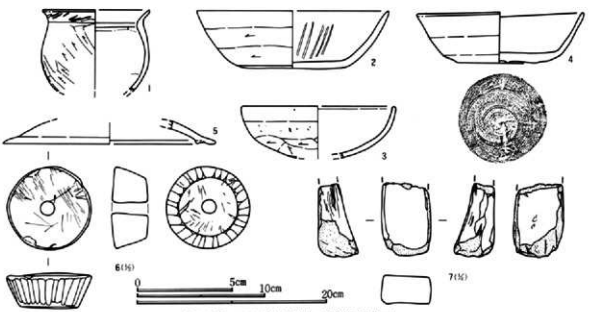
構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は掘られていない。貯蔵穴は電の右側に掘られているが、浅くて疑問も残る。

規模　東西3.92m、南北2.78mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で18cmである。貯蔵穴は径52cm深さ17cmである。小穴は径51cm深さ15cmである。

遺物　紡錘車と砥石の出土が注目される。



第209図　176号住居跡実測図



第210図　176号住居跡出土遺物実測図

176号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②構成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
210－1 90	土師器 小型壺	床面＋10 ½残存	口(11.0) 高　－ 底　－	①密、1mm前後の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	斜部外面ヘラ削り、口縁部にヘラの工具痕が多く残る。 内面ナデにて器表調密。 頻繁に使用されていた痕跡を残す。
210－2 90	土師器 坏	覆土 口縁部½ 底部½	口(15.0) 高　4.5 底　－	①密、多くの小さな赤色粒を含む ②酸化焔、軟質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ヘラ削り。いずれもヘラの単位不明瞭。 胎土がやや粉状を呈する。
210－3	土師器 坏	覆土 ½残存	口(11.0) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。 内面やや光沢を持つ。
210－4 90	須恵器 坏	覆土 口縁一部欠 他完形	口 13.1 高　4.0 底　7.0	①密、1～2mmの石英粒を多く含む。 ②還元焔、硬質　③灰白色	底面右回転ヘラ削り。 糸切り痕やヘラ切り時にできる中央部の凸状部なし。
210－5	須恵器 蓋	覆土 破片	口(16.6) 高　－ 底　－	①やや粗、2～3mmの片岩粒を含む。②還元焔、硬質 ③灰色	摘みの作りはやや雑である。 器表面全体に片岩粒が目立つ。
210－6 117	石製品 紡錘車	床面＋1	径　4.4/3.1 厚　1.9	孔径　0.8 重　56.0	蛍石片岩。広面と狭面に中低削りの痕跡。側面は鉄製工具により細長く削られ後に全面磨かれ光沢を持つ。
210－7	石製品 砥　石	床面直上	長　(7.7) 厚　3.0	幅　5.3 重　203.0	流紋岩。3側面を砥石として使用している。右側面に鉄製ノミと思われる工具による削痕あり。

179号住居跡（第211～215図、図版38・39・90・91・92・113・117・121・125・126）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、18・19－28・29グリッドに位置する。

概要　覆土上面の多くを平安時代の135号住居により、また電煙道部東側を平安時代の134号住居により一部削り取られている。しかし遺構確認面から床面までの深さが60cm前後と深く、竈の残りも非常に良好な住居である。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は4本掘られているが、貯蔵穴は掘られていない。柱穴1と柱穴2の外側の南壁面部分に小穴1と小穴2が掘られている。類例が少なく明らかでないが、出入り口に関係するものと思われる。

規模　東西4.57m、南北4.61mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で65cmである。柱穴1は径51cm深さ35cm、柱穴2は径67cm深さ32cm、柱穴3は径69cm深さ63cm、柱穴4は径62cm深さ67cmである。小穴1は径40cm深さ38cm、小穴2は径21cm深さ37cmである。

遺物　電内より多くの土器や石が、また南壁面付近よりこも編み石が数多く出土している。破片の出土も大量である。

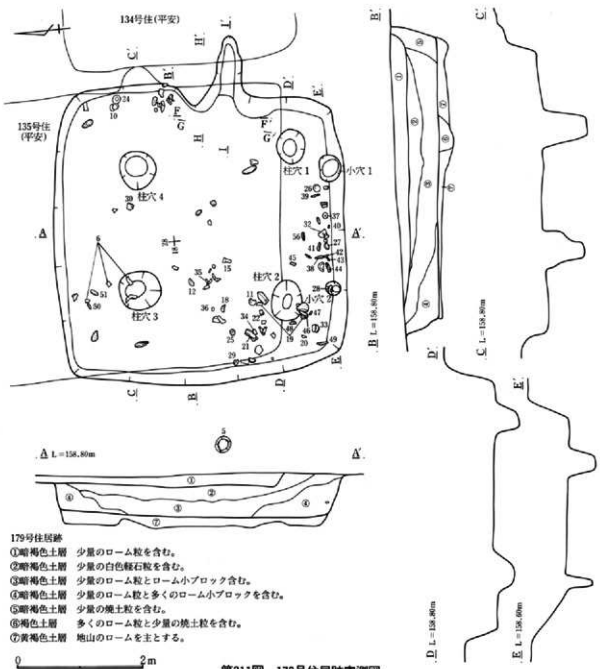
（竈）

位置　住居東壁面に造られている。燃焼部の一部は壁面を掘り込んでいるが、多くの部分は床面上に造られている。煙道部は壁面を深く掘り込んで造られている。

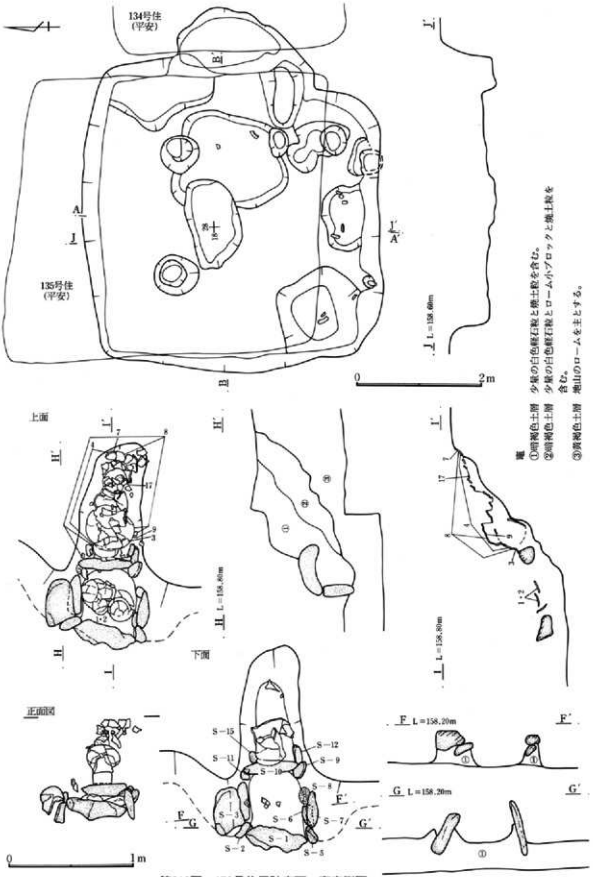
概要　燃焼部や煙道部の構築材や据えられた土器の大部分が良好に残っている。天井石（S－1）は焚口部分に落石していた。袖石は右側に5個（S－5～9）左側に4個（S－2・3・4・11）残っており、落石していた天井石は使用時においては、右袖部分でS－5・7の間、左袖部分でS－2・4の間に据えられていたものと思われる。燃焼部と煙道部の境に天井石（S－10）が架けられた状態で残っている。この天井石は右側でS－9・12、左側でS－11・15の間に設置され、前後の石で移動しないように工夫されている。以上の石の他にS－10の下にS－13・14が落ちており、電内より計15個の石が出土している。石の大きさと使用状況は次のとおりである。S－5は細長く長さ44cmで床面下に約17cmほど埋もれている。S－8は長さと幅が38×44×6cm、S－12は長さと幅が37×12×4cmで25cmほど埋もれている

いる。Ｓ－11は長さと幅が35×11×7.5cmで約26cmほど埋められている。Ｓ－15は長さと幅が36×10×4cmで27cmと大部分が埋もれている。このように石で囲まれた燃焼部の中に２個の完形の土師器の甕がやや焚口部分に倒れかけたような状態で出土している。煙道部には燃焼部との境に架けられていた天井石の上に、底部の欠けた甕が口縁部を下にして設置してある。その上に底部の欠けた壺がかぶさるような状態で設置してある。さらにその上に甕そして壺と続けて４個が組み入れまれて煙道としている。この残りの良好な竈は、地山のロームを掘り抜いて造ったものではなく、竈を築く予定の壁面のロームを掘り抜いた後に粘性の強い暗褐色土を大量に運び込み、それを地山として掘り込んで石や土器を用いて造られている。

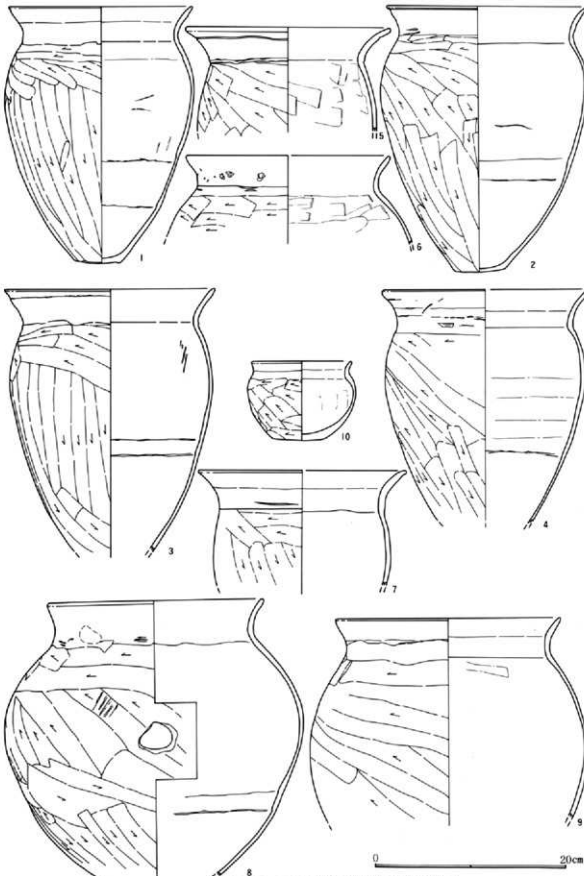
規模　煙道方向153cm、燃焼部幅約43cmである。



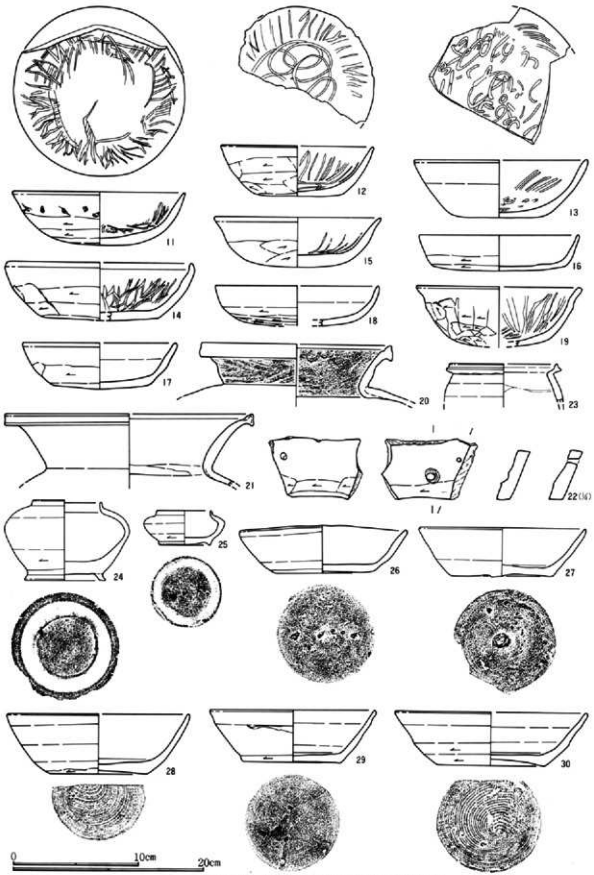
第211図　179号住居跡実測図



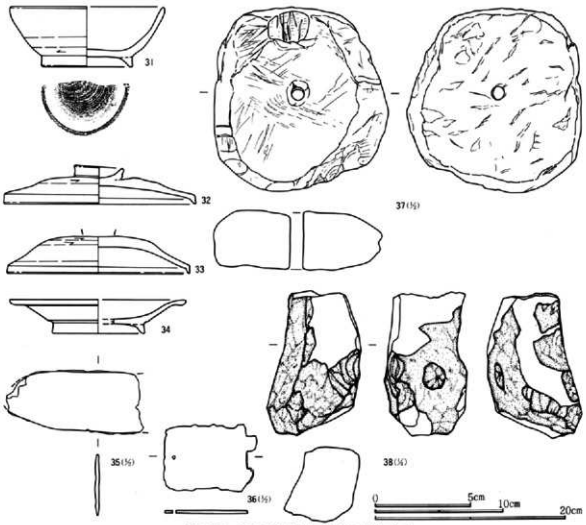
第212図　179号住居跡床下・竈実測図



第213図　179号住居跡出土遺物実測図(1)



第214図　179号住居跡出土遺物実測図（２）



第215図　179号住居跡出土遺物実測図（３）

179号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) （底）	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
213－１ 90	土師器 甕	竈内 ほぼ完形	口 19.4 高 27.0 底 4.9	①密 ②酸化焔、硬質 ③口縁部赤褐色、胴下半黒褐色	胴部外面ヘラ削り。内面中央部と下部に肉厚の違いからわずかに段を持つ接合痕あり。 肩部より下に多くの吸炭と粘土の付着あり。
213－２ 90	土師器 甕	竈内 ほぼ完形	口 21.1 高 28.2 底 5.2	①密 ②酸化焔、硬質　③口縁～内面にぶい赤褐色、胴外面暗赤灰色	底面と胴部外面ヘラ削り。 胴部内面の中央付近に明瞭な接合痕。
213－３ 91	土師器 甕	竈内 口縁～胴下部⅓	口 22.0 高　－ 底　－	①密、１mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 器内全体が薄い。胴部内側中央部付近に接合痕。 黒斑ほとんど認められず。
213－４ 91	土師器 甕	竈内 口縁部⅓ 胴部⅓	口(22.0) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
213－５ 90	土師器 甕	床面＋33 口縁部⅓ 胴部⅓	口 21.7 高　－ 底　－	①密、１～２mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色、一部黒褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部との境に大きな段を持つ。 口縁部中央に一本の沈線あり。
213－６	土師器 甕	床面＋５ ⅓残存	口(21.6) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。 器内が全体に薄い。
213－７	土師器 甕	竈内 口縁部⅓	口(21.8) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。

179号住居跡出土遺物観察表

横図番号 図版番号	土師器種別	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
213－8 91	土師器 甕	床面＋27 底部欠損	口 22.7 高 － 底 －	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。内面ナデ。 胴下部に接合痕あり。
213－9 91	土師器 甕	床面＋9 口縁部完形 胴上部½	口 23.6 高 － 底 －	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部に輪積痕が残る。内面ナデにて器表面密。 口縁部が「コ」の字状になっている。
213－10 91	土師器 小型甕	床面＋21 完形	口 10.5 高 8.3 底 5.0	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色、一部暗赤灰色	底面と胴部外面ヘラ削り。内面上半・外面乱雑に吸撫による暗赤灰色を呈している。 多く火に掛けられて使用されている。
214－11 90	土師器 坏	床面＋9 ½残存	口 13.4 高 4.1 底 －	①やや粗、2～3mmの砂粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面～体部外面ヘラ削り。 内面に乱雑な暗文。
214－12 90	土師器 坏	床面＋9 ½残存	口(12.0) 高 3.9 底 －	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面に放射状及び螺旋状の暗文。
214－13	土師器 坏	覆土 口縁部¼ 底部½	口(13.5) 高 － 底 －	①密、1～2mmの砂粒を少量含む ②酸化焔、軟質 ③橙色	底面と体部へヘラ削り。 内側口縁部と体部に放射状暗文。 底面は螺旋状暗文と思われるが不明瞭。
214－14 91	土師器 坏	覆土 ½残存	口(14.4) 高 － 底 (8.8)	①密、2～3mmの赤色粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 内面にやや格子状の暗文が繁雑に描かれている。
214－15 91	土師器 坏	床面＋5 ½残存	口 13.0 高 3.9 底 －	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③にぶい黄色	底面と胴下半がヘラ削りにより器表面が粗れている。 内面に暗文あり。
214－16 91	土師器 坏	覆土 ½残存	口 12.5 高 2.9 底 10.4	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面は丸味を持つが、ほぼ平らである。 ていねいなヘラ削りが行なわれている。
214－17 91	土師器 坏	竈内 ½残存	口(11.8) 高 3.6 底 7.6	①やや粗、2～3mmの赤色粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	底面と体部ヘラ削り。 内面に暗文は確認されない。
214－18	土師器 坏	床面＋2 ½残存	口(12.8) 高 － 底 －	①密、少量の角閃石を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。 黒斑認められず。
214－19	土師器 坏	床面＋15 口縁部¼ 体部½	口(12.6) 高 － 底 －	①密、1mm以上の砂粒含まず ②酸化焔、硬質 ③にぶい黄橙色	底面と体部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面に幅広の雑な暗文。 外面の削りは雑で、出土例の少ない坏である。
214－20	須恵器 甕	床面＋4 口縁のみ	口(20.0) 高 － 底 －	①やや粗、1～2mmの片岩粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	胴部内面青海波紋。 外面に平行叩目が残る。
214－21	須恵器 甕	床面＋4 口縁のみ	口(26.0) 高 － 底 －	①密、少量の片岩粒を含む ②還元焔、硬質 ③灰色	口唇部は厚く仕上げられている。 口縁部内外面に自然釉が付着している。
214－22	須恵器 甑	床面＋20 底部小片	口 － 高 － 底 －	①密、砂粒はほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③外面灰色、内面にぶい橙色	胴部下端の内外面ヘラ削り。 内面に閉状部と、穿孔された小穴が1箇所あり。
214－23	須恵器 小型甕？	覆土 口縁破片	口(11.3) 高 － 底 －	①密、小さな雲母粒を含む ②還元焔、硬質 ③灰色	胴部内外面横ナデ。
214－24 91	須恵器 短頸壺	床面＋28 完形	口 7.2 高 8.4 底 8.4	①密、2×6mmの長石粒を少量含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面回転ナデ。 高台はていねいに貼り付けてある。 体部下半ヘラ削り。口縁部短く、口唇部水平。
214－25 91	須恵器 短頸壺	床面－1 完形	口 5.8 高 3.6 底 5.2	①密、1mm前後の長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰黄色	底面回転ナデ。高台はつまみ出して付けられている。 体部下半ヘラ削り。 口縁部は短く、口唇部は一部水平。
214－26 91	須恵器 坏	床面＋10 完形	口 12.9 高 3.8 底 7.6	①密、2～4mmの長石粒を少量含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り後ナデ。 内面降灰による灰白色の自然釉が大量に付着。 全体にゆがんでいる。
214－27 91	須恵器 坏	床面＋16 ½残存	口 13.1 高 3.8 底 8.0	①密、1～2mmの長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り。 中央部に凸状の突起あり。 口縁部に凸状の明瞭なロクロ痕なし。

179号住居跡出土遺物観察表

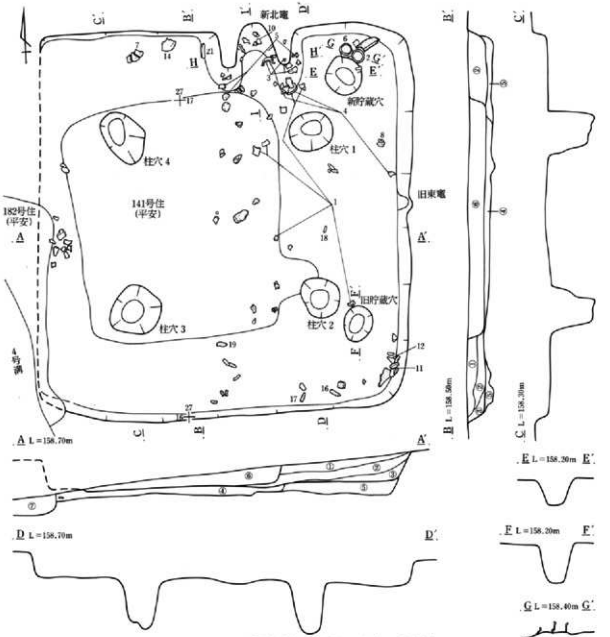
図版番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
214—28 91	須恵器 坏	床面＋12 ½残存	口(14.0) 高　4.7 底　7.2	①密、1mm前後の石英粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰白色	底面右回転糸切り後周辺部右回転ヘラ削り。 体部下端ヘラ削り。ロクロ直少ない。 少量の片岩粒を含む。
214—29 91	須恵器 坏	床面＋5 ¾残存	口 12.8 高　4.1 底　7.4	①密、1mm以下の小さな白色粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	底面糸切り後右回転ヘラ削り。 体部下端ヘラ削り。 体部外側重焼時に他の坏の口縁部破片付着。
214—30 91	須恵器 坏	床面＋6 ½残存	口(14.8) 高　4.2 底　8.2	①密、1mm以下の石英粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰白色	底面右回転糸切り後周辺部右回転ヘラ削り。 体部下半2段の右回転ヘラ削り。 底部中央の窪凹が薄い。
215—31 92	須恵器 壺	床面＋10 ½残存	口(11.8) 高　4.7 底　6.8	①密、1mm以下の石英粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰白色	底面中央右回転糸切り痕。 高台部はていねいに貼り付けて整形されている。
215—32 92	須恵器 蓋	床面＋9 ほぼ完形	口 14.8 高　— 底　—	①密、2～3mmの長石粒と片岩粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰白色	天井部ヘラ削り、摘みはリング状でやや長い。 口縁端部は鋭首状。 やや雑な感じの蓋である。
215—33 92	須恵器 蓋	床面＋4 ほぼ完形	口 14.2 高　— 底　—	①密、1mm以下の石英粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰白色	天井部ヘラ削り、摘みはほぼずれており貼り付けた痕跡がわずかに残る。口縁端部は鋭首状。 器表面が粗れている。
215—34 高台付皿	須恵器	床面＋24 ½残存	口(13.6) 高　2.6 底 (7.2)	①密、少量の白色粒を含む ②還元焔、硬質 ③灰色	高台部内側糸切り痕。 口縁部は大きく外反し、玉縁状をなしている。
215—35 113	鉄製品 鎌	床面＋31	長　(7.0) 厚　0.2	幅　3.2 重　14.9	鎌の先端部と思われる。 錆化が進行し残りが悪い。
215—36 113	鉄製品 飾金具	床面－3	長　4.9 厚　1.5	幅　3.5 重　10.4	名称及び用途不明。1箇所穿孔されている。 右側面に2個の小さな凸帯あり。
215—37 117	石製品	床面－52	長　9.7 孔径　0.7	幅　9.1 重　479.0	砥石車　滑石片岩。偏平な片岩の中央に砥鉢車とほぼ同じ径の穴が穿孔。縁辺の側面にノミの削跡や荒磨削り痕。 未製品か？
215—38 121	石製品 砥石	床面＋30	長　15.0 厚　7.5	幅　9.0 重　1270.0	3側面を砥石として使用されていた。 破損後転用されたため砥石面の多くが欠けている。

遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)	石材・備考
39	125	こも編み石	長 12.3　幅 3.7　厚 2.5　重 210	緑簾緑泥片岩
40	125	こも編み石	長 13.2　幅 5.5　厚 1.5　重 175	点紋石墨硝雲母片岩
41	125	こも編み石	長 11.6　幅 4.7　厚 3.6　重 285	点紋緑泥片岩
42	125	こも編み石	長 13.7　幅 3.8　厚 1.6　重 160	石墨緑泥片岩
43	125	こも編み石	長 14.6　幅 4.4　厚 2.9　重 315	緑簾緑泥片岩
44	125	こも編み石	長 17.6　幅 5.9　厚 3.0　重 550	緑簾緑泥片岩
45	125	こも編み石	長 14.1　幅 5.6　厚 3.0　重 375	緑簾緑泥片岩
46	125	こも編み石	長 16.5　幅 5.2　厚 2.3　重 265	緑簾緑泥片岩
47	125	こも編み石	長 15.6　幅 4.3　厚 2.5　重 250	緑簾緑泥片岩
48	125	こも編み石	長 11.1　幅 4.2　厚 2.5　重 190	緑簾緑泥片岩
49	125	こも編み石	長 19.1　幅 5.2　厚 3.0　重 415	緑簾緑泥片岩
50	125	こも編み石	長 10.0　幅 4.5　厚 3.0　重 235	緑簾緑泥片岩
51	125	こも編み石	長 11.6　幅 5.0　厚 1.4　重 135	硝雲母石墨片岩
52	126	こも編み石	長 14.5　幅 7.0　厚 3.0　重 410	点紋硝雲母石墨片岩、両側面一箇所凹状
53	126	こも編み石	長 13.2　幅 3.7　厚 2.2　重 190	緑泥片岩
54	126	こも編み石	長 16.2　幅 7.2　厚 2.2　重 360	硝雲母石墨片岩
55	126	こも編み石	長 10.5　幅 5.0　厚 2.3　重 205	緑簾緑泥片岩
56	126	こも編み石	長 14.1　幅 4.4　厚 3.7　重 340	点紋硝雲母緑泥片岩
57	126	こも編み石	長 11.5　幅 4.0　厚 1.2　重 95	硝雲母石墨片岩
58	126	こも編み石	長 13.9　幅 3.8　厚 2.5　重 235	緑簾緑泥片岩
59	126	こも編み石	長 10.6　幅 4.6　厚 1.3　重 100	硝雲母石墨片岩
60	126	こも編み石	長 14.2　幅 4.3　厚 4.0　重 370	緑簾緑泥片岩
61	126	こも編み石	長 11.3　幅 5.0　厚 1.7　重 130	緑簾緑泥片岩
62	126	こも編み石	長 17.6　幅 5.3　厚 2.2　重 325	硝雲母石墨片岩
63	126	こも編み石	長 16.1　幅 5.4　厚 1.8　重 225	点紋硝雲母石墨片岩

180号住居跡（第216～220図、図版40・92・126）

位置　本住居跡は第４次調査区にあり、17－27・28グリッドに位置する。

概要　西側の低くなるなだらかな傾斜面に位置し、東側部分の残りは良好であるが低い西側部分の壁面は残っていない。住居中央部を平安時代の141号住居により、床面部分まで掘り込まれている。また南西部分で平安時代の182号住居と重複しており、その部分の壁面と床面が削り取られている。南西コーナー部分には風倒木跡があり、壁面の検出が困難であった。新貯蔵穴の北に竈とともに甕の口縁部が置かれており、そのとなりに竈の天井石と思われる石が置かれてある。竈は旧東竈と新北竈があるが、旧東竈は大部分が取り壊されており、煙道部として削られた壁面に、僅かな焼土粒とともに痕跡を残



180号住居跡
①暗褐色土層　少量のローム粒と白色軽石粒を含む。
②暗褐色土層　少量のローム粒を含む。
③暗褐色土層　多くのローム粒を含む。
④褐色土層　多くのロームブロックを含む。
⑤褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。
⑥141号住居跡覆土
⑦182号住居跡覆土

第216図　180号住居跡実測図

す程度しか残っていない。

構造　床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土が混入した土で造られている。柱穴は４本掘られており、貯蔵穴は新旧の竈の右側に掘られている。

規模　東西5.94m、南北6.19mである。壁高は残りの良い南東コーナー部分で54cmである。柱穴１は径62cm深さ83cm、柱穴２は径60cm深さ76cm、柱穴３は径72cm深さ88cm、柱穴４は径58cm深さ90cmである。新貯蔵穴は径60cm深さ50cm、旧貯蔵穴は径48cm深さ59cmである。

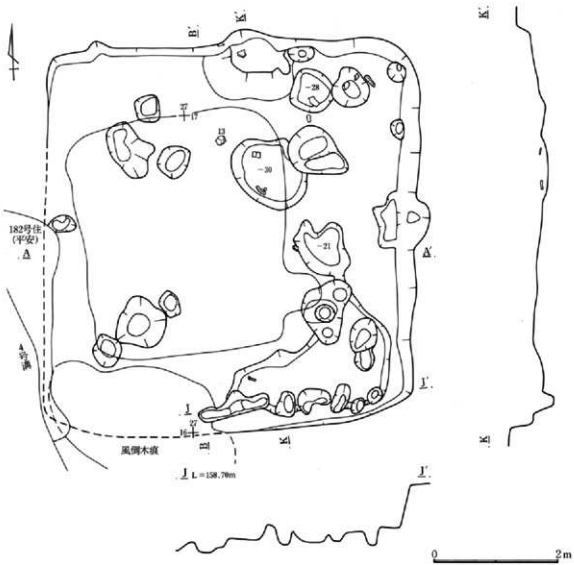
遺物　竈内と新貯蔵穴周辺より多くの甕や坏が出土している。

（新北竈）

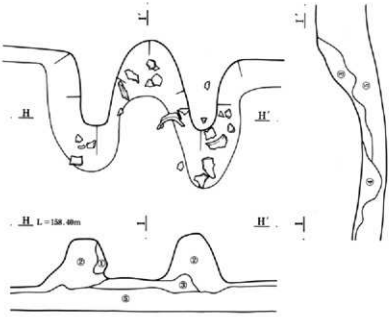
位置　住居北壁面に造られている。燃焼部の一部は壁面を掘り込んでいるが、多くの部分は床面上に造られている。

概要　両袖部分が残っているが、袖石はなく天井石は貯蔵穴の近くに置かれていた。遺物の出土も少なく全体的に残りは良好でない。

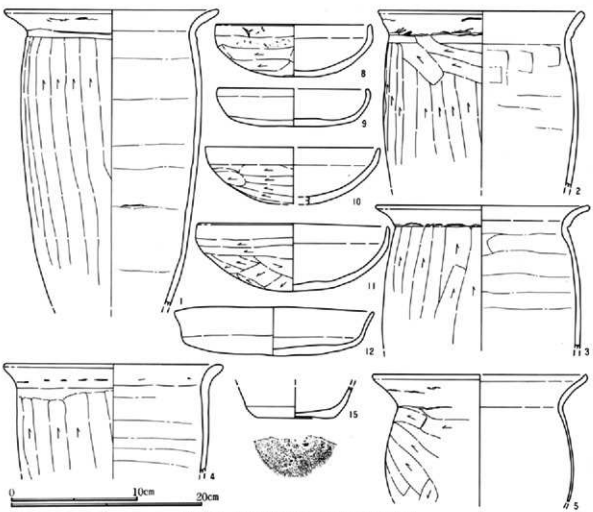
規模　煙道方向103cm、燃焼部幅約54cmである。



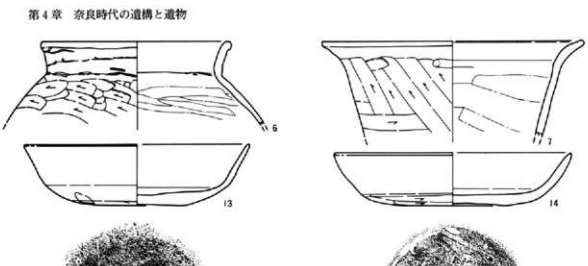
第217図　180号住居跡床下実測図



第218図　180号住居跡竈実測図



第219図　180号住居跡出土遺物実測図(1)



第220図　180号住居跡出土遺物実測図（2）

180号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (実)	①胎土　②成形　③色調	成・整形技法の特徴・備考
219－1 92	土師器 甕	床面＋3 口縁～ 胴下半ﾒ	口 22.4 高 － 底 －	①密、1mm前後の砂粒と赤色粒を含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動は少ない。 口縁部横ナデ、輪積痕が残る。 内面ナデ。
219－2 92	土師器 甕	床面＋7 口縁部完形 胴上部ﾒ	口 21.8 高 － 底 －	①やや粗、2～3mmの砂粒と片岩粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面強いヘラ削り、削りの単位は明瞭である。胴部と口縁部との境に段を持つ。
219－3 92	土師器 甕	床面＋32 口縁部ﾒ 胴部ﾒ	口 22.5 高 － 底 －	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③明橙色	胴部外面強いヘラ削り、口縁部との境に段を持つ。 内面ナデにて器表面密。
219－4 92	土師器 甕	床面＋15 ﾒ残存	口 22.4 高 － 底 －	①密、2～4mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色、一部黒褐色	胴部外面ヘラナデ、砂粒の移動少なく器表面の粗れ少ない。 口縁部の器肉が厚い。
219－5 92	土師器 甕	床面＋4 口～胴部ﾒ	口(22.6) 高 － 底 －	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 口縁部に輪積痕が残る。
220－6 92	土師器 壺	床面＋7 口縁部完形 肩部ﾒ	口 20.2 高 － 底 －	①密、1mm前後の砂粒を多く、片岩粒を少量含む。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部に接合痕。 内面ナデにて器表面密。 固くしっかりした作りである。
220－7	土師器 甑	床面＋16 口～胴上ﾒ	口(27.6) 高 － 底 －	①やや粗、2～3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。 内面ヘラナデ。 全体に少しゆがんでいる。
219－8 92	土師器 坏	床面＋4 口～底部ﾒ	口 12.2 高 4.0 底 －	①密、1mm以下の小さな雲母粒を多く含む。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、ヘラの単位は明瞭でない。 内面ナデにて器表面密。
219－9	土師器 坏	覆土 口縁部ﾒ 底部ﾒ	口(12.0) 高 － 底 －	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③明褐色	底面ヘラ削り、ヘラ削りの単位は不明瞭である。
219－10	土師器 坏	床面＋22 口～底部ﾒ	口(13.8) 高 － 底 －	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、砂粒の移動はほとんどないが削りにより器表面がザラ状を呈する。
219－11 92	土師器 坏	床面＋2 口縁～部欠 他完形	口 15.2 高 5.4 底 －	①密、1mm以下の砂粒を多く、角閃石を少量含む。 ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面数多いていねいなヘラ削り、削りの単位は明瞭でない。内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。

180号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
219—12 92	土師器 坏	床面＋2 ほぼ完形	口 15.8 高 3.8 底 —	①密、1㎜以下の砂粒を多く、角閃石を少量含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りと思われるが器表面が粗れており整形方法不明。 内面ナデにて器表面密。
220—13 92	須恵器 坏	床面－19 ½残存	口(17.6) 高 4.8 底 9.6	①密 ②還元焔、硬質、焼締 ③褐灰色	底面ナデ整形であるがヘラの痕跡が残る。 内側底面乱雑なナデ。
220—14 92	須恵器 坏	床面＋22 口縁部½ 底部½	口(18.8) 高 4.2 底 11.6	①やや粗、1～3㎜の砂粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り後手持ヘラ削り。 内側底面使用により磨耗している。 3～5㎜の長石粒や片岩粒もわずかに含む。
219—15	須恵器 坏	掘り方 口縁～底½	口 — 高 — 底 (6.0)	①やや粗、1～3㎜の片岩粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り後わずかにナデ整形。 底部中央の器肉が厚くなっている。

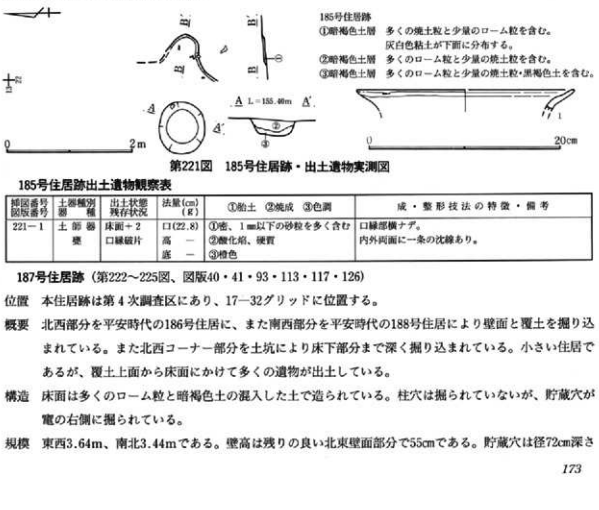
遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)	石材・備考
16	126	こも編み石	長 19.2　幅 5.7　厚 4.7　重 680	絹雲母石墨片岩
17	126	こも編み石	長 13.3　幅 4.5　厚 3.1　重 225	緑簾緑泥片岩　両側面に打ち欠いた凹状
18	126	こも編み石	長 14.0　幅 5.3　厚 2.5　重 265	石墨緑泥片岩
19	126	こも編み石	長 13.4　幅 5.6　厚 3.0　重 320	絹雲母石墨片岩
20	126	こも編み石	長 16.2　幅 5.6　厚 2.9　重 390	点紋絹雲母石墨片岩
21	126	こも編み石	長 11.2　幅 4.0　厚 3.3　重 210	絹雲母石墨片岩
22	126	こも編み石	長 14.4　幅 5.6　厚 5.7　重 210	絹雲母石墨片岩
23	126	こも編み石	長 10.4　幅 5.7　厚 3.6　重 275	点紋絹雲母石墨片岩

185号住居跡（第221図、図版40）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、13—22グリッドに位置する。

概要　西側の低くなるなだらかな傾斜面に位置し、住居の大部分は削られて竈の痕跡と竈手前の土坑しか残っていない。残っていた竈の下部分から多くの焼土粒が出土している。

遺物　破片を含め、総数5片である。



第221図　185号住居跡・出土遺物実測図

185号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
221—1	土師器 壁	床面＋2 口縁破片	口(22.8) 高 — 底 —	①密、1㎜以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	口縁部横ナデ。 内外両面に一条の沈線あり。

187号住居跡（第222～225図、図版40・41・93・113・117・126）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、17—32グリッドに位置する。

概要　北西部分を平安時代の186号住居に、また南西部分を平安時代の188号住居により壁面と覆土を掘り込まれている。また北西コーナー部分を土坑により床下部分まで深く掘り込まれている。小さい住居であるが、覆土上面から床面にかけて多くの遺物が出土している。

構造　床面は多くのローム粒と暗褐色土の混入した土で造られている。柱穴は掘られていないが、貯蔵穴が竈の右側に掘られている。

規模　東西3.64m、南北3.44mである。壁高は残りの良い北東壁面部分で55cmである。貯蔵穴は径72cm深さ

23cmである。

床下　多くの床下土坑が掘られており、覆土中より多くの遺物も出土している。

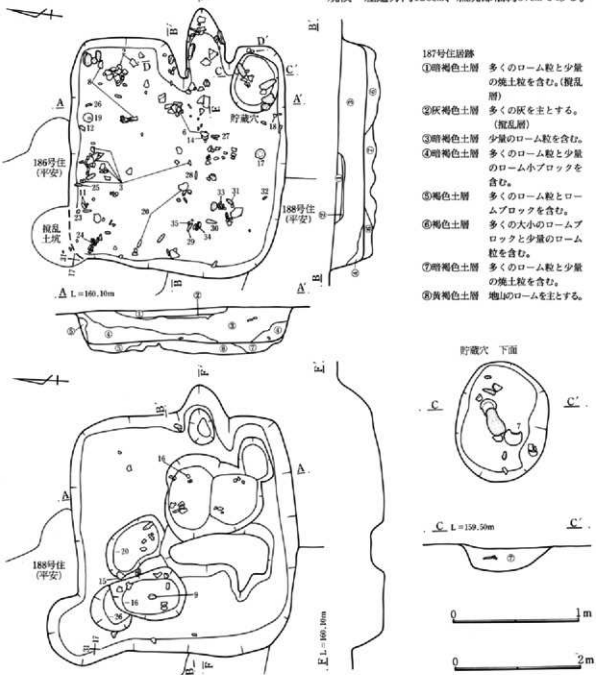
遺物　破片を含め多くの甕や坏、鉄、紡錘車が出土している。墨書土器が出土しているが、判読不明である。

（竈）

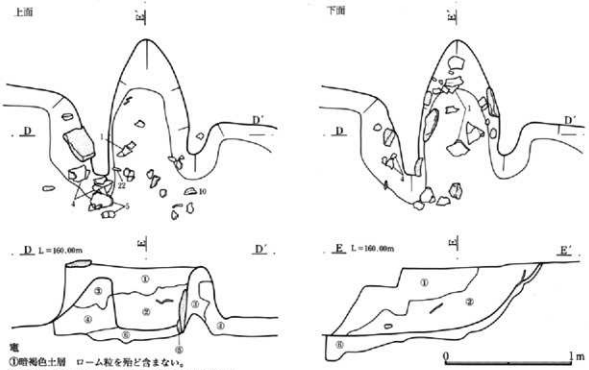
位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　両袖部分の多くは比較的良く残っている。煙道部は壁面を多く掘り込んで造られている。竈内より９個の石が出土し、燃焼部の３個の細長い石は埋められておりほぼ使用時の状態を保っていた。他の竈内の石も竈材として使用されていたものと思われる。竈内から焼土粒の出土は少ない。

規模　煙道方向126cm、燃焼部幅約57cmである。

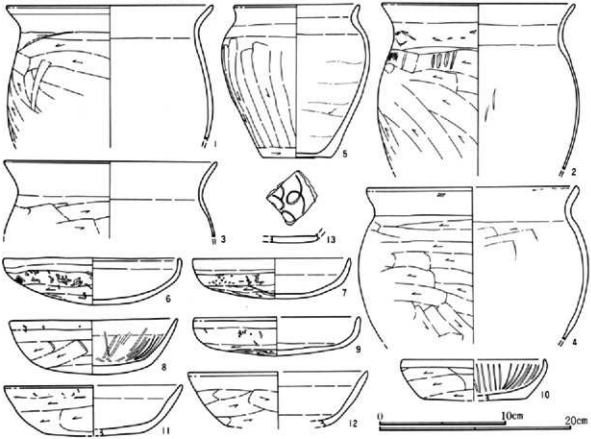


第222図　187号住居跡・床下実測図

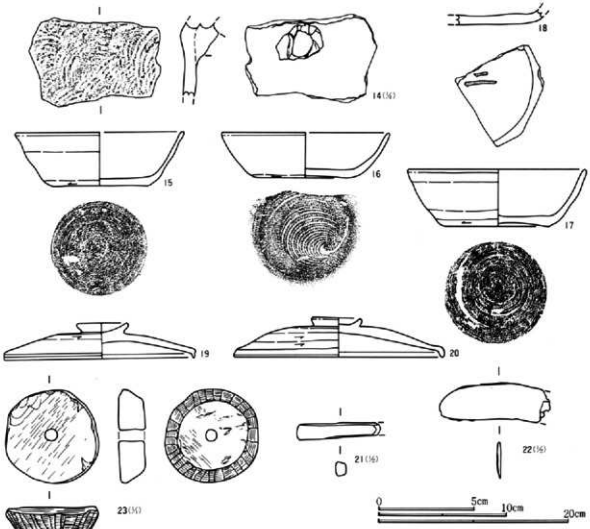


竈
①暗褐色土層　ローム粒を殆ど含まない。
②暗褐色土層　多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
③暗褐色土層　少量のローム粒と焼土粒を含む。
④暗褐色土層　多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
⑤暗褐色土層　ロームブロックやローム粒は殆ど含まない。
⑥黄褐色土層　地山のロームを主とする。

第223図　187号住居跡竈実測図



第224図　187号住居跡出土遺物実測図（１）



第225図　187号住居跡出土遺物実測図（２）

187号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) （g）	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
224－１ 93	土師器 甕	床面－１ 口縁部1/4 胴部1/2	口 21.4 高　－ 底　－	①密、１㎜以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③赤褐色	胴部外面ヘラ削り、小さな砂粒が多く移動している。 内面ナデにて器表面密。
224－２ 93	土師器 甕	床面＋４ 口縁部3/4 胴部1/2	口 20.0 高　－ 底　－	①密、１㎜以下の小さな砂粒を含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 内面ナデで器表面密であるが少し剥離している。
224－３ 93	土師器 甕	床面直上 口縁部3/4 胴上部3/4	口 22.0 高　－ 底　－	①密、１㎜以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、左→右方向の削りである。
224－４ 93	土師器 甕	床面＋41 口縁部1/4 胴部1/2	口(21.6) 高　－ 底　－	①密、１～３㎜の赤色粒を多く含む。②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、削り幅は狭く数が多い。 内面ナデにて器表面密。 やや異質な甕である。
224－５ 93	土師器 小型甕	床面＋44 ほぼ完形	口 12.8 高 16.0 底 7.0	①密、１㎜以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③茶褐色	底面ヘラナデでほぼ水平。 胴部ヘラナデで器表面密。 ほぼ左右対称で均整のとれたつくりである。
224－６ 93	土師器 坏	床面＋10 完形	口 13.6 高 3.7 底　－	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 体部ナデ。 器表面密でやや光沢を持つ。
224－７ 93	土師器 坏	床面－６ 口縁一部欠 他完形	口 12.2 高 3.2 底　－	①密、１㎜以下の小さな砂粒を含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り、ヘラ削りの単位は明瞭である。 内側器表面密でやや光沢を持つ。

187号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②成形　③色調	成・整形技法の特徴・備考
224－8 93	土師器 坏	床面＋18 1/4残存	口 13.2 高 4.2 底 －	①密、1～2mmの砂粒をわずかに含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部へラ削り。 器表面全体が密で胎土がやや粉状を呈する。
224－9 93	土師器 坏	床面－17 1/4残存	口(12.9) 高 3.1 底 －	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。②酸化焔、硬質 ③橙色	底面へラ削り。体部ナデ。 口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。
224－10	土師器 坏	床面＋46 1/4残存	口(11.2) 高 － 底 －	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	底面は幅の広いへラ削り、内面に多くの暗文。 口縁上端が内屈している。 口縁部内外面の器表面密でやや光沢を持つ。
224－11	土師器 坏	床面＋2 1/4残存	口(14.0) 高 － 底 －	①密、2～3mmの赤色粒を少量含む。②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部下半へラ削り。 口縁部中央に輪積痕残る。 内面に暗文は描かれていない。
224－12	土師器 坏	床面－2 1/4残存	口(14.0) 高 － 底 －	①密、1～2mmの砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	底面と体部下半へラ削り、砂粒が移動し器表面やや粗い。 内面に暗文は描かれていない。
224－13	土師器 坏	覆土 小破片	口 － 高 － 底 －	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底部内面に螺旋状の暗文あり、暗文は先の細い工具で掘り込まれている。
225－14	須恵器 甕	床面＋36 小破片	口 － 高 － 底 －	①密、1～2mmの長石粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	甕の把手部分と胴部の破片である。 口縁部は外反すると思われる。
225－15 93	須恵器 坏	掘り方 1/4残存	口(13.1) 高 4.2 底 7.4	①密、1～3mmの片岩粒を少量含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面右回転へラ削り。 体部下端右回転へラ削り。ロクロ目はほとんどなし。 全体的につくりがていねいである。
225－16 93	須恵器 坏	床面－3 1/4残存	口(13.0) 高 3.6 底 7.6	①密、1mm以下の小さな白色粒を多く含む。②還元焔、硬質 ③灰色	底面中央右回転糸切り痕。 底面周辺部右回転へラ削り。 体部下端右回転へラ削り。
225－17 93	須恵器 坏	床面＋5 ほぼ完形	口 13.8 高 4.5 底 8.2	①密、1～3mmの片岩粒を少量含む。②還元焔、硬質 ③灰白色	底面右回転へラ削り。 体部下端右回転へラ削り。
225－18 93	須恵器 坏	床面＋4 底部1/4	口 － 高 － 底 －	①密、1mm前後の石英粒と長石粒を含む。②還元焔、硬質 ③灰白色	底面右回転へラ削りによる再調整。 底部外面中央に墨書あり。
225－19 93	須恵器 蓋	床面＋6 完形	口 14.9 高 － 底 －	①やや粗、1～2mmの白色粒を含む。②還元焔、硬質 ③灰白色	天井部右回転へラ削り。 口縁端部は短く細い。
225－20 93	須恵器 蓋	床面＋3 口縁一部欠 ほぼ完形	口 16.2 高 － 底 －	①密、少量の片岩粒を含む。 ②還元焔、硬質 ③灰白色	天井部右回転へラ削り。摘みは小さい。 全体につくりのていねいな蓋である。 内外面に吸炭による重ね焼の痕跡を持つ。
225－21	鉄製品 釘？	覆土	長 (4.4) 厚 0.5	幅 0.8 重 5.4	釘の可能性が考えられるが名称及び用途不明。
225－22 113	鉄製品 鏃	竈内	長 (5.8) 厚 0.3	幅 1.9 重 9.2	錆化が著しい。
225－23 117	石製品 紡錘車	床面－13	径 4.8/3.6 厚 1.3	孔径 0.6 重 57.2	滑石片岩。広面は中砥削り。狭面はほぼ自然面。 側面は鉄製工具により細く削られている。

遺物番号	図版番号	器　種	法　量(cm)(g)	石材・備考
24	126	こも編み石	長 13.0　幅 5.6　厚 2.1　重 180	絹雲母石墨片岩、片側の側面が凹状を呈す。
25	126	こも編み石	長 11.8　幅 4.3　厚 2.2　重 180	石墨緑泥片岩
26	126	こも編み石	長 11.5　幅 4.1　厚 2.4　重 165	緑簾緑泥片岩
27	126	こも編み石	長 10.4　幅 4.1　厚 2.2　重 120	絹雲母石墨片岩
28	126	こも編み石	長 13.8　幅 4.2　厚 2.8　重 230	絹雲母石墨片岩
29	126	こも編み石	長 13.0　幅 3.9　厚 2.5　重 160	絹雲母石墨片岩
30	126	こも編み石	長 16.7　幅 5.1　厚 2.6　重 290	点紋石墨緑泥片岩
31	126	こも編み石	長 12.6　幅 4.7　厚 2.0　重 170	緑簾緑泥片岩
32	126	こも編み石	長 10.4　幅 4.7　厚 3.1　重 250	緑簾緑泥片岩
33	126	こも編み石	長 10.3　幅 4.2　厚 2.8　重 170	絹雲母石墨片岩
34	126	こも編み石	長 10.8　幅 4.5　厚 3.6　重 220	絹雲母石墨片岩　両側面凹状を呈す。
35	126	こも編み石	長 13.1　幅 4.8　厚 1.4　重 135	絹雲母石墨片岩

222号住居跡（第226～228図、図版41・93・113）

位置　本住居跡は第4次調査区にあり、10—25グリッドに位置する。

概要　南側の低くなる急斜面に位置し、北側の残りは良好であるが南側の床面から壁面部分は削られて残っていない。そのため南側の住居範囲は確認できなかった。北側部分で1号掘立柱建物跡と重複しており、本住居の覆土を掘り込んでいる。

構造　床面は多くの暗灰褐色粘質土を主とした土で造られている。柱穴や貯蔵穴は床下調査によっても確認できなかったため掘られていないと思われる。

規模　東西3.01m、南北は不明である。壁高は残りの良い北東コーナー部分で71cmである。

遺物　破片の出土量は多いが、図示できたのは土師器の甕と坏の3点と刀子1点である。

（竈）

位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

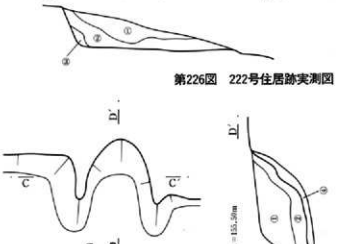
概要　住居の造られた位置は低地に近く地山全体がやや粘土質である。その粘性の強い土を利用して袖が造られている。左袖部分は良好に残っているが、右袖部分は少し削られて残りが悪い。袖石や天井石等は出土していない。覆土全体が粘土質のためか竈内より多くの焼土粒が出土している。

規模　煙道方向86cm、燃焼部幅48cmである。

222号住居跡
①暗褐色土層　少量の白色軽石粒を含むが、ローム粒は粉ど含まない。
②暗褐色土層　少量のローム粒とローム小ブロックを含む。
③褐色土層　多くのローム粒とロームブロックを含む。

0　2m

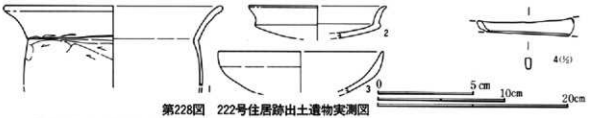
第226図　222号住居跡実測図



竈
①暗灰褐色土層　多くの暗灰褐色粘質土と少量の焼土粒を含む。
②暗灰褐色土層　多くの焼土粒と少量の炭化物を含む。
③暗灰褐色土層　暗灰褐色粘質土を主とし少量の焼土粒を含む。
④暗灰褐色土層　暗灰褐色粘質土ブロックを主とする。

0　1m

第227図　222号住居跡竈実測図



第228図　222号住居跡出土遺物実測図

222号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (器)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
228－1 93	土師器 甕	床面＋4 ½残存	口(23.0) 高・底一	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質　③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、削られていない口縁部との境にわずかに段差を持つ。
228－2	土師器 坏	覆土 破片	口(11.0) 高・底一	①密、粉状を呈する。　②酸化焔、硬質　③橙色	胎土が粉状を呈しており、底面のヘラ削りの単位不明。
228－3	土師器 坏	覆土 小破片	口(13.0) 高・底一	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質　③橙色	底面ヘラ削りと思われるが器表面が粗れておりヘラの単位不明。
228－4 113	鉄製品 刀　子	床面＋35	長　(5.1) 厚　0.4	幅　0.9 重　3.3	刀子の茎部分と思われる。 断面はほぼ長方形である。

224号住居跡（第229・230図、図版41）

位置　本住居跡は第5次調査区にあり、15―18グリッドに位置する。

概要　西側の低くなるなだらかな斜面に位置し、竈の造られている東側の壁面と床面は残っているが、西側の大部分は削られて残っていない。住居北側を平安時代の225号住居により床下部分まで掘り込まれている。また竈の煙道先端部を耕作溝により掘り込まれている。

構造　床面は多くの暗褐色土を主とした土で造られている。柱穴や貯蔵穴は住居規模が大きいため掘られていた可能性が高いが、確認できなかった。

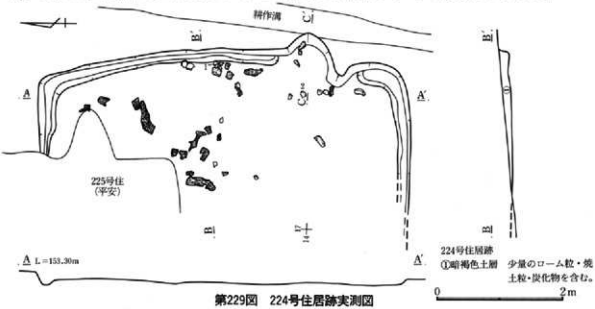
規模　東西不明、南北5.91mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で21cmである。

遺物　全体に出土量は少なく、総数で60片である。炭火物が多く出土している。

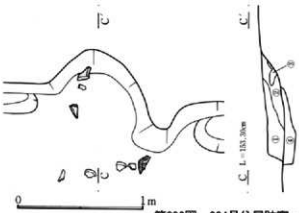
（竈）

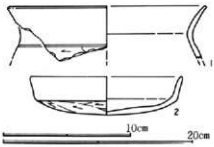
位置　住居東壁面南寄りに造られている。残りが悪く不明な点が多いが、袖と燃焼部の多くは床面上に位置していたものと思われる。

概要　残りが悪く袖部分の多くは残っていない。袖石等も全く出土していない。規模も不明である。



第229図　224号住居跡実測図





竈
①暗褐色土層　少量のローム粒を含む。
②暗褐色土層　少量のローム粒と焼土粒を含む。
③赤褐色土層　焼土粒を主とする。
④暗褐色土層　多くの焼土粒と少量の焼土粒・炭化物を含む。

第230図　224号住居跡竈・出土遺物実測図

224号住居跡出土遺物観察表

掲図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
230－1	土師器 甕	床面＋3 口縁小片	口(20.8) 高・底－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質　③にぶい褐色	胴部ヘラ削り、その他類部に刷毛整形、そのため類部との境に弱い段あり。
230－2	土師器 坏	床面＋5 1/2残存	口(11.8) 高　－ 底　－	①密、少量の片岩粒を含む。 ②酸化焔、硬質 ③黒褐色	底面ヘラ削り。 全体に少しゆがんでいる。 吸炭により多くの部分で黒褐色を呈している。

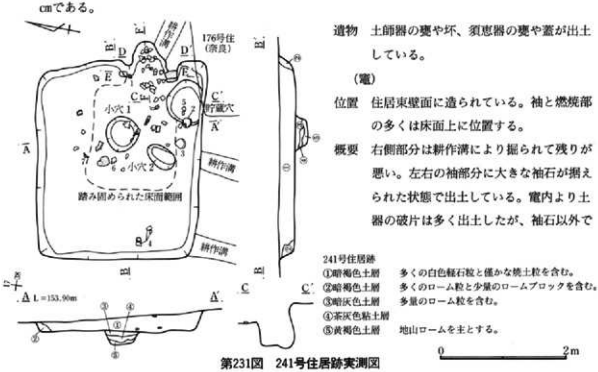
241号住居跡（第231～233図、図版41・93・94）

位置　本住居跡は第5次調査区にあり、38－18グリッドに位置する。

概要　南東コーナー部分で本住居より新しい奈良時代の176号住居とわずかに重複しており、重複部分の覆土が削られている。また耕作溝により竈の右側部分と南側の壁面と覆土が削り取られている。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。住居規模が小さいためか柱穴は掘られていない。貯蔵穴が竈の右側に掘られている。

規模　東西3.08m、南北2.54mである。壁高は残りの良い南壁面部分で34cmである。貯蔵穴は径70cm深さ38cmである。



遺物　土師器の甕や坏、須恵器の甕や蓋が出土している。

（竈）

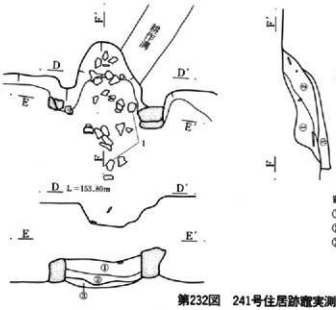
位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　右側部分は耕作溝により掘られて残りが悪い。左右の袖部分に大きな袖石が掘られた状態で出土している。竈内より土器の破片は多く出土したが、袖石以外で

第231図　241号住居跡実測図

は大きな石の出土は認められない。燃焼部付近より多くの焼土粒が出土している。

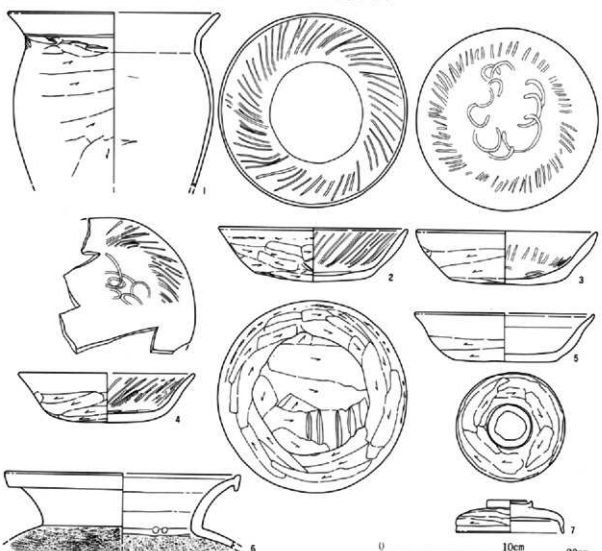
規模　煙道方向62cm、燃焼部幅55cmである。



竈
①暗褐色土層　少量のローム粒を含む。
②暗褐色土層　多くの焼土粒を含む。
③暗褐色土層　多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。

0　1m

第232図　241号住居跡竈実測図



第233図　241号住居跡出土遺物実測図

241号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (E)	①胎土　②成成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
233－1 93	土師器 甕	竈内 ½残存	口(21.8) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部との境に段を持つ。 内面ナデにて器表面密。
233－2 93	土師器 坏	床面＋20 完形	口 14.8 高 4.2 底 9.3	①密、1～2mmの砂粒をわずかに含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部ヘラ削り。 口縁部内側に暗文。 内側底面に暗文なし。
233－3 93	土師器 坏	床面＋1 完形	口 14.2 高 4.2 底 －	①密、1～2mmの赤色粒をわずかに含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ヘラ削り。 口縁部内側に暗文。 内側底面に暗文の痕跡が残る。
233－4 93	土師器 坏	床面直上 口縁部½ 底部½	口(13.8) 高 3.9 底 －	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面に放射状と螺旋状の暗文。
233－5 93	土師器 坏	床面直上 ½残存	口(14.0) 高 3.8 底 8.0	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	底面及び体部ヘラ削り。 内側の器表面が粗れており暗文は全く確認できない。
233－6	須恵器 甕	床面＋4 口縁½ 肩部½	口(25.0) 高 － 底 －	①密、2～3mmの片岩粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰色	肩部外面平行叩目。 内面に青海波文が一部残る。
233－7 94	須恵器 蓋	床面＋5 完形	口 8.4 高 － 底 －	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰白色	天井部手持ヘラ削り。 摘みは端部を細く引き出している。

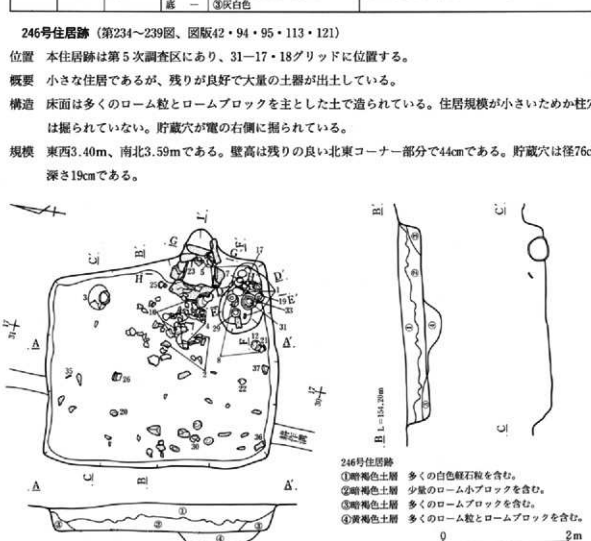
246号住居跡（第234～239図、図版42・94・95・113・121）

位置　本住居跡は第5次調査区にあり、31―17・18グリッドに位置する。

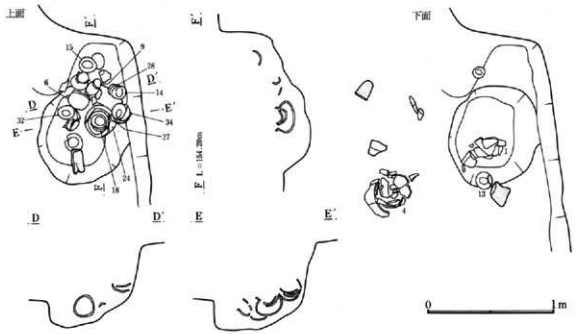
概要　小さな住居であるが、残りが良好で大量の土器が出土している。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。住居規模が小さいためか柱穴は掘られていない。貯蔵穴が竈の右側に掘られている。

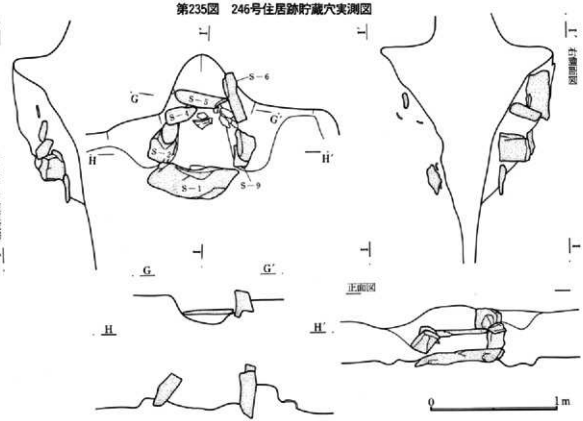
規模　東西3.40m、南北3.59mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で44cmである。貯蔵穴は径76cm深さ19cmである。



第234図　246号住居跡実測図



第235図　246号住居跡貯蔵穴実測図



第236図　246号住居跡竈実測図

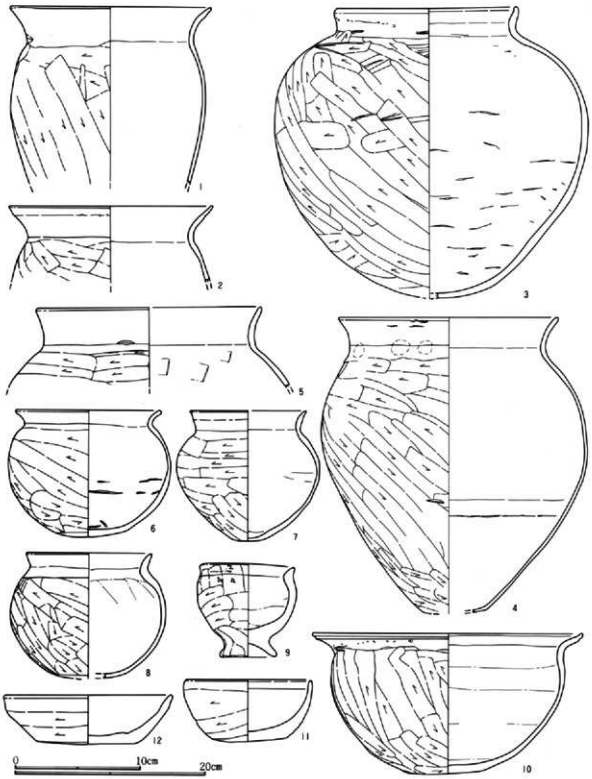
遺物　竈内から石が、その手前部分や貯蔵穴内から甕と坏が多く出土している。鉄鎌や砥石も注目される。（竈）

位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

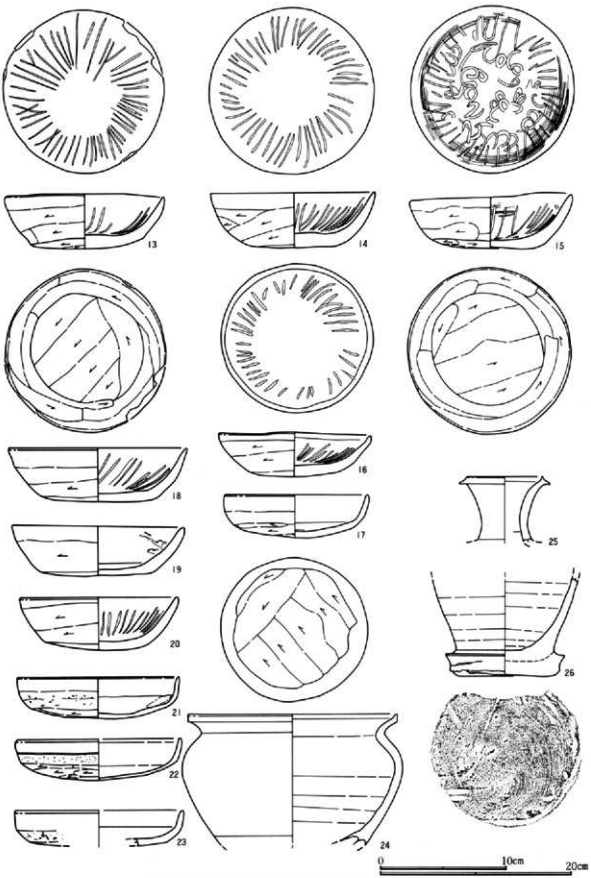
概要　左右の袖石としてＳ－２とＳ－９が使われ、その上にＳ－１が天井石として載せられていたものと思われる。さらに左側面に２個、右側面に３個の石が使われている。煙道部付近のＳ－６とＳ－４の上

にＳ－５が載せられて煙道部の天井石として使用されていたものと思われる。天井石はいずれもはずされ、支脚も残っていないが、残りの良好な竈である。燃焼部で使用された甕類は残っていない。

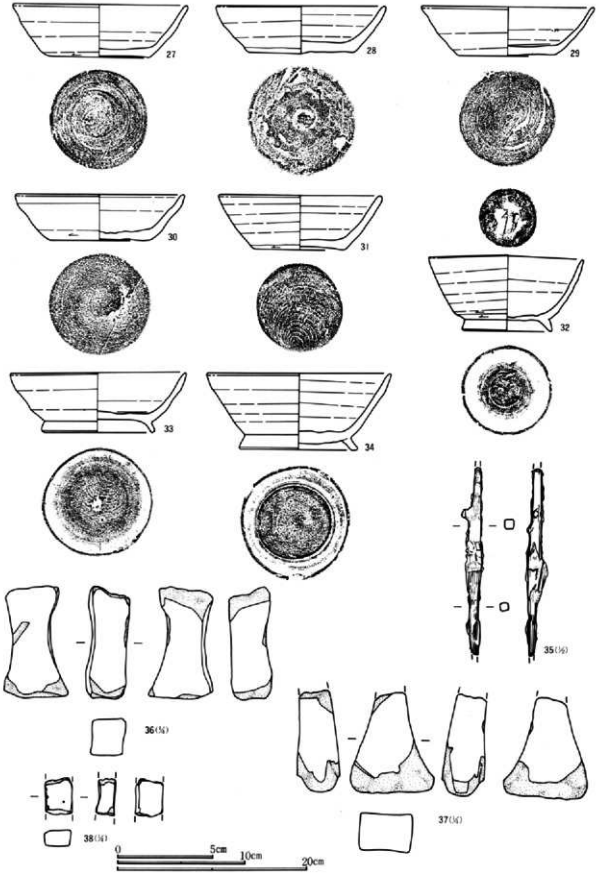
規模　煙道方向93cm、燃焼部幅54cmである。



第237図　246号住居跡出土遺物実測図（１）



第238図　246号住居跡出土遺物実測図（２）



第239図　246号住居跡出土遺物実測図（３）

246号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
237－1	土師器 甕	床面＋3 口縁部ヶ 胴部ヶ	口 21.0 高　－ 底　－	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。 口唇部は一部肉厚になっている。
237－2	土師器 甕	床面＋12 口縁ヶ	口 21.2 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部に輪積痕あり。
237－3 94	土師器 甕	床面＋3 底一部欠他 完形	口 19.2 高　－ 底　－	①やや粗、2～3mmの砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	胴部ヘラ削り、砂粒の移動少なく器表面は比較的密である。 口縁部と内側胴部に輪積痕が残る。
237－4 94	土師器 甕	床面直上 ヶ残存	口 23.2 高　－ 底 (6.5)	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③胴下半ヶ黒褐色、上部橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。多くの指頭圧痕が残る。 胴部中央下部分に接合による肉厚部分あり。
237－5	土師器 甕	竈内 口縁部ヶ	口 (23.4) 高　－ 底　－	①密、1mm以下の砂粒を含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部ヘラ削り。 小さな砂粒が多く移動している。
237－6	土師器 小型甕	覆土 ほぼ完形	口 15.2 高 13.3 底　－	①密 ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色、一部黒色	底面と胴部ヘラ削り、削りの単位明瞭。 内面に多くの輪積痕が残る。
237－7	土師器 小型甕	床面＋5 口縁部ヶ 他完形	口 (12.2) 高 13.6 底　－	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③内側底面以外黒褐色	底面ナデ。胴部ヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。 内側底面付近以外吸炭により黒褐色を呈する。
237－8	土師器 小型甕	床面＋6 口縁完形 胴ヶ、底ヶ	口 13.0 高　－ 底　－	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	底面と胴部外面ヘラ削り、削りの単位は明瞭である。 内面ナデにて器表面密。
237－9 台付小型甕	土師器	床面＋3 完形	口 9.8 高 9.8 底 5.9	①やや粗、1～2mmの砂粒を大量に含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	外面ヘラナデを主とし一部ヘラ削り。 内面ナデにて器表面密。 台部は雑なつくり。
237－10 94	土師器 鉢	床面＋9 ほぼ完形	口 27.8 高 14.8 底 8.4	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面と胴部外面ヘラ削り。 口縁部は大きく外反している。
237－11 94	土師器 坏	覆土 ほぼ完形	口 9.8 高 4.9 底　－	①やや粗、2～3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焔、硬質　③にぶい橙色	底面と体部ヘラ削り、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。
237－12 94	土師器 坏	床面＋4 口縁一部欠 他完形	口 13.1 高 3.9 底 7.7	①密、1～2mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、軟質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内側の器表面がやや粗れており暗文は不明。 暗文はおそらく描かれていなかったものと思われる。
238－13 94	土師器 坏	床面－8 口縁一部欠 損、他完形	口 12.6 高 4.3 底 8.9	①密、2～3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部ヘラ削り、器表面が粗れており削りの単位不明瞭。内面ナデにて器表面密。 内面に多くの暗文が描かれている。
238－14 94	土師器 坏	床面＋16 完形	口 12.9 高 4.3 底 7.7	①密、1～3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面に多くの暗文。 全体に器肉が厚い。
238－15 94	土師器 坏	床面＋23 ほぼ完形	口 12.7 高 3.9 底 8.8	①密、2～3mmの砂粒と赤色粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 口縁部内面横方向ヘラ磨き後放射状の暗文。
238－16 94	土師器 坏	床面－4 完形	口 12.0 高 3.5 底　－	①密、2～3mmの砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 口縁部は短く直立気味に立ち上がる。 内面に多くの暗文あり。
238－17 94	土師器 坏	床面＋2 完形	口 11.3 高 3.3 底　－	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。内面に多くの指頭圧痕あり。 黒斑全く認められず。
238－18 94	土師器 坏	床面＋1 完形	口 14.0 高 4.2 底　－	①密、1～3mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、軟質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内側は粗れており暗文は確認できない。 暗文は描かれていなかったものと思われる。
238－19 94	土師器 坏	床面＋13 完形	口 13.4 高 3.9 底 8.5	①密、1～3mmの赤色粒を多く含む。　②酸化焔、軟質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内側は粗れており暗文は確認できない。 暗文は描かれていなかったものと思われる。
238－20 94	土師器 坏	床面＋16 ヶ残存	口 12.4 高 12.0 底 4.1	①密、1～3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面に多くの暗文が描かれている。

246号住居跡出土遺物観察表

掲図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
238－21 94	土師器 坏	床面＋3 ほぼ完形	口 12.6 高 3.2 底 －	①密、1㎜以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 固い焼成である。
238－22 94	土師器 坏	床面＋18 1/3残存	口(12.8) 高 3.2 底 －	①密、1㎜以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデにて器表面密。 黒斑全く認められず。
238－23	土師器 坏	覆土 1/3残存	口(13.2) 高 － 底 －	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りと思われるが、ヘラの単位不明。
238－24	須恵器 鉢	床面＋5 口縁部3/4 胴部完形	口 22.0 高 － 底 －	①密、1～2㎜の長石粒を多く含む。　②還元焔、硬質、焼締 ③灰色	底部がそっくりはずれている。 胴部内面にわずかな凸状のロクロ痕が残る。 内外面に多くの自然釉が付着。
238－25	須恵器 瓶	床面＋22 口縁部のみ	口 7.8 高 － 底 －	①密 ②還元焔、硬質 ③外面灰色、内面灰色に輪薬	外反する口縁の端部を鋭利に仕上げている。 口縁部内面と頸部の一部に自然釉。
238－26	須恵器 鉢	床面＋14 胴部1/4 底部完形	口 － 高 － 底 11.5	①密、1㎜以下の長石粒を多く含む。　②還元焔、硬質、焼締 ③灰色	底部は別な粘土板を貼り付けて厚く仕上げている。 底面糸切り痕と思われるが不明。
239－27 94	須恵器 坏	床面＋6 口縁部1/4 底部完形	口 13.8 高 4.2 底 7.9	①密、2～3㎜の長石粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焔、軟質 ③にぶい黄橙色	底面右回転ヘラ削り。 体部下半ヘラ削り。ロクロ痕は少ない。 糸切り痕は不明。
239－28 94	須恵器 坏	床面＋14 完形	口 13.1 高 3.8 底 8.2	①密、2～3㎜の長石粒と片岩粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③灰色	底面ヘラ切り。 中央部に凸状部あり。 器表面に5～6㎜の片岩粒をわずかに含む。
239－29 94	須恵器 坏	床面－10 口縁一部欠 他完形	口 13.5 高 3.9 底 7.5	①粗、2～5㎜の砂粒と片岩粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③灰色	底面右回転ヘラ削り。 体部にロクロ痕少ない。 内外の器表面に大きな砂粒が目立つ。
239－30 95	須恵器 坏	床面＋23 口縁部1/4 他完形	口 13.2 高 3.7 底 7.9	①密、1～2㎜の砂粒を少量含む ②還元焔、硬質 ③灰白色	底面中央部に糸切りの痕跡。 周辺部及び体部下端右回転ヘラ削り。
239－31 95	須恵器 坏	床面＋2 完形	口 12.8 高 4.3 底 6.8	①密、1㎜以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面右回転糸切り痕。体部下端ヘラ削り。 口縁部にロクロ痕。 完全に酸化焔焼成であり焼きが固い。
239－32 95	須恵器 高台付椀	床面－5 完形	口 12.0 高 6.0 底 7.0	①密、1～2㎜の石英粒と長石粒を多く含む。　②還元焔、硬質 ③灰白色	底面の高台部内側回転ナデ。 高台部外側の体部下端回転ヘラ削り。
239－33 95	須恵器 高台付椀	床面＋8 ほぼ完形	口 13.8 高 4.7 底 8.9	①密、2㎜以上の砂粒含まず ②還元焔、硬質 ③灰色	底面中央部右回転糸切り痕。 高台はていねいに貼り付け整形されている。
239－34 95	須恵器 高台付椀	床面＋12 完形	口 14.4 高 6.1 底 9.2	①やや粗、3～5㎜の片岩粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰白色	底面回転ナデ。 高台は貼り付け部分で一部亀裂が入っている。
239－35 113	鉄製品 鉄　鏃	床面＋20	長 10.0 厚 0.5	幅 0.9 重 10.5	鉄鏃の茎部分と思われる。 下約半分の位置に木質部が残っている。
239－36 121	石製品 砥　石	床面＋16	長 (11.8) 厚 3.9	幅 (6.7) 重 390.0	短いが完形品と思われる。 4側面を砥石として利用している。
239－37 121	石製品 砥　石	床面＋7	長 (10.7) 厚 3.7	幅 (5.3) 重 440.0	4側面を砥石として使用、使用段階で中央が細くなり欠損したと思われる。欠損後の再加工の痕跡なし。
239－38 121	石製品 砥　石	覆土	長 (3.9) 厚 1.6	幅 (2.8) 重 32.8	砥石の小破片である。 4側面を砥石として使用している。

247号住居跡（第240～242図、図版42・95・117・126）

位置　本住居跡は第5次調査区にあり、31－16・17グリッドに位置する。

概要　南側壁面部分で奈良時代の323号住居と重複しており、本住居が323号住居の北東部分を掘り込んでいる。また西側壁面部は耕作溝により削られており残っていない。電北側に本住居より古い長方形の土坑が掘られており、その土坑を本住居が掘り込んでいる。

構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴は掘られておらず、貯蔵

穴が竈の右側に掘られている。

規模　東西4.00m、南北4.00mである。壁面は残りの良い北東コーナー部分で31cmである。貯蔵穴は径82cm深さ28cmである。

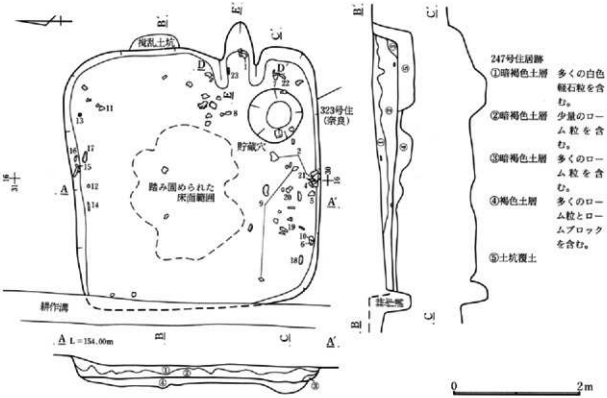
遺物　土師器の甕や坏が出土している。紡錘車２点が注目される。

（竈）

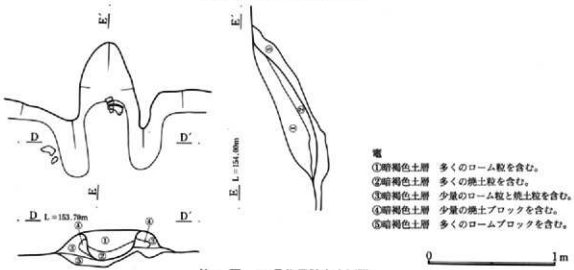
位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

概要　袖部分の残りは比較的良好であるが、袖石や天井石等は全く出土していない。

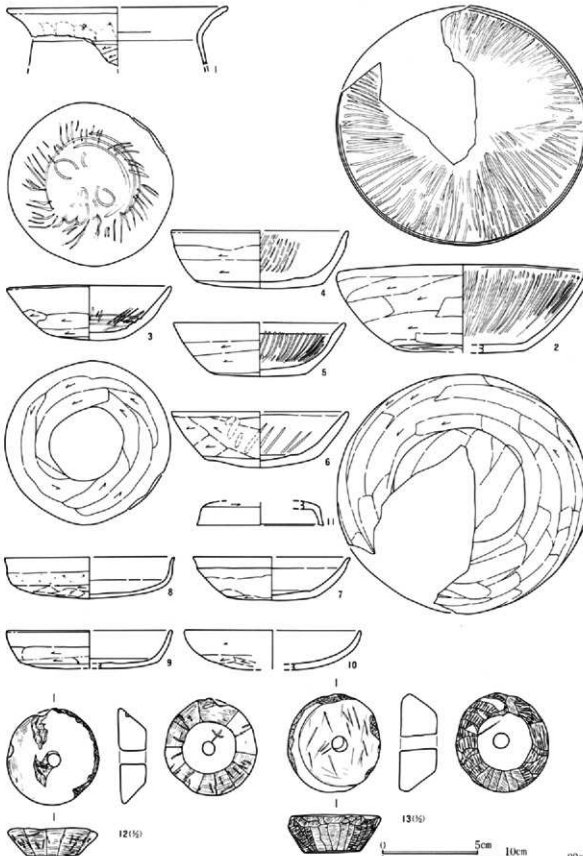
規模　煙道方向114cm、燃焼部幅38cmである。



第240図　247号住居跡実測図



第241図　247号住居跡竈実測図



第242図　247号住居跡出土遺物実測図

247号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) 〔g〕	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
242－1	土師器 壺	床面直上 口縁½	口(23.4) 高・底－	①密、小さな雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質　③にぶい橙色	胴部外面へラ削り。口縁部に指頭圧痕あり。 内側器表面密。
242－2 95	土師器 坏	床面＋6 ½残存	口 19.7 高　－ 底(10.2)	①密、1mmの赤色粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面へラ削り。 口縁部横ナデ。 内面に密な暗文。
242－3 95	土師器 坏	覆土 完形	口 13.0 高 4.3 底　－	①やや粗、3～5mmの片岩粒を少量含む。　②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部へラ削り。内側底面と体部との境に区画線。 内面に放射状暗文。底面に螺旋状暗文の痕跡。 黒斑全くなし。
242－4	土師器 坏	床面＋17 口縁½ 底部½	口(14.0) 高 4.5 底 10.2	①やや粗、2～3mmの片岩粒を少量含む。　②酸化焰、軟質 ③橙色、底部外面黒色	底面へラ削り。 口縁下半へラ削り。 内側に多くの暗文あり。
242－5	土師器 坏	床面＋21 口縁部½ 底部½	口(13.7) 高 4.1 底　－	①密、2～3mmの砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面と体部外面へラ削り。 口縁部内側に多くの暗文あり。
242－6	土師器 坏	床面＋25 ½残存	口(13.8) 高 4.4 底　－	①密、多くの雲母粒を含む ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部と体部へラ削り、ヘラの単位は不明瞭。 内面に多くの暗文あり。
242－7	土師器 坏	床面＋13 ½残存	口(12.4) 高 3.4 底 7.4	①密、粉状を呈する ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部下半へラ削りであるが、胎土が粉状で削りの単位不明瞭。 内側底面周辺部が明状になっている。
242－8 95	土師器 坏	床面＋2 ½残存	口(13.4) 高 3.2 底　－	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り、胎土が密で削りの単位不明瞭。 内面ナデにて器表面密。
242－9 95	土師器 坏	床面＋9 ½残存	口(13.0) 高・底 －	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質　③橙色	底面へラ削り、削りの単位不明。口縁部下半ナデ。内側器表面密。全体に器肉が薄く底部は平底に近い。
242－10	土師器 坏	床面＋26 ½残存	口(14.0) 高・底－	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質　③橙色	内外の器表面が荒れておりヘラ削りの単位不明瞭。
242－11	須恵器 蓋？	覆土 小片	口(10.0) 高・底－	①密 ②還元焰、硬質　③灰色	口唇部は平らでやや内傾する。 天井部右回転ヘラ削り。
242－12 117	石製品 紡錘車	床面＋2	径　5.0／2.9 厚　1.4	孔径　0.7 重　44.0	滑石片岩。広面と狭面磨かれて光沢持つ。側面は中砥削りで削時の単位の稜線とその中に細い削痕残る。
242－13 117	石製品 紡錘車	床面＋17	径　5.2／3.1 厚　1.9	孔径　0.8 重　74.8	滑石片岩。広面に区画線。広面狭面磨かれ光沢持つ。 側面は中砥削り。一部鉄製工具による細長い削り有。

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm)〔g〕	石材・備考
14	126	こも編み石	長 14.4　幅 4.6　厚 2.9　重 300	緑簾緑泥片岩
15	126	こも編み石	長 14.0　幅 6.2　厚 3.5　重 520	緑簾緑泥片岩
16	126	こも編み石	長 12.1　幅 4.7　厚 2.8　重 235	緑簾緑泥片岩
17	126	こも編み石	長 17.2　幅 5.7　厚 3.2　重 420	絹雲母石墨片岩
18	126	こも編み石	長 11.6　幅 4.7　厚 1.9　重 180	絹雲母石墨片岩
19	126	こも編み石	長 15.0　幅 5.6　厚 3.5　重 370	絹雲母石墨緑泥片岩
20	126	こも編み石	長 14.7　幅 5.9　厚 2.8　重 370	絹雲母石墨片岩
21	126	こも編み石	長 12.1　幅 4.3　厚 2.3　重 185	緑簾緑泥片岩
22	126	こも編み石	長 14.5　幅 4.8　厚 2.5　重 265	緑簾緑泥片岩
23	126	こも編み石	長 12.0　幅 5.4　厚 2.0　重 190	絹雲母石墨片岩
24	126	こも編み石	長 12.3　幅 4.5　厚 1.7　重 150	緑簾緑泥片岩

248号住居跡（第243～246図、図版43・95・113・117・126）

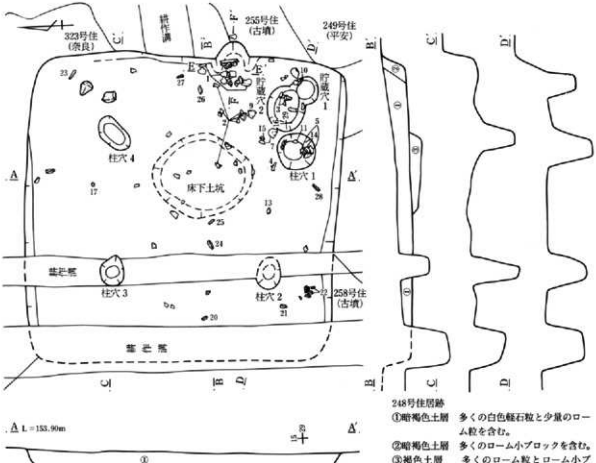
位置　本住居跡は第5次調査区にあり、30－16グリッドに位置する。

概要　本住居を含めて4軒が重複している。西側で古墳時代258号住居の床面を、南東コーナー部分で古墳時代の255号住居を、北東コーナー部分で奈良時代の323号住居の壁面から床面までを掘り込んで本住居が造られている。4軒の中で本住居が最も新しい時期に属する。さらに西側壁面部分とその内側は2本の耕作溝により床下まで深く掘り込まれている。このように複雑に重複しており、残りの悪い住居である。

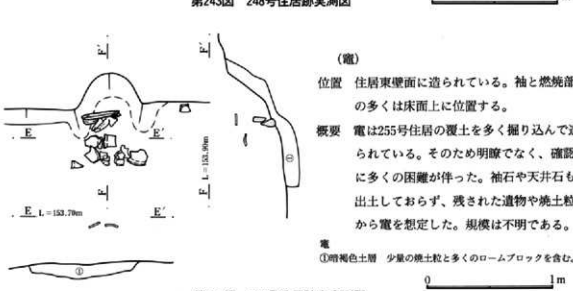
構造　床面は多くのローム粒とロームブロックを主とした土で造られている。柱穴が4本、貯蔵穴が竈の右側に2個掘られている。2個の貯蔵穴の新旧関係は確認できない。

規模　東西不明、南北5.00mである。壁面は残りの良い南壁面部分で29cmである。貯蔵穴1は径40cm深さ44cmで、貯蔵穴2は径60cm深さ45cmである。柱穴1は径62cm深さ68cm、柱穴2は径48cm深さ62cm、柱穴3は径48cm深さ71cm、柱穴4は径62cm深さ64cmである。

遺物　竈と2個の貯蔵穴の内部及び周辺部から甕や坏が多く出土している。紡錘車2点も注目される。



第243図　248号住居跡実測図



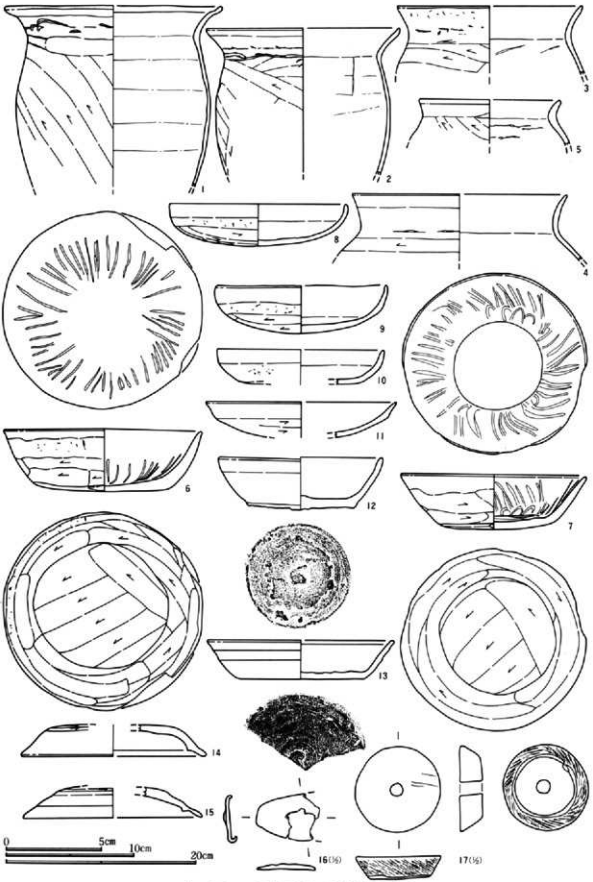
（竈）

位置　住居東壁面に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

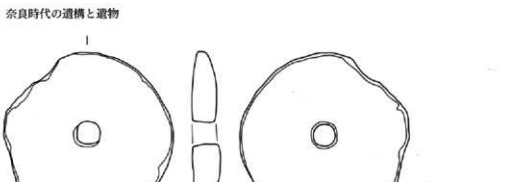
概要　竈は255号住居の覆土を多く掘り込んで造られている。そのため明瞭でなく、確認に多くの困難が伴った。袖石や天井石も出土しておらず、残された遺物や焼土粒から竈を想定した。規模は不明である。

竈
①暗褐色土層　少量の焼土粒と多くのロームブロックを含む。

第244図　248号住居跡竈実測図



第245図　248号住居跡出土遺物実測図（１）



第246図　248号住居跡出土遺物実測図（２）

248号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器　種	出土状態 残存状況	法量(cm) (重)	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法の特徴・備考
245－１ 95	土師器 甕	床面＋20 口縁～ 胴上部½残	口(22.6) 高　－ 底　－	①密、１mm以下の小さな砂粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。 口縁部にヘラが当たって削られた痕跡あり。
245－２ 95	土師器 甕	床面＋４ ½残存	口(20.2) 高　－ 底　－	①密、２～３mmの砂粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。口縁部横ナデ。 輪積痕が残る。 内面ナデにて器表面密。
245－３	土師器 甕	覆土 口縁小片	口(19.4) 高　－ 底　－	①密、雲母粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部ヘラ削り。
245－４	土師器 甕	床面＋16 口縁部½ 胴部⅙	口(22.8) 高　－ 底　－	①密、小さな砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。 小さな砂粒が移動し器表面やや粗い。
245－５	土師器 小型甕	床面＋27 口縁部小片	口(14.3) 高　－ 底　－	①やや粗 ②酸化焔、硬質 ③にぶい赤褐色	胴部ヘラ削り、砂粒の移動は少ない。 内面に輪積痕が残る。
245－６ 95	土師器 坏	覆土 口縁一部欠 他完形	口 15.6 高 5.0 底 10.0	①密、１～２mmの砂粒と片岩粒を含む。　②酸化焔、硬質 ③橙色	底面と体部下半ヘラ削り。体部上半ナデ。 口縁部横ナデ。 内面に多くの暗文。
245－７ 95	土師器 坏	床面＋10 完形	口 14.5 高 4.4 底　－	①密、１mm以下の赤色粒を多く含む。　②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面と体部外面ヘラ削り。 内面に多くの暗文。
245－８ 95	土師器 坏	床面－４ ½残存	口 14.0 高 3.3 底　－	①密、１mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 体部ナデ。 内面ナデにて器表面密。
245－９ 95	土師器 坏	床面＋14 口縁部½ 底部½	口(13.6) 高 3.8 底　－	①密、１mm以下の小さな砂粒を少量含む。　②酸化焔、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り。胎土密で砂粒の移動ほとんどなく器表面密。内面ナデにて器表面密。 固く焼かれている。内面やや光沢を持つ。
245－10	土師器 坏	床面＋９ ½残存	口(13.2) 高　－ 底　－	①密、砂粒ほとんど含まず ②酸化焔、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りと思われるがヘラの単位不明。
245－11	土師器 坏	床面－38 小破片	口(15.0) 高　－ 底　－	①密、黒色の雲母粒を少量含む ②酸化焔、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。 口縁～内面底部ナデ。 器表面全体が粗れている。
245－12 95	須恵器 坏	覆土 完形	口 13.1 高 4.2 底 8.4	①密、２～４mmの片岩粒を少量含む。　②還元焔、硬質 ③灰白色	底面ヘラ切り。 中央に凸状の突起、内側底面中央にも凸状の突起。
245－13	須恵器 坏	床面＋16 ½残存	口(14.8) 高 3.1 底 (9.6)	①密、砂粒ほとんど含まず ②還元焔、硬質 ③内面によい黄橙色、外面黒褐色	底面ヘラ切り後回転ヘラ調整。 底面中央に凸状の痕跡が残る。
245－14	須恵器 蓋	床面＋27 破片	口(14.6) 高　－ 底　－	①密、小さな白色粒を含む ②還元焔、硬質 ③灰色	天井部ヘラ削り。 カエリは低く短い。